同社の前途は益々發展すべく、洋々として多望なりと言ふべし、現下一日の製産力足袋一萬五千足、年産約四百五十萬足に達し、從業員は何れも八時間執務制の整然たる規律の下に活動しつゝあり、近時斯業の大規模なるもの漸く多しと雖も、製品に格段なる特色を具へ、好評嘖々たること斯くの如きは實に稀なりとす、『行田足袋』の聲價眞に人を欺かずと云ふべきなり。

※

株式會社東海機械製作所重役

山口儀一君

本　社　名古屋市西區下園町三丁目
電話本局長六〇三、五四六、六四三番
出張所　大阪市南區鹽町二丁目
電話　船場長　八九、三六五番
工　場　名古屋市外西古渡六十三番地
電話　本局長　五四三、六七六番
自　宅　名古屋東區千種町赤萩一ノ二

專賣特許中島式空氣濕潤機、同中島式ポンプ、同中島式スチームトラップ等の製作販賣業を營み、中京に蹯踞して斯界の一方を睥睨するものを株式會社東海機械製作所なりとす、同所は大正七年十二月資本金五十萬圓を以て名古屋市第一流の實業家たる神谷宗八氏を社長として創立せられたるもの前記諸機械の外、化學工業用諸機械、紡織用機械其他を製作し、何れも品質の確實精妙なるを以て好評あり、大に江湖に歡迎せられ、其の販路は關西と關東とに論なく、全國に亘りて需要者頗る多し、之れ元より其の製品の優秀なると、經營の誠實にして信用あるとに因ること勿論なりと雖も、業務一切を掌理する中心人物たる山口儀一君の手腕を逸すべからざるなり、君は長崎縣の人、明治十一年四月を以て東彼杵郡大村町に生る、大村中學校を卒業するや、東京高等工業學校に學び、機械科を專攻して明治三十三年其の業を卒れり、其の後鈴木鐵工所、豊田織機株式會社等に招聘せられて造詣を傾け、盡瘁する所尠からざりき、後木本鐵工所に入り、多年販賣掛長として手腕を發揮す、蓋し玆に於て君は其の專攻せる學術的蘊蓄を更に經營の方面にまで、進長せるものにして、同所に於ける多年の經驗は、愈々君をして斯界の逸足たらしめたり、大正十年七月東海機械製作所が業務當面の主腦者として適材を天下に物色するや遂に其の選に入れり、爾來眞勉頗る力め其の學識と手腕とを縱横に運用して、東海機械製作所の名聲を高からしめたり、今や內外の信望益々加はり、更に將來の大成を囑せられつゝあり、蓋し君の如き人材を得たるは同所の爲めに喜ぶべく、前途大いに多望なりと言ふべきなり、君今や人生活動の最盛期にあり、幸に自重して此の期待に背馳するなからんことを。

※

綿糸製造業

南勢紡績株式會社

三重縣飯南郡松阪町大字町作
電話松阪　三九、六一七番

創　立　大正八年十月二十四日
資本金　二百萬圓
重　役　取締役社長白塚大三郎、常務取締役川村克巳、辻武美、取締役安保鼎三、同長谷川直齊、同東政吉、同小笹利吉、監査役後藤友之助、同鈴木藤兵衛、同川村保武

社會文明の進歩は其の個人的營利事業と雖も、尙ほ能く國家的なる性質を帶ぶるもの尠なからず、殊に合同的會社事業に於いてをや、其の一計一劃は延ひて一國經濟の上に影響する所甚だ大なるものあり、而して常に玆に留意し、以て國富の增進に力むるは實に文明的實業家の本務と謂ふべきなり然かも我が國民生活と雖も、密接不離の關係を有する綿絲綿布の製造事業に於いて益々其の然るを見るなり、我が南勢紡績株式會社は其の操業極めて最近に屬すと雖も、本邦財界の多士儕々たる人物が、巨大なる資本を以て計劃せられたるが故に、將來國家に裨益する所尠少ならざるものあるを知るべし、即ち同社は大正八年十月二十四日資本金二百萬圓を以て創立せられ、次て廣大なる敷地を買收して工場の建設に着手し其の竣成を告ぐるや、最新式機械を購入して据付を完了し、昨十一年秋其の主要事業たる綿絲製造の操業を開始せり、而して同社々長は氣宇濶達、思慮周密の偉材たる白塚大三郎氏其の重任に當り、常務取締役川村辻兩氏亦眞摯熱誠にして才幹卓拔の俊英たり、取締役安保、長谷川、東、小宮の諸氏竝に監査役後藤、鈴木、川村の三氏皆富代稀有の俊傑、夫れ斯くの如く何れも同地方に於ける實業界の代表的人物を網羅せるを以て、創業日甚だ淺きが故に今之れを批判するに由なしと雖も、其の今後に於ける同社の雄飛發展は眞に驚天動地の盛觀を呈するものあるべし、現時國家財界共に頗る多事なるの秋に際し、吾人は多望なる同社に對し益々奮鬪活躍せられんことを囑望して已まざるものなり。

※

福井縣絹織物同業組合

福井市佐久良下町七十八番地
電話福井七四番

我が外國貿易品中優位を占むるものは絹織物にして、就中羽二重を以て其の第一位となす、由來我が國に於ける羽二重の歴史は頗る古きものにして、既に數千百年を閲せり、此の間時代の變遷に伴ひて一盛一衰ありしと雖も、年を經る毎に製造上の技巧大いに進み、最近日露戰爭前後より漸次外國人に愛用せらるゝに至り、我が海外貿易の發展と共に本邦物産中有數の位地を占め、以て今日に及べり、殊に歐洲大戰後に於ける財界の不況は我が海外貿易の上に一大打撃を與へたりと雖も、聽て財界の恢復と共に貿易界の活躍を見るは當然の理數にして從つて羽二重が昔日の隆盛を以て斯界に雄飛するの日あるは、又信じて疑はざる所なり、今や經濟的國際競爭の時代に進展して各國は何れも之れが覇權を掌握せんことに苦心焦慮しつゝあり、我が國も亦國民一致の努力を以て三大强國の名を辱づかしめざることに奮勵せざるべからず、我が羽二重の産地は呶々の辨を要せずと雖も福井縣を以て第一と爲す、而かも其の名海外に喧傳せらるゝことや、同縣が斯品に對し今日の名聲を博するに至りしものは、要するに製品の優良なると、製産高の多量なると、比較的價格の低廉なるが爲めに外ならず、之れ畢竟するに同縣下の斯業が協力一致以て其聲價を向上せしめんことに努力せる結果にして、而かも同業者を鞭韃し指導誘掖に勗め克く今日の盛況をあらしめたるものは實に福井縣絹織物同業組合なりとす、同組合は明治三十三年法律第三十五號重要物産同業組合法に依りて設立せられ、以て今日に及べるものなり、同組合は福井縣內に居住する絹織物製造業者、輸出綿織物製造業者、商業家、練業者、撚絲業者等を以て組織し、其の區域內に左の數部を設け、取締上の便宜を計れり、即ち福井市第一部、同第二部、同第三部、同第四部、同第五部、足羽郡第一部、同第二部、吉田郡第一部、同第二部、坂井郡第一部、同第二部、大野郡第一部、同第二部、今立郡第一部、同第二部、丹生郡第一部、同第二部、南條郡第一部、同第二部等とす、而して其の目的は業務上の弊害を矯正し、織物の品位を高め、信用を保持し、倍々販路の擴張に努め、商取引の圓滑を圖る等にありと云ふ、尙ほ同組合は從來各種博

覽會、展覽會、共進會等に羽二重其他の製品を出品して優等賞及び褒狀等を得たること枚擧するに遑なきを見るも、如何に斯界に貢獻せる所多きものあるかを知るべきなり現組合役員は組長松井文大郎、副組長早見光太郎の兩氏を初め、評議員、參與員、代議員、部長等百名に及び、何れも縣下一流の人物にして皆斯界の發展に斡旋盡瘁せられつゝあり。

※

福井縣絹紬精練株式會社

福井市外和田村見下濱
電話福井二二九、五八九番

創立　大正九年
資本金　三十萬圓(半額拂込)
重役　取締役社長吉江多吉、專務取締役川中嘉志雄、常務取締役古市重次郎、取締役島崎正一、同清水巳之助、同伊藤由太郎、同吉田末吉、同黑川榮次郎、監査役山口品吉、同河合彌平、同海崎藤作

本邦絹織物業界の重鎭たる福井縣絹紬精練株式會社は、大正九年資本金三十萬圓(內半額拂込濟)を以て創立したるものにして、絹紬の精練を其の營業の重なる目的とす、同社は常に研究的態度を以て、品質の優秀を期することを社の主義とせるが爲め、技師等も多年斯業に洗練せられたる、優秀なる者を招聘して、其の妙技を發揮せしむることに鋭意努力するが故に、從つて製品は常に優良なるものゝみを產出し他品を壓倒するの觀を呈せり、尙ほ同社の創業日未だ淺しと雖も、業運隆々として恰かも旭日昇天の勢を以て驚くべき發展振りを示し、其礎牢固として拔くべからざるものあり、今大正十年十二月三十一日現在の同社財產目錄を見るに未拂込株金十五萬圓、地所一萬四千三百餘圓建物（工場其他十六棟、七百三十七坪）十一萬四千百餘圓、機械器具（テンダー三、手燒機一、汽罐三、ロール二、脫水器二、エンジン二）五萬一千二百五十圓を年一割五分の株主配當金となし、尙五千三百五十八圓餘を後期繰越金となせり、其の如何に堅實なる經營振りなるかを知るべし、尙ほ同社は從來福井燃絲染工會社の工場を借入れて分工場となしたりしが、曩きに本社工場の增設を斷行し今や自己の工場のみにて鋭意生產能率の增進に努めつゝあり、現在百四十餘名の從業員を擁し、其の製產能力一萬八千匹に達するを見る、又取引先は福井縣下は勿論、石川、滋賀等の各縣に及び、尙益々販路擴大の趨勢にあり、現重役は社長吉江多吉、專務取締役川中嘉志雄、常務取締役古市重次郎、取締役島崎正一、同清水巳之助、同伊藤由太郎、同吉田末吉、同黑川榮次郎、監査役山口品吉、同河合彌平、同海崎藤作の諸氏にして、何れも斯界一流の人物たり、同社の前途愈々多望なりと謂ふべきなり。

※

陸軍火藥研究所第二課長、陸軍少將
從三位勳三等工學博士、子爵

朽木綱貞君

明治八年十二月二日生
東京府豐多摩郡戸塚町戸塚五番地
電話番町一九四三番

身は奕葉の貴を荷ひ、軍事に學界に兩つながら威望隆々として萬人の景仰を擅まゝにしつゝあるものは、我が陸軍火藥研究所第二課長たる朽木綱貞君其の人なりとす、君は舊福知山藩主十二世爲綱公の二男に生る夙に干戈を採りて身を立てんことを期し、明治二十四年陸軍幼年學校を卒へ、次で陸軍砲兵學校に學び、同三十二年之れを卒業す、後又帝國大學工業部に入り應用化學科を專攻し、明治三十七年優等の成績を以て同校を出づ、其の卒業に際し學術優秀の故を以て恩賜の銀時計を授けらる、眞に至榮と云ふべきなり、然れども君が攻學の念は未だ以て足れりとせず、同年大學院に進み更に深遠の學術を究めたり、斯の如くして君の學は軍事に將た又工學に充分なる修養と資格とを備へしむ、偶々日露戰役の起るに際し、君は內地勤務として軍務に從事し次で明治三十九年東京砲兵工廠に入り重要の職に就く、越へて同四十二年陸軍技術審査部御用掛を兼ぬ、又大正元年獨逸國へ留學し、同三年多大の蘊蓄を齎して歸朝と共に、陸軍火藥研究所第二課長に任ぜられ、以て今日に及ぶ、是より先き大正三年東京帝國大學工科大學火藥科講師に任じ、又翌四年再度渡歐佛國に在ること一年餘、其の齎らす所の新知識は、軍事に學界に偉大なる効果を致したり、大正八年工學博士の學位を授けられ、同十年三月陸軍少將に累進す、想ふに君が多年の間我が軍事に盡したる勳功と、本邦化學工藝界に與へたる其の功績とは蓋し鮮少ならざるを知るべし、尙ほ今日我が軍籍に將又た學界に、君が如き有爲の士を得たゞは、邦家の爲め洵に幸慶たらずんばあらず、今や我が國は三大强國の中に立つて軍事に經濟に愈々多事ならんとするの秋、今後君が力に俟つ所のもの益々多からんとす、庶くば自重自愛、更に一段の努力を吝まざらんことを、

※

横濱市瓦斯局工務課長

川島彥六君

横濱市西平沼町十番地
電話長者町三八四〇番

文明の進步は科學の發達に俟つや論なき所にして、就中近世物質文明の根基は應用化學の長足なる進步發達に存せり、本邦に於ける斯學は幾多英才の輩出と共に頗る目覺しき進展を遂げ、今や先進列國化學界の壘を摩するに至れり、我が川島產六君は斯くの如く長足の進步を遂げたる本邦化學工業界の重鎭として內外に重きを爲すの人たり夙に學を東京高等工業學校に修め、電氣化學を專攻す、三十四年優秀の成績を以て同校を卒業するや、直ちに豐前小倉なる千壽製紙株式會社に入り、工務に從事するの傍らアルカリーに就きて研究する所あり、更に斯學の堂奧を極めんとし京都帝國大學化學教室に助手として勤務し其の主席となる在職約六ヶ年、此の間日夜孜々として研究に沒頭し、有益なる發明を完成したる事一再に留まらず、聲名部內に高かりしが明治四十一年職を辭して橫濱市瓦斯局に入る、

同四十四年更に北海道の日本製鋼株式會社室蘭製鋼所に轉じ、鑄造工場主任たり、大正四年日東製鋼株式會社創立の擧あるや推されて其の發起人となり、同年六月東京市京橋區月島に資本金五百萬圓の同社を創立し技師長として同社の發展に盡瘁すること三星霜、同六年退社して專ら瓦斯工業の研究に沒頭して得る所尠なからず、偶々大正八年三月橫濱市瓦斯局平沼製造工場改造期に當りて、同市の熱心懇切なる招聘辭し難

く、入りて同市瓦斯局工務課長となり以て今日に及べり、君多年瓦斯事業の研究を怠らず、其の蘊蓄頗る深く實に斯界の權威たり、君工業界に身を投じて已に二十年に垂々とす、此間斯界に盡瘁せる功績や眞に偉大なるものあり、冀ば益々健在斯界に貢献せられんことを。

※

大阪砲兵工廠宇治火藥製造所技師、工學博士、陸軍技師、京都帝國大學工學部講師

齋藤晴五君

京都府紀伊郡堀内村泰長老一二八

我が國に於ける火藥製造界は、近時頗る長足の進歩を來せり、殊に世界大戰後に於ける各國火藥の比較等よりして、自然其の進歩革新を促がせるに至りしは疑ひを容れざる所なり、然り而して我が火藥界に偉功あるの士を求むれば、二三の數を擧ぐることを得べく、我が工學博士齋藤晴五君の如き亦其の一人たるを失はず、君は東京の人、幼より英慧自から群童と異なるものありき稍々長ずるに及んで、志を工業に立て、夙に中等の課程を了し、更に東京帝國大學工學部に入りて火藥科を專修す、爾來螢雪の功を積むこと多年、明治三十三年優等の成績を以て同校を卒業せり、後ち陸軍砲兵工廠に就職し、專ら技術の衝に當る、而かも君が天稟の才能と、其の多年蘊蓄せる學識とは遺憾なく、技術上に現はれ成績頗る觀る可ものあり、現時陸軍技師として大阪砲兵工廠宇治火藥製造所に職を奉じ、斯界に重きを爲せり、君は從前火藥の製造に多大なる研究を注がれ、其の結果は我が火藥製造に貢献したるもの少からず、其の功績其の勳功眞に尋常ならざるものあり、曩き に工學博士の學位を授けらる、君は又現に京都帝國大學工學部の講師たり、常に火藥の實際に鞅掌せらるゝと共に、學界に立ちて鋭意其の啓發に努めらる、蓋し人の景仰して措かざる所、眞に宜なりと云ふべし、今や君我が火藥界の殊勳者として、又學界の巨星として、斯道の爲めに益々奮勵努力せらるゝを見る、誠に是れ我が文明の貢献者として尊重に値するのみならず、君の如き碩學を有するは實に我が學界の誇りとす るに足るべき也、君尙春秋に富む、庶くば益々自重斯界の爲めに盡瘁せられんことを。

※

チンプレット製造業

木村秀次郎君

東京市深川區東森下町二十九番地
電話本所三五九七番
明治十五年生

近時化學工業の進歩頗る著しきものあると共に、斯界に奮鬪努力の士を要望すること愈々切なるを覺ふ、我が木村秀次郎君の如きは實に斯界有爲の人たるを失はず、君は群馬縣の人、明治十五年を以て邑樂郡渡來村に生る、家は閭里の豪農にして亦た頗る資産に富む、君幼より獨立の思想堅く、十三歳の時、單身東都に出で、某呉服商店に入り、精勵刻苦實務の修習に努むること十有二年、二十五歳にして獨立營業を開始せんとす、偶々君の近親者たる田村清八氏及び日本印刷インキ製造株式會社の松村文太氏、横田源太郎氏等共同して印刷用インキ製造の業に從事せんとするに際し、斯業の大いに有望なるを看取し、共に與に之れを經營することゝなりぬ、即ち深川區扇橋際に工場を設置し以て、オフセット用及プリキ印刷用インキの製造に從ふ、時是れ明治三十九年十一月の交なりき、當時は未だ印刷術の發展せざる時代なりしを以て、其の

苦心尋常ならざりしが、君が研究努力の効果は著々として事業の上に現はれ、追次販路の拓けるを見る、君資性頗る機敏にして大志あり、故に微々たる一インキ商に滿足せず、以來手を種々なる事業に染め、大いに見るべきの成績を擧げ得たりしが、這次世界戰後に於ける經濟界の不況に遭遇し、之れが爲め蹉跌を重ぬること數回に及ぶ、然れども不撓不屈なる君は大いに將來の大望を期しつゝ、數年前より星製藥株式會社と取引を開始し、チンプレットの專屬工場となりしが、偶々星一氏の守箴金言たる『二業ニ關係セズ』なる語に感じ、爾來專心インキ業に全力を傾注し、頗る精勵活躍する所ありたりき、是よりして君が事業一段の進境を認むに至る、今や其の販路大いに擴張し、東京全市は勿論大阪其他各地に亘り、好評嘖々として至る處に觀迎を受けつゝあるを見る、思ふに君が如きは眞に奮鬪努力の士と謂ふべきなり、君は又大正八年浦鹽に渡り、露人と共同してチンプレット商會を設置し、其の經營に頗る努力する所ありしが、今は則ち之れを露人に引渡して專ら現業に從事せられ、目下業運頗る隆々たるものあるを見る、夫れ二兎を追ふものは却つて一兎をも得ずとの諺に洩れず、君は早く既に之れを覺りたるものか。

※

アセトン製造業

大正化學工業株式會社

工場 大阪府泉北郡三寶村
出張所 大阪市南區高津三番丁
電話 南一〇三八番

大正七年七月

資本金 五十萬圓

役員 取締役社長大坪嘉太郎、專務取締役高木銳男、取締役藤井吉次郎、同原田智夫、監査役高津文右衛門、同山中福之助、同三谷軌秀

創立

人文の開發と共に化學的工業の進歩頗る著しく、從來アセトンの如きは、內地に在りて之れが製造に從事するものなく、外國輸入を須つの有樣なりしが、大正化學工業株式會社現社長大坪嘉太郎氏及專務高木銳男氏等、當然內地に於て之れを製造すべきものなるを看取し、又其現時に於ける最も急務なるべきことを感じて、玆に同志を糾合し、大正七年七月を以て本社を創立するに至れり、而して其の設立と共に大阪府下泉北郡三寶村に一大工場を設置し、蒸汽機關と電動機十數馬力を据付け、堂々たる陣容を以て其の業務を開始せり、實に是れ本邦に於けるアセトン製造の嚆矢なりとす、爾來社長大坪氏及專務高木氏等の奮鬪努力に因り、社業の成績大いに擧がり、而かも其の生產品の如き最も優秀にして之を外國製品に比し更に遜色あるを見ず、之れが爲め一般の需用益々擴大せんとするの狀況を呈せり、近時我が財界の變動に由り、業界の打擊を蒙るもの甚だ多く、本社の事業も亦幾分其の影響を受け、爾後生產を減少するの止むなきに至りしと雖も、現在社長及專務の振興に奮勵努力しつゝあるを以て、今後我が經濟界の回復と共に更に好況を現するの日來らば、本社の事業は隆々として大發展を見るべく、將來の飛躍刮目して俟つべきなり。

※

谷爲合名會社代表社員

谷爲米次郎君

明治二十年三月二十六日生
住宅 和歌山市新通七丁目十二番地
本店 大阪市東區本町一丁目二十二番地
電話 長本局 三三九番、三四六番
支店 和歌山市新通七丁目十三番地
電話 和歌山 一三七〇番

輓近我が國に於ける各種新事業の勃興は、延いて之れに從事すべき現代的新人を要求する事切なる爲め、新進氣鋭の事業家の續

々として出現せるは寔に悅ぶべきの傾向たり、我が谷爲合名會社代表社員谷爲米次郎君の如きも、正に其の一人たり、君は明治二十年三月富山市に同苗貞德氏の四男として生る、明治四十一年大阪商業學校を卒業するや、更に名古屋高等工業學校に入りて同四十三年同校色染科を修了し、爾後約一箇年餘和歌山捺染工場に實地作業を研修して家に歸り、長兄を輔佐して染料藥品の販賣に從事す、長兄寮太郎氏は明治三十年頃より大阪に於て染料藥品商を營み、同地に本店を置きて、更に和歌山に支店を設置する等盛んに活動を續けつゝありし際なるを以て、君は歸りて之れを輔け、主として販賣方面に努力せり、偶々歐洲大戰に際會し商品の暴騰につれて業蹟頓に揚り、爲めに家業一擧にして大成の域に達せり、大正十年長兄の不幸長逝するや、君は谷爲幸吉、同友次郎、山口孫市郎等の兄弟諸氏と相圖りて合名會社を組織し、長兄の事業を繼承して染料及藥品の直輸入販賣に全力を傾くる事とせり、而して同社の代表社員は谷爲幸吉氏及君にして、本店を大阪市に、支店を和歌山市に置く事從來の如く、販路を全國各地は勿論、遠く支那、朝鮮に擴げて、染料商、染色工場、捺染工場等に供給しつゝあり、兄弟其の心を一にして、以て亡兄の遺志を繼ぎ、而かも其の業務進展の一路を辿りつゝあるが如きは、洵に絶好の美談と云ふべきなり、君店員の養成に當りて、能く其の奇性を認容し、各自の天性に則りて其の能力を發揮せしむるに努め、尙ほ其の取引先の撰擇の如きも、數に由らずして專ら質を旨とし、全力集中主義を採れるが如きは眞に現代的新進實業家の範と爲すべきなり、君の趣味とする所は園芸及謠曲にあり、以て其の人格の一斑を窺ふべきなり令閨を小文子と云ひ、家庭洋々として和氣恰かも春の如き觀あり。

☒

攝津メリヤス株式會社犬和川工場主任技師

佐藤恭一君

工場　大阪府東成郡黑江村字遠里小野上
電話住吉二四六番

我が國に於けるメリヤス製造業は最近長足の進歩を告げ、其の振興眞に目醒ましきものあり、然れどもメリヤス業の隆替他業に比し最も著しきものありしは、直接經濟界の影響を受くること頗る甚大なるものあるに依るなり、此の間に立ちて、不況に撓まず好況に慢せず、其の飛翼を關西方面に張るものを我が攝津メリヤス株式會社と爲す現在同社の信用及び勢力は斯界を風靡するの觀あり、夫れ斯の如く名聲を博する所以のものは、全く是れ同社の基礎確實なるに因らずんばあらず、今や業界稍やもすれば沈滯の境に在るを憂ふるの時に當り、此の如き有力なる會社を有する我がメリヤス界は、將來に於ける斯業の振興上大いに人意を强ふするに足るものなり、玆に叙述せんとする佐藤恭一君は、實に同社の樞要人物にして技術上最も秀拔の譽れ高きの士なり君は明治四十一年京都高等工藝學校色染科出身の秀才にして、同校を出づるゝ共に本社に入り、技術方面の衝に當る、其の入社以來多年心血を瀝きて同社發展の爲めに盡瘁する所尠なからず、殊に君の有する天與の才腕と多年蘊蓄せる其の學識とは、漸次事業上の成績に顯はれ、爲めに社運の隆盛に資する所頗る多し、現在大和川工場主任技師として其の職に盡瘁せられつゝあるは同社の爲め大いに祝福せざるべからず、君資性溫厚篤實、加ふるに業務に精勵にして而かも其の色染に對する研究に至りては頗る熱心を極め、寸時も是を怠ることなしと云ふ、是を以て同工場の製品は益々世の好評を博し、關西メリヤスの聲價をして各地に喧傳せらるゝに至りし所以のもの、全く君の功績と謂はざるべからず、君が斯くの如く斯界に盡したる其の功勞や眞に偉なりといふべきなり。

中央製紙株式會社中津川本社工場長

瀨古太一君

明治十二年二月生
本社　岐阜縣中津川町
住宅　同所社宅
電話中津川一五番、二五番

人の一事業を完成せんと欲するには、須らく熱誠眞摯の素質なかる可らず、才ある人往々にして才に倒れ、技ある者往々にして技を恃み、爲めに其の事業を貫徹する能はざるの事例太だ尠からず、我が中央製紙株式會社中津川本社工場長たる瀨古太一君の如きは、實に熱誠眞摯の資質を具備せる理想的の人と謂ふべし、君は三重縣桑名郡桑部の產、明治十二年瀨古太右衛門氏の長子として同地に生れ、年少三重縣立津中學校に學を修むる事半途にして東京に出づ、次て東京高等工業學校の入學試驗に合格し、以來孜々研鑽の功空しからず、明治三十四年同校機械科を卒業するや、自ら進んで靜岡縣に至り、四日市製紙株式會社芝川工場に入社し、實務の修習に努むること數年、同三十九年清國上海華章造紙公司に技師として聘せられ、在職約三ヶ年同四十二年社長大川氏の推薦に依り、湖北省武昌に於ける白砂造紙廠に技師長として轉じ、深遠なる學理と多年の造詣とを傾注して、同工場の設備より其の完成に至るまでの準備作業一切を竣了したる爲め、大いに社の信用を博するに至る、越へて同四十四年辭して歸國するや、當時長野縣西筑摩郡大桑村に木曾興業株式會社の創立せらるゝに會し君卽ち招かれて之れに工務係長となり、再び工場其の他一切の設計を完成すると共に、大正二年同工場長の任に膺りて、同九年同社の中央製紙株式會社に併合せらるゝや、其の本社工場長となり、爾來一意專心社業の發展と興隆とに全力を傾倒して餘念なく、遂に克く同社をして今日の聲望を馳するに至らしめたり。蓋し同社の發展史上に特筆すべき事象たるを失はざるなり。それ斯の如く君が從來の經歷は、創始、設計、準備等の至難繁雜なる基礎的事業に關するもの多きを以て、今若し君の人と爲りを問ふものあらんか、吾人は直ちに眞摯熱誠の人たるを答ふるに躊躇せざるなり、同社は公稱資本金五百萬圓(二百萬圓拂込)を擁せる大會社にして、君は其の敷地一萬坪に及べる中津川本社工場を主宰し、二百五十名の男女工を使役しつゝ新聞紙及燐寸用紙、支那輸出品等の製造に其の熱誠を傾けつゝあり而して同工場には君と同窓染色科出身の熊澤市三氏技師として克く君を輔佐せり、吾人は同社の盛運を祈ると共に、又君の前途を祝福せんと欲するや切也。

☒

海軍火藥廠技師

宮入清太郎君

明治三十一年生
神奈川縣平塚町海軍火藥廠官舍

世界軍需品中、火藥が其の主要の部分を占むるは言を俟たず、現時歐洲諸國に於ける火藥製造の狀況を見るに、其の製法の進歩せる實に驚くべきものあり、我が國に於ても明治維新後日清日露の戰爭を經て世界大戰に參加せる等、數次の實戰を經驗してより火藥製造の技術も亦た一段の進歩を見るに至り、就中海軍用爆發藥製造技術の進歩は驚嘆に値するものあり、我が宮入清太郎

君は海軍火藥廠に於て技師として其の技術に當り、而かも年壯氣鋭大いに將來に囑望せられつゝあるの士なり、君は長野縣の人夙に長野中學校を出づるや、桐生高等工業學校色染科に學び、大正八年優等の成績を以て同校を卒業す、後直ちに海軍火藥廠技師として就任せらる、大正十年監督官として大阪に出張し、同十一年十二月任を了へて平塚本廠に歸任す、君は資性溫厚篤實、且つ恪勤精勵を以て聞へ、而も研究心に富み、孜々火藥の研究に沒頭して寧日無し、是を以て上司の信任益々厚く、今や同廠内に於て樞要の地位を占むるに至れり、君年齒漸く二十五歳の青年なり、然れども其の有する才識と技能とは、君をして早く已に斯界有要の地に立たしむ、其の將來世に顯はるゝもの實に測り知る可らず、令弟菊次郎氏亦技術的の天才を有し、曩きに桐生高等工業學校色染科を卒へて、現に山口縣岩國中學校に奉職中なりと云ふ、氏も亦令兄に似て資性溫良恭謙、而かも才學共に衆に秀て、人格又高潔の士にして、今や後進子弟の指導誘掖に一意專念せられつゝあり、此の有爲の二兄弟相竝んで以て本邦技術界に貢献せらるゝを見る、庶くは共に自重國家の爲めに奮勵せられんことを。

山下化學工業所主

山下裕三君

明治二十二年三月十日生

住宅　大阪府豐中新市街北通り一丁目
電話　北長一〇九〇番
營業所及工場　大阪市北區北野佐藤町廿八番地

山下利右衛門氏の三男に生れ、幼名を留太郎と呼ぶ、少にして覇心あり、明治四十四年、其二十三歳の時色染學研究の目的を以て鄕關を出て、之れを京都高等工藝學校に學ぶ、斯くて業を卒へしは大正二年七月の事に屬す、爾後直ちに同校理化學教室勤務を命ぜられ、翌三年七月更に京都帝國大學工科大學工業化學教室に轉じ、同四年二月山下化學工業所設立のため之を辭せり、同所の目的とする所は印刷用インキ及び顔料其の他工業藥品の製造にして、君が多年學窓に學び、又教へたる所を實地に應用せんと欲するもの、蓋し時代の產みたる新人が時勢の生みたる新事業を營まんとするものにして、其の着眼の警拔、其の撰業の嶄新共に現代的新味に富めるものと謂ふべき也果然君の事業は比年ならずして隆昌なる業績を擧げ、其の信用聲名また忽ち四隣に喧傳せらるゝに至る、目下同所に於て使役せる店員及工場員を合せて三十有五名、其の製品の產額は顔料一箇年約五千斤、印刷インキ同十五萬封度、販賣高年額三十萬圓に及び、朝鮮京城及支那上海に於ける特約販賣店を初め、內地に在つては一般印刷所及染料店其の他各販賣店にて發賣せられつゝあり、君が少壯新鋭の身を以て一躍今日

時代は一轉又再轉し、世情は急や又激遷して、凡百の事物は吾人の生活に一大革命を齎らせり、舊事業は新事業に壓倒せられ、舊人は新人に追迫せられ、新舊事物の交代は社會進歩の原則として甚だしく其の威力を肆にし、新陳代謝の急速は文化興隆の條件として太だしく其歩度を早からしむるに至る、吾人之を國家の慶幸として祝福せざる能はざる也、輓近我化學工業界に於ける趨勢も亦此自然の波濤に打たれざる能はず歐洲戰爭と相前後して斯業の勃興せるもの亦尠からず、本邦化學工業界の新人山下裕三君に由つて經營せられつゝある山下化學工業所の如きも、正に其の一に算ふべきものたり、君は和歌山縣海草郡和歌浦町の產

鐘淵紡績株式會社淀川工場技師

鶴谷源治君

明治三十一年生

住所　大阪市外鐘紡社宅

我が紡織界の重鎭として覇を斯界に占むるものは則ち鐘淵紡績株式會社と爲す、今や鐘紡の名內外に喧傳し、其の勢力の偉大なる其の事業隆昌なる、實に人をして驚嘆せしむるに足るものあり、同社の淀川工場は大阪市外淀川の地に在りて宏壯雄大を極め頗る其の盛況を偲ばしむ、若し夫れ市外淀川の一方に當りて望めば、天を貫く幾多の煙筒より黑煙の常に濛々として揚がるを見る、則ち是れ同社淀川工場の壯觀なり、而して現在同工場に在りて日々技術方面の衝に當り以て同社の事業を扶翼しつゝあるの士に同社技師鶴谷源治君あり、君は千葉縣の產、幼より英慧の譽れ高く、長ずるに及んで身を實業に寄せんことを期し、桐生高等工業學校色染科に入り孜々研學して倦まず、大正九年優等の成績を以て同校を卒業するや、直ちに鐘淵紡績株式會社に入り、技師として社業に從事するに至る、君年齒漸く壯今や新進有爲の身を以て專心其の業に精勵せらる、而かも其の活氣ある奮鬪振りは、同社の幹部をして大いに前途の望みを囑せられ、隨つて社內の信用頗る厚く現在同社淀川工場に在りては實に有要缺くべからざるの人となれり、思ふに我が紡績業の如きは、世運の推移と共に益々改善振興を要するは元より呶々を俟たざる所なりとす、是を以て斯界の技能才腕ある士を要望すること最も切なるものあり、此の秋に當り、君が如き新進精鋭の士を斯界に有するは頗る人意を强ふするに足るものあり、而かも君が其の名を斯界に成すの日は、尙ほ之れを將來に期することを得べし、君たる者奮勵自重する所なくして可ならんや。

日本インキ製造株式會社專務取締役

永田博君

明治十六年生

本社　東京府北豐島郡高田町四八〇番地
電話　番町二八三〇番

販路の廣汎なること內地は勿論遠く支那各地より南洋方面に及び、技術の優秀にして品質の善良なること、之れを舶來品に比するも毫も遜色なく、然かも短日月に堅實なる基礎の上に事業を樹て、斯界の權威として囑目せられつゝある日本インキ製造株式會社に專務取締役たる君は、明治十六年を以て神奈川縣橫須賀に生る、資性溫厚なれども機略縱橫、然かも學識深遠なるものあり、夙に斯界の重鎭を以て目せらるるの人なり、明治四十二年東京帝國大學藥學科を卒業するや、橫濱鳥居藥品試驗場に於て研究中、偶々日本インキ製造株式會社の招聘するる所となり大正四年二月同社支配人兼技師長として就職す、爾來、內に社員職工を督勵して製產能率を高め、外には販路の擴張に力めて縱橫畫策を揮ふ、成績歷々として擧り、遂に專務取締役に推され、經營の責を一身に負ひて今日に至る同社は始めインキ界の老功者松村氏の創立する所なりしが、品質より考ふるも、產額より察するも、頗る發展の餘地を存し、更に一段の奮勵を要するものなきにあらざりき、君の入社以來面目一新、資本金三十五

萬圓を擁し、生産高年三十萬磅に達し、本邦インキ界に覇を稱するに至れり、之れ實に君が經營の手腕に俟つ所尠しとせざるなり、世人が同社今日の盛況を以て、一に君の功に歸する所以のもの、決して怪しむに足らざるなり、而して此の努力は、獨り同社の發展に與りたるに止まらず、實に本邦インキ製造業の興隆に貢献する所大なりしと云ふも過言にあらず、思ふに事業の成否は人物の如何にあり、之れが經營の衝に當る者にして、果して適材にあらざれば、凡百の事業は成功の域に達する能はざるなり同社が君の如き才幹を得たるは、寔に適材を適所に得たるものとして、其の前途を祝福すべきなり、君未だ春秋に富む、將來の大成期して待つべき也。

※

日本毛織株式會社姫路工場技師

青木常藏君

明治三十一年生

自宅　兵庫縣飾磨郡飾磨町中島

我が毛織物業界に於て、勢力信用の偉大なるものを求むれば、先づ我が日本毛織株式會社を擧げ得べし。由來我が毛織物業の如きは經濟界の變動に左右さるゝこと甚だしき部類に屬す、故に一たび業界の不況を來すと共に、其打擊を受くること頗る多きものあり、世界大戰中財界好況の時代に當り盛んに物興せる大小幾多の會社は、這般財界の不況到來に遭遇し、萎微不振遂に解散の悲況に陥るもの亦幾何なるを知らず、此の際に立ちて我が日本毛織株式會社は不況に撓まず逆流に襲はれず、嶄然として頭角を露はし、事業の益々順調に向ひつゝあるもの、全く是れ其い基礎の鞏固なると經營の宜しきを得たる結果たらずんばあらず、今や同社の信用愈々高く、斯界に雄姿颯爽たるもの亦た理由なしとせんや、然り而して同社姫路工場に技師として新進有爲の士を以て稱せらるる者、之れを我が青木常藏君と爲す、君は青木吉太郎氏の長男にして家代々農を以て業となし、閭里の豪家として其名高し、君は生れながらにして英敏の才を具へ、夙に姫路中學を出で、後桐生高等工業學校色染科に學ぶ、大正八年優等の成績を以て同校を卒業するや、直ちに日本毛織株式會社の招聘に應じて入社し、爾來精勵奮勉社業の爲めに鋭意努力せらる、殊に君が修得せる學識と熱烈なる其の研究心とは忽ち技巧上に現はれ、常に良好なる成績を收め、社の内外に重きを爲せり、君年齢尚壯、頗る春秋に富む、其の前途大いに矚目すべきものあらん、自愛を切に祈る。

※

中央インキ株式會社

大阪府西成郡鷺洲町大仁二二
電話長土佐堀　六八四番

大正七年五月創立

本邦印刷インキ製造業者頗る多しと雖も、グリーン及びブリユー色のインキ製造に於て、嶄然斯界に頭角を擢んずるものを我が中央インキ株式會社なりとす、抑も同社は前專務取締役たりし佐藤正次郎氏の個人經營に係りしものにして、氏が京都尚寧工藝學校應用化學科を出でゝ後、斯業の將來頗る多望なるものあるを達觀し、嶄新卓拔なる氏一流の經營法に基き、專らグリーン、ブリユーの兩インキの製造に從ふ、然るに這般世界大戰勃發以來、文化の發展と共に印刷業は急激なる發展を來し、此の事業亦頗る繁忙を告げ、限りある能力を以てしては限りなき需要を滿たす能はず、遂に大正七年五月組織を革めて資本金五十萬圓の株式會社となし社長に松島肇氏を推し、佐藤氏自ら專務取締役となり、更に安藤延一氏を取締役兼支配人に任じ、以て製造能率の增加を計りたり、後偶々實業界に於て松島氏の信用失墜せるものあり、爲めに同社にも影響する所尠しとせず、即ち同氏も遂に大正十年三月辭任の止むなきに至り、野田槌太郎氏之れに代りて社長となる、然るに佐藤正次郎氏亦た戰時の好況時代に際し、諸種の事業に關係し大いに爲す所あらんとしたるも事志と違ひ、遂ひに失脚倒産再び起つ能はざるに至り、同年十二月又全責を放擲して引退するに至る、斯くて老巧敏腕の聞へある安藤延一氏更らに益々社運の進展に努むべく奮然起つて唾手一番、大いに事業の發展を計り、施設を革め、秩序を正し、或は東京より新に斯業の技術家を聘する等、殆んど寢食を絶して日夜經營劃策に黽勉せり、果せる哉、社運漸次に復興して舊時に倍加する狀況を來し、今や業績隆々として正に旭日天に冲せんとするの慨あり而して其の生産高は二千五百磅に上り、内四分を支那方面に出し、其餘は主として内地の需用に應じつゝあり、製品の種類は印刷インキを始め、顔料及染料等にして、就中グリーン、ブリユーは代表的製品たり、尙專務佐藤氏引退後安藤氏は社内に石版機械を据付け、製品は必ず之に依りて試驗を經ざれば市場に出さずと云ふ、其の製品の優秀なるは、改めて呶々するを要せずと雖も、つて煙草專賣局に於て使用試驗の結果、獨乙品以上の濃厚なる色素なりと大いに賞讃せられたるものありと、而して安藤氏は大阪商業學校出身の秀才にして、明治二十九年香川縣に於ける某銀行に職を奉じ、忠實勤勉克く行務に鞅掌したりしかば、漸次重用せられて同行本店支配人となりたる着實溫健の人なりしが、大正五年辭し、自ら貴金屬商を經營す、次で幾何もなく佐藤氏の本社創立の計畫あるや、自家の業を他に譲りて佐藤氏を補け、東奔西走專ら會社創立に力を致し、其の成立後擧げられて取締役兼支配人となり、爾來幾多の曲折を經て、同社を今日の盛運あるに至らしめたる殊勳者たり、社長に斯界夙々の名ある野田槌太郎氏を戴き、今又多大の功勞ある安藤君を支配人に配置す、同社の前途洋々として其の發展蓋し測り知るべからざるものあらん。

※

建築材料其他諸機械製造業

株式會社赤井商店

大阪市西區靱下通り一丁目二十二番地
電話長土佐堀　一四二番

創立　大正八年四月
資本金　十萬圓
役員　取締役社長赤井勘一、取締役草薙庄司、同馬詰茂八、同榮田重藏、同岡田徹雄、監査役富山巧、同作田清治

本社は大正八年四月の創立に係る、現社長赤井勘一氏は大正二年建築用諸器械の製作業を創始し、爾來獨力を以て是が經營に奮鬪盡力せらる、時偶々世界大戰の勃發に遇ひ、一般經濟界の好況頗る目覺ましきものあり、隨て氏の事業も亦た其の好影響を受けて益々發展の盛況に向ひ、前途一大擴張の必要を認められたるを以て、玆に組織を變更し、資本金十萬圓の株式會社を創設せり、其の成立するや、氏は社長として一切の經營に任ず、爾來天與の才氣と多年の經驗とを以て縱横に馳騁し、同社の事業をして更らに一段の發展を招來せしめたり、同社重役は赤井氏以下草薙庄司氏を始めとし、悉く業界有力の士にして殊に一致協力社業の爲めに力を致しつゝあり、今同社の製造科目を擧ぐれば建築用陶器並に建築材料製造諸機械及び水道器具等の製作販賣を目的とし、其の技術頗る精巧を極むるのみならず、營業方針としては專ら誠實を旨とし、廣く顧客に臨むが故に一般の好評益々高く隨つて信用愈々加はりつゝあり、思ふに世運の進歩と共に、此の種事業は倍々振興を見るべく、同社將來の發展や殆ど豫測

し難きものあり。

※

角丸商會主

佐藤四郎君

明治七年七月十七日生
東京市京橋區東港町一丁目十一番地
電話京橋四二四一番
工場 石川縣小松町

盤根錯節に遇はざれば以て利器を分つ能はず、人も千挫萬折の艱苦を經ざれば其の眞價を知る可らざる也、吾人古語の眞なるを君に於て知るを得たり、君は東京の人、松本金兵衛氏の四男として生る、少にして横濱市野毛商業學校を卒るや、某マンガン鑛製造所に入りて實務の修習に力むること數年、次て明治三十年竹内鑛業株式會社の前身たる芳谷炭礦に入りて事務會計の一切を擔當し、以來大正七年に至る迄二十數年間多年一日の如く一意專心忠勤を擢んじたり其の辭職後九州に於て梅谷清一、藤野健吉太田太次郎氏等と相協りて日邦鑛業株式會社を創立し、其成立を見るや君は支配人兼鑛業所長の要職に就き、爾來着々事業の進展を圖りつゝありしが、這次世界大戰の終熄後經濟界亂調の餘波を受け、爲めに事業中止の已むなきに至れり、是に於てか君は更に陣容を改め、現所に店舗を設けて角丸商會の名稱の下に、カーバイト及アセチリン酸素容接器具等の販賣を開始せり、斯くて不眠不休の努力を繼續したる結果、今や業運日に月に揚り、其主要商品たる前記諸品及集魚燈の賣れ行き頗る旺盛を極む、現時主なる取引先としては石川島造船所を始め、内務省戰時機械工場、大日本自轉車株式會社、東京綱材株式會社、汽車製造株式會社、雨宮製作所、芝浦製作所等其他著名なる工場なりとす、尚ほ其の集魚燈は房總半島東北兩海岸新潟方面に向つて盛んに販出せられ有ゆる缺點の除去せられたる理想的のものとして嘖々たる好評を博しつゝあり、而かも責任を重んずること厚き君は、自ら各地を巡歷して親しく自己の供給品を視察調査し、若し其の工夫を要する個所ある時は直ちに考案改良するを以て、更に一層の信用を得て隨處に歡迎せらるゝの盛況を呈せり、蓋し千挫不撓の利器は爰に至りて更に其の光彩を發揮せるものと謂ふべし夫人を千代子と呼び、五男二女あり、家庭また頗る圓滿を極む。

※

銘酒『嵐山』『花娘』其の他清酒醸造

合名會社嵐山酒造店

大正七年十一月創立
本店 山形縣東置賜郡小松町
電話小松四〇番
支店 綱島市笹賜町
電話綱島七〇番
同 米澤市桐町
電話米澤三〇九番

本據を山形縣下小松町に構へ、支店を樞要の地に設けて、業務隆々として繁榮窮りなきものは、合名會社嵐山酒造店なりとす、聞く嵐山の名は其の醸造に係る銘酒の一にして、他に『花娘』と稱するものあり、此の二者は醸造石數頗る多く、何れも各方面の愛飲を得て嘖々稱讃せらる、代表社員を佐藤新右衛門君とす、同店は元來氏の個人經營たりしものを、大正七年十一月現組織に變更せり、佐藤家は附近一圓に知られたる舊家にして、佐藤氏としての酒醸業は享保十五年の創始たり、君は其の九代目に當り代々例に倣ひ、新右衛門を襲名す、明治二十二年三月一日を以て生れ、夙に山形縣立

置賜農學校の業を卒り、家業に從事し組織の改まるや代表社員として今日に至れり、其の經營を合名會社に變更したる所以は、勢力を充實して大發展を爲さんとせるもの所謂時世に策應したる施設に外ならず、營業所釀造場の敷地千八百餘坪に亘り、最近三年間の平均造石數毎年三千石、仙臺福島米澤の各都市を中心として、東北六縣の各地に販路を有し、殊に福島、米澤兩市の支店は組織變改前に設置せるものにして、前者は明治十七年、後者は大正二年を以て開業し、確實たる根據を有す、而して販賣高の約半額は壜詰として東京以東に需要あり壜詰に就ては多年苦心せる所に係り、恐らくは君を以て同地方に於ける壜詰販賣の鼻祖とすべし、釀造場主任は令弟憲治氏にして、氏は米澤中學卒業後、東京灘の川釀造試驗場に講習生となり、研究を了して歸り爾來君を扶けて熱心業務に當りつゝあり、品質の進歩改善に就ては、氏の力與つて鮮からずと云ふ、君人と爲り溫厚、自から人をして親ましむ、而かも頗る敏捷、商機を握るに巧みなり、少壯實業家として錚々の名あるも亦故ありと云ふべし、同店は叙上の如く、篤實勉勉なる令弟の之れに協力するあり、業運益々向上前途實に囑望に値ひするものあり。

※

石鹸原料商

岡脩治君

明治十八年二月生
東京市神田區久右衛門町三番地
電話神田二一七七番三六〇七番

近代立志傳中の一人たる我が益岡脩治君は元と埼玉縣三ヶ島村の人にして、人中氏の二男に生る、十六歳の時司村益岡寅造氏の養子となり、因りて現姓を襲ふ、君が家は代々農を以て業とし、君亦幼時より耕農の事に從ひしが、後大いに期する所あり、即ち實業界に身を立てんと欲し、笈を負ふて單身上京、次て大倉商業學校に入り、孜々研鑽攻究に力む、明治三十八年優等の成績を以て同校を卒るや、直ちに大倉組に就職し、恪勤精勵すること三ヶ年餘、同四十年大倉組を辭して現所に化粧品店を開業せり夙に商機を見るに敏なる君は、石鹸原料の有利なるに着眼し、明治四十三年斯業を兼營するに至れり、斯くて斯業の前途漸く光明を認められたるを以て、大正元年從來の化粧品商を廢して石鹸原料商を專業とせり偶々世界大戰の起ると共に我が經濟界は頓に活氣を呈するに及んで、君の事業も亦た能く其の好機に投合し、原料の如き格外に騰貴したるが爲めに、大いに巨利を博することを得たり、是に於てか益々事業を擴張し、大正八年組織を變更して資本金十萬圓の合名會社と爲し、自ら代表社員となり、更に一段の精力を傾注せられたり、現時石鹸原料商界に於ける君が業運は、隆々として同業を壓するの慨あり、而して其の原料仕入先は東京グリセリン會社、神戸鈴木商店等にして、尚ほ供給先は彼の有名なる花王、三ツ輪各石鹸製造業者を重とし、此の外全國各地に及び區域頗る廣汎なるを見る、取引金額一ヶ年約五百萬圓を計上すと云ふ、亦以て其の盛況を窺知するに足るべきなり、思ふに君の今日を致せるもの、全く是れ奮勵努力の賜たらずんばあらず、吾人は自助力行の人益岡君の健在を祈る、君夫人との間に子女五人あり、常に家庭圓滿、和氣靄々たり。として春風駘蕩たるの觀あり。

福島紡績株式會社堺工場長

河合諒造君

明治二十一年十月生

住宅　大阪府堺市湊町
工場　同　所
電話　堺　七、五一五番

紡績業界に著聞する福島紡績株式會社の堺工場は、獨り同社の重要工場たるのみならず、各紡績會社に所屬する工場中有數のものたり、而して工場長河合諒造君は、又斯界技術家中の尊々者として知らる、君は幼より群童と趣を異にし、所謂栴檀は双葉より香しく、鄉校に小學の課程を修めて秀才の譽れあり、中學を經て大阪高等工業學校に入るや、其の明晰なる頭腦と熱心なる研究とは　同窓の間に重きを爲し、明治十四年、優良なる成績を以て同校機械科を卒業せり、直ちに招かれて神戸川崎造船所に入り、新進の技術家として令聞頗る高かりしが、後ち志を紡績界に寄せ、大正二年一月福島紡績株式會社に轉じたり、爾來其の蘊蓄を傾くると共に、尙ほ研鑽甚だ勗め、各工場に技師たること數年、大正七年十一月累進して堺工場長の重職に就き、以て今日に至れり、抑も同工場は紡績界の代表的工場と稱せられ、歷代の工場長には何れも人材を擧げて之れに當らしめ、頗る光輝ある記錄を保有す、明治二十五年の建設に係り元堺紡績株式會社工場たりしも、大正六年三月同社が福島紡績に合併せらるゝと共に堺工場となれるものなり、リング、プラッド式一萬七千餘錘、男女工其の他從業員七百餘名、動力總計五百三十馬力、機關計六基、發電機は最新式の製置を備ふ、其の偉觀堂々他の群少を壓するの慨あり、君一切の技術を統理して遺憾なく、製產能率の增進と品質の改善とに力を致し、着々實蹟を示しつゝあり、同工場が嘗に其の設備に於て本邦の模範工場と稱せらるゝのみならず適材を得たる故を以て羨望せらるゝも宜なりと云ふべし、蓋し堺工場と其の工場長河合君とは同社が有する誇りの一たるべき也君は明治二十一年十月を以て生れ、資性篤實一意社業に貢献して又他を顧る所なし、斯界少壯技術家中の代表的人物たり。

※

埼玉縣工業試驗場長　正六位勳六等

大塚久次郎君

埼玉縣大里郡熊谷町ぬ通

我が埼玉縣工業試驗場は、多年縣民の希望する所なりしが、種々の事情に依り、大正八年に至り初めて縣會に提案せられ、同九年三月農商務大臣より設立の認可を得、以來準備を進め、大里郡熊谷町に地を卜して同十年一月に着手し、同年八月全部を竣成せり、同場　機械部、色染部の外に庶務部を設け、同年三月より職員の任命、諸機械の据付、鐵管の敷設、電動機及試驗器の設置等、專ら內部の設備を圖り、其の完成するや作業を開始し以て今日に及べり、同場の目的は其の縣下に於て產出する綿織物及絹織物、絹綿交織等其の他各種織物の改良發達を計るにありと、業務は染色及機械に關する試驗及作業染色物と圖案との連絡原料竝に製品の分析試驗鑑定檢査講習講話見本配布、質疑應答及調査工場設計、其の他必要なる調査事項等にして、此の外更らに最近織物整理部を設置の豫定なりと云ふ、同場長大塚久次郎君は明治三十年、東京高等工業學校出身の秀才にして、卒業後八王子織染學校の教諭に聘せられ、同三十四年奈良縣立工業學校に招かれ、此の間專ら子弟の教養に勗めしが、同四十年

愛知縣技師として、大正元年に及ぶ、同年三重縣立工業試驗場長に轉じ、同十年更らに本場長に赴任す、行くとして可ならざるなき君が才識は、各方面に發揮して斯界の重望を集め、先輩の信任最も厚きものあり曾つて三重縣に在任中、染織物の堅牢及品質の向上に努め、或は窯業部を增設する等君が盡したる功績尠なからず、又君は酒醬油の釀造にも多大の趣味を有し、多年研究調査せる其の有益なる方法を以て指導誘掖に勗めたり、故に三重縣下斯業者は大いに君を德とせり、斯くて君は官命に依り支那各地に渡りて斯業の視察調査を試み多大の蒐蓄を齎して歸朝したりき、今や埼玉縣工業試驗場長として依然斯業の爲めに滿腔の熱心と努力とを傾注しつゝあり、

※

三田黑糸染工場主

三田清三郎君

明治四年生

京都市上立賣通堀川西入
電話　西　陣　四八八番

商業の要素は信用を重んずるに在り、信用を得むとするには須らく誠實熱心ならざる可からず、能く此の機微を捉へ家運の隆昌を計るもの、我が三田清三郎君の如きは眞に其人なりとす、君は京都の產、幼にして學を好み、資性穎悟明敏、頗る濶達の氣慨に富み、博覽强記の賞譽を受く、嚴君亦頗る活眼の士、明治の初年早くも獨逸に留學し、專ら應用化學を研修せられ、歸朝後時世に先んじて改良黑染に着手す、時人未だ之を試みるものなく、氏を以て本邦に於ける斯業の鼻祖となす、爾來父子共に熱烈精勤全力を傾注して事業の擴張を計りしに、君が父君の計圖誤まらず、我が文化駸々として隆運を見るに至り、君が事業も之れに相隨伴して益々繁劇を加へ、家運隆々として恰かも旭日昇天の觀を呈せり、抑も此の改良黑染の主眼とする所は、原糸の美質を保全し、其の重量を增加せしむるのみならず、幾多の年月を經過するも變色又は褪色する事無き濃厚なる眞黑色を而かも廉價に染揚ぐるに在りと云ふ、現時同工場に於ては繻子、繻珍、平御召、博多、海軍服地用の絹糸、柞蠶糸等の染色をなしつゝあり、而して當工場の代表的黑染を「寶黑」と稱し、斯界に於ける世界的逸品として其の名內外に謳はる、明治三十六年第五回內國勸業博覽會開催せらるゝや、君卒先同志と語らひ、京都染物同業組合糸綛黑染部員六名にて、絹綿糸黑染を以て武者人形を製作出品し、時人をして其の精巧美麗なるに驚嘆せしめたる事ありしと云ふ、又當時君は自製品をも出品し二等賞牌を受領し、更に第四回全國五二品評會に於て有功賞金牌を、又內國製產品博覽會に於て金牌を受領し、其他大小の共進會、品評會、展覽會等に於て受賞せる數枚舉に遑非ず、目下君が取引先きは京都西陣地方の機業家及び各地織物業者なりとす、今や絹綿交織繻子の輸入を防遏するのみならず、輸出織物として本邦製品の聲價を高めつゝあり。

※

衛生材料及被服商秋草商店主

秋艸正五郎君

住宅　東京市神田區今川小路三ノ七
電話　長九段二四七五番
營業所　同市淺草區平右衛門町十番地
電話　淺草　[illegible]六番、[illegible]八番
工場　東京府下高田町六七八番地
電話　番町一三四七番

我が國衛生材料商界の權威たる秋艸正五郎君は東京の人、戶長新兵衛氏の五男にして夙に秋艸家の先代寅之助氏深く君の將來に囑目し遂に其の養嗣子と爲す、君は明治二十四年三月、東京市淺草區向柳原町に店舗を開き、專ら衛生材料及消毒繃帶の販賣を創始す、然れども當時我が國の衛生思想は甚だ幼稚にして、其の製品の如きも輸入品

に比して頗る遜色あり、君之れを頗る遺憾とし、爾來刻苦精勵其の改良に意を懇ぎ、寢飲を忘れて克く努めたりしかば、漸次優良なる成績を收め、特にガーゼ及繃帶卷の精製品は一般需用者の間に嘖々たる好評を博するに至れり、是れ實に君の事業の一轉換期にして、以來其の業績は日に月に隆々の一途を辿りしを以て、君は爰に業務擴張の必要を痛感し、同三十二年六月其の營業所を現在の淺草區平右衛門町に移すと共に、彌々倍々製品の改良と事業の擴張とに渾身の精力を傾注せられたり、次て翌三十三年、東京醫科大學の指定工場となり、大正二年、大正博覽會に繃帶及補助品を出品して名譽賞銀牌を得、偶々歐洲戰亂の勃發するや、先づ英國に派遣せられる日本赤十字社救護班に繃帶材料を供給し其の名聲を歐洲の天地に轟かすと共に、更に露國政府の信認を得て多額の材料を供給する等一躍にして、其生產力の膨大を招徠したれば、或は工場を擴張し、或は從業員を增加し、爰に君の業礎は確乎不拔の情勢となりて、遽然君は我が國に於ける衛生材料商の一大權威たるに至れり、今や其の製品の需用先は陸海軍病院を初め、鐵道省陸軍衛生材料廠、日本赤十字社、松本支部病院濟生會病院其他全國各府縣に於ける大病院實に數千に及び、更に伸びて朝鮮青島濟南を中心とせる南支一帶及滿蒙地方、南は南洋諸島に及びて、商運隆々寔に昇天の勢あり、之より先同店を大正七年七月會社組織と爲し、店主の舊知人たる山本善弘氏（千葉縣長生郡本納町の人、生糸及仲買業）專ら業務執行の任に膺れり、惟ふに同店の急速なる發展は、恰も天馬空を驅くるの慨あり、君が多年拮据經營の苦心は玆に全く酬ひられたりと謂ふべき也。

※

大阪セルロイド同業組合副組長、日本輸出セルロイド製品聯合會大阪支部長、八木セルロイド工業所主

八木宇三郎君

明治十二年十二月十五日生
大阪市外今宮町木津四百番地
電話 櫻川二六二番

久しく進歩の遲々として他の諸工業に比し遜色を免れざりし我がセルロイド工業も、歐洲大戰の餘波を受けて、絕好なる刺戟を被り俄然勃興を觀るに至り、爾來之れが製造に從事する者を頻出せり、若し夫れ關西方面にありて其の代表的位置を占むるものを物色すれば、先づ大阪市外今宮町木津に存在する八木セルロイド工業所を擧ぐべし之れ單に規模の大小製產の多寡を以て斷ずるに非ず、經營者其の人の人格的評價より爾く判ずるものなり、所主八木宇三郎君は明治十二年十二月十五日を以て大阪市に生れ、八木重藏氏の長男なり、少年の時代より斯業に從ひ、其の實際的研究に於ては萬人に超越す、電槽其の他容器類の製作を專門と爲し、三十餘名の所員を督勵して、各地よりの需要に應じつゝあれども、常に供給不足を告げ、忙殺せらるゝの狀態にあり販路は歐米及び南洋等の輸出を主とし、國內に販賣するものは極めて小部分なり、蓋し君の製作品に就ては定評あり、外國に於ても頗る重用せらる、君の爲めに特記すべきは曾に自己の經營に沒頭するに止らず、廣く業界の爲めに獻身的努力を惜まざるの一事にあり、卽ち大阪セルロイド同業組合副組長たると共に、日本輸出セルロイド製品同業組合聯合會大阪支部長として、其の多忙なる時間を割き、同業者の福利增進を圖り、斯業の進步發展に意を致し、効績の

多大なるは何人も認むる所なり、思ふに我が國のセルロイド工業は、其の量より考ふるも、其の質より察するも尙開拓の餘地鮮少にあらず、決して今日の狀態を以て滿足すべからざるは明かなりとす、此の時に當りて君の如き偉材を有するは、大に意を强ふするに足るべきなり、吾人は君が切に自愛して今後尙業界の爲めに盡瘁せられんことを望み、期待する所甚だ多し。

※

日本染料製造株式會社技師

藤生雄三君

明治三十年十二月生
工場 大阪市西區春日出町
電話土佐堀 自五五〇〇至五七番

多士儕々たる大阪染料界中、少壯新進にして將來望を囑すべき人を物色すれば、我が藤生雄三君の如き固より其の選に洩るゝの士にあらず、君は群馬縣新田郡の產にして藤生勝太郎氏の三男なり、家代々農を以て業とせしが、君は將來染色業を以て身を立てんと志し、縣立太田中學校を卒業後、進んで桐生高等工業學校色染科に學び、大正八年拔群の成績を以て、同校を出づるや直ちに日本染料株式會社に入社して技師たり同社は本邦染料界に偉大なる勢力を占め、基礎信用共に確實堂固たるものあり、其の工場は同市西區春日出町に在りて、規模頗る壯大を極め、據付機械の如き專ら最新式のものを用ひ、設備の整頓せる實に斯界の模範を以て稱せらる、君は同工場の技師として、而かも天敏の才氣と熱心なる研究とは、益々向上の域に向はしめ、其の技能の優秀なること、眞に賞揚に價するものあり、夙にアニリン染料の研究に沒頭せられ、其の結果大いに良好の成績を見んとす、若し夫れ君が研究にして他日大成するの日ある に至らば、我が染料界に裨益する所決して鮮少ならざるを知るべし、君年齒尙ほ少壯前途洋々として春海の如し、冀くば自重せられんことを。

※

綿布無地染、別陳足袋地染專門
大阪府東成郡蛯江町蒲生四五

松崎染工場

福助足袋、日の本足袋等が好評嘖々たるは固より其の裁縫の入念なるに由ると雖も、染色の明瞭鮮麗にして褪色の憂なきは亦是等足袋の好評ある所以也、叙上の足袋は實に我が松崎染工場の染色に係るものにして同工場の技術は優秀無比を以て稱せられ、夙に足袋地染色界の覇を唱へ、一日の加工高一萬八千碼と註せられ、事業の盛大斯界稀れに見る所なり、其の經營は酒井重松、澤崎小一郎兩氏の共同に成り、工場敷地七百坪現在職工數三十餘名を算するも、註文日に月に增加し、今や擴張の機運に向ひつゝあり、其の營業は綿布無地染、別珍足袋地染を專門とし、久留米の日本足袋株式會社、福助足袋株式會社其他岡山方面の足袋製造業者を主たる得意とす

澤崎氏は福井縣の人、明治十五年に生れ、幼にし敏捷夙に麒麟

兒を以て稱せられ、大いに其の將來を囑目せらる。年十八、南部亦左衛門氏の令弟にして染色界に名ある前田金造氏經營の工場に入り、同氏に就きて斯業を研究すること多年、其の技年と共に熟達して遂に同僚を凌駕するに至り、前田工場の模範工たりき、酒井氏も亦福井縣の人、明治十六年生る、性來俊敏、聞一知十、才名夙に高く、殊に手技の妙を得、屢々妙技を發揮して鄕黨を驚かせり、稍長じて染色業に志し、前田金造氏工場に入つて斯業を

研究すること幾星霜、技術逐年上達して大いに嘱望せられしが、澤崎氏と意氣相投合して大正元年共に前田工場を辭し、提携協力以て松崎工場を大阪府下鮫江町蒲生に開設せり、爾來業運日に月に隆盛に赴き、遂に今日の殷盛を見るに至れり、斯界の新進にして卓拔なる手腕を有する兩氏に依つて經營せらるゝ當工場將來の發展や、蓋し大いに見るべきものあらん。

※

毛織物製造業

立川毛織物工場

工場　大阪市北區北野芝田町一八七番地
電話長北一七九八番
大阪市東區內淡路町一ノ四工場主自宅
電話東二五二五番

凡そ事を成し業を遂ぐるの途は專心努力に在り、事に專心ならざれば成なり難く、業に努力せざれば功を收め難し、是れ古今一貫の條理なりとす、我立川毛織物工場が今日大阪織物界に於て有數の地位を贏ち得たる所以のもの全く場主立川宇藏君が精勵努力の結晶たらずむば非ず、君幼より英敏の資を負ひ、夙に實業を以て身を立てんとし毛織物業に關して研修する所尠なからず、今を去る約三十年以前、現工場を創設して毛織物製造業を開始し、爾來斯業に奮勵努力の結果、遂に今日の盛況を見るに至れり知るべし、君も亦近代立志傳中の一人なるを、現在同工場は各種毛織物及綿布の製造を業とし、規模の宏大なる設備の整頓せる實に斯界稀有を以て稱せられ、其の製造能率亦頗る多く、据付機械の如き最も最新式なるものにして、織機は英國製ロバートホール五臺、手織機五十餘臺を有し、實に斯界の模範工場たるに愧ぢず、尙本工場の外に住吉工場(住吉公園附近)及本庄工場(大阪市外本庄町の二分工場)を有し、職工約八十名を擁して日々製作に忙殺せられつゝあり、而かも其の製品の優良なること、決して他の匹儔を見ざる所なり、全國各官署及各地の大商店より注文輻輳し大に歡迎を受く、思ふに君の今日あるは全く是れ專心努力の賜たらずんばあらず、君年齒已に五十七歳、冀ば加餐健在せられんことを。令息政利氏(二十七才)は、大正十一年桐生高等工業學校紡織科出身の秀才にして、業を卒ふると共に直ちに家業に從事し、父君を輔けて餘念なし、今や同工場は此の有爲なる父子の努力に因り前途益々多望なるものあり、其の將來に於ける發展は延ひて我が業界の振興に資すること甚だ多きものあるを信じて疑はざるなり。

福島紡績株式會社飾磨工場技師

金田宗三郎君

明治三十二年生
兵庫縣飾磨町福島紡績社宅

關西紡績界の少壯技術家として嘱望せらるゝ金田宗三郎君は群馬縣北甘樂郡の產、嚴君を金田嘉十郎氏と稱し、君は實に其三男なり、幼より英才、夙に群馬縣立富岡中學を卒へ、將來紡織業を以て身を立てんとし桐生高等工業學校紡織科に入學して斯業を研鑽攻究、大正九年優等の成績を以て同科を卒業す、直ちに福島紡績株式會社に入社し、最初堺工場詰たりしが後ち岡山縣笠岡工場に轉じ、更に大正十一年飾磨工場に榮轉以て今日に至れり、福島紡績株式會社は關西地方に於ける紡績界の雄を以て目せらる、其經營の堅實にして基礎の鞏固なる、同業幾多の會社中稀に見る所なりとす、從つて信用勢力偉大にして夙に斯界の推奬を受く、現在各所に工場を設け、其の製產額の如き頗る多額に上り、販路亦た廣汎なる區域に及ぶ、君は現に同社飾磨工場に在りて製作上の技術を擔當し、同社事業の發展に盡瘁せらる、今や君が有する天賦の才能と多年修得せる其の學識とは遺憾なく事業の上に顯れ、着々其の成績の向上を實現しつゝあり、是を以て同社に於ける君が信用益々厚く、今や社內樞要の人物たるに至れり、由來紡績の事業は、時代の推移と共に改善進歩を促がすこと甚だ切なるものあり此の秋に當り、斯界の技術者中に君の如き新進研究的の士を迎ふるは、大いに人意を强ふするに足ると共に、我が福島紡績會社の爲めに其の人を得たるを賀すべきなり、君年齒漸く二十五歳の壯齡にして、前途頗る多望なり、冀くば自重益々斯界の爲めに奮勵せられんことを。

※

陸軍火藥製造所技手

石川浩太郎君

明治三十二年生
東京市外王子町豐島
陸軍火藥製造所豐島分工場內

現時陸軍火藥製造所に於ける多數の技術員中年齒最も少く、而かも新進有爲を以て稱せらるゝものは即ち我が石川浩太郎君其の人と爲す、君は群馬縣利根郡の產にして石川鐵雄氏の長男なり、幼より聰慧の聞えあり、長ずるに及んで群馬縣立沼田中學校を出て、更に進んで桐生高等工業學校色染科に入る、大正九年優秀の成績を以て同校を卒業するや、陸軍火藥製造所技手に任官し王子分工場に勤務せり、是れ君が校窓を出でて實際社界に立ちたるの初めなり、爾來孜々として業務に鞅掌盡瘁せられ、上司の信用頗る厚し、殊に又其の有する天才と技術に關する學識とは、業務上成績頗る良好にして、將來に於ける有爲の技術者として嘱目せらるゝに至れり、後豐島分工場に轉じ、現に其の職に在りて日々精勵奮勉せられつゝあり、思ふに輓近我が火藥製造界の進歩頗る著しきものあり、殊に世界大戰に於ける各國交戰の實際上より比較研究の結果益々其の製造法の進歩發達を見るに至れるは、大いに之を賀せざるべからざるなり然れども尙ほ將來斯界に有爲の技術者を俟つこと頗る切なるの際に當り、君が如き年少氣鋭の士を有するは邦家の爲め更に祝福せざるべからず、君は今齡漸く二十五歳に達したる青年なるを以て、其の前途は尙ほ遼遠なりと謂ふべきなり、是よりして奮勵努力能く君が多大の抱負と遠大の理想とを透徹するの曉に至らば、我が火藥製造界の進歩は、更に一段の生面を開くの日あるは照々として明かなる所なりとす、君たる者それ今後自重自愛して更らに邦家の爲めに倍々盡瘁貢献せられんことを望んで已まざるなり。

松太綿布株式會社技師長

田中泰亮君

明治二十年五月六日生
和歌山市三木町南三丁八番地

紀州和歌山の地綿布の特產地として夙に其の名顯はる、彼の綿布の流行を極めし寬文の頃には其の產額實に全國に冠たりしといふ。近年特に綿フランネルの製織旺盛を極め、其の製產額の夥多なる全國亦其の比を見ず、而して同地機業家の數明治四十年の交に於て既に七百戶使用職工五萬餘人と註せられき。近時其の數益々增加し規模の雄大、設備の完全、眞乎刮目に値するものあり、松太綿布株式會社の如き蓋しその瞠目して見るべき新進の一會社にして、資本金三百萬圓、拂込金百五拾萬圓、和歌山市奉行町に本社を置き、事業の殷盛斯界稀れに見る所なり。同社は元松太合名會社と稱し大正六年二月綿布精工合名會社を合併するに及んで組織を變更し株式會社となしたる

ものなり、社長に松居善助氏を擧げ、專務取締役に太田儀兵衛氏を推せり、殊に同社技師長として令名ある田中泰亮君は、靜岡縣の人、田中鑑吉氏の四男にして、明治二十年五月六日を以て生る、夙に靜岡縣立工業學校に入學して染織學を研修し、明治三十八年首席を以て同校を卒業す、幾許も無く上京して伊藤染工場に入りカーキー色の研究を遂げ、更に和歌山市に於て綿布捺染を習得す、後ち松太綿布會社に入りて技師長に任じ以て今日に至れり。這般歐洲戰爭の影響に依て染料の暴騰するや、君之を遺憾として其の製造を計畫するところあり、幾多の失敗と經驗とを積んで、漸く輸入品に匹敵し得べき製品を得たり。是に於て乎大正五年十月同志を糾合して朝日化學工業株式會社を創立し、其の成立と共に推されて同社監査役に任ず、君資性溫順眞摯率直にして毫も浮華輕佻の風無く、而かも頭腦明晰にして才學あり、內外の聲望甚だ高し夫人をよしへ子と云ひ、和歌山市の人、有本伊之助氏の女なり、貞淑敏才を以て稱せられ、君との間に長男彰氏（明治四十四年十月生）二男敏則氏（大正二年五月生）の二君を擧げ、家庭頗る圓滿和氣靄々として春風駘蕩の慨あり。

秋田縣横手町會議員、湯澤酒造株式會社取締役、株式會社阿櫻館取締役、株式會社横手劇場監査役、勸儉株式會社取締役、東北足袋株式會社取締役、平鹿織物信用組合理事

湊谷門兵衛君

明治十二年六月十八日生
住宅營業所　秋田縣横手町大町
電話　横手　六四番
工場　同　同　鳥崎町
電話横手三一八番

東北織物界に於て一異彩を發揮する秋田縣平鹿織物は、同業者尠からずと雖も、就中頭角を顯して覇者と目せらるゝものは、湊谷門兵衛君なりとす、君は縣下增田町の出身、明治十二年六月十八日を以て呱々の聲を擧げ幼名を貞吉氏と稱す、織物業は先代より繼承する所にして、先代は平鹿織物株式會社の製品たる縞物を一手販賣し、同業中に屈指の商績を示したりき、大正八年中不幸病歿せるを以て君家督を相續せり、君は裏地用染木綿を主產品とするの方針を樹て、先づ經營法の全般に亘りて整理を斷行し、積極的の擴張を爲すと共に冗費を緊縮して改善の實を擧げ、內は品質の向上能率の進歩、外は販路の開拓、同業の發展に思ひを注ぎ、寢食を忘れて盡瘁し、着々其の實効を收めて面目を一新するに至れり、工場は大正九年九月より操業を開始し、鈴政式力織機八十臺を備へ、之れに熟練せる從業員七十名を附して製產に力め、十餘名の店員は販賣事務に執掌す、販路は本縣內、山形、靑森、巖手、北海道其の他に及び、何れも其の地方一流の代表的商店と取引す、君は埼玉、靜岡、新潟、東京等の各機業者に就て多年研究する所あり、斯業に關する造詣は卓越せるものにして、從つて品質は優秀平和記念博覽會其の他に於て屢々受賞せり今や聲望高きを爲して平鹿織物信用組合理事に推薦せられて、同業の爲めに盡瘁し、横手町會議員として自治の振興に貢獻す、其の他阿櫻及び湯澤の兩酒造株式會社に取締役として酒釀界に、又阿櫻館社長、横手劇場監査役として民衆娛樂の爲めに寄與し更に亦た東北足袋株式會社、勸儉株式會社兩取締役として產業發達の爲めに努力す、其の各方面に缺くべからざるの人材として期待せらるゝこと斯くの如し、蓋し東北に於ける實業家中の錚々たるものたり、君年齒不惑を超ゆる五歲、既に今日の聲名を博す、其の將來の發展蓋し豫測し難きものあらん、夫人はとよ子と稱し溫雅貞淑の賢夫人にして、兩者の間に八女を有する子福者たり、繁榮羨むべきかな。

福島紡績株式會社取締役技師長

川合英太郎君

明治七年二月生
大阪市北區上福島中四丁目二三七番地
電話　土佐堀　二八〇七番

福島紡績株式會社が依然として優勢を持し常に斯界の先驅を爲せるが如き觀ある所以のものは何ぞや、他なし經營の衝に當る幹部が克く施設を誤らず、巧に時勢に策應して所期の目的を達成せんとする努力に歸すべきものありと云ふべし、君は三重縣津市の人明治七年二月を以て呱々の聲を擧ぐ、由來津市は各種工業の盛大を極むるの地、然かも我が國の商都たる大阪に遠からざるに於て、君が自から感化を承け、將來の志望を斯界に措きたること當然なりと觀るべし、即ち小中學の課程を卒るや、遠く笈を東都に負ひ、東京高等工業學校に學ぶ、機械科なり、殊に取締役にして技師長を兼ぬ川合英太郎君の如き偉器を有するに於て同社の前途は眞に祝福するに足るものなり、爾來奮鬪頗る力め、次第に重用せられて備後福山工場長に任じて八年、効績顯著なるものあり、更に進んで本社に轉じ、技師長の要職に擧げらる、君茲に於て乎、其の深遠なる學識と多年の經驗とを傾倒し、多數の從業員を督勵して、社業の發展に全力を注ぎ、製產の增加品質の向上何れも着々として面目を新たならしめたり社內の上下は勿論、業界の先進者も亦深く君に期待する所あり、遂に大正九年六月、取締役に推されて今日に至る、君が二十年一日の如き、至誠の努力は愛に結びて美果を生じたるなり、蓋し同社の爲めに缺く可らざる有用の材器にして、君の責任や重且大なりと云はざる可らず、惟ふに多年の經驗を有する君の如き有爲の人材を、取締役兼技師長の要職に就かしめたる同社諸氏の慧眼も亦賞揚に値すべきものあらん、君幸に自重更に今後の活動を望んで止まず。

に入りて斯學の蘊奧を專攻し、明治三十年其の門を出づ、成績拔群にして同學の羨望する所たり、卒業後東洋紡績株式會社愛知工場に職を奉ずること二年、後ち感ずる所あり獨立して機械鐵工業を營む、經營三年餘、時適々福島紡績株式會社の人材を求むるに會し迎へられたるは、恰かも約二十年の前にあり、爾來奮鬪頗る力め、次第に重用せられて備後福山工場長に任じて八年、効績顯著なるものあり、更に進んで本社に轉じ、技師長の要職に擧げらる、君茲に於て乎、其の深遠なる學識と多年の經驗とを傾倒し、多數の從業員を督勵して、社業の發展に全力を注ぎ、製產の增加品質の向上何れも着々として面目を新たならしめたり社內の上下は勿論、業界の先進者も亦深く君に期待する所あり、遂に大正九年六月、取締役に推されて今日に至る、君が二十年一日の如き、至誠の努力は愛に結びて美果を生じたるなり、蓋し同社の爲めに缺く可らざる有用の材器にして、君の責任や重且大なりと云はざる可らず、惟ふに多年の經驗を有する君の如き有爲の人材を、取締役兼技師長の要職に就かしめたる同社諸氏の慧眼も亦賞揚に値すべきものあらん、君幸に自重更に今後の活動を望んで止まず。

菓子製造業

山寺商事株式會社

本社　東京市神田區東龍閣町十九番地
電話神田　八九九番一二一〇番
出張所　東京市神田區大和町十九番地
製菓工場　東京市神田區鞍地河岸

創立　大正十年三月
資本金　參十萬圓
重役　取締役渕邊寬之、山寺篤太郎、鐵野彌兵衛

東都に於ける砂糖、麥粉及菓子製造問屋として山寺篤太郎氏の名は久しき以前より斯界に知らる、氏の營業は今より約二十餘年前の創始に係り、其の間氏一己の經營として奮鬪せられ、業績の擧るものあると共に名聲頗る斯界に嘖々たるに至る、大正十年三月事業進展に伴ひ、茲に組織を變更して株式會社と爲す、之れと同時に從來の營業を擴張して、更に材木製函染料工業藥品等の品目を增加し、一段の生面を發揮するに至れり、而して從來の營業主目たる菓子製造業に就ては、本社の最も主力を注ぐ所にして、品質の優良なると製品の時代的なることとは、能く嗜好に投ずることを得て、頗る一般の歡迎する所たり、是を以て其の賣行き頻繁を極め、都下の各菓子製造會社を代理店と爲し、廣く日本全土に播布せられ、尙ほ支那方面に向つて販路益々擴張せられ

つゝあり、現在代表的菓子製造業者として稱揚を受く、本社の盛運此の如くなる所以のものは、其の商略の宜しきを得るに起因するは勿論なると雖も、主として營業の任に當る山寺篤太郎氏其人の才腕技能に由るべきは因より言を俟たざる所なりとす、曩に又營業科目を增加し、材木其他化學的工業事業を開始せられ、其の成績も亦大いに見るべきものあり、將來に於ける本社の發展更に目覺しきものあるは、今より期待することを得べし、殊に取締役渡邊寛之氏の如きは新進氣鋭の士にして且最も理解に富むの人なり、其の他重役諸氏何れも皆經驗と力量とを有し、是等諸氏協力一致して事業の爲めに奮闘せらる、本社の前途に於て光明の昭々乎たるものあるは、大に本社の爲めに祝福すべきなり。

※

平野撚糸場主

田中留吉君

工場　京都市表笠大一番町
電話　西陣八〇一
住所　京都市七本松元誓願寺上ル
電話　上三八七八番

明治五年二月十日生

京地に於ける斯業の頭目として西陣撚絲再整株式會社、日本撚絲會社に次ぐ平野撚絲場は實に我が田中留吉君の經營する所たり同工場が斯くの如く斯界に隆々たる聲威を示す所以のものは、之れ即ち君が尋常の材幹にあらざることを現せるに外ならざるなり、君は明治五年二月十日を以て福井縣大飯郡和田村に生る、田淵權之助氏の三男なり、由來福井縣は織物產地として名あり、生を此の地に享けたる君の斯業に從事するに至れるは因緣淺からずと云ふべし、幼少の頃より、俊秀の資質は鄕黨の推服する所となり、何れも其の將來を矚目して止まざるものありき、普通學の課程を卒るや、早く既に實業に志し、其の周到にして鋭敏なる才識を以て、常に業務の發展を謀り、大いに獨立の準備を整へて、飛躍の機到るを俟て長を免れずと雖も、君の努力と手腕とは、克く頻發する障害を打開し、年と共に業績は進歩して、遂に一二大會社を除くの外は個人經營のものとしては全く其の比類を見ざる盛況を呈するに至れり、今や分工場を京都市上京區七本橋通り、今出川下るに設け、二百五十名の從業員を有して年產額一萬貫目に及ぶ、販路は西陣の各織物業者にあれども就中同地の代表的工場として著名なる矢代仁織物工場を主なるものとす思ふに君と尠からざるも、創業二十年に垂んとする歲月の間、奮闘精勵せる結晶の美果と稱すべきなり、業礎愈々固く今後の發展は更に刮目して待つべきものあらん。曾に平野工場の爲めのみと言はず、斯業の爲めに自重せられることを希望して止まざるなり。

※

大阪紡績株式會社技師長

中松續君

明治二十五年八月生
大阪府泉南郡田尻村大字吉見

關西紡績業界の新進人物を求むれば、先づ指を大阪紡績株式會社技師長中松續君に屈せざるべからず、君は大分縣の人、明治二十五年八月同縣速見郡杵築町に生る、幼にして穎悟怜悧機敏にして才氣衆に優れ、大分縣立杵築中學校を卒業後、進んで名古屋高等工業學校に入學して、紡績學を專攻す大正七年拔群の成績を以て同校を卒はるや和歌山紡績株式會社本社工場に入つて工務係に就任し、設計改增築及保全部を擔當して大いに其の非凡なる手腕を認めらる、同九年二月懇請辭し難く、大阪紡績株式會社に入つて工務長に擧げられ、諸般の設備に改良を加へて能率の增進を圖ると共に製品の改善に力を注ぎ、社業の發展に盡瘁せしこと尠なからず、同年九月拔擢せられて技師長に擧げらる。君又大阪紡績會社長たる寺田氏一族の經營に係る寺田紡績株式會社の囑託を受け、同社の工務に鞅掌し、大正十年八月同社第二工場起工に際して、其の設計及工事の監督に當られたり。又同十年十一月より支那各地を歷遊して紡績事業を視察し得る所尠なからず、歸來益々社業の改善に力を注ぎ、熱誠以て優秀品の製出に腐心せられつゝあり、大阪紡績株式會社製品が近來著しく其の聲價を揚ぐるに至りしは、もとより原料の精選優良職工の採用、其他に意を用ひたるに因ると雖も、君の努力に依るところ亦尠なからず。君今や最高技術員として同社內に重きを爲すのみならず、關西紡績業界に於ける新進として斯界に嘖々の名聲あり。而立を越ゆる僅かに二歲、既に一大會社技師長の要職に就ける君の如きは、蓋し異數と云ふべく、深遠なる學識と超凡なる技術的手腕と、而して燃犀明逸なる頭腦と縱橫の才氣とを有し、而かも德義を有するの士に非ざれば克く君の如きを得んや、年齒尙壯將來の發展期して俟つべきなり。

※

清酒『富士』醸造元

加藤富三郎君

山形縣西田川郡大山町
電話　大山四二番

『白扇倒縣東海天』とは、丈山が吟咏として著名なるものにして、近くは京都花の本聽秋翁が『白雲の上もみくにぞ富士の山』の名吟も亦人口に膾炙する所、彼の三國に跨る芙蓉峰の秀靈は、洵に日本の名山たるを失はず、今や山形縣下に於ける唯一の優良酒として知られたる清酒『富士』の命名は其の醸造家たる加藤富三郎君の選ばるゝ所、實に好箇命名たるを覺ゆるなり、君は明治三十二年二月の出生、其の先代富三郎氏大正五年死去に依り、家督を相續して其の名を襲へり、同家は安永年間初代加藤專之助氏以來今に至る迄十一代なりと云ふに於て其の舊家たるを知るに足らんか、當主富三郎君は、大正九年中大阪高等工業學校醸造科を卒業し、同年十二月一年志願兵として入營、大正十一年春除隊以來家業に鞅掌努力しつゝあり、其の醸造高は一ヶ年八百石なるも、清酒『富士』は芳味掬す可きものとして縣下到る處に嘖々たる好評を以て迎へられ、各種品評會、博覽會等に每回出品して一等賞を受けざるは莫しと云ふ、亦以て其の如何に品質の優秀なるかを察知すべきにあらずや、而かも其の販路は目下主として附近各地に在りと雖も、今後の發展を期待して飛躍すべき計畫中に屬すとの事なれば、其の前途の光彩奕々たるものあるは、これを逆睹するに難からざるべく、更に君は同地に於ける醸造家の合同經營を劃策しつゝある以外、清酒の原料が米なる爲めに往々食料問題の脅威を受くべきを察知し、將來に於ける清酒は其の原料を米に取らずして他の種類より醸造なし、以て新日本の飲料物たらしむべしとの抱負を懷きつゝあり、其の醸造法に沒頭して倦色なきが如き

實に君が蘊蓄の深きを窺知するに足るものあらん、君前途春秋太だ富めり、惟ふに今後の發展、顯著なるものあるや疑を容れざる所、希くば自重せられんことを。

※

東洋紡績株式會社尾張工場長

福持壽雄君

明治二十三年三月生

社宅　名古屋市南區熱田尾頭町

現今東洋紡績株式會社として我が紡績界に重要なる位地を占め、業勢隆々益々盛況に向ひつゝあるは、明治二十三四年の交、建設せられたる尾張紡績株式會社の後身なりとす、卽ち尾張紡績は經營宜しきに適ひ、次第に發展して更に組織を大規模に改め、以て業界に縱横の雄飛を試むべき機運に達し、大正三年三重紡績及び大阪紡績等を合同して玆に東洋紡績と改稱するに至れり、所謂名は其の體を現すの文意人を欺かざるものあり、今や內外の矚目する所となる、而して其の尾張工場は初め規模甚だ大ならず、今日に比すれば到底霄壤の差を免れざりしと雖も、社業の進展と共に年を追ふて改增築を加へ、斯界有數の工場として知らる、リング二千六百錘、男女の工手併せて千二百餘名、第一、第二の二工場軒を並べて聳え立ち、八番手より二十番手までの綿絲を製產す、之れを統理する場長福持壽雄君は、三重縣名賀郡錦生村の人、明治二十三年三月を以て生れ、少年の時代より非凡の才幹を有し、殊に其の周到精密なる推理力は衆の感嘆する所なりき、中學の課程を卒るや、工業に志望を抱き、笈を大阪に負ふて同地の高等工業學校に入り、機械科に學びて秀才の稱あり、明治四十三年優等の成績を收めて卒業す爾來斯業に從事して其の專殊に資性溫厚にして明敏、從業員を遇するに寬嚴度を失はず、人心の機微を末前に察して指導する所を誤らざるが故に、千二百餘名の大家族は和氣藹々の裡に業務に精勵しつゝあり、斯くの如き工場長を得たることは獨り東洋紡績株式會社の爲めに喜ぶべきに止らず、我が產業を發展向上せしむる上に、逸すべからざる要素として、紡績界の爲めに祝すべきにあらずや、同社の將來は卽ち君の將來にして、前途春秋に富む、須く期待すべきなり。

※

岩船郡酒造組合評議員、銘酒越之菊釀造元

奧村彌平君

明治二十四年十月十二日生

新潟縣岩船郡村上町

電話村上一一九番

『越の菊』と命名せる醇良酒が一般愛酒家に歡迎せられつゝあるは、知る人ぞ知らん、其の芳味掬す可きものある、亦た其の名の優美なると相似たり、本品は實に越後國岩船郡村上町奧村彌平君の吟釀に係る。君も同郡內には二十數名の酒造家あり、協力して芳醇無比の良酒を釀造するに努め、曩に酒造組合を組織し、君は實に其の牛耳を執れり、同組合員は明治二十五年中新潟縣酒造組合創立と共に同組合に加入して、岩船郡支部を設けしが、同三十八年中酒造組合法に因り、岩船郡酒造組合として設置せられたるものにして、現組合員數二十二名其の釀石數は村上稅務署に就きて調査する所に據るに、大正八年度中清酒七、八七一石、燒酎四二八石、同九年度中清酒六、六〇五石燒酎二二六石、同十年度中清酒七、八八九石燒酎三二一石にして、第八回全國酒類品評會其他に出品し、賞を受けたる事枚擧に遑あらず、其の主たる販路は北海道なりとす奧村家は代々彌平を稱し襲名して今に及べり、君は明治二十四年十月の出生、先代彌平氏の長男なり、幼名を房太郎と稱し、大正五年十二月中先代死去の後其の名を襲名す、夙に縣立村上中學を出て、後、大藏省釀造試驗場講習生として研鑽二年、歸省して家業の酒造に從ひ、熱心業を勵むの傍ら釀造に關する化學的研究に沒頭しつゝあり人と爲り謙抑重厚、現に岩船郡酒造組合評議員として頗る信望あり、夫人をきん子と稱し一男あり、家庭圓滿、宛然春風滿堂の慨あり。

※

純絹絲柞蠶絲染色業　商號丸屋松村染工場主

松村辨之助君

明治二十一年一月二十八日生

京都市寺之內通淨福寺西入

電話西陣三九三番

軒頭櫛比する京都西陣の色染業界にありて新進の工場として其の發展の急速なる、殆んど業界の異數なりと稱せらるゝものに松村染工場あり、場主松村辨之助君は西陣染色業者中の名家を以て許さるゝ後藤辨次郎氏の一族たり、商號を丸屋と呼ぶ君は明治二十一年一月二十八日を以て生れ、資性活撥にして豪快頗る覇氣に富む、夙に京都市立工業學校色染科に學び、同窓を擢んずるの秀才として、在學中より異彩を放ちたりき、其の業を卒るや、各地の工場に就て學理と實際とを研究し、更に工場經營の要諦を會得するに力め、數年の間苦心する所尠からず、爲に造詣愈々加はり、今を去る約十年前現工場を開設して獨立するに至れり、爰に於てか多年の經驗より各般の施設に改善を加へ、最新の方式に因る裝置を備へ、熟練せる職工を網羅して生產率の增加を圖ると共に、製品を優秀ならしむるに意を用ひ、漸次に其の理想を實現せしめつゝあり、純絹絲、柞蠶絲の色染を主とし、其の過半は西陣帶地用に供せられ、僅少の量を御召と爲すものなるが、然かも二者とも絲織物中の高級品にして、其の色染の良否が品格價値に及ぼすべき影響は甚大なりとす、丸屋染工場が常に他の模倣すべからざる特色を有し、江湖の歡迎を受くるは、君の手腕に對する信賴を證するものたらずんばあらず、西陣染友會の錚々たる人物として、同業の囑望すること篤きも、亦故ありと云ふべし、君は別に撚絲工場を兼營し、他日の雄飛に具ふ、或は色染製織の綜合的大工場の出現するも遠き將來にあらざるべきか、誠に君は雄大なる氣魄の下に終始躍進的態度を持し、然かも堅實なる步調を以て基礎を築き、一度機熟するに於ては、獨往千里の慨を示さんとす、願はくば此の意氣をして愈々旺んならしめ、其の遠大の志望を達成するに速かならんことを。

※

清酒米正宗釀造元

佐藤權左衛門君

明治二十四年四月十五日生

米澤市信夫町

電話米澤二〇八番

奧羽六縣の酒釀界を通じて、其の品質首位にありと推稱せらるゝは、實に佐藤權左衛門君の釀造に係る「米正宗」にあらずや、所謂酒の三大生命とも稱すべき味、香、色に於て到底之れに比肩し得るものなく、獨り雄委堂々斯界を濶步するの狀にありとす、

米正宗は代表的清酒にして、其の他幾多の製品何れも優秀群を抜き、鶏中の孤鶴たる歡を有す、佐藤家が醸造業者としての起元は頗る遠く、數度の火災に依りて舊記多くは灰燼に歸し、詳細を徵すべき古文書多からずと雖も、蓋し元祿年間の前にあるべしと想像せられ、天明時代に建設せる酒庫の殘存せるあり、中興の祖より傳へて君は正に第十一代目に當ると云ふ、君は幼名を文吉と稱し、明治二十四年四月十五日を以て生れ、大正十年十月先代權左衞門氏の歿するや、代々の家憲に依り其の名を襲ふ、資性極めて謙讓、自ら持すること嚴なれども人に對して寛宏、稀れに見る君子人たり、小中學の課程を履みて大阪高等工業學校に笈を負ひ、醸造科に入りて專念研究に從ふ父祖傳來の家業に對して日新の學術を應用し、以て家門の名聲を盛んならしめんとする意氣凜乎たるものあり、同窓尋常の修學と精神を異にす、即ち優良なる成績を以て大正五年其の業を卒ふ、歸來直ちに醸造に從ひ、研鑽し得たる學識を傾到して又剩す所なく、忽ち好評一段の藉甚を加ふるに至れり、先代の歿後は更に經營の全般を双肩に荷ひ、愈々販路の擴張を謀り、益々品質の改善を行ひ、福島、宮城の各縣を初めとし、近縣より注文續々到る、各地に催さるゝ酒類品評會、共進會、博覽會等には毎年出品を怠りたることなく、又毎回名譽ある賞牌を受領せざること未だ嘗てなしと云ふ、之れ大いに其の品質に對する公平なる批判と稱すべきなり、君未だ而立を過ぐる僅か三歳、前途甚だ春秋に富む、必ずや其の抱懷する理想を實現して、質量と共に斯界の重鎮たるべきと決して遠きにあらざらん。

※

日本整布株式會社技師

金子酉三君

明治三十一年生

會社及工場　京都府伏見市外堀内村
電話伏見二四六、二四七番

君は風に由來整布の事業たるや、其の目的とする所織物の整理加工に在り、即ち織物の眞價を益々高からしむるものは、全く整理加して工の如何にありと謂ふべきなり、然り而して京都斯界に技術の優秀と基礎の鞏固なるとを以て、夙に名聲藉甚たるものを日本整布株式會社と爲す、同社工場は現在京都伏見市外堀内村に在り、其の規模の宏大なる設備の整頓せる實に斯界稀れに見る所なり我が金子酉三君は則ち同工場技師として日々其の業務に當り、以て大いに事業の好成績を擧げつゝあるの士、現時同社に於て最も擦要の地位を占め、而かも缺くべからざる人材たり、君は群馬縣利根郡沼田町の人金子類藏氏の三男なり、資性英邁にして年少己に事理に通じ、自から群童と異なるものありき、家代々農を業とし縣下に於ける豪農として名あり、君將來色染業を以て身を立てんと欲し、夙に沼田中學を卒ふると共に、桐生高等工業學校、色染科に學び、大正八年優等の成績を以て卒業す、直ちに日本整布會社技師として入社し、爾來君の精勵努力眞に驚嘆稱揚すべきものあり、殊に其の有する天才と修得せる學理の應用とは、遺憾なく同社業績の上に顯はれ、爲めに製品の向上着々として其の實績を現すに至れり、惟ふに君が地位をして今日あるに至らしめたるもの、蓋し過去に於ける奮闘的勉學の與つて力ありしは勿論にして、固より偶然にあらずと云ふべし、君は年齒尚少壯にして而かも新進有爲の士を以て推さる、其の前途は洋々として恰かも春海の如きものあり、今後其の研究と活躍とは我が整布業界に稗益する所決して鮮少にあらざるべく、吾人は其實現を切望して已まず、それ君たるもの冀くば益々自重加餐せられんことを。

小紋染今村染工場主

今村萬三郎君

明治二十三年六月二十七日生

京都市西洞院通錦小路上ル

京都特産として夙に世に知らるゝ絹布小紋染業を營み、然かも業界新進の人材を以て稱せらるゝは今村染工場主今村萬三郎君なりとす、抑々我が今村家が斯業を開始せるは幕末の頃にあり、創業後既に七十年の歴史を有す、當主たる君は明治二十三年六月二十七日を以て生れ、今村家の第三代に當る、由來小紋染なるものは其の起原頗る遠きにありて、意匠は概ね一定の型式に捉へられ、何等新味の掬すべきものなく、徒に舊態を墨守するに過ぎざるの狀にありたり素より小紋染の特徴は恂爛を極めざるも優雅にして風韻に富み、其品位の高尚なるを尚ばるゝものなりと雖も、時代の進歩と共に之れに適應する技術を加へ、新機軸を生ずべきは當然理明の理に屬す、即ち君の如き新進の人物を要する所以なり、君は夙に京都市立工業學校に學び、色染科を專修して成績頗る優良、先輩同窓は其の卒業後の活動に對して多大の期待を寄せ囑望する所深かりき、果然同校の門を出づるや、家業を繼ぎて鋒鋩忽ち顯れ、父祖以來多年築成せる信用に加ふるに、新鋭の氣を以て手腕を發揮す、既に先代の頃に於ても、製品の優秀なるは世の等しく認むる所にして、嘗て大阪に開催せられたる第五回内國勧業博覽會に於ては、宮内省の御用品たるの光榮を博すると共に、名譽ある褒賞を授與せられ、其の他内外の博覽會、共進會等に出品して優等の賞を受けたること數ふるに遑あらず、而して君の代に及び愈々專攻せる學識を運用して其の研磨せる技術を揮ひ、意匠染色ともに秀麗を極め、幾度か代表的作品として稱鑽を博せることあり、眞に小紋染工場中屈指の地位を占む、君資性溫厚篤實、嚴君慈母の苟くもせざる庭訓の裡に人となり、居常端正、身を持すること嚴にして然かも人を待つ寛、蓋し業界の人格者として汎く江湖に推奬すべきなり、其家業の日を逐ふて益々旺盛を極め、愈々其の家名をして振揚せしむるものある、亦故ありと云ふべきなり。

セルロイド及其加工品製造販賣

サン、セルロイド株式會社

大阪府堺市向井町北庄二二四番地
電話　堺　一九〇番
振替口座大阪　五六九九三番

創立　大正九年三月二十日
資本金　三十萬圓
重役　取締役社長鈴源之輔、專務取締役坪井佐太郎、常務取締役渡壁全一、取締役相宅宰藏、吉年忠雄、平岩義一、監査役山口義一、柴谷善次郎、指吸富之助

歴史は常に興亡起伏の跡を示し、社會萬般の事象盡く盛衰消長の理を免るること能はず、即ち或る者は忽ち天下に覇を稱へ、或者は盛名徒に虚を構へて内既に衰退の兆あり、我が國事業界歐洲戰爭の好影響を受けて一時繁盛其の極に達し、世を擧げて營利に吸々たりき、然るに財界一度不況の兆見ゆるや彼等は尚時勢の轉變を覺らず、恐慌の波濤漸く眼前に迫るに及んで急遽匆惶之れが對策を畫せんとしたり、その迂愚や笑ふべきなり、かゝる群盲中にありて燦然光輝ある方針と確乎たる主義とを以て世俗の赴く所に支配せられず、自信と勇氣とを以て勇往邁進せるものを實に我がサン、セルロイド株式會社となす、本社は大正九年三月二十日、財界の一大變動期に當り資本金

三十萬圓を以て設立せらる、其の營業科目はセルロイド又は斯品に類似する加工品の製造販賣及び、之れに附帶せる各種の事業經營にして、尙ほ製品の重なるものは自轉車用ケース、カラー、カフス及び櫛、齒刷子の類とす、其の製品は優秀卓拔なるを以て世の好評を博し、甚年ならずして先輩諸會社を凌駕せんとする營業成績を示し、嶄然と斯界に擡頭せり、蓋し幹部諸氏の堅實なる營業方針に依らずんば安くんぞ斯くの如きを得んや、現時貿易の不振は事業に影響する所甚大なるも、同社は社業順調に發展しつゝあり、更に景氣の囘復を俟つて一大擴張を試むべく着々準備中に在り、セルロイドの需要は、近年益々增進して其底止する所を知らず、同社の前途や眞に多望なりと云ふべきなり。

※ 越路暢君

株式會社寶山玻璃廠技師長兼專務取締役

明治二十二年七月二十四日生

住宅 上海大康街九六
電話上海北一六八六番
工場 上海寶山路
電話上海北二三一七番

長江沿岸を始めとし、支那全土に亘れる廣汎たる販路を有し、斯業を代表するものの如き觀ある株式會社寶山玻璃廠は、明治四十五年九月三十日の設立に係り、同年十月一日より業務を開始し、漸次に發展の道程を辿りて大正八年三月株式會社に改められ資本金銀五十萬弗、拂込銀廿五萬弗を有す技師長にして然かも專務取締役の要職に任ずる越路暢君は、栃木縣栃木町の人、代次郎氏の長男にして明治二十二年七月二十四日を以て生れたり、夙に福島縣立福島中學校を出て第七高等學校鹿兒島造士館に入り

優秀の成績を收めて更に東京帝國大學に進み、工科大學應用化學科を專攻して大正四年其の業を卒る、直に針路を實業界に執り臺灣製糖株式會社神戸製糖所技師に迎へらる、最新の學術を運用し、同所の爲めに貢獻せる所尠からず、少壯技術家として名聲嘖々たり、後、神戸醋酸工業株式會社に轉じて技師長となるや、又深遠なる蘊蓄を傾倒して工務を督勵し、面目を一新せるもの多々ありき、故に社の內外より信望せらること篤く、殊に工場從業員の如きは衷心より君に悅服せり、適々寶山玻璃廠技師長に轉ずるの報を手にするや、何れも惜別の至情を表して止まず、然れど君は同廠が單に營利事業たる以上、支那の文化開發に至大の關係あり、且つ國際的意義を存するに鑑み、決然其の任に就けり、而して更に專務取締役に擧げられて全く經營の衝に當る今や同廠は工場坪數約二千坪、二百五十餘の從業員を抱擁し、セード類並に瓶類の製作に從ひ、一日の製造高一千弗に達す、蓋し其の壯觀想望するに足るべく、君の手腕亦敬服するに堪えたり、君年齒尙壯、幾多春秋に富むあり、眞に國際的實業家として活躍するは寧ろ今後にして、然かも其の眞價を發揮する亦遠きにあらざるを信ず。

※ 井上幸次郎君

新潟縣會議員、北蒲原郡乙村々長、新潟縣北蒲原酒造組合長

明治三年十月廿九日生

新潟縣北蒲原郡乙村

新潟縣北蒲原酒造組合は北陸方面に於ける斯業の白眉にして、瀧澤文四郎、高津鐵五郎、荒井彥太郎等諸氏の盡瘁する所に依りて創立せられ、專ら品質の改善と組合員の

發展とを謀り、品評會、釀造法講習會の開催、原料品共同購入等、施設する所尠からず、嘗て名古屋に於ける六縣聯合清酒醬油品評會に出品して、優等賞一點、一等賞三點を擧げたることあり、最近大正十年度の組合員總造石數を觀るに、清酒一萬九千三百八十石、燒酎二百二十七石、味淋二十二石、醬油一萬四百七十五石の計數を示し、盛況を極めつゝあり、荒井、瀧澤の諸氏幹部たりしも、現在君が組合長にして笠原七九郎氏副組合長に、高澤俊太郎氏、瀧の川酒造店の兩氏幹事に當り、一致協力勵精しつゝあり、抑も君は新潟縣に於ける舊家にして且つ名望家たり、代々土地の豪農として知らる、明治三十四年の交釀造業を開始し、家門の光輝と君の努力に依り、年と共に發展を來して今日に及べり、每年の造石數六百石內外、銘酒『養老』、『加知閑』は其の代表的製品たり、一は養老の名の如く酒味芳醇、一は加知閑の稱の如く潑溂新鮮、各々特色を具へ、愛飲家をして讃嘆措かざらしむ、販路は縣下、北海道方面を主とし年々擴大しつゝあり、君資性敦厚にして俊敏、明治四十年以來縣政に參し、大正六年以來乙村々長に推され、大正九年以來北蒲原酒造組合長たり、何れも治績顯著、自治産業の功勞者として重んぜらる、夫人きよ子との間に三男三女あり、長男良平氏は獨逸協會學校出身の秀才にして家業に驍掌し次男次郎氏は新潟中學校を卒業後同郡內近氏に養嗣子として迎へられ、三男三郎氏は別に酒店を經營しつゝあり、長女りく子は新潟工藝學校を出でゝ豪農加藤活平氏に嫁し、次女は尙家庭に在り、一門の繁榮欣羨の至りにあらずや。

※ 管波善助君

備後織物同業組合代議員、株式會社常盤染工場社長

明治十七年十月一日生

本社 廣島縣深安郡川北村甲五八四番地
電話 神邊四六番
自宅 縣同郡同郡川南村四八番地

廣島縣福山地方を中心として染工場の散在するもの決して尠からず、各獨特の技術を標榜し業を競ひつゝあれども、特筆するに足るべきは寥々曉天の星の如きのみ、唯常盤染工場は是等の間に伍して異色を發揮す之れ現社長菅波善助君が壯年有爲の才を擁して敏腕を揮ふに因る、君は菅波玖治氏の長男、明治十七年十月一日を以て生る、父君は農を家業として、君も亦幼年の交田團に出づると極めて多かりき、稍々長じて思へらく、將來織物界に於て名を爲すべしと即ち近鄕の吉重合資會社に入り染織を研究す、君の期する所は規模狹小なる經營にあらず、須く斯業の大成者にして縱橫馳騁せんとするにあるを以て、大いに伸びんと欲せば、先づ屈せざるべからずの眞理に從ひ自ら進んで辛勞艱苦と戰ひ、豐富なる經驗を蓄積して他日に資したり、留ること十有餘年、斯くして業成ると共に獨立の機も熟し、大正八年現所に菅波染工場を創設せり

然かも機敏果斷なる君は同年末合資會社に改めて神邊染工場と稱し、翌年更に資本金六萬圓、四分の一拂込みの株式會社に組織を一變せり、之れ着々として君の宿望を實現せるものにして、現在工場敷地約四百坪從業員約四十名內外を使用し、絹綿絲染色整練に就ては他の模倣し能ざる特色を有す每日整練五百反、染色亦異數の能率を擧げ盛況同業の羨望する所たり、殊に君は斯業に對する熱心なる研究家として知られ、都

市を距りたる不便の地にあるにも拘らず、異常の苦心を以て、研究材料を蒐集し、時好の風潮を按じて製産の參考と爲すが故に常に好評の嘖々たるもの存す、因に同社の重役は取締役に重政近太郎、泉原彌一郎、龜川新助、園生敬一、監査役に小砂市次郎、江木圓吉、相談役に石橋龜吉の諸氏ありて何れも有數の名望家を網羅せり、同社今後の發展蓋し豫測するに難からず。

☒

石井銀造君

關西紙工株式會社伊丹工場技師

明治二十九年生

本社　大阪市南區安堂寺橋通二ノ三三
電話船場二八七八長二八七九番
工場　兵庫縣川邊郡伊丹町字天津

我が國に於ける裝飾紙工界の權威たる關西紙工株式會社は、大正八年の創立にして資本金五十萬圓を有する會社なり、同社の製造科目は建築裝飾紙工品にして、是等の事業は當時我が國に於て未だ多數の同業者あるを見ず、蓋し我が建築裝飾業界の幼稚にして是等事業に着目するもの至つて少なきに由らずんばあらず、思ふに世の文明に伴ひ、各種製造品種の如きも亦時勢の推移に應じて相當計策なかるべからざるは固より言を俟たざる所なりとす、關西紙工株式會社は夙に此の點に着目し、以て時代の要求に應ぜんが爲めに生れたるものなり、然り而して同社の技術を担當し、社業の發展に努力しつゝあるの士を我が石井銀造君とす、君幼より才名あり、殊に技工上一種天與の才腕を具ふ、故に其の將來技術的事業を以て世に立つの得策なるを知るや、桐生高等工業學校に入り色染科に學ぶ、大正十年優等の成績を以て同校を卒業後、直ちに本社に入りて技師となり、製品上の技術を擔當せらる、爾來君が有する才能と修得せる學術とは、相俟つて遺憾なく業務の成績に發揮せられ、爲めに同社の事業を發展せしめたる功績頗る顯著なるものあり、殊に又現社長たる谷野彌吉氏は、事業上多大の經驗と豐富なる力量とを有するの士にして其の經營振りに至りては他の追從を許さざるものあり、今同社が斯の如き才識に富む社長谷野氏と、天才的技術家たる君とに因りて益々事業の發展に努む、本社の日に月に隆運を呈しつゝある所以亦た理由なきにあらざるあり、今や其の製品は到る處に歡迎せられ、而も其販路の如き遠く支那、朝鮮、南洋等に輸出せられ、前途倍々擴大せんとするの狀勢に在り、同社の將來愈々多望なるべきは吾人の信じて疑はざる所、斯界の爲め君の奮勵を庶幾して已まざる也。

☒

加土廣次君

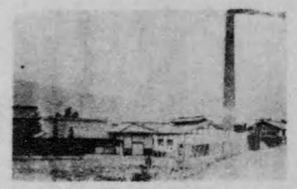
廣島織物加工株式會社常務取締役

明治九年八月二十八日生

廣島縣安佐郡三篠町十七番地
電話　廣島一一三四番

廣島地方に於ける織物は近年頓に其の聲價を高め、品質の改善に觀るも製産の增加に考ふるも、決して他に遜色なきのみならず或種のものに至りては却つて一歩を先んじ大いに世の歓迎する所となり、勢ひ隆々として侮るべからず、蓋し斯くの如き盛況を呈するは同業者が一致協力して敢て私心を挾まず、其の普及に努力せる結果に外ならずと雖も、亦中心勢力と爲るものありて常に同業を激勵鞭撻し、廣島織物の位置を向上せしめたる功尠からざるは昭々として明かなりとす、其の中に就て特記すべきは廣島織物加工株式會社なり、同社は嘗て現常務取締役たる加土廣次君の創立する所に係る、君は加土太郎吉氏の五男にして明治九年八月を以て生れ、夙に染色業に望を囑して技術並に經營に就て研究を積むこと多年明治二十年業を始む、以來精勵努力の功果

空しからず、忽ち殷賑を來して同二十四年現所に工場を新設するの機運に達し、爾後も尚ほ依然として發展の道程を歩みつゝあり、去る大正九年二月、規模擴張の必要に迫られ、資本金二十萬圓の株式會社に改め社長に桑原政助氏、取締役に立石龜吉氏を推し、君は常務取締役の要職に在りて經營の衝に當る、玆に於て更に陣容堂々たるものあり、名實共に同地方に於ける斯業の牛耳を執るに至れり、今や工場六百坪、職工三十名を使用し織物絹綿糸の染色及び整理を營み年額約五十萬反を產し廣島縣下に於てはそれに比肩すべきものなく中國筋に於ける屈指の會社たり、販路は主として、四國九州にあれども、更に對支貿易を計畫中なりと云ふ、眞に廣島織物界の大勢力也と云ふべし、君天資豪壯、細事に屑々たらず、常に眼を大局に注ぎて奮闘努力す、同社の今日あるは全く君の功勞に背ふ所多し、吾人は今後の活動を期待して止まざるなり。



糸染業佐々木染工場主

佐々木清三郎君

明治二十五年三月二十一日生

京都市上京區東小川通上立賣上ル

京都は我が國に於ける染色の名地にして巨商老舗雲の如く軒を並べ、斯界の權威たるべきもの敢て尠しとせず、或は多年營業の信用に依り、或は優秀なる技術に依り、或は壯大なる規模に依り、各特色を發揮しつゝあり、我が佐々木染工場の如きも亦逸すべからざるものにして、特に場主佐々木清三郎君の研究的態度は推稱するに値ひす、君は明治二十五年三月二十一日を以て生れたる少壯の士なり、嘗て京都染織試驗所に於て色染技手たること數年、熱心職務に盡し、精勵恪勤同僚に擢んずること遠く、細密なる注意と明敏なる考慮の下に斯業の改善を謀り、其の成績顯著なるものあり、後滋賀縣下に於ける某染色大工場に入り、更に研鑽を積むこと多年、學理と實際の兩方面に亘りて造詣する所愈々深く、蓋し色染界の偉材たるを疑はず、自ら工場を開始するや多年の蘊蓄は遺憾なく發揮せられ、其の製品の優秀なるは贅言するの要なく、年と共に進歩しつゝあり、君の主とする所は西陣帶地用絲、マント裏地、繻子等の染色にして到底他の企及するを得ざる特色を具ふ、創業は數年前なるが故に、日尚淺きにも拘らず、先進の業者と伍して堂々毫も遜色なき業績を示しつゝあるは、實に其の發展の急速なる驚嘆するに堪へたり、然れども之れ元より一朝一夕を僥倖せるものにあらずして、君が努力の堆積せられたる結果に外ならず、而して特に世の注目を惹けるは終始研究の念旺盛にして、斯業の改善に心を傾け、優秀なる製品を產出するの一事にあり、現に西陣染友會の幹部に列す、君資性溫和にして意志堅固、一度其の溫容に接するや、何人も信頼の念、湧然として禁ずべからず、技術家にして又好箇の實業家的性格を有す、今や而立を超ふる僅かに二歲、前途春秋に富む、必ずや近き將來に於て業界一方の覇者たる亦た遠きにあらざるなり。

☒

農商務省染料試驗所技師

角替利策君

住宅　横濱市岡野町七十五番地

最近科學の進歩著るしきものあると共に、各種の發明頗る多く、爲に國家に裨益する所偉大なるものあるは敢て言を要せず、然り而して、眞の有益なる發明は固より異才者の努力に俟たざるべからざるなり、我が

角替利策君の如き、所謂發明家を以て推すべき人なり、君は幼より英敏の資を具へ、夙に農藝化學に志し、小中學を終へ、後東京帝國大學農學部に入り、專ら斯道の研鑽に勉む、大正四年同校を卒業するや、鈴木博士の助手として研究に從事すること約一ケ年、後神奈川縣農事試驗場の技師となり在職精勵すること約二箇年に及ぶ、更に轉じて農商務省絹業試驗所の技師となり、現に第一部長の職に在り、其の職に當りて精勵恪勤令名隨所に高し。君又斯界稀れに見るの研究家にして、從來其の研究發明に係るものを公表したること一二に止まらず、尙ほ最近專ら精力を傾注せられつゝあるは絹の精練に因りて生ずる石鹼の廢液を利用する方法を研究せり、今や其の成績頗る良好なるを認め、目下特許出願中に屬せりと云ふ、此の方法を完成する曉には、所謂工業的より農業的に應用し得らるゝ有益なる發見にして、實に是れ近來の偉大なる研究なりと謂つべし、從つて其の結果は國利民福に裨する所決して鮮少ならざるを知るべし。思ふに君の才學と研究とをして今後一段の努力を積ましめんには、更に斯界に偉大なる賜を贏ち得らるべきは固く信じて疑はず、君尙ほ前途春秋に富む、庶くば精勵努力して益々邦家の爲めに奮鬪せられんことを切望して已まざるなり。

クリーニング、西洋洗濯、里昂染、和服洗張
石鹼及洗濯用具製造販賣

白洋舍クリーニング株式會社

本社　東京市芝區西久保櫻川町十番地　電話　芝　四　五　四　〇　番
工場　東京府中澁谷七四乃至七六番地　電話　青　山　二　五　一　八　番

吾人の日常生活が愈々繁雜となり、衣服の如き千差萬別の種類を生ずるに從つて、其の洗濯方法も亦た勢ひ複雜とならざるべからず、此の自然の要求よりして生れたるをクリーニングとなす。我が白洋舍がクリーニングを創始せしは明治卅九年にして舍主五十嵐健治君は卒先斯業を研究し、當時農商務省技師たりし現大阪商品陳列所長山口貴雄氏、東京高等工業學校長吉武榮之進氏、傳染病研究所員故柴山醫學博士、三越呉服店常務取締役たりし故藤村喜七氏等の指導後援の下に、東京府下大井町に工場を設置せり、之れを以て斯業の濫觴とす、當時朝鮮統監たりし故伊藤博文公、斯業の嶄新なるを見て直ちに之れを試みしに、其結果甚だ良好なりしかば、同社の名聲忽ち上流社會に喧傳せらるゝに至りしといふ、爾來同社は時流に投じて着々發展を招徠しつゝあるのみならず、常に學校出身の新知識と熟練の職工とを多數用ひて學理と實驗の兩面より研究を怠らず、遂に所謂リョン染として堅牢耐久の點に於て同社獨特の染色法を發明するに至れり、今や三越、白木屋、松坂屋等の染色を一手に引受け居るのみならず、更に宮內省陸軍被服廠、三井、三菱其の他高貴の階級を得意とし、東京芝區西久保櫻川町の本社に於て專ら品物の集配を取扱ひ、澁谷の同社工場に於てクリーニング、リョン染、西洋洗濯、洗張等をなす、同工場は澁谷川の清流に臨み、清淨の空氣を以て誇りとなす、煤煙を忌むを以て石炭の代りに專ら瓦斯又は電氣を使用すと云ふ。殊に理想的の設備、最新の機械、熟練の職工の三拍子を具備するに於ては、正に我國斯業の白眉と稱するを得べし、同社は又名古屋市及び大阪市に支店を有す、前者は西區伏見町五丁目にあり、明治四十二年の創立にして、工場の規模と設備とは中京第一と稱せられ、同地いとう呉服店專屬工場として信用頗る厚く、後者は大阪の中央東區高麗橋四丁目にあり、大正十年四月の開業に係り同地の上流階級に認められ、開業匆々より異常の隆盛を極め關西斯業界の權威たり、

同社は又一般家庭の便宜の爲め品質本位の白洋舍印洗濯石鹼を始め、洗濯用藥品及び洗濯用具を販賣し、之れ亦た一般社會の稱讃を博しつゝあり。同社の專務取締役五十嵐健治君は熱心なる基督教信者にして、眞摯精勵同社今日の基礎を築けるの人なり、而して君を扶くるに松坂屋呉服店取締役鬼頭氏、三越呉服店取締役笠原健一氏及び藤村兼次郎氏等錚々の士あり、以て同社の前途を卜知するに難からず。

☒

爆藥カーリット製造販賣

日本カーリット株式會社

本　社　東京市麴町區永樂町一ノ一　淺野同族株式會社內
電話丸ノ內　自一〇八至一〇七一番　自一七一六至七八番
第一工場　東京府下南千住町
第二工場　神奈川縣保土ケ谷町佛向
創立　大正九年十一月
資本金　壹百萬圓（拂込濟）
重役　取締役社長淺野總一郎、取締役淺野泰治郎、白石文治郎、鈴木紋次郎、淺野良三、淺野八郎、金子喜代太、監査役吉田良三、前川益以

輓近化學の進歩に伴ひ、驚異すべき幾多の發明を見るに至れり、就中新爆藥カーリットの如きは眞に驚心瞠目に値する一大發明と謂はずむばあるべからず、抑もカーリット爆藥は瑞典のカールソン一家の發明に係り、其の原料製造より調合法の發明に至るまでには實に二代に亘り、多年の苦心研究を要せしといふ、是を以てカールソンに因み、此の爆藥をカーリットと命名せられたり、其の爆發威力たるや頗る强大、而かも安全度の大にして熱、光等の爲め分解作用を起す事無く、從つて夏季成分の分離滲出すること無きのみならず、冬季に於ても凍結するの憂あらざるが故に、取扱及保存上頗る安全にして好評湧くが如く、這般歐洲大戰中各地の戰場に使用せられて偉勳を奏せり、淺野總一郎氏夙に此の新爆藥に注目し、之れが研究調査の結果、種々特長を有するのみならず、其の原料は全然之れを內地產に仰ぎ得ることを知り、曩に故近藤會次郎氏及び社員を瑞典に派遣して其の特許權使用契約を結び、理學士野原彝夫氏を聘して技師長とし、爰に日本カーリット株式會社を創立したり、時に大正九年十一月なりき。於是乎同社は東京府下南千住町及神奈川縣保土ケ谷町に工場を建設して、之れが製造を開始せるが、其の製品は海軍火藥廠、鐵道省熱海線、內務省岩舟採石所其他に於て試驗の結果、大いに賞讃を博し、爾來內務、鐵道、農商務各省及民間諸方面の工事場竝に各鑛山の需用著しく增加するに至れり、カーリットは又伐根堀取に適し、開墾事業に應用せらるゝを以て今後其の需用は益々增進すべく、同社將來の發展蓋し刮目して見るべきものあらん。

☒

和歌山莫大小同業組合長

楠本藤楠君

明治十九年四月生
和歌山市小野町二丁目一七七番
電話和歌山

本邦莫大小界に重要の地位を占むる和歌山縣下は、近來一層斯業の發展を見るに至れり、之れ同業者を結束せしめ、互に相扶けて斯業の發展に努力せる結果に外ならざるも、而して斯業者を連結協同せしむる機關は和歌山莫大小同業組合也、同組合は大正二年の交に、和歌山莫友會と稱して同業者を以て組織せられたるものなるが、大正九年和歌山莫大小業組合と改稱し、同十一年三月更に現名に改めて今日に及べるなり、其目的は斯業の發展を助長するにありて、爾來各方面に亘り、縣下斯界の爲めに多大の貢獻をなせり、組合長楠本藤楠君は先代藤助氏の長男にして明治十九年四月を以て生る、天性熱心誠意の人格者たり、先代は

最も機を見るに敏にして、明治四十一年の頃斯業の前途甚だ有望なるを看破し、數十年來の家業たる綿ネル製造業を中止し、初めて之れを開始せり、當時同市に於ては未だ何人も斯業を經營する者なく、同氏の開業に倣ひて後數人の開業する者ありしも、大正年間に入る迄は僅々數軒の斯業者に過ぎざりき、從つて其の經營は頗る困難を極めしのみならず、不幸にして先代は創業後幾何ならずして長逝したるなり、玆に於て嗣子たる當主藤楠君は、先考の遺志を繼き凡有困難と戰ひつゝ日夜刻苦、只管家業の進展に精勵したるの結果、年と共に隆昌を來し、聲名喧傳せらるゝに至れり、斯くて君は斯業發展の最大急務は斯業者の一致協力に依らざるべからずとなし、有志と共に東奔西走して和歌山莫友會なるものを創設し、選ばれて其の幹事となり、熱心斯界の爲めに斡旋盡瘁せり、而して漸次斯業の發展を見るや、組合組織に變更して君は更に其の組長に擧げられ以て今日に及べり、今や君が家業は工場作業員常に三十餘名を使用し、製品の優良と價格の低廉なるを以て販路は遠く大阪、東京に及び牢乎として拔くべからざる基礎を確立し、而かも注文日々殺到するの盛況を呈せり、好漢幸に自愛加餐せられんことを。

※

株式會社高野製紙所長

高野一二三君

明治十六年生

靜岡縣駿東郡お泉村木宿五〇一番地

數種の專賣特許權を有する紙類を製出して斯界に堅實なる地歩を占むるを株式會社高野製紙所なりとす、所長高野二三君は單に重役として經營の責を負へるに止らず、同所には深き緣故を有する人なり、君は福井縣今立郡岡本村高野治郎氏の二男にして明治十六年其の地に生る、抑も高野家は君に至りて四代、代々製紙業を營む、從つて斯業に關する豐富なる經驗と多年開拓せる地盤とは組織を株式會社に改めたる後と雖も常に有利なる資力となり、事業發展の上に寄與する所亦た尠からず、君は日露戰役當時明治三十六年より同三十八年に至る迄は印刷局に職を奉じ、能吏として令聞を馳せ、後官途を辭して家業に從ひ、專ら其の發展に力を注げり、君、素より天資俊雋、識見は克く時運の趨向を洞察し、手腕は自在に幾多の難關を打破して着々盛況を極むるに至れるも、更に業界に大活躍を試みんと欲すれば、規模を擴張し資金を充實するの要あり、玆に於てか大正七年資本金六十萬圓を以て株式會社を組織し、從來君の個人經營に屬する業務を繼承するに至れり、維新前にありては越前奉書、鳥の子紙等を製造せるも、現今專賣特許安全紙、抄造紙等を產す、其の外數種の製品何れも特許權を有するものにして、確實なる需要率を保有し年產額凡そ五百萬封度、販路は東京及び大阪を主とす、現今三工場と從業員四百餘名を有し、常時供給に追はれつゝあり、今や我が國に於ける製紙は漸次に勃興し、競爭亦た激甚を加ふるものあれども、同所の如きは獨特の製紙を爲して、特殊の地位を占むるが故に、敢て焦慮するの要なく、悠揚迫らず、次第に業績は向上して止まざるなり、君齡不惑を過ぐること僅かに一歲眞に充實せる活動は今後に在るべく、高野製紙所の前途洋々たるものありと云ふべし。

※

安村晒染工場主

安村長造君

明治九年五月二十二日生

京都市上京區高野上開町十三番地

電話 上一四五七番

輓近染色工業の發展に伴ひ、捺染加工亦た盛んに行はるゝに至れりと雖も、其の染色法たる專ら日光乾燥に由るものなるを以て梅雨期又は冬期に於ける乾燥の率は甚だ低きものなるを免がれず、故に日光乾燥を以てしては到底其の供給力不十分の結果、一般に激增の趨勢に在る需要を充たすを得ざる感を齎したるものと謂はざるべからず、而かも其の法たるや、工學博士西田博太郎氏の漂白法に則り、更に君自身の實地經驗に基きたるものにして、日光乾燥に代ゆるに機械漂白を以てし一方從來の洋晒を行ふ所、其の便益洵に推奬するに足るものなりとす、所謂洋晒とは何ぞや、今を去る五十年前、京都精密局に於て、君の先代たる者、其の教習を受けたるに起り、當時

（晒粉其他外國品にして少量の分賣を爲さゞるを奈何せん、此の時に當り京都市上京區安村長造君が、機械漂白に成功したるは、斯業界の爲め一大福音なり、夙に小安村長兵衛氏の長男なる君は明治九年五月を以て京都市川端通三條橋畔に生る

本業の傍ら營業したりしが、藥品としては晒粉其他外國品にして少量の分賣を爲さゞる習慣あり、一方製品としては需用尙ほ幼稚なりし關係上、收支償はず、爲めに一時は中止の狀態に陷りしことありしが、爾來之れを本業と爲し得るに至りしものなり、

安村長兵衛工場（機械製造能率三巾金巾木綿等四百萬反に及び、販路海內に遍ねく、其工場員は常に六十餘名を下らず、蓋し個人經營の工場としては其の盛業を寇知するに足らんか、尙ほ同工場の由來を問へば、其の先、永祿年間に於て近江國野洲郡より京都市川端通り三條上ル地に轉住し、綿布晒業を開始し、爾來鴨川筋を拜借使用し來りし關係上、其の生產品は鴨川晒として內地に販路を得、其後明治三十七年現在の地に轉ずると共に捺染工業を開始し、之れを主業とするに至れりと云ふ、君往年日露役に出征し、其の戰功に依つて金鵄勳章功六級勳八等白色桐葉章を賜はりたる國家の殊勳者なり。

※

黑染業奧田平兵衛工場

奧田源次郎君

京都市西洞院夷川上ル

電話 上一六八四番

染色界に於て喧傳せらるゝ本檳榔子染は、斯界の特產として知られ絕大なる稱讚を博しつゝあり、蓋し其の色質堅牢にして褪色の憂ひなく、光澤麗明にして到底他の模倣し得ざる特色を有すればなり、然り而して我が奧田平兵衛工場は檳榔子染業の舊家を以て同業中に重きを爲し、柏屋の商號は普ねく人々に喧炙せらる、之れ元より多年の奮勉に基ける當然の結果にして、營々辛苦の後に收め得たる信用に外ならずと雖も、亦以て同工場の技術全般を統督するの地位にある奧田源次郎君の功績を逸する能はざるなり、君は當主の令弟にして少年の頃より秀才の譽れあり、殊に家業たる色染に關しては深甚なる興味を有し、未だ其の喜戲

する時代にありても、嚴君令兄を輔けて家業の隆昌に意を致したり、小中學を卒りて愈々斯業を專攻すべく、京都高等工藝學校に入り色染科に學ぶ、多年志望せる所にして然かも家庭に於て親しみある實際の學理を研究するに在るを以て、其の熱心なると同業の及ぶ所にあらず、極めて優良の成績を以て同校を卒業したり、爾來令兄を輔けて今日に到る、代々蓄積し來りたる信用に配するに君の最新知識を以てせるが故に、其の結果は忽ち製品の上に表れて好評嘖々たるものあり、內外の博覽會、共進會、品評會等に出品して常に名譽ある賞牌を受領しつゝあり、今や愈々其の聲價斯界に高く、全國より注文殺到して到底需要を滿たす能はざるの盛況を示し、發展の程度測り知るべからざらんとす、兄弟相扶けて轡を竝べ家業の繁榮に力を致すが如きは、實に人生の佳話と稱すべきにあらずや、蓋し其の一事、後進の活模範として廣く江湖に推奬すべきなり。令兄は累代の家風に薰陶せられて溫雅篤實なる典型的紳士として知られ、君も亦資性敦厚、接する者をして春風の思ひあらしむ、思ふに君や前途尙ほ幾多の春秋に富めるを以て將來の大成期して待つべきなり。

八日市織布株式會社取締役、京都市上京區第七學區會議員、西陣糸染購買組合長、京都染物組合會代議員、池田染工場主

池田伊三郎君

京都市西區堀川通一條北入
電話西陣一一三四番

才氣銳發の人、容易に又之れを得べしと雖も、至誠職に忠なるの士は求めて多く得べからず權謀術策に富むの人は、之を求むるに難からずと雖も、操守節を持するの士は容易に見るべからず、吾人は池田伊三郎君の平生に於て言々肝腑より出で惟々人を動かすに足るものあるを看取し、澆季の世にも亦た斯くの如き人物あるかの嘆美の念、おのづから發するを禁ぜざるなり、君は現に八日市織布株式會社取締役、京都市上京區第七學區會議員、西陣絲染購買組合長、京都染物組合會代議員にして前京都染物組合絲綛色染部長として九ヶ年間就任せられたることあり、其の居常職に忠實なるは稀れに觀るものとして市民の間に嘖々の令聞あり、其の業務たる池田染工場は、明治十四年父君池田兵太郎氏の創立に係るものにして、絹絲諸色染專門を營業の目的とし、從業員約廿名、生產額一ヶ年十萬圓餘に達し、販路としては西陣其他各機業地なりとす、君は明治十三年九月の出生にして、中學卒業後京都市西陣なる池田染工場に染物業を修得し、西陣高等織物用の絲染法に精通せり、同工場は創業以來既に四十餘年を經過したる歷史を有し、其の柞蠶色染に就ては先代池田氏苦心の結果、明治卅年六月漸く完成を告げたるものにして、現今柞蠶の色染法が隆昌を極むるに至れるは、全く池田氏苦心の賜なりとして、斯界之を唱へざるは無きより見るも、其の功勞の永く沒すべからざるを知るべき也、君は亦常に西陣織物界の流行を左右するの意氣を以て、研究を怠らず、絲染界の發展に資せんとする所其志篤しと謂ふ可し、宜なる哉今や西陣絲染界の第一人者として衆望を負ひ、現に京都絲染研究會の牛耳を執れるとや、夫人は同業にして宮內省御用達後藤辨次郎氏の令妹にして、夙に貞淑の譽あり。それ方今一般工業界の躍進時代にあるや勿論にして、君が此機を利用し益々向上發展の一路に向つて突進する、固より當然の結果なりとす。

合資會社

岸本染織工場

大阪市北區東野田町八丁目
電話東一三四八番

創業　大正五年
資本金　三十萬圓
社員　代表社員岸本竹三郎、社員和田常吉、岸本彌太郎、岸本カネ、岸本ウメ

規模必ずしも宏壯雄大ならずと雖も、其の製品は優秀佳良なるを以て、好評を博し屢々博覽會、共進會、品評會等に出品して賞牌を得しと十數回を數へ、關西染織界有數の工場と稱せらるゝもの、之れを合資會社岸本染織工場と爲す、同工場は本工場を大阪市北區東野田町八丁目に置き、其敷地七百餘坪、織機五十臺を有し、一ヶ月間の生產能率千五百反に達す。分工場は之れを大阪府下四條畷に置き織機十臺を設備し、從業員數兩工場を合して總計七十餘名を算する出資社員は前記の諸氏にして、大阪、神戶、東京方面に得意を有し、信用頗る廣大なり當社はもと岸本竹三郎氏の個人經營として創設せられしもの、實に大正五年の創業に係る。氏は明治二十一年生れの少壯新進なる事業家にして卓拔なる手腕と才幹とを有し、大いに其の將來に望を囑せられつゝあり、氏夙に染織業に志し、年十三歲にして岸本新左衞門氏經營の織布工場に入り、斯業を研究すること十有餘年、其の技已に堂に入り、而かも勵精摯實事に當るや、念頭又他を顧みるなく、專心業務に沒頭して倦むことを知らず。大正五年歲二十八にして獨立し、五千圓の資本金を以て當工場を開設したり。爾來粉骨碎身業務の發展に努め、偶々歐洲戰亂の影響に依り斯業空前の好況を呈するや、氏好機逸すべからずと爲し、大いに工場を擴張して生產力の增進を圖り內地に於ける需要に應ずるの餘力を以て、製品の海外輸出を試み、異常の好成績を擧げ、後ち組織を變更して合資會社とし、以て今日に及べり、今や同社の資本金三十萬圓を算し、事業の旺盛なる、當に旭日冲天の慨あり、吾人は多望なる當社の前途を祝福するに吝ならざる也。

上毛撚絲株式會社

群馬縣佐波郡伊勢崎町千六百二十七番地

資本金　百萬圓（七十萬圓拂込）
重役　取締役社長鳥田由五郎、常務取締役西島順榮、同永井篤三郎、同關重兵衛、同八田榮藏、同德江彌三郎、同岡部菊次郎、常任監査役穗口鐵太郎、監査役業住利藏同星野源左衞門、同星野雷作、同谷節太郎、支配人大和房吉

本邦撚絲業界の重鎭たる上毛撚絲株式會社は、重役に斯界錚々たる人物を有し、創立以來堅實なる營業方針の下に經營し來りしが故に、現時斯界の權威として、群少同業を拔き他を壓するの盛觀を呈せり、今同社大正十年度下半期の成績を見るに、同期に於ける內地織物は前期より引續き順調なる業績を辿りしを以て、內地用諸撚絲の委托頗る多く、相當繁忙を來したるも各地の織物生產過多にして需給の調節を誤り亦近年稀るに久しく商談杜絕したる輸出撚絲織物の九月上旬より一時に多數の注文殺到したるを以て、之れが原料强撚絲の依托頓に多く、福井分工場の全部及新工場亦其の過半を之れが製撚に仕向くるの止むなき多忙の內に同期を終了せり、織物部に於ては前期末以來專ら內地織物に轉換し、當期後半より漸く全機臺の運轉を開始し、順調に超過した

なる霖雨あり、爲め、米作の不作を招きたるを以て、商勢茲に一頓挫を來し、隨て一時閑散の狀を呈したり、然し、

るを以て相當の成績を得たり、同時に前期以來の輸出織物持越品は殆んど全部を消化せり、其の大正十年十一月三十日現在の財產目錄を見るに、拂込未濟株金三十萬圓、地所五千八百餘圓、家屋二十三萬五千七百餘圓、機械四十二萬二千五百餘圓、事務什器一萬五千五百餘圓、工場什器四千五百餘圓、貯藏品四千二百餘圓、原絲二萬五千一百餘圓、仕掛品四千三百餘圓、製織品五千五百餘圓、賣掛代金二千三百餘圓、有價證券三萬三千五百餘圓、假拂金一萬七千五百餘圓、得意先勘定七萬七千四百餘圓、受取手形一萬二千四百餘圓、當座預金一萬七百餘圓、其他合計百十九萬九千八百餘圓を計上し、當期利益金五萬八千八百餘圓、內五千圓固定資產消却金、五千二百三十圓有價證券減價消却金、二千五百圓諸稅引當金、三千圓法定積立金、七百圓を職員作業員恩給扶助基金、四千六百圓役員賞與金、三萬五千圓(年一割)株主配當金、五千三百五十九圓餘後期繰越金に各々處分せり、夫れ社礎の强固なるを以て推知するに難からざるなり、現重役は社長島田由五郎君を初めとして、何れも當代稀に觀るの人物たり、多士儕々たる同社の將來は更に活躍發展の一路を辿ること疑ふの餘地なき也。

大日本紡績株式會社深川工場長

前田彌太郎君

明治十四年十一月生

東京府下寺島村一〇七四番

志を立てゝ功を奏するは猶ほ初樹を植ゑるが如く、然り其の根芽に力りて未だ幹あらず、其の幹あるに及びて尙未だ枝あらず、枝ありて後葉あり、葉ありて後實あり、其初め根を植ゑる時只管栽培灌漑して以て其の生長を冀ふべきのみ、只だ栽培の功を忘れずんば枝葉花實必ず之れに伴はんと、古人の言移して以て我が前田彌太郎君の經歷に見る事を得べし、君は明治十四年十一月を以て愛媛縣東宇和郡宇和島町に生る、家代々宇和島藩士たり、郷里の小學を卒へて上京し次で順天中學に入る、此間君が獨立獨行の志想は郷里より學資の補給を欲せず、即ち東京モスリン會社、電話交換局等に勤務し、傍ら苦學力行寸時も怠らず、同三十六年遂に其の業を終へ、直ちに東京高等工業學校染織科機械分科に入學す、栽培の功を積むこと序あり、枝葉繁茂し開花結實の期を見る固より其の所なりと謂ふべきなり同三十九年高等工業を卒業するや、次て東京キャラコ製織株式會社に入りて工務に從事す、爾來精勵勤勉すること三年餘、明治四十二年支那方面歷遊を志し、各地を視察し、親しく紡績事業を調査して歸朝し、後幾ばくもなく聘せられて尼ヶ崎津守工場に入る、大正三年七月偶々同社東京紡績株式會社に合併せらるるや、君同工場の紡績係員として同社東京橋場工場に轉勤し、次いで更に同社の大日本紡績株式會社に併合せらるゝに際し、君依然同工場に勤續し、紡績部主任より工場副長に累進せしが、大正十年四月同社の深川工場長に榮轉するに至れり、君資性溫厚奇を好まず、驕を街はず、只管職に忠實にして實蹟の見るべきもの亦尠なからず、君の身を斯界に投ぜしより以來前後二十餘年の間、專ら學理と實際とに基き、專心斯業の發展に傾倒せらる、其の功勞頗る多大なりと謂ふべし、君尙前途春秋に富む、將來斯界の權威を以て推さるゝの日あるは期して待つことを得べし。

豐國セメント株式會社常務取締役

柁原眞平君

明治十五年四月二十二日生

小倉市古船場町三本松一五〇ノ七番地

電話 小倉一五四番

我が國セメント業界の重鎭たる豐國セメント株式會社は、製品の優良なると營業振りの着實なるとを以て、夙に斯界有數の地位を占むるに至れり、從て市場の聲價は隆々として他品を壓倒し、註文日毎に激增の盛況を呈し、現に年產額百十五萬樽に及び尙需要に應ずる能はざるが爲めに工場の增築に着手し、近く其の竣工を見る豫定なりと云ふ、然る上は年產額は優に百七十萬樽を超ゆるに至るべし。現在工場は名古屋佐賀兩市及福岡縣京都郡苅田に有す、同社の常務取締役たる柁原眞平君は明治十五年四月二十二日先代眞平氏の男として山梨縣南都留郡禾生村に生る、幼より穎悟俊敏旣に大人の風あり、普通學を郷校に卒ゆるや、東京帝國大學工科大學應用化學科に入學して專ら高等の學術を研究し、明治四十年七月優良の成績を以て卒業す、後直に磐城國平町なる日本耐火煉瓦株式會社に入り、多年蘊蓄せる學理を實地に應用して、施設貢獻する所勘からず、在職二年餘にして同四十二年十二月、福岡縣遠賀郡黑崎町の中央セメント株式會社の招きに依りて入社し、同社の爲めに資する所多大なるものありしが大正四年二月九州帝國大學助敎授に任命せられ、次て同年五月歐米各國に渡りて留學すること二ヶ年、同六年九月豐富なる蘊蓄を齎して歸朝し、同年十一月明治專門學校敎授となり、專ら子弟の敎養に任じ、深遠なる學理の講述に餘念なかりしが、昨十一年八月豐國セメント株式會社の招聘する所となり、其の常務取締役の重職に就きたり由來如何なる事業も資本と能力と勞働の三者相協力せざれば到底完全なる成功を期する能はず、惟ふに資本を活用し、勞働者を指揮督勵して其の特長を發揮せしむるは之れ即ち能力にして會社の盛衰興亡は畢竟其の幹部の手腕と識見とに因つて左右せらるゝこと贅言を要せざる所なり、君專門の學理と技術とを抱擁し、加ふるに絕大の精力と天禀の才腕とを以て同社の經營に任じつゝあるは、其の社業をして益々向上發展の一路を辿らしむる一素因たり、蓋し同社將來の活躍や眞に刮目に價するものあらん。君多趣味の人にして文藝に對する理解と其の造詣頗る深く、亦た運動にも非常なる熱心家たり、夫人雪子は今年三十六歲にして夙に貞淑の譽れ高く、長男清一氏(十一歲)二男英二氏(四歲)長女ふみ子(二歲)の二男一女を有し、家庭和氣藹々として春風の觀あり、蓋し君が人格の反映と云ふべき也。今や實業界多事多端なるの秋、吾人は君の如き有爲の人材に俟つ可きもの多々あるを確認し、切に其健闘を祈りて已まざる也。

銘酒「大黑正宗」醸造元、安福又四郎商店主

安福又四郎君

明治四年二月一日生

住宅 兵庫縣武庫郡御影町

電話 御影八三四番

營業所 同縣 同郡 御影町字東明

電話三ノ宮 特ヲ四一二七番

御影 六一、五一〇番

酒は天の美祿なり、其味天下に比すべきもの無く、天下之を嗜まざるもの稀れなり。酒は百藥の長なり、一杯の酒能く精神を快活にし感情を和らげ血液の循環を良くす、實にや酒は味ふべく貴ぶべし、灘の銘酒殊に重んずべし、就中大黑正宗は其風味寔に愛すべく其香氣眞に掬すべし。由來灘五郷は酒の名產地として天下に鳴り、其他淸酒の釀造を業とする者幾百を以て算す、而かも一流を以て目せらるゝ者に至りては、僅かに十數家に過ぎず、大黑正宗の釀造元安福商店主安福又四郎君は實に其の一流釀造家の一を以て數へられ名聲四隣を壓せり、君は兵庫縣の人、明治四年二月一日武庫郡御影町に生れ、幼名を美代松と云ふ、先代安福又四郎氏の長男なり。家代々麴甕の事を以て業とし、其創業實に寶曆元年に在り同地の舊家として知らる。君年少にして氣鋭卓絕せる才幹を抱き、大に其將來を矚目

せらる。夙に酒造業に趣味を有し學業を終るや父業を扶くるの傍ら斯業を研修すること多年、造詣頗る深し。明治二十九年六月家督を相續して箕裘を繼ぎ、先代又四郎を襲名するに及んで更に奮勵家業の興隆に力を致し、爾來惡戰苦鬪實に二十有餘年、今や昔日に數倍するの繁榮を見るに至り、産を成すこと亦尠なからず、同地實業界の重鎮を以て目せらる。君資性温厚篤實にして眞摯、事に當つて熱誠黽勉、人格亦高潔君子の風あり、而も寛容にして克く人を容れ、人と語るの雅量を藏す。其の清酒の釀造に關する知識の博大と技倆の卓越せる點に至りては眞に驚嘆すべきものあり、君亦謙曲に趣味を有し頗る斯道に堪能なりといふ。同店支配人として敏腕を揮はれつゝある安福武氏は君の義弟にして明治十九年六月八日御影町に生れ別に一家を創立せり。氏頭腦明晰社交に長じ頗る商才あり、主として同店の外事に當り、大黒正宗の販路擴張に心血を注ぎて功勞少なからず、最近更に販路の一大擴張を斷行するの計畫ありといふ。同店今日の盛大を致せる、氏の力亦た與つて多大なるものあり。同店には又少壯有爲の異材にして君の養嗣子たる靜枝氏あり、氏は山梨縣北巨摩郡駒城村の名門、櫻井義令氏の次男にして明治二十四年十一月四日を以て生る、夙に鄕黌を終はりて甲府中學に學び同校を卒はるや東上して明治大學商科に入り經濟學を專攻し大正四年螢雪の功空しからず、優秀の成績を以て同校を出づ幾許もなくミツワ石鹸製造元たる芳誠舍に入り斯業に從事すること二ケ年、次で軍務に服し甲府四十九聯隊に在營二星霜、此間克く上長の命を奉じ精勵恪勤範を他に示して國民の本分を盡せり。除隊後安福家の懇請辭し難く入りて同家の養子となる、爾來父君を扶けて家業の發展に全力を傾注し日夜勉勵日も尚ほ足らざるの觀あり。近來同店の殷盛驚くべきものあるは素より其造酒の芳醇なるに依ると雖も、又一面に於ては一族悉く俊才逸足にして其の販賣商略の巧妙なるに依ること多きは言ふを俟たず。現在一ケ年の釀造高一萬餘石に上るといふ、蓋し熾なりといふべし。店主又四郎君夫人里津子は明治十年九月の出生、兵庫縣御影町の富豪安福武之助氏の令姉にして、天稟の美容と穎才とを有し、兩者の間に美代子（明治三十一年四月生）里代子（明治三十一年四月生）の二女を擧ぐ、何れも高等教育を了して才媛の譽れ高く、長女美代子は靜枝氏を迎へて一子を擧げ、名づけて義郎氏と呼ぶ、家庭頗る圓滿にして和氣藹々たり。

※

清酒「盛長」釀造元　酒造業

安福武之助君

明治十五年十二月十八日生

兵庫縣武庫郡御影町

電話御影二〇〇番

往年唐に蘭陵の美酒あり、日本に灘の銘酒あり、蘭陵の美酒は李太白をして「能く客を醉はしめば何れの處か是れ他鄕なるを知らず」と吟はしめ、灘の銘酒は山陽外史をして「魚は琵琶湖の産にあらずむば食ふべからず、酒は灘の吟釀にあらずむば飲むに堪へず」と稱せしめき、今支那に蘭陵の美酒無し、日本に尙灘の銘酒あり、芳醇天下に冠絶し殊に近來歐米人の之を嗜好する者亦尠なからず。而して灘の銘酒は其の種類甚だ多く或は古き歴史を有するものあり、或は釀石數の大なるものあり、而かも其の色澤透明にして香味芳烈儕持善く火落の憂ひ無く酒仙に珍重せらるゝもの「盛長」の如きは蓋し稀れなりとす、銘酒盛長、是れを釀造する者は實に安福東本家安福武之助君なり。君は兵庫縣の人、先代安福武之助氏の長男にして、大黒正宗釀造元たる安福又四郎氏の甥に當り、明治十五年十二月十八日武庫郡御影町に生る。幼にして機敏凡童と異なる處あり、初め又之助と云ひ明治二十九年六月家督を相續して先代武之助を襲名す、家は代々酒造業を營み國稅千二百餘圓を納め資産家として同地に知らる。君年少斯業に從事し、其の熱心なる斯界稀れに見るところ、夙に釀造の秘訣を探りて之れに自家の工夫を加へ、注意吟釀を怠らざるのみならず、常に時人の嗜好を探究して時勢に適應せる醇良品の釀造に腐心！つゝあるが故に盛長の販路年と共に擴まり、現今之れが一ケ年間の釀石高四千石に達するといふ當店の前途夫れ眞に多望なる哉、君又夙に兒童教育の輕視すべからざるを悟り、常に熱心之れが指導啓發に任じ、或は斯道の大家を聘して一般父兄並に兒童教育家の爲に其所說を講演せしめ、或は巨財を投じて校舍の新設增築に資する等實際上に裨益する所洵に鮮少ならざるものあり、蓋し地方の篤志家と謂ふべきなり。令弟武氏は明治十九年六月を以て生れ分家して一家を成せり現時其の叔父にして大黒正宗の釀造元たる安福又四郎商店に勤務し同店の支配人たり令妹千代子は明治十七年五月の生れ、大阪府の人林邦松氏に嫁し、貞淑の稱高し、令閨幸子は明治二十一年二月の出生、大阪府の富豪久保田美英氏の令妹にして爲昌氏を擧ぐ。家庭の清福慶すべきなり。

※

大阪合同紡績株式會社

本店　大阪市北區堂島濱通二丁目六番地
電話　北　三五、三六、三七、四四番
支店及工場
大阪市南區北高岸町今宮支店
電話　南　一　四　一番
大阪市北區天神橋東二天滿支店
電話　北　三〇、三　一番
大阪府西成郡粉濱村住吉支店
電話　南　三　四　〇〇番
廣島市堀屋町廣島支店
電話　廣　島　一　三　六番
寧島縣佐伯郡大柿村能美支店
兵庫縣川邊郡小田村神崎支店
電話土三〇一五尼二二一番
德島縣勝浦郡小松島町小松島支店
電話　長　三　一、四　〇番

創業　明治三十三年一月
資本金　一千八百七十五萬圓
重役　坂綿役社長谷口房藏、同副社長秋山廣太
同隅田光藏、同飯尾仁一、同能松太郎、同
坂田幹太、同瀨川虎吉、同秋田久、同河
野義一郎、監査役飯田義一、同三谷執秀

我が紡績界の巨頭たる同社は明治三十三年一月現社長谷口房藏氏及其の他現重役並に當時の關係者が現能美、今宮兩工場の前身たる朝日紡績工場を繼承して創業せるに其の端を發す、當時は資本金七十三萬圓に過ぎざりしが、同年三月天滿紡績株式會社を合併し、三十五年八月中國紡績株式會社を買收して一百萬圓の資本金を有することゝなり、更に三十六年二月明治紡績株式會社を合併して一百六十萬圓に、卅九年には天滿支店第三工場を新設し、三萬錘を增加して二百四十萬圓に大正二年六月には神崎支店を設置して四萬錘、一千臺の紡織機を据付けて四百萬圓に增資を爲し、同四年五月には同支店に第二工場を增設し更に四萬錘、撚絲機二萬錘、織機四百臺を同六年五月には、それに織布加工々場を新設する等、急激なる發展を遂げて資本金八百萬圓に倍加せり、然かも同社が旭日冲天の勢を以て向上する隆運は爰に止らず、大正七年には既設工場の增錘、最新機械の据

村等により一千二百五十萬圓の巨資に、更らに同九年四月には小松島工場新設其の他の事由に依りて、一千八百七十五萬圓を有する我が國の代表的會社となれり、同社が斯界の爲めに貢献せることの多大なるは今更贅言するの要なかるべく、其の基礎の鞏固なるは積立金一千二百萬圓を計上せるに依つて證し得べき也。

※ 旭硝子株式會社

本　社　東京市麹町區永樂町一ノ一番地
電話丸ノ内一七七三、一七七四、一七七五番
第一工場　兵庫縣尼ヶ崎市
第二工場　福岡縣戸畑町
第三工場　神奈川縣鶴見町
第四工場　福岡縣技
創　立　明治四十年九月
資本金　五百萬圓
營業課目　窓硝子製造販賣
重　役　取締役社長岩崎俊彌、常務取締役山田三次郎、同田村八二、取締役菊地幹太郎、同青木菊雄、監査役莊清次郎、同川添清麿

窓硝子の製造は多年白耳義國の獨占する處にして歐米各國競ふて斯業を奬勵するところありしと雖も、近年に至るまで之れが良品を製出すること不可能なりき、本邦に在りても明治維新後屢々各方面の人士によりて斯業を計畫せられしと雖も、窓硝子の製造たるや歐米に於ても、難事業中の至難事業とせられしもの、彼れに比して尚霄壤の差ありし我化學工業界に在て、斯業完成の至難なりしは言ふを要せず、何れも皆中途に蹉跌し窓硝子は到底日本に於て完成不可能なるものとせられ悉く外國品の輸入を仰ぐの狀勢なりき、然るに先年旭硝子株式會社設立せられ遂に克く其の製造を完成して本邦に於ける之が自給の途を確立したり、其の動功や眞に偉大、蓋し日本工業史上に特筆大書すべきなり。同社は財界の一大權威者岩崎家の手によりて興り明治四十年九月を以て會社を成立、直ちに兵庫縣尼ヶ崎市の地を相して一大工場の建設に着手し、翌四十一年其落成を俟て研究に着手したり其翌四十二年初めて千五百箱の製品を市場に出すと雖も未だ聲價を博するに至らず爾來數年缺損を忍びつゝ之れが完成に努力し、遂に外國品に比して毫も遜色無きのみならず、寧ろ彼れを凌駕するの逸品を出すに及んで需用激增し以て今日の盛況を呈するに至れり、此間技術の研究練達を期せんが爲め白耳義より技師トボルトダロンス外數名を招聘し、特に選拔せる我俊才技術者をして其技を傳習せしめ、更に技倆の卓絶せる優秀職工を選拔養成して技術を練習せしむる等苦心慘憺たるものありしが、今や已に其製造に成功して支那、印度、濠洲、南洋の大市場に同社製窓硝子の取引熾んに行はれ當に歐米製品を壓倒せんとす。其の成功の榮華燦爛として實に光芒陸離たるもの無くむばあらず。同社は更に各種板硝子の研究に着手し已に業に成功の域に進めり。同社の前途や眞に多望なりといふべし。現在資本金五百萬圓にして、岩崎俊彌氏を社長とし、山田三次郎、田村八二の二氏常務取締役の任に就き、菊地幹太郎、青木菊雄の二氏取締役に任じ、莊清次郎、川添清麿の二氏、監査役たり、山田氏は又技術監督を兼ね、田村氏は販賣部長を兼務して岩崎社長を援け共に鋭意經營に盡瘁しつゝあり。

※ カーバイド及發生器其他各種附屬器具一式 合資會社 東京旭商會

本店　東京市京橋區本八丁堀二丁目二番地先北櫻川岸十七號地
電話京橋長四二五番

本邦アセチリン瓦斯業界の一權威者として自地共に容す我が東京旭商會は、明治三十三年先代北村十三氏の創業に係る、氏は舊豐橋藩士山本一水氏の男にして豐橋市に生る、後故あつて北村の姓を冒す、氏、明治十八年日本郵船株式會社に入り、爾來重用せられて歐米各國に派遣せられ、偶々白耳義に滯在中アセチリン瓦斯の有望なるを看破し、之れに關する各方面の事項を調査研究して歸來、同社を辭して斯業を開始せり即ち栃木縣日光に日光カーバイト製造所を設け、同品の製造に着手せり、之れ實に本邦に於ける同品製造業の嚆矢たり、而して一面には郡山カーバイト製造所、山三カーバイ

ト製造所、信濃電氣株式會社等に連絡を執りて鋭意斯品の製造に精勵し、且つ以上諸會社の製品を一手販賣するに至れり、斯くて歐洲大戰の勃發するや、海外輸出に着手し、支那、印度、南洋等は云ふに及ばず、遠く歐米各國に輸出して多大なる好評を博し、大正七年に於ける年產額實に三千噸の多きを算するに見るも、又當時財界の好況に乘じて同業者續出したるも本邦全輸出額三分の二は同會の占むる所なりしが如き、會主十三氏が如何に活躍雄飛せるかを推知するに足るべし、尙其用途たる鑛山漁業用燈は現今一般に普及せられたるも、最初之れが使用を指導奬勵せるは之又氏の賜にして、今日に至る迄の苦心と其功績は到底餘白なき紙面の盡す能はざる所なり、次で大正九年六月組織を變更して合資會社北村商會となし、更に一段の活躍を試み遂ひに現今の盛況あるに到らしめたり今やカーバイト、アセチリンに關する器具は室內用、膀手用、街路用、工業用、漁業用、自動車用、醫科用、軍隊用等其他の製造販賣を營み、而かも堅牢無比、體裁優美、取扱簡便の特長を以て斯界最高の權威たり、現に日本窒素肥料、信濃電氣、郡山電氣、日本化學工業、山三カーバイト、盛岡電氣、山形電氣、北越水力電氣、福島電氣、久原鑛業、石川島造船所、横濱ドック、浦賀ドック等の大會社は勿論、鐵道省、海軍省、陸軍省等各官廳を得意先とし、社運隆々として旭日昇天の概あり、現代表社員北村省三君は十三氏の長男にして、明治十九年十月を以て横濱に生る、普通學を卒ゆるや横濱高等商業學校に入りて專ら高等の學術を修め、同卅八年優良の成績を以て卒業するや、家業に從事して父君を輔佐しつゝありしが、合資組織に變更と共に其代表社員となり、爾來業務一切を總攬するに至れり、君資性淵達、而も父君に似て才腕力量を具有する紳士たり、年齒未だ壯幸に自重せられんことを。

※ 東京毛織株式會社王子工場技師 飯田昌君

明治三十二年生
工場　東京府北豐島郡王子町二百三十九番地
電話小石川六四、六五番

桐生高等工業學校の出身者にして、現時我が紡織界に嘖々たる聲名を博しつゝあるもの尠なからずと雖も、就中我が飯田昌君の如きは、年齒未だ少にして才識技能眞に誇るに足るの士たり、君は埼玉縣北足立郡の產、飯田覺次氏の令弟たり、家は同郡屈指の豪家にして代々農を以て業とせらる、君は其の家に生れ、幼より英敏の譽れ高く、稍や長ずるに及んで小學の課程を了へ、更に縣立粕壁中學を卒業す、君夙に紡績業を以て身を立てんことを志し、固く自ら將來に期する所あり、後桐生高等工業學校紡織科に學び、大正九年優良の成績を以て同校を卒業せり、次で同校を出づると共に東京毛織株式會社の招聘に依りて同社に入り、現に王子工場技師として其の職に在り、蓋し茲に初めて實業界の人となれるものなり

爾來君が有する才能と學識とは、漸次實際技術の上に現はれ、之れに加ふるに精勵と努力とを以て社業に鞅掌せしかば、忽ち良好なる成績を擧げ、益々其の生面を發揮するに至れり、現時同社は我が毛織物業界に一大勢力を有し、信用亦た斯界に冠絶せり、由來斯業の實際を觀るに一般經濟界の盛衰に依りて直接の影響を受け之れが爲めに其の替否の急激なるものあるを免かれず、而かも同社の如きは世の不況に摧けず、時の逆流に撓せず、嶄然として勢威を一方に擅まにする所以のものは、全く是れ其の基礎の鞏固なると營業の堅實なるとに因らずんばあらず、其の王子工場の如きは規模頗る廣大にして、設備の堂々たる眞に驚嘆に値するものあり、而して君は同工場に在りて專ら技術の衝に當られ、切磋研鑽怠る所なし、それ君が如き有爲の人材を多數抱擁する同社事業の將來は、其の基礎の堅實なると相俟ちて、益々發展振興の期あるを信じて疑はざるなり、君今齢僅かに二十五歳の青年にして、尚ほ其の前途は洋々として是より將に春風の駘蕩たるに遇ふの感なくんばあらず、吾人は切に望む、君の自重自愛、以て倍々斯業の爲めに盡瘁貢献せられんことを。

永井染工場主

永井新太郎君

明治二十一年一月十九日生
京都市下京區油小路通四條北入
電話中一一一四〇番

色染標本「艶麗」の發行は我が染色界に貢献する所多大なりとして、現下到る處に好評嘖々たるもの、其優秀なる染色を蒐集して收むる所五百餘、全部錦紗縮緬に染出したるものにして、絢爛人目を眩せんとし眞に偉觀たるを覺ゆ、此れは是れ京都高等工藝學校長工學博士鶴巻鶴一先生指導の下に永井染工場主永井新太郎君が多年苦心研究の結晶に係るものを提供せるものなり、抑々君は京都市の人、明治三十一年一月を以て此の山紫水明の郷に呱々の聲を擧げたり、其業務は錦紗、羽二重、縮緬類の如き高貴なる織物染色を爲せり、同家はもと紅屋と云ひ、本紅の製造、及本紅染を業とせしが、明治初年より一般色染業を開始するに至り名聲益々揚る、初め祖父新六氏横濱商館に出張し、アニリン染料を輸入して之を使用す是れ京都に於て同染法を開きたる濫觴なりと云ふ、爾來幾星霜、研究を重ね、遂に今日の如き優秀品の製出を見るに至れるが如き、同家の功勞亦偉なるものあり、蓋し推奬に値すと謂はざる可らず、宜なる哉其家運益々隆昌にして旭日沖天の慨あり、分家全市に散在し、内地向染色品の大部分は其一族の手に成ると云ふも過言にあらずと云ふ、以て如何に其業況の盛大なるかを卜知するに足らん、當代の新太郎君亦父祖に劣らざるの研究家にして、而かも進取の氣象に富み、毎月一回一族を招集して、研究會を開き、時好に遲れざらんことを努め、又近くは海外輸出品に着手し、本邦染色界の爲め萬丈の氣焔を吐かんとす、其の意氣や亦壯なりと謂ふ可し、其の加工品は屢々内外博覽會竝に共進會に出陳して優賞を受領せしこと枚擧に遑あらず、斯界に於ける名聲の隆々たる洵に偶然ならざるなり。

☒

伊藤染工場主

伊藤清次郎君

明治二十一年生
大阪府三島郡吹田町

現代の工藝品中最も進歩せるものを擧ぐれば先づ指を友禪染に屈せざるべからず、殊にモスリン友禪染は年々新意匠新染法を案出して巧妙眞に天工を奪ふの慨あり、近時其需要に伴ふて斯業の發達頗る顯著にして殊に大阪府下に於けるモスリン友禪業の旺盛なる正に全國に冠たるものあり。同府下三島郡吹田町は東洋のマンチエスターを以て稱せらるゝ大阪市街を北に距ること僅に五哩、水質の優良なるを以て近來此の地に友禪業を創始するもの續出し、其の有力なるもの已に數指を以て算す。就中伊藤染工場は其の規模に於て、其の設備に於て將又技術の優秀なる點に於て嶄然頭角を抜き、名聲斯界に籍甚たり。當工場は先代伊藤清次郎氏の創立に係り敷地實に二千餘坪を算す、氏は萬延元年名古屋に生れ、夙に身を染色界に投じて、超凡卓拔なる技倆を有し明治三十二年時代の好尚を察知して現所にモスリン友禪工場を設置し、事業年と共に殷盛に向ひ、遂に斯界有數の工場たるに至れり、當主は先代の男、明治二十一年呱々の聲を擧げ、幼にして英俊、才氣尋常ならず、郷黌を終はるや、進んで大阪高等商業學校に學び、明治四十二年拔群の成績を以て同校を卒業す、爾來家業に從事して研鑽須臾も怠らず、或は染法に改良を加へ、或は意匠に工夫を凝らし、專ら時好に投ずるの良品を出すに努力したるを以て益々信用を博せり、君這般愛兒絞なるモスリン加工品を案出し、婦人内職奬勵の一策として、之れが絞りを同地婦人の内職たらしめつゝありしが、其製品は頗る世の好評を博し、註文山積するの好況を呈しつゝあり、今や同工場に於ける職工百五十餘名を算し、一ヶ年間の生産高實に八萬反を超ゆといふ、其の今後の發展や眞に豫測し難きものあり君年齢尚壯、前途洋々として恰かも春海の如し、冀くば自重自愛せられんことを。

☒

金更紗紙印刷及活版印刷業　改光堂主

藤井萬吉君

萬延元年七月十日生
東京市神田區豊島町三十番地
電話神田一七八七番

美術印刷界の功勞者たる藤井萬吉君は三重縣の人、萬延元年七月を以て飯南郡松坂町に生る、幼にして嚴君を亡ひ令兄直七氏の掬育を受く、十一歳津市の紙商田口長左衛門氏に投じ、實務の練習に從ふ、十七歳の時田口氏病歿せる後を承けて努力奮勵二十歳に及ぶ、後感ずる所ありて同家を辭し、廿四歳單身上京して、或は芝の酒商に或は日本橋の製本業に、轉々すること二年餘、廿七歳の二月麹町區永田町なる木版印刷業坂本傳吉氏方に身を寄せたり、之れ君の今日ある因由にして、爾來苦心慘憺業務に精勵なると共に、印刷界に新機軸を出すべく腐心し、羊羹箱用のペーパー印刷を創案し知人に事業の共同を謀りたるも成就せず、更に木版應用金印刷フッテル等を工夫し明治二十一年神田區富松町十三番地に小家屋を借り入れ獨立す、同年七月煙草規則改正されたるを以て、直ちに包裝用紙の印刷を引受けて巨利を博し、翌二十二年六月同區岩本町六番地に移轉せり、更に翌年には西洋艶紙に更紗模様を金色印刷するの方法を發明し、業務益々隆昌を來せるを以て現所に再び移轉工場の大擴張を行へり、以來礫紙印刷にありては、斯界の巨商川島庄之助氏の專屬工場となりて日本第一の稱あり、亞鉛凸版を利用して浮出し模様を附せる文

庫紙を工夫し、之れ亦斯界の覇王たる須田友吉氏の專屬工場となり、同區和泉町一番地に業を營みつゝあり、君信仰心に篤く常に各神社佛閣に寄し、嘗て都新聞の如きは稀れなる篤信家として世に紹介せることあり、又慈善を樂しみ、義捐救恤せること多く、其の善行を表彰せらるること數次あり夫人をすみ子と呼び、君に侍して內助の功多し、長男太郎氏は石版工場を經營して隆昌を極め、次男章次郎氏は軍務に服し好下士として令聞あり、三男光造氏は丹青に親しみ、將來の畫伯たらん、長女かね子は他に嫁し、次女せい子は未だ家に在り、更に最後に特記すべきは君の職工を遇すること篤きにあり、毎年多額の私財を投じて其の鄉里にして神都たる伊勢參宮を爲さしむるが如き、亦一美談にあらずや。

※ 靜岡織布株式會社

靜岡縣安部郡大里村川邊七五
電話 靜岡 八六一番

創立　大正八年六月
資本金　二十五萬圓
役員　社長北村浦太郎、常務取締役關本爲吉、取締役馬場惣左衛門、安達俊助、酒井嘉重、監査役厚木由藏、岡部服太郎

遠州木綿の名は夙に人口に膾炙する所、近年此の地方に於ける機業頗る進歩し、其の製品は布面の均一と染色意匠の巧緻とを以て益々聲價を博するに至れり、方今遠州の機業家其の數尠なからずと雖も、事業の殷盛にして設備の完全なるもの、靜岡織布株式會社の如きは蓋し罕れなり、同社は大正八年六月を以て創立せらる。資本金二十五萬圓、其製品の主なるものは正紺無地物にして、品質の優秀卓拔なる、世既に定評あり、其の販路は內地全般に亘るのみならず遠く支那方面にも及ぶといふ、以て其の眞價を知るべきなり。現工場建坪二百五十餘坪、織機百數十臺を設備し、一ケ年間の生產額十五萬圓を超ゆ、今や遠州機業界の重鎭を以て稱せられ、社運當に隆々たり。同社創立以來星霜を閱すること僅かに三年有餘にして、今日の隆昌を招來したるは因より一般社員が刻苦勵精の結果に由るべしと雖も、抑も亦社長及常務取締役等經營の衝に當る重役諸氏に敏腕の士を得たると、工場主宰者たる技師長に適任者を得たるに因ること尠なからず、現社長北村浦太郎氏は夙に靜岡縣下に於ける事業家として嘖々の名聲あり、常務取締役關本爲吉氏亦霸氣縱橫の手腕家にして、鬼才膽略群を拔き、縣下實業界に尋々の名あり、技師長として工場統率の任に當る服部勘治氏は熱心なる研究家にして、斯業に造詣する所頗る深く、而かも頭腦明晰にして才氣煥發恰かも竹を破るが如き性格を具ふ。多士濟々たる當社の前途や眞に多望なりと云ふべきなり。

※ 武井興三郎君

東京瓦斯株式會社精製所大島工場長
工場　東京府下大島町六ノ六〇六
電話本所一六二二番

輓近本邦に於ける化學工業の發達は眞に驚嘆に値するものあり、就中瓦斯工業は近年長足の進歩を遂げ、斯業の副產物生產額亦驚く可き數字を示しつゝあり、然り而して其の尤なるものは蓋し東京瓦斯株式會社ならん歟、同社の副產物精製所として規模の宏大設備の完全を以て斯界に誇る大島工場は、專らコールタール、硫酸アンモニア、石炭酸、ベンゾール、ナフタリン等瓦斯副成品の製造に從事す、元來タール中には更に未知の化合物數十種を含有するも、其含量少きと且つ分離の困難なる爲め、從來其の利用法充分研究の域に達せざるものありしが最近化學の進歩に伴ひて漸次研究の歩武を進め、染料、醫藥、爆藥其他各種多數の原料ぺ蒸餾精製するを得たり、然れども此の研究は今尙ほ完成の途にあるに過ぎず、今後タールの原料としての價値は化學の進歩と共に益々增進するに至るべきは論を俟たず同社は事業の發展と共にタール事業の重要なるを認め、明治四十年深川區猿江工場に於て專らコールタールの蒸餾精製をなし、更に東京府下大島町に其工場を增設したり同工場長として令名ある武井興三郎君は、東京の人、明治十三年三月を以て生る、三十三年築地工手學校應用化學科を出て、後

ち愛知セメント株式會社に入りて同三十五年迄勤續せしが、同三十六年轉じて東京瓦斯株式會社に入り、精製所に在勤して專ら一般瓦斯の副精製物の製造に從事映掌し、同四十四年猿江工場長に進み、大正十一年大島工場長に榮轉したり、君は斯業の造詣甚だ深く、學理の蘊奧を極むると同時に常に實驗に身を委ねて研鑽苟も怠らず、嘗て帝國瓦斯協會雜誌等にコールタールの蒸餾に就て其の蘊蓄の一端を披瀝し、前後八回に涉りて詳論せられたることあり、以て君の學究的態度を寓知するに難からず、君資性溫厚にして而かも人格圓滿、典型的紳士の風格を備ふ。

※ 平澤準一郎君

日本製麻株式會社技師
本社　東京市麴町區有樂町一ノ一

日本製麻株式會社は、我が國製麻業界の權威にして其の信用勢力の偉大なること、斯界幾多の會社中に在りて實に首班と稱せらるゝものたり、而して我が平澤準一郎君は現に同社の技師として令名嘖々たるの士なりとす、君は茨城縣久慈郡の產にして平澤亥之吉氏の長男たり、君の家は肥料商として聞里に名あり、君其の家に生れながら、將來紡織業を以て身を立てんと志し、夙に縣立太田中學を出て、進んで桐生高等工業學校紡織科に入り、研鑽努力すること年あり、大正九年同校を卒業するや、名古屋市菊池紡績會社に入りて實務に從事せしが、後一年志願兵として入隊し、斯くて除隊と共に、日本製麻株式會社に技師として入社す、當初赤羽工場に勤務せるも、大正十一年五月本社工務課に轉任し、現に其の職に在り、君資性英敏達識にして其の技術上に關しては實に先天的才能を具ふ、君の一たび同社に入りて技術の衝に當るや、其の天與の才氣と修得せる學理とは、遺憾なく業務の上に發露せられ、爲めに社業をして着々向上の域に向はしむるに至る、思ふに此の新進有爲の士を有する同社は、眞に是れ適材を得たりと謂ふべき也、今や我が事業界の現況を觀察するに、動もすれば經濟界の變動に伴ひ、沈滯萎微を來たさんとするの傾向なきにしもあらず、苟くも實業を振興發達せしめんとせば、大いに當業者の覺醒を促がさざるべからざるなり、殊に我が製麻事業の如き前途益々之れが繁盛を期せざるべからざるの秋に當り、更に大なる抱負を持して、斯界に勇厲せんとする我が平澤準一郎君の如き人あるは、斯業の爲めに眞に賀すべきとなりとす、君今や年齒漸く壯に達す、庶くば自重奮勵して益々斯界に盡瘁せられんことを。

※ 藤本染工場主

藤本秀治君

京都市田中町關田
工場　同　夷川熊ノ道西入
電話上三二一八番

織染の名產地としての京都は宇內に冠絕す

る位置を占め、到底之れに比肩し得るものなし、其の起元は實に歴史的由緒に富み、代々相傳へて名工巨商を出し、其の聲譽は依然として渝らざるなり、吾人が玆に叙せんとする藤本秀治君の如き、亦逸すべからざる人材にして、京都染色の爲めに氣を吐くものと云ふべきなり、君は幼少の交より染色に因みあり、將來の志望を之れに囑して學業を修め、現市立工業學校の前身たる市立染織學校に入り、優等の成績を收めて其の門を出づ、爾來拮据經營し、藤本捺染工場を設けて其の秀拔なる技能を發揮しつゝあり、工場の所在地は恰かも疏水の運河畔にして、最も好適の地を占む、創業以來頗る急速なる發展を遂げ、同業者をして驚嘆せしむるの狀にあり、蓋し君が孜々として倦まざる努力の結果にして、啻に時運を僥倖せるものに非ず、時に自ら工場に職工と伍し寒暑を厭はず、辛勞を避けず、優秀なる製品を得て需要者を滿足せしむるとに專念す、此の故に藤本捺染工場の製品に對する世評は、嘖々として喧傳せられ、多大の信用を博するに至れり、君、思へらく斯業の改善發達を期せんとせば、須く其の教育を盛んならしめざるべからず、母校京都市立工業學校の如きも大に内容を充實して、人材の輩出を圖らざるべからずと、常に同校の爲めに貢献して現に同窓會幹事たり、令息善一郎氏亦君の薫陶を被りて新進の才幹觀るべきものあり、君と同じく市立工業學校の出身にして、家業に勵精しつゝあり誠に好機嗣を得たりと云ふべし、今や藤本捺染工場は隆運堂々として旭日の天に冲するが如く、盛況極まる所を知らざらんとす思ふに父子相共に超凡の英資を有し、相携へて業務に力むるに於て、奚んぞ其の繁榮を來さゞることあらんや。

※ 高木賴三君

横濱輸出羽二重檢査所技師　明治二十三年生

住所　横濱市岡野町一〇七番地

近時我が羽二重製造の發達頗る著しきものあるを見る、由來海外諸國に於ける我が羽二重織物の聲價亦大いに擡がる所以のものは、蓋し其の品質の優良にして、全く他製品を壓倒するの傾あるに因らずんばあらず嚢きに横濱輸出羽二重檢査所の設立せらるゝや其の目的とする所は、之れが輸出品の正確と奬勵とを期するに在り、爾來同所の指導に依り該品の輸出をして改善向上に效せるもの亦決して鮮少ならざるものあり、我が高木賴三君は即ち同所の技師として其の實際に當りつゝあるの人なり、君は名古屋市の產にして、夙に名古屋高等工業學校に入りて色染科に學ぶ、大正二年同校を卒業すると共に、大阪染料界の覇者たる繪安染料店に入り、更に實地の研鑽に從事せらる、居ること約三年其の間に於ける君が熱心なる研究と努力とは、君をして能く得る所多からしめたり、後和歌山なる由良染料株式會社に入り、技師として盡す所勲なからざるものありき、大正八年轉じて横濱輸出羽二重檢査所技師に任ぜられ、現に主任技師として令名大いに高し、君の當所に入るや、殊に輸出品の正確に惠心留意し、他面斯業の開發に盡瘁する所亦頗る多し、其の功績の多大なること、夙に斯界の仰景する所たり、君資性溫厚篤實にして業務に精勵なり、而して、斯業に對する熱心なる研究家にして、實に斯業技術家中稀れに見るの人と稱せらる、其の人格も亦高潔にして最も尊敬すべきの士なり、君年齒而立を超ゆる僅かに四歲、前途頗る多望なる幾多の春秋を有せり、思ふに君が今後に於ける精勵奮勉の結果は我が輸出羽二重業の爲め偉大なる效果を收め得らるべきは固く信じて疑はざる所なり、君夫れ更に斯界のために努力健闘を吝まざらんことを。

※ 内山有利夫君

農商務省絹業試驗所技師　明治二十九年生

勤先　横濱市北伸通六丁目絹業試驗所

嚢きに農商務省に於て絹業試驗所の設置せられて以來、我が絹織物界の改善發達に資せるもの頗る多し、即ち本試驗所の實績如何は直ちに斯業の消長に關係する所偉大なるものあるを知るべし、而して我が内山有利夫君は、實に同試驗所に在りて其の技術・方面を擔當せらるゝ所の一人たり、君は福井縣大野郡大野町に生れ、夙に技術家を以て身を立てんと欲し、年少福井縣立大野中學校を卒へ、更に進んで桐生高等工業學校紡織科に學ぶ、大正八年優等の成績を以て業を卒ふるや、農商務省絹業試驗所技師に任ぜられ、玆に初めて學理と實際を應用することゝなれり、君資性英邁にして事理に明かなり、一たび本所の事務に就かるゝや其の天賦の才腕と多年學得せる技術上の知識とは、遺憾なく業績の上に現はれ、爲めに能く同所の成績をして眞好なる結果を誘致せしむるに至らしめたり、今や君就任日尚ほ久しとなさざるも、現在同所に在りて樞要の地位を占むるに至れるもの、全く是れ精勵奮勉の結果たらずんばあらず、君の今日あるは固より偶然ならざるを知るべし而かも君は頗る研究心に富み、技術上に關する研究に就ては其の熱心日も亦足らざるの感あり、尚ほ君が抱負と理想とは何れも斯界を稗益する所大なるものにして、即ち現時に於ける絹織物を更に能く改善の實を舉げ、以て時代に適應するの域に達せしめんことを期するにあり、若し夫れ君が斯の如き遠大なる理想と豐富なる抱負の實現せらるゝの日あらば唯獨り絹織業界の發展に資するのみならず、國家を利する所蓋し尠少ならざるを知るべし。君今年齒漸く壯に達し、其の前途は洋々乎として恰かも春海の如きものあり、それ君たる者自重自愛し以て、我が產業の進展に貢献せられんことを吾人は衷心より囑望して止まざるなり。

※ 東海製紙株式會社

製紙業　静岡縣富士郡岩松村　電話加島三五番　信書加島局私書函第三號

重役　專務取締役武田忠臣

静岡縣内富士郡地方は、由來製紙の業を以て名あり、而して同地に於ける大小製紙業者の數も亦尠からずと雖も、中に立ちて嶄然として頭角を顯はし、盛大なる工場を有し、製品の優良なると信用の厚大なるとを以て夙に名聲を博するものは、則ち我が東海製紙株式會社と爲す、同社の創立は已に數年前に係り、重にライスペーパーの製造に從事し、常に優秀なる成績を擧げつゝ大正十一年に至り、三益紙布化工株式會社との共同經營事業となし、更に從來の營業方針を改め、玆に一大擴張を見るに至れり、之れと同時に工場を改造して設備の整善を期し、今や威勢堂々として優に斯界を風靡するの概あるを見る、殊に又工場内には理化學實驗室を設くるが如き、最も現代的の設備にして、決して他工場の模倣し得べき所にあらず、現在生產種目を擧ぐれば、(イ)絹絲、綿絲用包裝紙、蠶卵紙、掛紙及硬軟各種、(ロ)打綿包裝紙其他紙質强靭なる各種耐火耐水包裝紙、(ハ)漉包紙各種、(ニ)保米袋紙、製茶袋紙、蠶座紙等其他

東洋紙類、（ホ）特種印刷紙、謄寫紙、捺染用紙等にして、何れも製品の優秀なるは、夙に一般の定評あり、其の生産高の如きも頗る多額に上り、一ヶ年約六百萬封度を製するに至ると云ふ、以て其の盛況如何を窺知すべきなり、同社は曾てライスペーパー製造に依り、褒狀數回及銀杯木杯等を受く、亦以て同社の名譽たゝずんばあらず、思ふに世運の進展に伴ひ、文化的必用品の需求を感ずること益々多からんとす。隨つて同社の製品たる各種用紙の如きは前途大いに望を囑するに足るべきなり、此の秋に當り同社の發達倍々隆盛なるを見るは、其の今後に於ける社會文明に貢献する所のものも亦決して鮮少ならざるを知る也。

※

米國ナショナル、アニリン染料會社東京支店主任

門馬軍太郎君

明治二十八年生

住所　東京市外下落合一五一五番

凡そ實業家の尊ぶ所以のものは志操と努力との二者にあり、古來其の成功の原因を尋ぬれば、多くは是れ此の二者に依らざるものなし、我が門馬軍太郎君の如き亦其の一人たるを失はず、君は元と仙臺の人なり、其の家は代々同地の豪家を以て名あり、父君は多年官界に在りて令名を馳せたる異彩たり、君は其の關係上大阪市に生れ、幼より英才を以て稱せらる、長じて東京學院中學部を卒へ、更に進んで桐生高等工業學校色染科に入り、大正八年優等の成績を以て同校を卒業せり、君は夙に實業を以て身を立てんと志し、其の桐生高等工業に在るや專心螢雪の功を積み、大いに將來に期待する所ありたりき、是を以て學業の進歩眞に驚くべきものあり、今日同校出身者中に錚々たる聲名を謳はるゝ所以のもの、固より理由なきにあらざるなり、君同校を出づると共に、機械貿易株式會社の招聘によりて入社し、爾來同社の爲めに一意專念奮勵努力する所ありしが、時偶々米國ナショナルアニリン會社が神戸支店を設置せんとするに際會し、君は其の懇望に由り轉じて同支店に入る、更に又大正十一年東京支店の開設に當り、選ばれて其の主任となり、現に君資性溫厚篤實にして志操最も堅固なり、而して其の業に熱心にして、人格亦た高邁君子の風あり、蓋し君の如きを少壯實業家中稀れに見るの人と謂ふべき也、尙ほ君の東京支店を擔當せられてより以來、同社事業の駸々として發展しつゝあるを見るは、全く是れ君が奮勵努力の結果たらずんばあらず、君今年齒漸く二十九歲に達し、最も活動盛かりの時代たり、思ふに君が今後の活躍は、我が實業界に偉名を馳するの日遠きに非ざるを知るべし、自愛加餐切に祈る。

※

微粉工業株式會社技師

石原周三君

明治二十九年生

工場　大阪市西區南鵜崎町一番地
自宅　大阪市西區三條通二ノ二一

微粉工業株式會社技師として大に囑目せらるゝ少壯技術家を石原周三君と爲す、抑も微粉工業株式會社はもと大阪銑鐵株式會社と稱し、資本金十五萬圓を以て創立せられ當初銑鐵製造を目的とせしもの、斯業好況時に於ては異常なる好成績を擧げたり。這般營業の目的を變更して各種鑛石の粉末製造業を開始し、大正十一年十二月を以て社名を微粉工業株式會社と改稱するに至れり斯業は近年有望なる事業として漸く世人の注目を惹く所となり、從つて同社の前途に望を囑するもの尠なからず。同社々長石原辰治氏は其の前身たる大阪銑鐵株式會社の創立者にして、創業當時より社長として社務に掌鞅し、慧敏豁達の實業家として夙に關西實業界に名あり、同社技師石原周三君は實に同氏の令息にして桐生高等工業學校の出身なり。頭腦頗る明晰にして學殖深く而も研究心に富み且つ經營の才あり、同社の大阪銑鐵株式會社時代に入社して父君を輔け、諸般の業務に當りて大に社務の刷新を圖れり、這般同社の微粉工業を開始するに及んで、自から技術上の責任を負ひ以て同社の發展に盡瘁せらる、君資性溫厚篤實にして克く部下を愛撫し頗る德望あり、其の業務に當るや、熱心の極、往々にして寢食を忘るゝに至ることあり、其の熱誠なる眞に嘆賞に値するもの無くむばあらず、而して嚴君辰治氏其の已に得たる實業界の信用と勢力とを以て只管社業に努力せらる、同社將來の發展期して俟つべきなり。君年齒漸く二十八、前途春秋に富むこと尙ほ甚だ多し、冀くば自重奮勵、益々斯業に貢献せらるることを。

※

東明製壜株式會社取締役技師長

岡本市太郎君

明治二十一年七月二十九日生

會社　兵庫縣御影町東明字五番七九八番地
電話御影七九八番
住宅　兵庫縣武庫郡芦屋村字芦屋二五番

天下の銘酒地たる灘五郷一帶の酒造家、竝びに東京、岡山等の各地に硝子酒壜を供給して著名なる東明製壜株式會社は資本金百萬圓四分の一拂込を以て、大正九年一月創立せられ、翌十年八月更に大擴張を試みて製產額を倍加し、今や一箇年約五十萬圓の販賣高を算するに至り、佐伯信太郎、岡本市太郎、松本德藏、黑石米藏、村井因憲、米谷庄七、吉田磯馬の諸氏重役として協力社業の發展を圖りつゝあり、而して同社の株式組織を觀たるは前述の如しと雖も、其の沿革を尋ぬれば、現取締役技師長たる岡本市太郎君の創始する所に係れり、君は岡本福松氏の長男、明治二十一年七月二十九日を以て、兵庫縣武庫郡芦屋村に生る、夙に工業に志す所あり、中學校の業を卒るや大阪高等工業學校に學び、孜々として勉め明治四十四年其の門を出づ、直ちに製壜業を開始し、兵庫縣武庫郡芦屋村に工場を設く、灘の酒造家を主なる得意と爲し、業務漸次に隆昌を來すに至れり、大正三年二月更に同郡下西宮町に耐火煉瓦製造工場を建設し、兩工場を兼營せるも大正七年六月これを中止すると共に、更に製壜事業に全力を注ぎ工場を御影町東明に移し、大正九年一月現組織に變更し、取締彼兼技師長として、依然同社の棟梁たり、凡そ酒類を壜詰と爲すもの、各種正宗の類を初めとして、其の數甚だ尠なからざるも、多くは東明製壜株式會社の製品を使用して殆んど其の代表的地位にあるが如き觀あり、之れ一に君の努力に負ふものにして同社の將來に囑望すべきと共に、君の前途は益々多望なりと謂はざるべからず、夫人を八重子と謂ひ、長男博氏十四歲以下一男二女ありて家庭頗る圓滿、近隣に羨望せらる、君尙不惑に充たず眞に期待すべきは今後の活動にあり、大に自重せられんことを望みて止まざる也。

※

日本毛織株式會社印南工場支配人

片岡元彌君

明治六年十月生

工場　兵庫縣印南郡米田村
電話加古川三七番
住宅　兵庫縣加古川町社宅

我が毛織界に嘖々の好評を有する日本毛織株式會社の經營する工場中、兵庫縣印南郡米田村に十萬餘坪の廣大なる敷地を占むる印南工場は、大正七年に起工し、翌八年九月より操業を開始せるものにして、各般の設備機械等は何れも最新の精粹を網羅し本邦有數の大工場たり、此處に支配人たる片岡元彌君は、山形縣鶴岡町の人、明治六年

十月を以て生る、夙に東京高等工業學校染織科に學び、明治廿八年其の業を卒はれり其の後帝國製麻株式會社に技師たること多年、社業に貢献して功勞尠からざるものあり、同社有要の材器として信望隆々たりき大正元年日本毛織株式會社より辭を厚ふして招聘せらるゝに及び、轉じて其加古川工場に技師となり、豊富深遠なる學識經驗を縱横に運用し、工場の能率を俄然として倍加せしめたり、大正八年現工場の新設せらるや積日に進みつゝあり、之れ元より君が多年の經歴に因りて自から研磨せられたる手腕才幹の明敏なるに基くもの多しと雖も、然かも亦其の圓滿にして溫良なる性格に由らずんばあらず、誠に工場支配人として絶好の資質を具備せりと稱すべきなり、思ふに君が學窓を出でゝ今日に至るまで二十餘年の長年月間、僅かに帝國製麻株式會社及び日本毛織株式會社の二社に在職せるのみにして、何れも多年勤續して重きを致せるに考ふれば、單に手腕學識に秀で、人と和する溫厚篤實の美質を有するのみにあらずして、至誠恪勤、後進の範と爲すに足るものあるべきなり、君常に謠曲乘馬等に趣味あり、殊に乘馬術は名手として許さるゝに足ると云ふ、一面靜かに朗詠を味ふと共に、他面逸物を山野に驅つて大に雄渾の氣を養ふ、自然の用意妙を極むと云ふべし。

即ち拔擢せられて工場支配人の要職に就き、事務員約百名、工手男女合せて三千名の大集團を統理し序次整然業務に進捗せしめたり、君の經歴は、日本邦麥酒釀造法は長足の進歩を爲し、其の本場と稱せらるゝ獨逸を凌駕せんとするの勢ひにありと云ふ、然れども彼れに於て好適なる麥酒は必ずしも、我が國民に愛用せらるゝと爲すべからず、其の體質生活、多年の習慣嗜好等の相違に依りて左右せらるゝこと勿論なりとす、麥酒が今日の如く殆んど國民的飲料と爲りたるは、邦人に適切なる味質を有するものを釀造し得たる結果に外ならざるなり、然り而して多年苦心の餘り、克く此處に到達したるは、畢竟矢木久太郎君の功勞に歸すべし、君は石川縣の人、矢木八郎兵衛氏の長男にして、明治三年六月を以て生る、夙に東京帝國大學農學部に學び、農藝化學科を專攻し秀才として目せらる、明治廿七年同窓羨望の裡に優良なる成績を以て其業を卒る、後ち札幌麥酒株式會社技師に聘せられ、爰に初めて麥酒釀造界に於ける端緒を履めり、續いて歐米に留學し、多年研鑽する所あり、深遠なる蘊蓄と絶大なる抱負をもたらして歸朝せり、偶々札幌株式會社は大日本麥酒株式會社に買收せられたるを以て、君亦同社に轉じ最新の釀造法を運用して製産に從ひ、殊に邦人の體質嗜好に鑑み、細密なる實驗研究の結果、全く獨特の美味を含有するものを釀造し、好評嘖々俄かに愛飲者を增加するに至れり、先に農學博士の學位を授けられ、又東京帝國大學農科大學講師たるは君の斯界に於ける功勞と權威とを表明するものにあらずや、現に大日本麥酒株式會社取締役として重きを爲し、愈々社業の爲めに努力しつゝあり、蓋し君を有するは單に同社の幸福たるに止らざるなり、資性溫厚篤實にして一度接したる者をして永く其の風丰を想

大日本麥酒株式會社取締役、東京帝國大學農科大學講師、農學博士

矢木久太郎君

東京市芝區高輪南町三十番地
電話 高輪 三五八番

明治三年六月生

起せしむ、誠に洗練せられたる紳士の典型たる感あり、斯業の權威なると共に好適の實業家たる君の如きは、稀有の資材と稱すべし。

※

陸軍衛生材料廠長陸軍大佐藥學博士

渡邊又治郎君

東京市牛込區拂方町十二番地
電話 番町 一五二〇番

軍紀の振肅、士氣の旺盛は峻嚴なる規律と不斷の鍛錬とのみに依りて期し得らるゝものにあらず、實に將卒の健全なる體力に俟つ所尠からざるなり、此の故に第一線にありて奮鬪する戰士の戰鬪力は、日常の糧食營養は勿論、衛生狀態に依りて左右せらるゝもの輕々にあらず、須く規律鍛錬と糧食衛生等とは併進すべきなり、然らば其の衛生材料廠の如き、陸軍の爲めには缺くべからざる重要機關にして、主腦者に偉材を要することも亦明かなり、現陸軍衛生材料廠長渡邊又治郎君は、其の學識經驗に於て誠に適材を適所に配置せるもの、國家の爲めに頗る賀すべきなり、君は東北宮城縣の人明治卅三年東京帝國大學藥學部を出づ、專攻せる所は製藥化學にして、成績卓群、同學の間に仰望せられたり、卒業後陸軍省に職に奉じ、陸軍材料廠に入りて製藥及び材料製造の任に當る、漸次に累進して官は陸軍大佐に昇り、材料廠長に補せられ、陸軍衛生の爲めに盡瘁すること今日まで二十餘年に及び、其の間數多の戰役に遭遇し、功勳の赫々たるものあり、然かも每々實戰の結果に鑑みて改善を加へ、之れを往時に比して面目一新せるは、內外の等しく認むる所たり、然かも劇務の裡にありて始終研究を廢せず、大正八年には藥學博士の學位を授けらるゝに至れり、眞に君の如きは我が陸軍衛生界の中心にして、亦國民の恩人と稱すべきなり、今や熟心官務に鞅掌し、又寧日なきの狀にあり、尙將來君の努力に依りて軍隊衛生を更に改善し、眞に忠良なる兵卒をして國家干城たるの使命を全うせしめんことは、國民の希望して止まざる所也所謂軍縮に依つて數量を縮少せると共に、質に於て精練せざるべからざるは蓋し自然の趨勢にして現下の緊急事に屬すや必せり而して其の優良なる資格を保持增進せしむるには、實に君の如き學識經驗二つながら全き有爲の士の手腕に待つ所多大なるは敢て玆に贅言の要なし、それ國家愈々多事ならんとするの時、切に自愛せられんことを望む。

東京帝國大學農學部教授、農學博士

鈴木梅太郎君

東京府豐多摩郡淀谷町上淀谷一四一番地
電話 芝 四六七三番

明治七年四月生

教授農學博士鈴木梅太郎君の如き、旣に世界各國に其の名を著聞す、君は靜岡縣の人鈴木捨藏氏の弟にして、明治七年四月を以て生る、明治二十七年東京帝國大學農學部農藝化學科を卒業したるが、當時より將來斯學の權威たるべきことは、先輩及び同學の期待せる所なりしと云ふ、以て君が如何に秀才なりしかを察するに足るにあらずや明治三十三年母校の助教授に任ぜられ、同三十四年農學博士の學位を受く、其の學者

學藝の進歩は畢代の祥事にして、國家文運の發展は國民の利福を增進する要務たり、今や我が國に於ける各般の學術を通觀して錚々たる學者、世界的名聲を博せる碩學、亦決して稀れならず、東京帝國大學農學部

と相て進歩の駸々乎たる驚くに値ひす、同三十九年獨佛瑞の各國を歴遊し、深遠なる研究を遂げて歸朝するや、盛岡高等農林學校教授に任ぜられ、母校農學部助教授たること故の如し、後現職たる大學教授に進み盛岡高等農林學校教授を兼ね、先に第八回應用化學萬國會議の米國ワシトン竝にニューヨークに開かるゝに際しては、日本委員として參列を仰付けられたり、君が斯學の爲めに寄與貢献せる所斯くの如し、之れ元より概要を摘記せるに過ぎざれども、其の一斑を察知するを得べし、特に大書すべきは榮養學説中にヴヰタミンを提唱せるの一事なり、之れ實に君の創見にして、當時は我が國の學者は勿論、世界の學界に於てはヴヰタミン説を認めず、却つて反駁せらるゝの狀にあり、然かも君の熱心なる研究は遂に反對者を屈服せしめ、千九百十四年頃より、オスボルン、アブデルハンデン、マッニラム、ホプキンソン等の諸家も實驗に從ひたるのみならず、君の所説に贊意を表し今や世界的に研究せらるゝに至れり、寔に君の如きは眞に斯界の明星と稱するも溢美に非ざるべく、其今後に於て更らに一段と本邦斯界に裨益する所多大なる可は蓋し一般人士の信じて毫も疑はざる所なるべし。

東京工業試驗所第二部長農商務省技師

山村鋭吉君

東京市外西大久保三百八十三番地
電話番町四二七七番

社會の表面に立ち、尊々の名聲を著さずと雖も隱れたる偉材は世に尠からず、殊に敬虔なる科學者にありては、自ら好みて名聞を避け、唯孜々として自己に與へられたる天地の研究に全力を注ぎ、亦他を顧みざる篤學の士を發見すべし、農商務省東京工業試驗所の如き幾多優秀なる學者並に技術家を包擁し、何れも勵精其の職に力めつゝあれども　世間的に喧傳せらるゝもの極めて稀にして、同所第二部長たる山村鋭治君の如き亦隱れたる人材として推稱すべき也、君は東京の人、幼少の交より頗る異彩を帶び其の卓越せる天稟は所謂双葉より香ばしきものあり、將來を囑望せられ、他日の大成を期待せらるゝこと極めて深かりき、小中學校の課程を卒り、高等學校を經て東京帝國大學工學部に入る、專攻せるは應用化學科にして成績頗る優秀、在學中より同窓の推稱する所たり、明治三十四年其の門を出づるや、農商務省に職を奉じ、東京工業試驗所に在りて一般分析の任に當る、漸次に進みて第二部長の重責にあり、蓋し君は自己の任務を以て趣味とも生命とも爲し、決して他を顧ることなし、故に一旦研究室に入るや全力を注ぎて之れに沒頭し、其の結果を得るにあらざれば安んぜず、斯くの如き熱誠を以て職務に對するが故に、從來幾多の新發見を爲し、斯界を裨益すること數ふるに遑あらず、然かも君は依然として喜びて藥品を配合し、機械を手にするの外自己の功勞を吹聽することもなく、默々職務に最善の力を致すのみ、實に斯くの如きは單に篤學者たるのみならず、偉大なる人格者として尊敬するに値ひすと云ふべし、從つて上下信頼する所篤く、桃李言はざれども自ら蹊を成すの理にして、君の研究に依りて闡明せらるゝもの甚だ多しと云ふ。幸に邦家の爲め自愛せられんことを。

伊藤胡蝶園

東京市芝區芝公園九號地六號
電話特長芝七七、二九九、（七四七）番
工場　同市麻布區本村町一四五番地
電話特長芝　元九四、同五二〇番

伊東榮氏の經營する伊東胡蝶園は、各種化粧品、就中完全無鉛御園白粉の製造發賣に於て夙に名名あり、無鉛白粉とは有害なる鉛白粉の鉛中毒を除かんが爲、多年の苦心によりて創製したる御園白粉に冠し、以て其特質を明かにしたるものなり、古來我國に於て婦女子の身躾として奬勵せられ來りし化粧は、主として白粉を使用するにあり其成分は炭酸鉛を主とするが故に人體に極めて有害にして、之を常用すれば毛孔より吸收されて體内に入り皮膚に斑痕を生じ、脈管壁を硬固ならしめ、胃痛を起し齒を腐蝕し、手足の關節を麻痺せしめ、終に背髓心臟等を冒して生命に危害を與ふるに至り到底救濟の途無きに至る可く、又上記の如き鉛中毒症狀を明に現さゞるも、婦人體質の惡化は當然免る可らず、且又久しきに亘りては國民體質の低下を來すべきは自明の理に屬す、此害患を除かんが爲めには完全なる無害の化粧品を以て之に代へしめざる可らず、御園白粉の發明は尚ほ其遲かりしを懐はずんばあらず。今日御園白粉の聲價の昂れるを見、之が模倣追隨するもの尠なからざるを見、單に無鉛白粉の名を冠するが爲めに其眞否精粗を問はずして同一視するが如きは蓋し思はざるの甚だしきものにして、今發明創製當時の實狀を回顧すれば一般醫師は勿論學者と雖も鉛中毒に關する知識少かりしこと、今日尚ほ本邦に於ては纔かに三四の學者の研究せるもののあるの外其業績の見るべきもの無きに徴するも明かにして、明治三十年代に於ける開業醫師が鉛中毒症狀を往々他の病症と誤認せしが如きは決して怪む可きにあらず、御園白粉の發明が斯る時代に行はれしは實に不思議と稱すべく、時代の要求に先んじて衞生觀念の普及を計りたるは我化學工業史上特筆大書すべきなり　從て無鉛白粉の意義を徹底せしむることの如何に困難なりしかは、想像するに餘りあり。當時の化粧品として

園主　伊藤榮君

は、古來慣用せられ來りし鉛白粉のみにして、上下都部とも何等の懸念なく常用せられ、會々新奇を好むものありて外國産の白粉を使用する者あるに過ぎず、其害毒に至りては醫師さへ念頭に置かざりしもの、常人の奈何でか之を知るを得べき、實は外國産の白粉と雖も包裝香料等の相違あるのみにして全然原料を炭酸鉛に取りたるもの多く甚だしきに至りては甘工水を主要原料とするものあり、或は其中一二の先覺者ありて白亜若くは澱粉等の原料を以てしたるものを輸入する者ありしも、一見白粉として體裁を具備し使用上有害若くは無効にして化粧の機能を有せざるものあり、今日に於ても稀に澱粉製を名として且つ炭酸鉛製の舶來品あるを見るが如きは嗤ふに堪えたりと謂ふべし。畢竟進歩せる泰西の科學も化粧品に對しては權威なきに等しく、其改善は我に一籌を輸せるを見る。玆に於てか完全無鉛を標榜する御園白粉は、化粧品界の翹楚にして萬國に魁せるものと誇稱するも決して潛越にあらざる可し。從て發明當時に於て廣く世界に亘りて化粧品の種類を蒐め、一日分析して實の眞否と効の有無とを驗し、遂に採て參考とすべきもの絶無なりしは寧ろ當然にして、新化粧品の研究は根本より開始するの外なく、學理に基礎を置き實驗に依りて之を完成するの一途ありしのみ。御園白粉は長谷部仲彦氏先づ研究し伊東榮氏之を完成したるものにして、長谷部仲彦氏の實驗的研究は伊東榮氏によりて一大工業に進展せしめられたるものなり。後來之に倣ふもの輩出し、今日に於ける化粧品製造業が化學工業界に於て特殊の地位を占むるの源由玆に起れり、明治三十年頃に於ける民間の化學的知識が貧弱なりしは

前に叙する所によりて想像するを得べく、一の化粧品の發明に多大の苦心を胎すが如きは意表外の事とせられ、其研究の苦心も努力も徒らに嘲笑の的となるに過ぎず、研究稍や進み、學理上純良なるものを得るに及んで、尚ほ缺點の百出するあり、有名無實なるあり、化粧品として充分なる性能を具備するものに至りては、學理と實驗との完全なる一致を見ざる可らず、かくて月を閲し年を重ね、試製品數十種に上れども而かも盡く廢毀せざるを得ざるに及んでは心身爲めに困憊の極に達し、中止せんとすること幾度なりしを知らざりしといふ、然れども尚ほ之に屈することなく、或は近親婦女子の實驗を求め、或は俳優に試用せしめたり、更に之れを田原藥學博士、下山藥學博士の兩氏に依賴して嚴密なる分析試驗を乞ひ、又橋本醫學博士及び土肥醫學博士を始め藥學醫學の大家に質して教示を求め、漸く鉛其他人體に有害なる原料を用ひず、學理上純良にして而かも古來慣用せられたる白粉を使用上毫も劣る所なき優良なる化粧品たるの證左を得、遂に完全なる無鉛白粉の發明を大成したり。御園白粉の完成するや直に高貴御料の恩命を拜受し、更に明治卅七年一小工場を設け、伊東胡蝶園の商號を以て御園白粉及び御園化粧品の製造發賣を開始したり、時恰も日露戰役の初頭に際し、化粧品の如き事業は何人も顧みる者なく、甚だしき難況に立つの餘儀なきに至りしも、鋭意衞生思想の喚起に勗め、巨費を投じて鉛中毒の害を宣傳してより、醫師學校等に於ても特に注意するに及び、女學校の教科書中又斯事を登載するに及べり、御園白粉の販賣額の増加と共に、創業の趣旨を貫徹するに至りしは當然のことにして從て當業者の覺醒を促し、皆爭て無鉛白粉の製造に意を注ぎ、今日に於て白粉とは無鉛白粉を指すもの〻如き感あるに至れり。かくて外國化粧品の輸入防遏は勿論輸出の數量年々増加しつ〻あるは、御園白粉發明當時に比して驚嘆すべき進歩にして實に隔世の感あり、御園白粉が斯界の先驅者として常に改善を怠らず、殊に亦其の發賣に係る御園白粉及び御園化粧品等四十有餘種の製品が常に最良の化粧品として各博覽會等に於て最高の賞を受くけつ〻あるを見る、蓋し本邦化學工業界に致せる功績の偉大なるを知るべきなり。伊東胡蝶園創立以來茲に十有七年、研究に着手してより二十有餘年、一意不斷の努力は今日に於て始めて萬花結實の期に達したりと稱すべきか。

野口寅之助君

東京工業試驗所第三部長、農商務省特許局技師

東京市牛込區加賀町二丁目二番地
電話 番町 二〇〇九番

化學の發見は時として從來の價値を逆轉せしめ、萬金を積むも尚望み難しとせるものをして、何等の價値を存續せしめざるに至る、爾く吾人の生活に密接なる關係を有し大革命を生ぜしむるものなれども、其の研究は一朝一夕にして完成し得るものにあらず、性急にして目前の利益に汲々たるは邦人の通弊也、從來世界的に發見の誇るべきもの殆んど絶無に近きは痛嘆すべく、化學的研究の微々として振はざりしも、此處に因由するにあらざる乎、然れども歐洲大戰亂の興へたる我が國に對する各方面の刺戟は、漸く國民の長夢を醒して化學の方面に就ても、優秀なる發明發見の續出すると共に其の研究者に偉材の輩出するは甚だ喜ぶべきことに屬す、特に染色の研究に就ては朝野官民の著しく注意を喚起せるものありて、東京工業試驗所技師たる野口寅之君の如き、錚々たる人物を有するに至れり、蓋し君は我國に於ける染色學界一方の權威にして、既に發表せられたる業績中斯界の重要記錄たるもの尠からざるなり、明治三十九年優良の成績を以て東京帝國大學工學部應用化學科を卒業し、其强烈なる研究的態度は幾多の碩學耆宿をして將來を囑望せしめ大に斯界に重きを爲し、東京工業試驗所に入るや第三部長として功績顯著なるものあり、更に君の偉材は獨り東京市にのみ在るを容さず、農商務省特許局技師を兼任せしめられ、又其の深遠なる學識を傾倒して我が國發明界の向上發展に力を捧げつ〻あり、君資性溫厚にして研究に沒頭するの外特殊の趣味あることなし、他日其の精透なる研究の完成發表せらるゝ曉に於ては、必ずや前人未發の創見を以て斯界を驚嘆せしむるに足るものあらん、前途尚春秋に富む將來の大成期して待つべし。

圓城寺規君

上海紡織株式會社技師長

明治十五年七月二十五日生
住宅 上海楊樹浦路六八號第一工場社宅
電話 上海東二〇七番
工場 上海楊樹浦路第二第三工場
電話 上海東二五二番三五〇番
別邸 第一工場同路六號

支那上海に於ける紡績業界の開祖たると共に、其の堅實なること亦た他の匹敵する所にあらざる上海紡織株式會社は、今を去る約二十年前、千九百三年の交、資本金四百萬圓を以て創立せられたるものにして、千九百二十年即大正九年國籍を我國に轉じたるが、現代表取締役は野平道男氏、支配人は黑田慶太郎氏にして、十餘名の技術家と七千五百名の職工を有し、紡機九萬五千錘、織布機千八百八十臺を備へたる規模壯大なる工場たり、技師長たる圓城寺君は鳥取市鍛冶町五十三番地文藏氏の長男、明治廿五年七月十五日を以て生る、少時俊敏、小中學校の業を卒はるや第六高等學校を經て東京帝國大學工科大學に入り、機械科を專攻して明治三十九年其の門を出づるや、共に同社に迎へられ、現に技師長として技術部の全般を統率しつ〻あり、君の同社に在る既に十五年に亜ぐとし、其の間の努力精勵は社の内外に等しく認めらるゝ所にして、今日の隆昌を招けるもの、君の功與つて尠からずと云ふべし、君、資性篤實にして研究心に富み、常に周到なる注意を以て豐富なる經驗に省察を加へ、新らたなる業績を收め、社業の爲めに貢献せる所極めて多し、尚同社が今後君の辣腕に待つもの尠からざるなり、蓋し同社の存在は、單に業界の盛衰に甚大なる關係を有するに止まらずして、我が產業の對外的勢力の消長に密接不離の交渉あり、從つて經營者の責任重且つ大なりとすべく、更に其の死活を制する技術當事者に非凡の人材を要することも明々白々たり、君が克く此の要求に適し、其の使命を辱しめざるは、既往の事績に徵して歴然たり、然かも年齒尚壯、僅かに不惑を過ぐる一歳、愈々圓熟の期に入るに於てをや、夫人を壽子と呼び、溫雅貞淑亦頗る令聞に富み、異域に神洲婦人の精華を發揮しつ〻あり。

植原敬四郎君

日本工劑株式會社、日本化學工材株式會社
專務取締役、南武鐵道及綏道工業會社顧問

明治元年十二月十八日生
東京市芝區南佐久間町二丁目九番地
電話 芝 一五一二番

日本工劑株式會社及び日本化學工材株式會社は共に新進の二會社にして、其の創立の年所より觀れば極めて最近に屬す、即ち前者は大正十年五月、後者は大正十一年七月

の創立に係るものたり、然り而して其業績を檢するに及びては、幾多同業の先進に伍して遜色なきのみならず、却つて其の勢ひ隆々として、之れを凌駕せんとするの狀にあるに一驚を喫すべきなり、即ち日本工劑株式會社はセメント急酸防水劑ケーテーオーを一日に製産するもの三千封度、日本化學工材株式會社はサカン粉の製産一日三千石を算す、其の盛況誠に歎稱すべきにあらずや、而して是等の販路は本邦内地は勿論滿韓臺灣其の他の殖民地に及び、更に輸出を見るべきの狀況にあり、蓋し兩社が期年ならずして忽ち斯くの如き隆運を招致せるは、時勢の要求に適中せるに依るべく、社員の一致協力せる結果に基くべしと雖も、專務取締役たる植原敬四郎君の殊功を埋沒すべからざるなり、君は岡山縣津山町の人昌氏の三男にして、明治元年十二月十八日を以て生まる、夙に實業界に志し、學業を卒るや各方面の事業に參劃して、才識手腕年と共に磨かれ、豐富なる經驗と相俟ちて斯界の偉材たり、兩社の創立せらるゝや推されて專務取締役に任じ、内外百般の經營に當りて、計劃宜しきに適ひ、着々として其の抱負を實現せしめつゝあり、君が鋭意努力する所は、製品の改善にして其の質に於ては更に優秀なるものを得べく、其の量に於ては益々製産增加を圖るべく、技術員を督勵して日も維れ足らざるの狀にあり、今後兩社か斯界の覇者として堂々たる雄姿を仰視せらるゝも遠きにあらざるべく、之れ一に君の双肩に繫がれり、而して君の手腕、努力、熱誠は必ずや此の期待を空うすることなく、其の發展は刮目して待つべきなり。

※

窒素肥料及爆發藥原料製造研究

渡邊化學研究所

事務所　東京市麹町區有樂町三丁目一番地
電話　新橋　二〇一六番
工場　東京府下北豐島郡巣鴨村大字池袋字谷一〇七
電話　小石川　二二五七番

眞に驚嘆すべきものは獨人の創造力なり、先年世界大戰の開始當時、獨國に於て爆發藥の原料たる智利硝石を貯藏せしもの、實に五十萬噸を超ゆるものありしが、數次の激戰は爆發藥の消費量を豫想外に多量ならしめ、同國は開戰の初年に於て殆ど其の全量を消費したり、然るに同國はハーバー法アンモニア合成の工業的設備を完成し、爾來該方法により製出したるアンモニアより硝酸を製造し、之を以て爆發藥の原料ならしめたり、故に英國艦隊の北海封鎖により智利硝石の輸入不可能となりしも、同國は更に痛痒を感ずること無く、戰爭を繼續し得たり。是に於て乎、歐米各國は競ふて該方法の研究を開始し、米國の如きは戰時中一千二百萬弗を投じてシエッフキールドに其の試驗工場を建設したり。本邦に於ては先年臨時窒素研究所を設立せしも、同所は一般の窒素固定法を研究するに止り、又民間に於ても、平時窒素肥料の製造所たるものにして、一朝有事の際には直ちに爆藥原料の軍需工場となし得るもの無きは吾人の深く遺憾とする所也、此際實業界の重鎮、渡邊勝三郎氏夙に之れを慨して、大正六年六月約三十萬圓を投じて、東京市外池袋に其の研究所を建設したり、渡邊化學研究所卽ち之れなり。其の工場敷地八百八坪、建物坪數三百十八坪にして電動機四臺總馬力三十一馬力)、變壓器六基(合計八十キロワット)、汽罐一臺、水性水素窒素瓦斯發生機各一臺、三次瓦斯壓縮機

二臺、四次瓦斯壓縮機一臺、低壓及高壓廻轉送風機各一臺、アンモニア合成器附屬裝置共大小二組、瓦斯溜五臺の設備あり、其他化學實驗室電氣分解室等の外器械工場を有し、アンモニア合成に要する特殊の器械及高壓裝置は殆んど自家に於て製作し得るの設備あり、現在所員十名職工十數名を使用し、一ヶ年間の經費約五萬圓を要すといふ。今同所の事蹟を擧ぐれば、大正七年の夏季歐米各國に於て無水アンモニアの輸出を禁止し、之れに依て本邦に於ける製氷、麥酒醸造其他冷却機使用工場の一大困難に逢着するや、同所は其の製法の研究を完成し同年八月以降無水アンモニアの製造販賣を開始せり、之れ本邦に於ける該品工業的製出の先驅たり、同八年七月下旬小型試驗合成器を製造し、壓縮機一臺を使用して水窒素混合瓦斯二百氣壓に壓縮し、一時間十立方米通過速力を以て合成試驗を開始せり、之れ蓋し本邦否東洋に於ける元素よりアンモニア合成の嚆矢なり。同九年春大型合成器及附屬裝置の製作を了し、爾來幾多の試驗研究を遂げ、今や獨國に於ける得率と大差なきの域に達し、工業的設計の基礎を爲すに足るの成績を擧ぐるに至れり、蓋し同所の如く、創設以來五ヶ年間一個人にて多額の經費を拋ち、以て國家的事業の研究に努力せるは本邦稀有の例といふ可なり。

※

化學鹽業株式會社取締役支配人、關東酸曹株式會社技師

中邨民一君

明治二十一年五月二十五日生
支那青島市佐渡町二番地
化學鹽業株式會社內

東洋の要津たる青島に鹽業を經營し、勢望隆々他を壓するの概あり、斯業の權威として著名なる化學鹽業株式會社は、取締役支配人に中邨民一君を有することに依つて更に其の盛況を招致せりと稱するも過言にあらざるべし。君は東京の人父君を中邨東一氏と謂ひ、明治二十一年五月二十五日を以て生る、幼年の頃より俊才を以て知られ、學業行爲、凡庸の徒の企及し得ざるものあり、何れも其將來に嘱望する所多大なりき明治四十二年東京高等工業學校應用化學科を卒業するや聘せられて福岡縣戸畑町なる明治專門學校助教授の任に就く、蓋し其の小中學校に在學せる間と雖も、明敏なる頭腦は遙に同窓の群を抜き、成績の優秀なるを常とせり、愈々進みて年來の宿志たる應用化學を專攻するに及びては琢磨益々加はり、其の麗朗たる本質を發揮せるに至れるなり、敎壇に後進を啓發すること數年辭して實業界に入り、深遠なる學術的研究を實際に運用して縱横に手腕を揮ふ、卽ち東京府下王子町關東酸曹株式會社技師竝に化學鹽業株式會社取締役支配人の重職に在り、今や主として後者の經營に任じ、拮据勵精内外の信任頗る篤し、同社は鹽田の經營及び、加工鹽製造輸出販賣を業とするものにして青島市佐渡町二番地に本社を置き、二百餘名の從業員を使用し、内地曹達工業家へ、工業用洗濯鹽年額一萬二千噸を供給しつゝあり、關東酸曹株式會社技師は兼任するものなれども、曩に大正五年十一月にはナイヤガラ市に渡航して電解曹達工業を研究し、大正七年歸朝して同社の爲めに建築費百萬圓を以て新工場を設立せしめたる殊功ありて同社業務發展史に逸すべからざる人物たり、思に君は尙前途春秋に富みて、飛躍の道程綽々餘りあり、幸に奮勵を望む。

※

三菱製紙株式會社

本店　兵庫縣加古郡高砂町
出張所　東京市麹町區有樂町一ノ一
電話丸ノ内七八七、七七八番
高砂工場　兵庫縣加古郡高砂町
中川工場　東京府南葛飾郡新宿町

創立　明治三十一年二月
資本金　壹千萬圓（拂込八百萬圓）
重役　取締役會長田原豊、取締役木村久壽彌太、取締役藤野德造、高砂工場長二國三樹三、中川工場長漆戸起一

本邦製紙業界の權威たる當社の沿革を繹ぬるに、明治五年英人リカビーが神戸三ノ宮に工場を創立して、專ら洋紙原料の製造に從事したるに濫觴す、同九年米人ウォルシュ之れを讓受けて工場を增設し洋紙の抄造をなすに至り後明治三十一年二月三菱家に於て現在當社高砂工場の創始なり、爾來屢々新式機械を增設し、諸般設備に改良を加へ、更に東京府中川附近に新工場を建設し、技術の進歩と共に絶えず紙質の改善竝に新紙質の創製に努力し、歐洲戰亂以來益々發展の結果、大正六年十一月組織を變更して三菱製紙株式會社を設立し以て今日に及ぶ、本社は今や資本金一千萬圓を擁し、長網抄紙機八臺、丸網抄紙機四臺の外、最近更にアートペーパー製造機械を購入し、盛に發展しつゝあり、而して此等に使用する建物坪數は二萬三千坪にして、工場敷地竝に附屬地面積十五萬坪なり。現在の製品は汎く、活版石版アルミ版等各種の印刷用紙竝に圖書筆記寫眞等に適する洋紙其の他各種の加工紙に亘り、又和紙は專ら書院紙小判紙及糊入紙にして、製造能力一月約五百萬封度に達す、此等製品は實に全國に於ける和洋紙品質の標準となるものにして聲價の首班たり。現在從業員は役員職工を合せて其の數二千名を超ゆ。當社中川工場は大正七年の建設に係り、其の裝置、機械の斬新なる、設備の整頓せる、規模宏大なる、敢て縷述を要せざるところ、一ヶ年間の生產高亦た巨額に達すといふ。亦其の從業員に對しては無賃社宅を設けて之を支給し、徒弟學校を設置して少年工の智識の啓發に勗め、慰安設備としては諸種の娯樂場を置き、無料浴場を設くる等優遇の途盡さざる無く、又時勢の影響に伴ふて賃金の增額を行ひ、白米を廉賣し、貯金制度を設け、永年勤續者を表彰する等福利增進の方法一として備はらざる無し。工場長漆戸起一氏は明治二十八年東京高等工業學校の出身にして明敏の頭腦と澄澈たる手腕と縱橫の才氣を有し、而も八面玲瓏玉の如き人格者なり、能く下僚を愛し頗る聲望ありと云ふ。寔に適材を適所に得たりと稱すべく、同社今後の隆運期して俟つべきなり。

※

造花材料製造商

八木庄助君

明治十二年五月生
東京市本所區石原町四九番地
電話墨田一六四〇番

我が國最近に於ける造花の進歩は實に驚くべきものあり、從來は其の製造能力に於ても殆んど云ふに足らざる狀態にあり、故に輸出の如きは夢想だも及ばざりし處なりしが、最近に至りては既に多額の輸出を爲し得るの盛況を現出せるのみならず、技術の進歩は直ちに天工を奪ひ、輸出工業の範圍を脱して美術工藝たる進境に向ひたり、夫れ斯の如く進歩發展を致したる所以は、實に我が八木庄助君の如き天才的工藝家の在るあつて、一意專心斯業の爲めに其の發達を圖りたるに外ならず、蓋し君の如きは眞に斯界の恩人と稱すべきなり、君は東京の人、十六歲の時不幸にして早くも嚴君を喪ひ、爾來孤影漂然各地に轉々して具さに辛酸を味ひ、後ち志を投機界に伸ばし、一躍萬金の利を得て、世の風雲に乘ぜんと屢々該場裡に出入し大いに爲す所あらんとしたるも、時運未だ到らず幾度か失敗を重ねたり、偶々明治四十一年君廿四歲の頃、一朝飜然悟る所あり、卽斯業の不眞面目なるを知り斷じて再び足を入れず、次て日本橋區横山町なる天野卯兵衛氏の商店に身を投ず、當時天野商店は本邦造花界の一權威者として取引の多大なると業務の繁榮なるとは斯界稀に見る所なりき、而して君は幼少より手工の天才的にして又非凡の技能を有するが故に、天野氏の下に入店以來其の精勵勤勉は君が技術をして益々發揮せしめ、曾つて內國勸業博覽會開催に際し、其製作品花蕚、蕾を出品して一等賞を授與せられたるが如きは、君が作品の如何に優秀なるかを證するに足るのみならず、其の技術の巧妙なるは既に一般江湖の認むる所となれり、大正三年不幸にして天野氏物故せらるゝに當り、君は止むなく同店を去りて獨力工場を本所區石原町に設け、不屈不撓の精神を以て造花原料の製作に日夜奮闘に奮闘を重ねたりしかば、終に今日の隆昌を招きたるに止まらず、現時は全く輸入を防止し、盛んに米國、濠洲其他海外各地に輸出せらるゝに至れり、之れ君が多年斯界に盡したる功績にして玆に特筆大書するを障らざるなり、君年齒不惑を超ゆる僅かに五歲、其の今後に於ける君が活躍こそ、眞に刮目に値すべきものあらん。

※

福井精練株式會社第六工場主任

池田與市君

明治二十三年生
住宅　福井縣今立郡鯖江町
工場　同　上

福井縣の織物は京都其他と共に盛名あり幾多大小の工場軒を竝ぶる中に就て代表的地位を占むるものを物色すれば、先づ指を福井精練株式會社に屈すべし、同社は規模堂々設備整然として技術部に優秀なる手腕家を網羅せり、卽ち第六工場主任たる池田與市君の如き其の一人にして、同社重要人材中の錚々たるもの、君は福井縣の人、縣立福井中學校を經て名古屋高等工業學校に學び、紡織科を專攻して大正三年其の業を卒る、成績優良、直ちに聘せられて同社技師となれり、爾來精勵其の職に任じ、深遠なる學識を傾倒して研究を進め、成績觀るべきものあり、君の献策に基きて改善を試み優良なる結果を收めたること枚擧に遑なく次第に重きを爲して第六工場主任の要職に進む、君は啻に同社に於て衆望を擔ふこと斯くの如く多大なるのみならず、福井縣下の各機業家より信賴さるゝこと亦厚く、各地より君の指示を求むるもの尠からずと云ふ、思ふに福井縣の機業は世に定評あり、多年の歷史と當業者苦心の結晶とは、今日の聲價を贏ち得たるものにして、尙年と共に進歩發展して止まざるの勢ひにありと雖も、時勢の進展、生活の改善嗜好の變遷等に順應して、製產額より論ずるも品質より考ふるも改良を加ふべきものあるや必せり停滯は如何なる場合に於ても退歩となる、此の意味に於て君の如き有爲の士の奮勵して、斯界の爲めに貢献すべきもの多々あり君今や研鑽漸く深く經驗亦豊富にして然かも年齒壯齡、活動の最好期に入らんとす、吾人が多大の期待を寄する所以なり、天資敏直にして純眞一度打てば才華煥發して物の響に應ずるが如し、將來の大成を切望して止まず。君夫れ斯界の爲めに自愛せ。

大西染工場技師

尾林茂樹君

明治三十年生

住所　京都市下京區東堀川四條下ル大西本店
工場　京都市下京區中堂寺粟町

染色製織を以て天下に盛名を肆にする京都にありて、綿布、金巾、モスリン等の機械捺染を以て一流の稱あるは大西染工場なりとす、技師尾林茂樹君は山梨縣北巨摩郡の出身、尾林甚吉氏の長男たり、家は代々農を業とし、堅實なる農家として近隣に知らる、君は縣立甲府中學校を卒業するや、將來の志望を技術家に置き、桐生高等工業學校色染科に學び、大正十年優等の成績を以て其の門を出で聘せられて大西染工場の技師となれり、同工場は京都市に於ても屈指のものにして、規模の宏大と設備の完全とを以て斯界に雄飛し、多數の從業員を擁して製産に忙殺せられつゝあり、抑も君が學業を卒ると共に此の大工場に聘せられたる所以のものは、君の人物を如實に立證して餘りありと云ふべし、君は幼少より天禀凡ならず、待に好學心に富み、何事に對しても研究的態度を以て接するの風あり、小中學校に於て既に然り、殊に自ら志望する所の色染學を專攻するに及びては、愈々其の特長明白となり、同窓の間に喧傳せらるゝと共に又深く推服せられて重きを爲せり、從つて蘊蓄尋常にあらず、獨特の研究を有し、其の前途に對して多大の嘱望を寄せられたり、大西染工場は眞に適材を得たりと云ふべく、今や君は全幅の精力を傾注して勵精しつゝあり、就職後尚日淺きを以て赫々たる事實の徵すべきものなしと雖も、既に君の手腕は隨所に發揮せられて、上下の信頼益々淺からず、同工場に於ける有數の人材として認めらる、將來君の努力に待ちて改善を要すべきもの多々あらん、敢て事功を急がず、漸を追ふて實効を期せんとする君の周到なる用意は敬服に値ひす、君尚而立に滿たず、甚だ春秋に富めり、其大成期して待べきにあらずや。

※

大阪染工合資會社技師

大和時次君

明治二十九年生

住所　大阪染工合資會社内
工場　大阪市外豐崎町

時勢は刻々進展し人材は新陳代謝す、我國何れの方面を通觀するも、新進の人物輩出して活躍するの狀は、亦一代の盛觀ならずとせず、殊に技術家の如きは商工業の急激なる進歩に伴ひ、單に實技を主とする舊型の人物を要求するの風漸く衰へ、實際的手腕と共に科學の權威ある知識を有する技術家を要望するの聲年と共に顯著なるは明白にあらずや、我大和時次君の如き技術家としては極めて新進鋒々の士たり、君は群馬縣佐波郡の產、家は代々農業を營みて地方の豪家たり、由來群馬縣は所謂兩毛織物の名產地なると共に、色染紡織等織物に關する學科を中心とする桐生高等工業學校の創設せらるゝや、俄かに斯業の志望者を增加し、青年の相爭ひて同校に學ぶもの少からず、君も亦學を東都に負ひて東京中學校の課程を卒へ進んで桐生高等工業學校に入りて色染科を專攻し、大正十一年優等の成績を以て其の業を卒る、直ちに招かれて同社技師に任じ其の蘊蓄を傾倒して社業に力む明晰なる頭腦と敏活なる手腕とは大に内外の推重する所にして、着々實績の觀るべきものあり、更らに多年勤續するに於ては剖目に値ひする記錄を示すべく期待せらる、君は元來新井氏の出なれども大和家に入りて現姓を繼ぐ、資性溫和にして恭謙の態度を具へ、眞に尊敬すべき少壯技術家たり、思ふに染色界は歐洲大戰の結果として、測知すべからざる發展を爲し、染料發見の根

本的研究に染色の技術的發明に未曾有の新事實を展開せりと雖も、未だ以て滿足すべきにあらざらん、新進有爲の士に依りて開拓せらるべき餘地綽々として限りなし、君の如き年齒尚若く、前途春秋に富むの秀才に待つ所極めて多し、望むらくは自愛せられよ。

※

大西染工場技師

星野武三君

明治三十一年生

本店　京都市下京區東堀川四條下ル
工場　同市下京區中堂寺田町

京都は染色製織に於ては天下に盛名を專らにす、此地にありて綿布、金巾、モスリン等の機械捺染を主として、一方の覇者として知らるゝ大西染工場に技師たる星野武三君は、新潟縣南蒲原郡の人、家は代々農を營みて地方の名家たりしも、故嚴君は常に工業の國家存立上忽せにすべからざるを說き深甚なる趣味を以て其の趨勢に留意し、識見時流を擯んずるものあり、君亦其の遺志を體し、新潟縣立三條中學校を卒業し、次て桐生高等工業學校に入り、大正十一年を以て其の色染科を出づ、成績優秀同窓の間に重んぜらる、聘せられて大西染工場の技師に就職するや、同學一年の先輩たる尾林茂樹氏既に同工場技師として亦同僚たり、爾來相携へて業務に勵精し、着々其の手腕を發揮しつゝあり、思ふに時勢は刻々に進歩し人材は新陳代謝す、我が國の政治學術實業、何れの方面を通觀するも新進の人物を要求すること頗る切なり、就中、技術家の如きは商工業の急速なる進歩に伴ひ、單に實技の一方に偏する舊型の人物よりは、實際的手腕に加ふるに科學の權威を具へたる知識を有する技術家を要望するの聲、年と共に盛なるは顯著なる事實にあらずや、然り而して染色界にありては、歐洲大戰の結果として、測知すべからざる發展を爲し染料發見の根本的研究に、染色の技術的發明に、未曾有の盛觀を極むと雖も、未だ以て滿足すべきにあらざらん、新進有爲の士に依りて開拓せらるべき餘地綽々として際涯なからんとす、我が星野武三君の如き、前途春秋に富める秀才を待ちて大成せらるべきのみ、君資性敦厚にして情誼に厚く、然かも自ら持すること極めて嚴、技術家として稀有の人格者たり、想ふに君や年齒尚少壯にして前途春海の如き春秋に富む、其將來ある前途は斯界の爲めに大に奮鬪を祈りて止まざる也。

日本印刷インキ株式會社專務取締役社長
松村工業場主

松村久太君

慶應元年生

東京府北豐島郡巢鴨町西巢鴨

多年の經驗に基き精良なる印刷インキを製造して、印刷界の利便を圖り嘖々の好評ある日本印刷インキ株式會社は現社長松村久太君の創業せる所なり、君は山口縣の人、篤介氏の長男にして慶應元年を以て生る、明治十三年の頃志を立てゝ上京し、印刷局製圖部に入り、職務に勵精して勤續すること二十餘年、次第に累進して技師となり、有要の材として重きを爲せり、蓋し其の間に於ける君の熱誠は恪勤して遺憾なく職責を盡すと共に、精細なる研究を生み、其の結果は印刷用インキに於て前人未發の卓見を招き、幾多の新案を有するに至れり、明治三十五年職を退くと共に、東京市本所區横網町に印刷インキ及び顏料製造の業務を開始し、多年の經驗は到底他の模倣し得ざる優良なる製品を得て、之を外國製品に比較するも毫も遜色なきのみか、却つて彼れを凌駕するものありとせられ、需要翕然として集注し、速に工場を擴張せざるべからざるの機運に達す、經營二年、卅七年には東

京府下瀧の川町に規模を大にして工場を新設せるも、之れ亦忽ち狹小を告ぐるに至り到底殺到する所の需要に應じ得ざるものあり、即ち資本金十五萬圓を以て日本印刷インキ株式會社を創立す、推されて專務取締役社長となり、一切の經營に任じて業況益々奮ひ、依然として發展の勢ひを持續しつゝあり、之れ實に君の手腕に因由する所、其の効績大なりと云ふべし、君は別に感ずる所あり、大正二年松村工業所を東京府下巣鴨町に新設し、圓熟せる技能を發揮して斯界に貢献せるに、之れ亦豫想外の歡迎を受け、同十一年に至り現住所たる府下西巣鴨町に大工場を新設せり、君資性恬淡にして溫容玉の如く、君子人の風格あり、接する者をして其德に懷かしむ、事業の駸々乎として進歩する亦故なきに非ずと云ふべし。

創立　明治二十九年十二月
資本金　二千萬圓（千五百萬圓拂込）
營業課目　毛織物に關する一切の業務
重役　取締役社長川西清兵衛、常務取締役谷江長、取締役有馬市太郎、同小曾部喜一郎、同澤田清兵衛、同松方幸次郎、同瀧川辨三、監査役木谷吉二郎、同秋山忠直、同松本鐵太郎

※ 日本毛織株式會社

本社　神戸市西出町六百九十一番地
電話本局　七二〇、七六、七元番
東京支店　東京市日本橋區上槇町廿番地
電話本局一九九六番
工場　兵庫縣加古川町加古川工場
電話加古川一番
兵庫縣姬路市吳服町姬路工場
電話姬路一一番
岐阜縣岐阜市鶴田町岐阜工場
電話岐阜七五〇番
兵庫縣印南郡印南工場

我が國に於ける毛織界を代表して權威的地位にあるは日本毛織株式會社なり、二千萬圓の大資本を有し、重役は何れも實業界錚々の名流を網羅して、其の資質に於て完全無缺たり、宜なる哉、現に一千五十七萬餘圓の積立金を擁し、利益配當優に年四割を突破せんとするの確實と盛況とを示すことや創業以來、既に相當の年所を經過し、多年の經驗に加ふると共に、巧みに機宜の措置を執りて設備の完成を圖り、製產の增加品質の向上年と共に進歩するを以て、業績發展の一路を辿りて動かざるは自然の理なり四箇の工場には技師支配人として、西村菊二郎、櫻井靖、小倉喜一、片岡元彌氏等の斯界有數なる技術家を聘し、原毛解析、洗毛調合、染色乾毛、製絲整紡、紡毛、縮絨洗絨、製織、起毛、光澤、經剪、梳毛、剪紡、織布の諸裝置より整理、仕上に至るまで、熟練せる從業員を督勵して、最新精巧なる機械を利用し、遺憾なく行はれつゝあり、其の販路の單に內地に止らず、海外にも需要を增加せるは、決して故なきにあらざるなり、思ふに今後の毛織界は頗る多事同社の如き斯界の覇者が敢然努力せざるべからざるもの鮮少にあらざらん、從つて其の前途は益々多望なり。

※ 宮內幸太郎君

東京美術學校講師、東京寫眞師組合副組長
明治五年十月五日生
東京市本郷區湯島天神町三百二番地
電話下谷七四二番

本邦寫眞界の泰斗にして、其の發達の爲めに貢献せる効績顯著なるは宮內幸太郎君なり、君の聲譽は既に世界的に喧傳せられ、名手として嘖々たる好評を有す、君は千葉縣海上郡銚子町に生れ、太平洋の澎湃として際涯なき怒濤の響きに親しみ、大自然の微妙なる偉力は君をして美術家たらしむるに適せる環境なりき、多年の宿望に因り、明治三十一年上京して斯界の先輩中島精一郎氏の門に入り寫眞の研究に從ふ、夙に斯界に志を存せるを以て、翌三十三年早くも其の一般技術に通じ、十二月獨立して現所に開業し今日に及べり、明治三十三年斯業の發達を計り即ち發起者となりて東洋寫眞會を創立す、爾來內に研鑽に力むると共に出でゝは公共の爲めに盡瘁し、東洋寫眞會第五回內國勸業博覽會、第二回東京美術及美術工藝展覽會、東京勸業展覽會、納涼博覽會、第二回及び第三回東京勸業展覽會、大正博覽會等に審査員鑑別委員審査官たり、其の功勞により木盃又は銀盃、其の他の賞與を受たること尠からず、明治三十八年二月には帝國大學工科大學造船學教室學術研究用として寫眞を、大正三年六月には東京美術學校參考用として石膏像二體を寄附し、之れ亦其の筋より篤志を表彰せられたり、先に明治四十五年六月斯道視察の爲めに歐米を漫遊し大正元年末を以て歸朝す、其の間大に得る所あり、歸來蘊蓄を發表して同業を稗益せるもの多し、大正四年東京美術學校講師を囑託せられ、學生の爲めに斯道の蘊奧を講じつゝあり、又東京寫眞師組合副組長に推され勤續既に十餘年に達して努力を惜まず、誠に君の如きは斯界の第一人者として尊敬するに値ひすべく、其閱歷と効績とは赫々たる光彩を放ちつゝありと云ふべし、近來斯道の普及進歩特に著しきものあり、蓋し君の力與つて大なりと謂ふべし。

相川製藥所主

相川利三郎君

東京府豐多摩郡中野町大字中野一〇九三
工場同上一二八一番地

獨力獨歩、製藥所を經營して業況隆昌を極め巨額なる資本を擁し、堂々たる規模を有する同業の大會社と比肩して敢て遜色なく殊に製品の確實なるを以て知らるゝ相川利三郎君の如きは、亦斯界の逸足と稱すべきなり、相川製藥所の創業は明治三十九年に係り、多くの同業者が殆んど歐洲大戰中の自給策より勃興せるものに比して、一歩を先んじたる所あり、爾來君の苦心經營に依りて今日の盛況を築けるもの、先づ製造品目を一瞥せんか、酸類にありては、純鹽酸工業用白鹽酸、純燐酸及び濃燐酸あり、アルカリ類にありては結晶亞硫酸曹達及び各種鹽類にありてはアンモニア水各種あり無水亞硫酸曹達、純鹽化アンモニア各種、純クロールカルチウ各種、最純炭酸カリウム各種、純硫酸カリウム、純重硫酸カリウム各種あり、有機物日本藥局方品スルフォナール、純醋酸カリウム各種あり、頗る多方面に亘り、何れも品質優秀にして定評あり、君の方針とする所は、敢て製產の多量を誇らんとすることなく、寧ろ確實なる品質を得んとするに存り、これ藥劑本業の性質より考ふるも、全く然るべき次第にして、製藥業者に缺くべからざる第一の要件たり、此の故に今や相川製藥所の名聲は斯界の標準的價値を帶び、何れも爭ふてこれを歡迎しつゝあり、之れ君が徒らに商賣の常套手段たる術策を用ひず、品質本位主義を執りて正々の陣を張り、最後の勝利を期せるに依るものにして、其の此處に到達するまでの奮闘は到底容易の業にあらず、薄志弱行の徒の企及し得ざるや言を要せず、然かも君の熱誠は今日の成功を以て尙滿足せりと爲さず、愈々努力を續けつゝあり、蓋し將來の發展は測り知る可らざるものあらん。

※ 上月秀太郎君

ケーデー組製作所主
東京市本所區小梅瓦町二十八番地
電話墨田長一二九七番

我が工業界が幼稚なる狀態にありとは等しく先覺者の歎ずる所にして、彼の歐米先進國に比ぶれば、尙遺憾の點多々あるは元より明か也、然れども最近十數年間に於ける商工業の發展は驚くべきものあり、特に歐洲大戰の刺戟を受けて長足なる進歩を示し漸次に世界的活動に移りつゝあり、從來原

料を安價に輸出して、其の加工品を高價に逆輸入するが如き弊は漸次に其の後を絶ち優秀なる製品を各國の市場に供給するに至れり、之れ蓋し平和克復と共に、國際的經濟戰の激烈なるべきを慮り、斯業者の奮起せるを以てなり、見るべし官邊の施設なると民間の事業たるとを問はず、大に緊張しつゝあるとを、飲料水製造機械を製作販賣するケーラー組製作所の如き、未だ工業界の第一人者として特筆すべき規模を有せざれども場主上月秀太郎君の熱誠にして努力を惜まざるは、我工業界を振興する上に與つて多大の貢献を爲せるもの也、君は東京の產、夙に東京高等工業學校に學び、機械科を專攻して造詣淺からず、卒業の後、日本皮革株式會社に入りて皮革製作に從事せるも、年來の宿望は機械の製作にあり、飲料水製造機械に就て工夫を凝らし、幾多の實驗を重ねて苦心慘憺、遂に獨特の裝置を有するものを創案し、即獨立してケーラー組製作所を設け盛んに製作しつゝあり、今や販路も大に擴張せられ、多數の從業員を擁して製造能率も進み、販賣高巨額を算するに至れり、君資性誠實奮鬪を辭することなく、如何なる困苦に遭遇するも意氣旺盛、未だ嘗て退避的態度を執りたることなし、今日の成功も亦故ありと云ふべきなり、思ふに君の如き堅實なる士が斯界に存るは、其の發達の爲めに大に意を强うするに足ると云ふべし、願くは益々奮鬪して所期の成果を結ばれんことを敢て囑望して止まざる也。

※

小槌印完全障子紙製造元南商店

柴田三雄君

明治二十七年九月二十五日生

東京市下谷區竹町十二番地七號
電話下谷一一一五番
東京府下高田町
電話番町四三三七番
東京府下落合村
電話番町三八九二番
第一工場
第二工場

我が國從來の建築に於ては防寒の意味に於ても採光の方便としても紙障子が缺くべからざる機關たりしも、紙質は概ね薄弱にして永久の使用に堪へず、且つ水に對しては殆んど抵抗力に缺けるの缺點あり、甚だ遺憾とする所なりしが、小槌印完全障子紙の製造せらるゝに及びて其の弊を除去するに至れり、同紙の創案者たる南商店主柴田三雄君は、茨城縣猿島郡古河町の人、明治二十七年九月二十五日を以て生る、栃木縣立工業學校を卒業し、大正二年の頃上京し、早稲田及び慶應の各大學等に學び、後工業界に入れるも、常に我國の家庭生活に密接の關係ありて、然かも不完全極まる障子紙の改善に就て思ひを潜め、苦心を重ねたるが遂に成案を得、初め某會社に委囑して製作せしめたるも、自ら工場を經營するの至便なるを思ひ、大正十一年より二箇所に工場を新設し、盛んに製出しつゝあり、蓋し其の初めは決して完璧のものにあらざりしも、改善に次ぐに改善を以てし、今日の良質を得たるものにして、在來の耐水紙と稱するものの缺陷を除去し、日光に燒けることなく、酸化風化することもなく、縱横共に强靭、特殊の臭氣を帶びず、全く獨特の抄造法に依るものにして、本邦紙界の革新とも稱すべきなり、而して障子紙以外、臭服用包紙、各種荷造用紙、軍用パン包裝紙、生牛肉包紙、魚肉各種食料品包紙、紙ハンカチーフ、助產用紙等あり、何れも小槌印の登錄商標を付し、好評嘖々として販路は時を追ふて擴張され、內地一般臺灣、朝鮮、滿洲の各方面に供給し業務愈々振ひつゝあり。

織物製造業五十嵐工場主任

花岡德一君

明治二十六年生

群馬縣桐生市本町六丁目二九五番地
電話桐生二二番

關東の織物產地たる桐生に於て、輸出織物製造を專門と爲し、其の技術の優秀なると製品の卓越せるを以て、斯界に定評を有する五十嵐工場は、場主多年の苦心に依りて動すべからざる今日の地盤を開拓し、盛況を贏ち得たるものなれども、現に同工場內外の要務を双肩に負ひ、經營の方寸、亦殆んど其の劃策に出づるの觀あるが如き、重要なる人材の存するを忘るべからず、之れ花岡德一君なりとす、君は福岡縣三池に呱々の聲を擧げ、後東北に移りて仙臺中學校に學び、更に桐生高等工業學校に入れるの人、幼少より俊敏、凡庸の資にあらざるは四周の認たる所、小學校よりは中學校、中學校よりは專門學校と次第に進むに從ひて其の鋭鋒を露し、光彩陸離たるものあり、桐生高等工業學校の紡織部に在るや、勉勵同學に超え然かも才華煥發せるを以て、忽ち同窓の間に重きを爲せり、大正十年其の業を卒るや、直ちに迎へられて五十嵐工場に入る、抑も君の同場に招かれたる所以は單に一の技術家として其の優秀なる手腕を認められたるが故にあらず、性格、學識、頗る場主の理想に合致し、將來五十嵐家の養嗣子として後圖を托するに足る人材を物色中、適々君其の選に當りたるものにして、近き將來に於て五十嵐工場主たるべきなり君入場以來、現主を輔けて努力精勵、百般の施設に參劃し、其の專攻せる紡織技術の方面は言ふまでもなく、經營事務に於ても最善を盡せるを以て、從來の聲譽に加へて更に一層の隆昌を呈するに至れり、君未だ滿を持して放たざるの狀にあれども、一朝機熟するや工場の擴張を試み、最新の設備を施し、大飛躍を爲さんとするの雄志勃々たり、其の壯觀想ふべきにあらずや、君の前途に對して多大の祝福を寄するもの、豈獨り吾人のみと云はんや。

※

シャツ及カラ類製造販賣

大和屋シャツ店

本店 横濱市神天町通一丁目六番地
分店 東京市京橋區銀座通り
同 神田區小川町通り

シャツと云へば直ちに大和屋を聯想し、大和屋と云へば又立所にシャツに想到す、爾く大和屋シャツ店は世人に知られ、人口に膾炙す、蓋し其の製品の優美高尙、堅牢無比なるを以てなり、抑も同店は明治九年の創業にしてシャツ及びカラ製造に就ては本邦第一位に推さる、本店は横濱市にあり、分店は東京及び神戸の各市にあり、本店に於ては專ら輸出を掌り、東京市の二分店に於ては小賣を營み、神戸市には小賣及び卸の各部あり、製造は横濱及び神戸の二大工場に於て、優秀なる技術家と最新の機械とを備へて之れに當る、店主石川淸右衞門君は横濱に錚々たる紳商として知られ、斯界に重きを爲せり、今や獨り日本內地に止らず、其の販路は海外に及び、斯界の代表的巨商たる地位を占め、繁榮比類なしと雖も其の今日に到れる苦心は決して尠からず、多年奮鬪の結果に依るものにして、啻に一時の幸運を僥倖せるものにあらざるなり、而して君の爲めに祝すべきは、其の令息何れも秀才の譽あり、長次男ともに君を輔け家業に從ひて勵精し、少壯實業家として令聞に富む、三男文藝君は大正十年桐生高等工業學校紡織科を卒業し、一年志願兵として軍務に服し、大正十一年十二月除隊せられて家に歸るや、又家業に力めて他念なし年齒二十有四歲、やがて嚴君及び令兄等と共に錚々の名を馳するに至るべきなり、思

ふに大和屋シャツ店の營業品は、文化の進歩に伴ひて益々其の需要を高むるものにして、優秀なる製品の供給を忘却せざる限り發展極りなきを保證すべし、一家の秀才轡を並べて陣頭に立ち、商戰に從ひて倦まざること斯くの如きに於ては、其の繁榮は疑ふべからざるなり、吾人は同店の規模愈々擴張せられて、斯業獨歩の雄視を維持すること永久なるべきを信ぜんとす。

※

山保毛織物株式會社技師

小泉達君

本社工場　栃木縣足利市今福
電話足利五〇、一〇三五番

山保毛織物株式會社は栃木縣に於ける斯界の雄者たるのみならず、其の製品の優良確實なるを以て普く社會に知らる、同社が斯くの如く名望を馳するに至りたるは、幹部重役の經營宜しきに適ひ、社員一同の協力せる結果に外ならずと雖も、技術部に職を奉ずる技師諸氏に俊材を網羅せるも、亦主なる原因たらずんばあるべからず、就中染色部に主任技師たる小泉達君の如きは、斯界稀れに觀る秀才として好評嘖々たるものあり、君は福井縣丹生郡の產、小泉教太郎氏の長男、縣立武生中學校を卒業して笈を桐生高等工業學校に負ひ、色染科に學びて大正九年拔群の成績を以て其の闈を出づ、直ちに大阪市内外化學物產株式會社に技師として聘せられ、留ること約一年後山保毛織物株式會社の懇望する所となりて、染色部に主任技師たり、未だ而立に達すること遠き少壯の士にして、其の淵源たる英氣は多年研究せる學識を自在に活用せしめ、優越せる技術を示しつゝあり、蓋し毛織物の需要は國民の生活が漸次に向上さるゝと共に益々多きを加ふるは明白なる事實なり、而して開拓すべき領域の無盡藏なるも、亦確實なる事實なり、其の染色の部に於て君の敏腕に俟らて改善すべきもの決して尠しとせず、君の熱心にして研究的態度の强烈なる、必ずや斯界の面目を一新するに至るべく、同社が多大の期待を寄するも亦此の故に外ならざるなり、現に部員を督して新たなる實驗を試みつゝあるもの多々あり、其の結果の發表さるゝに於ては、廣く斯界を稗益すると共に絕大なる稱讃を受くべきなり、眞に君の如きは斯界の偉材として前途囑望するに餘りありと云ふべし、思ふに小泉家は福井縣丹生郡地方に於ける素封家にして、其の名全縣に著聞すと聞く、君の如きは名門の出として家名を辱しめざるのみか、進んで其の光彩を增さしむるものと云ふべし。

※

廣毛織織株式會社技師

新井幸長君

群馬縣桐生市本町四丁目

桐生織物界に於て數ふるに遑非ざる多くの工場中其の業況の殷賑にして設備の模範として知らるゝもの、兩毛整織株式會社の右に出づるものなし、誠に斯界の精英たり、之れ元より同社多年の信用と、當事者の經營機宜に適ひたる結果に外ならずと雖も、然かも優秀なる技術家を拉致して充分に其の手腕を發揮せしめ、他の企及し得ざる製品を市場に出し、品質の競爭に於て勝利を占めたるを重要なる原因となすべし、現に紡織部に主任技師たる新井幸長君の如き、斯界に於ける新進の逸材として重きを爲しつゝあり、君は埼玉縣の人、由來同縣に於ても織物業は最近著しき發達を爲し、其の秩父銘仙の如き實用的價値の豐富なるを以て稱讃せられ、都鄙需要者は急激に增加するの狀況にあり、君が織物技術家たるの志望を起したるは、其の緣由淺からずと云ふべし、埼玉縣立熊谷中學校を卒業するや、桐生高等工業學校紡織科に學び、在學中異常の勉勵を以て研究に力め、造詣見るべきものあり、校長教授も深く其の將來に囑望する所ありたるが、大正八年優等の成績を以て其の業を卒ると共に、果然兩毛整織株式會社に迎へられたり、蓋し同社は前述の如く、桐生織物界に覇者たる權威を有し、同社に技術家たることは即ち其の人の學識手腕を裏書するものなり、現に紡織部主任技師たる要職に在りて、令聞嘖々內外の信望頗る篤し、資性溫厚態度沈着、克く多數の部員を統裁して社業に貢獻する所甚大なり、適材を適所に配したるものと云ふべし、今や兩毛織物界は驚くべき發展を爲し、本邦重要物產中の重位を占めんとするの勢ひにあり、今後其の製產能率に於て、其の品質改善に於て、努力を要するものあるや尠からず、少壯にして斯界の秀才を以て目せらるゝ君の如き、大に期待さるゝは素より怪しむに足らず、願くば大に奮へ。

※

鐵道省技師

張忠一君

東京府下入新井町新井宿一四七八番地

我が國の鐵道は漸次に進歩發達して、其の延長より考ふるも、其の分布より觀るも、四通八達せるの感あるは事實なり、然れども歐米各國の現狀と比較するに於ては、更に大に努力を要するや必せり、運輸交通並に國防の見地に立ちて論ずるも、我が鐵道が一層改善普及せられて國利民福を增進せしめざるべからざるは頗る明白なる事實なりとす、此の故に當路は其の各般の施設に就て常に精細なる研究調査を試み、着々として面目を新たならしめつゝあるは多とすべし、即ち鐵道の根本要件たる技術に關しては英才を網羅し、政策の運用と相俟ちて其の進歩を速かならしむ、我が張忠一君の如き亦同省に於ける俊秀なる技師として重きを爲せるも故なきにあらず、君は山口縣の人、幼少の頃より秀才の譽れあり、將來を期待せるもの啻に父母兄弟のみにあらざりき、小中學校の課程を經て高等學校時代に至るや、其の思索の緻密にして研究心の旺盛なるは、同學の推稱する所となり、更に東京帝國大學理科大學に入り、應用化學科を專攻するに及びて愈々其の錚鋩を露し研學に忠實なると共に、常に獨創的發見に力め、眞に科學者の態度として異彩を放ちたりき、明治四十一年優等の成績を以て、其の業を卒るや直ちに鐵道省に職を奉じ、技師に任ぜられ大臣官房研究所に在りて專ら鐵道關係化學的方面の研究を擔任し、孜々勵精して倦む所を知らず、而して君の天賦の美點たる研究的頭腦は益々其の特質を發揮して我が鐵道事業上に貢獻する所甚大なり、殊に君は科學の通弊とする偏狹自恃の風なく快活圓滿、何人に對しても墻壁を設けず、好個の人格者として景慕せらる、蓋し我鐵道は年々歲々進歩しつゝありと雖も尙改善の餘地なきにあらざるは容易に世の首肯する所、君の努力に待つもの多々あるべく、吾人は君の前途に對して多大の期待を寄するものなり。

※

川島善右衛門君

明治三十三年生
群馬縣新田郡生品村字田村一二八番地

群馬縣は關東の織物產地として著名なるのみならず、今や其の名聲は世界的に喧傳せられ、製產額は年と共に增加し、品質は漸次向上を來して優秀なる製品を出しつゝあることは世の知る所なり、殊に織物色染學科を中心とする桐生高等工業學校の創設せられてより、俄に其の進歩發達を早からしめ、斯界代表的工場の新設、若くは新進俊秀なる技術家の輩出等、驚嘆に値ひするものなくんばあらず、川島善右衛門君は群馬縣下に於ても有名なる豪農にして且つ名門

累代秀才を出すを以て近郷信望の標的たる川島家富主米三郎氏の次男たり、縣立太田中學校を卒業するや、桐生高等工業學校に入り、紡織科を專攻して成績優等、大正十年を以て其の業を卒れり、資性英敏、頭腦の明晰なるに加ふるに、身體强健、學窓を出づるや直に一年志願兵として軍務に服し大正十一年十二月除隊となる、此處に於てか徐ろに計劃を樹て、新に壯大なる規模の下に織物工場を創設し、多年研究せる結果を實地に運用すべく、着々各般の準備を進捗せしめつゝあり、近く之れが實現するに於ては群馬織物界に新偉力を加ふるに至るべきなり、嚴父米三郎氏當年五十八歲累代の勢力に加ふるに人格高雅、頗る德望家として重ぜられ、推されて生品村會議員田村區長等の名譽職にあり、祖父五郎氏も米壽を超へて尙甚だ健全、令兄仁一氏は廿九歲夙に前橋師範學校を卒業して國民教育に從事し、鄕校生品村小學校に於て子弟の薰陶に努力し、少壯教育家として令聞に富む、一門繁榮斯くの如く四隣の尊信淺からざるに於て、君が織物工場を經營するの曉には、其の隆運は期して俟つべく、將來愈々多望なりと云ふべし、君は當年未だ二十四歲の少壯秀才、前途の大成刮目すべきなり幸に今後奮鬪せられんことを。

☒

高橋染工場

埼玉縣忍町行田
電話忍三一一番

染色整理業

足袋の名產地として知られたる埼玉縣行田に於て、鷄群の一鶴、萬綠叢中の紅一點とも稱すべきか、染色整理を業として好評を博せるは高橋染工場なりとす、同工場は其の創業五十年前にして明治の初年にあり、爾來年を追ふて盛大を爲し、遂に同地方に於ける代表的工場たるの地位を占むるに至れるもの、初め裏地及び着尺物の染色加工を專門に營み、製品の優秀なるを以て着々得意を增加せしめ、然かも時勢の要求は更に業務を擴張するの必要に迫らしめ、數年前より之れに加ふるに綿布捺染及びコールテンの染色を開始したるが、千代更紗、裏地、中形、飛白等の染色に於ては、意匠の斬新なる、色彩配合の高尙なる、到底他の模倣し得ざる特色を發揮し、遠近之を喧傳して注文殺到するの盛況を來せり、工場主高橋佐市君は、當年四十二歲の壯齡にして七人の兄弟あり、次弟及び三弟は協力相携へて縣下熊谷町に設置せる分工場を經營し、之れ亦た本工場に匹敵するの業績を示しつゝあり、四弟敏春氏廿四歲、大正十一年桐生高等工業學校色染科の業を卒り、君を輔けて技術に關する全般の要務を督し、其の秀拔なる技能を揮ひ、製品は年と共に改善向上せられ、面目新たなるもの存す、蓋し君は幼少の頃より秀才として鄕黨に認められ、小中學校の如きも優良なる成績を以て其の課程を卒り、殊に桐生高等工業學校在學中に於ては同學に範を示すものありたり、思ふに高橋染工場が今日の如き隆昌を招致せるは、創業以來數十年の苦心を累ね、經營機宜に適ひたるに因るものなれども、當主佐市君を中心として多くの兄弟心を協せ、事業に滿身の努力を傾注せる結果なるべく、思ふに一家團結して事業の發展を圖るに於ては、前途何物の障碍かあらん、將來同工場の益々繁榮を極むべきは、期して俟つべきなり。

☒

石藤豐太君

日本火藥製造株式會社取締役兼技師長
海軍大技士從五位勳四等工學博士

安政六年五月生
東京市小石川區高田老松町三十七番地

我が國に於ける火藥製造の權威として、名

聲內外に嘖々たるは工學博士石藤豐太君なりとす、君が斯界に對する効績の顯著なるは永く海軍に身を投じて、火藥製造の爲めに貢獻せるに徵しても知り得べし、抑も君は廣島縣の人、石藤喜七郎氏の三男にして安政六年五月を以て生る、幼より學を好み殊に研究心に富み、細微なる事象と雖も窮盡せずんば止まざるの慨あり、鄕黨をして其の將來を囑望せしめたり、進んで東京帝國大學理學部に入り、化學科を專攻して優秀なる成績を收め明治十二年其の業を卒はれり、當時明治維新後日尙淺く、且つ十年西南の亂等あり、社會の序次整はず、物情騷然たる時代に於て、既に化學の研究に沒頭したる君は、識見亦卓拔なりと謂ふべし卒業後海軍に入り、漸次に累進して海軍造兵大技士に任ぜらる、君が軍籍に在るの間は、恪勤精勵、其の專門の學術を以て君國に奉仕するの至誠は一日も忽緖に附せず、軍用火藥の改善に腐心し、屢々前人未曾有の發見を爲して我が海軍の一偉力たりき、數次の戰爭に際しては粉骨碎身、兵器彈藥の供給に鞅掌して、克く戰鬪力の充實を全からしめ、殊勳赫々たるものあり、而して多年研究の結果は、遂に明治三十二年三月工學博士の學位を受くるに至れり、爰に於て君は武功文勳併せ得たるものにして、眞に人生の大快事と云ふべきなり、後軍籍を退き、日本火藥製造株式會社に聘せられて取締役兼技師長たり、蓋し同社は唯一無二の適材を得たりとすべく、其の製品が到底他の企及し能はざる廉價を維持し、殆んど斯界獨步の觀あるも亦故なきにあらざるなり、經歷學識共に君の如きは斯界の明星とも稱すべく、獨り同社の利益に止まらざるも、望むらくは君益々加餐、大に斯界の爲めに自愛せられんことを。

☒

辻本滿丸君

東京工業試驗所第一部長、農商務省技師
工學博士

東京市小石川區高田豐川町二十五番地
電話番町七九六番

我が國の化學工業は漸次進步發達の域に向ひつゝあるは否定すべからざる事實なれども、之れを歐米の實際に比較して決して滿足すべき狀態にあらざるや、亦疑ふべからざる事實なりとす、抑も斯くの如き所以のものは、其の普及以來日尙久しからざるとも、研究費の潤澤ならざるに依ると云ふべし、今日都市にあつては〻種の機關等も備り稍化學工業の研究に注目せられ、住民亦直接其の利便を被るものにしても、地方農村等に於ては、殆んど無關心の態にあるが如き比々然りとす、思ふに斯業の發達は、國民の日常生活に與ふる利益鮮少にあらざるが故に久しく現狀に止まるに於ては甚だ恨事なりと云はざるべからず、幸ひに官邊にありては各地に各種の研究所試驗所の設けあり、夫れ其の施設の全く民衆に徹底するに到らざるの遺憾はありとするも、普く秀才碩學を拉し來りて各專門とする所を擔任せしめ斯業の實用的普及を期するは喜ぶべきなり農商務省東京工業試驗所第一部長工學博士辻本滿丸君の如き、嘗に同所の中心人物たるのみならず、我が國に於ける權威たり、君は東京の人、東京帝國大學工學部應用化學科を卒業したるは明治三十四年なり、爾來同所に在りて研究に沒頭し、先に工學博士の學位を受くるに至れり、學者的典型の人にして敢て名聞を意に介せざれども、其の油に關する研究は、化學工業界の光明として光輝燦然たり、學界の等しく稱讚して止まざる所、其の他君の研究にして世に著名なるもの亦尠からず、誠に君の如き偉器を有することに依りて我が幼稚なる化學工業も漸次に普及徹底するを得べく、尙將來君の努力に俟つものあるや明かなり、願は

くば國利民福の爲めに自愛せられんことを前途大に春秋に富む、吾人の期待は必ずや滿さるべきなり。

※

東京帝國大學教授、理學博士

池田菊苗君

元治元年十月九日生

東京市麴町區富士見町五丁目十六番地
電話番町三五三番

我が化學界の泰斗として其の名聲世界的に藉甚たる學星、元より尠しと云ふべからず誠に文運の隆昌たる聖代の祥事と稱すべきなり、多年東京帝國大學理科大學教授の要職に在り、其の深遠なる學識を傾けて學生の指導に力めつゝある理學博士池田菊苗君の如き、亦當代有數の碩學にして、學界の誇りとすべき人材たり、君は鹿兒島藩士池田春苗氏の二男にして、元治元年十月九日を以て生る、當年薩州の健兒は多くは意氣驕豪、大臣大將を夢みて或は陸海軍に走り或は政治に赴くを常とせるに反し、君は遠大の志望を抱きて明治十九年、東京帝國大學理科大學に入り化學を專攻す、同廿二年業成り、更に進みて大學院に其の蘊奥を極む、同時に東京高等師範學校教授に任ぜられ、後理科大學教授に進む、同卅一年五月、文部省より外國留學を命ぜられ獨逸に渡航して其の世界的學星に師事して研鑽に力むること年あり、同卅四年歸朝し次て再び東京帝國大學教授に任じ、其の深遠なる學殖を披瀝して、學生の指導と學術の闡明とに沒頭す、明治卅五年理學博士の學位を授けられ、爾來理科大學の權威として今日に及べり、君の發明創見に成り一般社會就に學術界を裨益せるもの甚だ多しと雖も、其の專門的研究は暫く措き家庭調味料として稱讃せらるゝ『味の素』の發明の如き普く人口に膾炙して知らざるものなし、現今空氣乾燥法の研究に從ひ、着々完成の域に近づきつゝありと云ふ、蓋し其の成績の發表せらるゝに於ては、世界の學界を驚倒せしむるものあらん、思ふに科學的研究に冷淡にして、發明發見の見るべきものなきは邦人の弊也、殊に化學の研究は遲々として進まず、幸ひ君の如き世界的學者を有するは國家の爲めに意を强うするに足ると云ふべし。

※

松文機業場管理者

山本政四郎君

明治二十八年生

福井縣大野郡勝山町大字上元祿
電話勝山三七番

福井機業界の重鎭たる松文機業場の技師長兼工場管理者として令名あるもの、之れを山本政四郎君と爲す、君は福井縣南條郡武生町の產、幼にして敏捷、聞一知十の才あり縣立武生中學校を出でゝ桐生高等工業學校に入り紡織學を專攻し、大正九年優等の成績を以て同校を卒業す、君直に其の叔父に當る横濱貿易界の雄將松文商會主の經營に係る松文機業場に入り、其の蘊蓄を傾注して優秀製品の產出に努力し、其の敏活なる手腕と卓拔なる技術とは忽ちにして製品の上に顯はれ、其の聲價を揚ぐること甚だ多し。松文商會主早くも君の偉材たるを認め、拔擢して技師長とし、且つ工場管理の大任を負はしむるに至れり。是に於て乎君更に發奮或は工場內に於ける設備の改良を施し、或は原絲の仕入れに留意し、或は製織上に新工夫を凝らす等、縱横の手腕を發揮して益々製品の改善に努めし結果、同工場の製織に係る羽二重及絹紬は更に其の品位を高むるに至り、今や內外市場に嘖々の好評を博しつゝあり、君人と爲り溫良悠謙にして淸廉些かの街氣を留めず、其の人格たるや、渾然玉の如きものあり、而も事に當つて勵精摯實、一意業務に沒頭して吃々倦まず、加ふるに絕倫の精力と縱横の才腕を有し、器局雄大にして能く人を容れ、人の長所を識り、部下を愛すること殆んど骨肉の如く衆望自から歸す、蓋し斯界稀に見る少壯の偉材たり、年齒漸く二十有九、前途洋々春海の如し、幸にし自重益々斯業に貢獻せられんことを希望して已まざる也。

※

福井市丸三染練工場技師

水島三郎君

明治三十四年生

福井市毛矢町丸三染練工場

羽二重を代表的產物と爲し、各種絹織物を產出して本邦機業地として錚々たる福井縣は、其の發展に伴ひて秀才雲の如く集まり將來染色製織の權威たるべき人物尠からず殊に少壯新進の技術家に於ては多士儕々、殆んど天下の偉材を此處に網羅せるかの觀なきにあらず、丸三染練工場技師たる水島三郎君の如きも、蓋し其の一人にして逸する能はざるの士なり、君は新潟縣西頸城郡の人、水島元吉氏の三男にして明治三十四年を以て生る、幼年の頃より天禀凡ならず鄕黨は將來に囑目して必ず爲す有るべきを期待せり、縣立糸魚川中學校に學び、進んで桐生高等工業學校色染科を專攻し、大正十一年を以て其の業を卒る、元來水島家は農を業と爲し、篤農家として遠近に知らるる君は少年時代より工業立國の大勢に著眼し技術家を以て世に立たんとするの志望あり斯業を選定せるものなれば、其の學窓に於ける勉勵は、同窓をして驚嘆せしめ、從つて成績の卓拔なる指導の任にある諸教授をして稱讃措かざらしめたりと云ふ、卒業後直ちに丸三染練工場に聘せられ、第二工場に技師たり、同工場は福井縣下に於ける染練界の權威的地位にあり、君卽ち最新の知識を傾け熱心に職務に鞅掌す、頭腦の明敏なるは嶄然群を拔き、性質の溫和なるは大に衆望を得て、內外に重きを爲し缺くべからざる人材とし認めらる、抑も機業界の進步は近時特に著しきものあり、然かも時世の變遷は徒に舊態を墨守するを許さず、此の趨勢は技術家に對する要求にも變化を來し、單に實拔の手腕のみに偏せるものにあらずして、明確なる科學的知識を具備し、研究的態度と熟練せる技能とを有するの士ならざるべからざるに至れり、君の如きは眞に此の要件に適するものにして、加ふるに前途に尙ほ春海の如き洋々たる幾多の歲月あり、蓋し君の如き少壯の異材に將來斯業改善の重任を寄托すべきなり、それ君たるもの豈自重せずして可ならんや。

福井精練株式會社第二工場技師

鈴木亮君

明治三十二年生

福井縣福井市江戸上町十八番地

天下の機業地として、京都其の他の各產地と共に其の名の著聞せるは福井縣にあらずや、然り而して大小の織物染色工場櫛比し各其の雄を競ふ中に就て權威的榮位を占むるものを物色すれば、其の數甚だ多からずと雖も、最も人口に膾炙し、規模堂々として設備の完全せるは福井精練株式會社の右に出づるものなからん、然かも同社は技術部に優秀なる人材を招致し、製品の良否を以て世の批判に訴へんとす、到底他の之れと匹敵し得ざる明かなり、第二工場技師たる鈴木亮君の如き、斯界新進の秀才を有するは甚だ慶賀すべし、君は縣下大野郡勝山町の人、貞治氏の男にして、縣立大野中學校を卒業するや、進んで桐生高等工業學校に入り、優等の成績を以て大正十一年色染科を修了す、直ちに福井縣下の模範工場として斯界に定評ある福井精練株式會社に聘せられ、現に第二工場に技師たり、入社以來日尙淺く、其の成績特筆すべきもの多からずと雖も、君の學識手腕は工場の內外に認められ、上下多大の尊敬を拂ひつゝあり

今後多年勤續するに於ては、効績刮目に値ひするものあるべきなり、嚴君寅治氏、久しく絹布精練工場を自營し、年と共に甚だ盛況を來せるも、同社の創業と共に入社し現に重要の位地にありて勝山町所在第七工場主任として令名あり、思ふに我が國の機業界は大發展を爲しつゝありと雖ども、時勢の變遷、生活の進歩と共に、之れに對應して又改善を要すべきものあるや必せり、而して之れ新進有爲の士に俟ちて初めて實現すべく、特に技術の方面に就て然りとす、即ち君の如き少壯俊敏の技術家の奮闘に期待せざるべからず、吾人は邦家の爲め將た斯界の爲め、君が大に自愛せられて此の寄托に任ぜらるべきを確信せんとす、前途眞に多望なるかな。

※

羽二重絹紬織物業

吉田武士君

明治三十四年生

福井縣福井市佐佳枝下町二十七番地

羽二重を代表的織物として、天下に機業地の盛名を喧傳せらるゝ福井縣は、斯業の益々發展すると共に、少壯有爲の技術家を案出せしめ、多士儕々俊材雲の如し、然り而して吉田武士君の如きも亦五指に屈せらるべきの器たり、君は福井市の産、吉田末吉氏の長男にして明治三十四年を以て生る、嚴君は斯業の重鎮、夙に羽二重及び絹紬製織工場を經營し、規模設備堂々たるものあり、君は福井中學校を卒業するや、進んで桐生高等工業學校に入り、紡績科に學ぶ、大正十一年優等の成績を以て其の業を卒り歸來嚴君を輔けて家業に勵めつゝあり、其の明晰なる頭腦は忽ち工場經營の實務を會得し、專攻せる學識を運用して着々成績を擧げ、嚴君をして安んじて公共の事に奔走するを得せしむ、蓋し嚴君は同家工場を管理する外、福井縣の三大會社たる福井精練株式會社、福井絹紬精練株式會社の重役たるのみならず、福井縣絹織物同業組合代議員として斯業の爲めに貢献し、殆んど寧日なきの狀にあるを以て、今や君が學窓を出て家業を統率して遺憾なからしむるに至れるは、眞に吉田家の爲めに賀すべきと共に福井縣下機業界の爲めに大に多とすべきなり、君が年所を經て經驗益々加り、業界の表裏に精通する曉に於ては、又嚴君に等しき衆望を負ひ、重きを爲すに至らん、今や最新の蘊蓄を傾けて工場を督し、製産能率の增進、品質の改善等に努力す、少壯技術家として嘖々の評あり、君天資重厚老成の風あり、何れも未だ半生に滿たざるの青年と認むるものなし、而して謙抑の態度は上下の信頼篤く、敢て嚴君に劣らざるの人格者たり、更に鍛錬を加へらるゝに於ては、光輝愈々玉成せらるべし、稀有の秀才眞に前途多望なるかな。

※

繪具染料商足立商店主

足立辰三君

明治十三年二月生

東京市日本橋區伊勢町十四番地

電話本局四九二、八七三番

機會を捉ふるの明智あり、業務に熱注するの意氣あり、奚んぞ事業の成功せざるものあらんや、世に才幹非凡なりと稱せらるゝの士にして、然かも有終の美果を收めざる所以の理は、明智あれども確乎たる意氣なきが爲めのみ、我が足立辰三君の如き此の兩者を兼ね備へたる偉材にして、遂に克く今日の地位を築き得たるものなり、君は足

立善助氏の次男にして、明治十三年二月を以て横濱に生る、幼年の交より卓拔なる天稟を示し、尋常兒童と異なる所あり、年甫めて十三、志を立てゝ東都に出で日本橋區小舟町半田荒物商店に入り、商業の實務に從事すること數年、既にして徵兵適齡に達するや、合格して千葉縣習志野騎兵聯隊に入營し、軍務に精勵して滿三年、明治卅六年除隊となる、將に舊主半田氏、君の將來に期待する所あり、即ち仲介して群馬縣桐生市の染料商山田稻吉氏に養子たらしむ、幾何もなく明治三十七八年の日露戰役となり召集せられて出征滿洲の各地に奮戰す、平和克復して凱旋家業に從ひ、明治四十年十月足利町に染料店を開く、足利は有名なる機業地にして、君の此處に着眼せるは巧みに地の利を用ひたるもの、其の後十年、店運駸々として進み、新進の店舗たるにも拘らず、絶大なる信用を博するに至れり、而して歐洲大戰の勃發するや、其の染料界に對する影響の測り知るべからざるものあり、必ずや空前の活況を呈すべきを察し、大正四年東京市日本橋區堀江町に山田氏の名儀を以て出張所を設たるに雄圖忽ち適中し巨萬の富を積む、後自己の名儀に改め、現住所に宏大なる營業所を新築して、それに移る、更に大阪市東區北久寶寺町にも出張所を設けて大活動を試み、東西相呼應して發展せり、それ時の利に乘じたるもの、今や堂々たる紳商として家門頗る繁榮す、夫人芳子、君を助けて內顧の憂なからしめ又賢婦人として令聞に富めり。

※

鐵道省化學研究所長

長屋修吉君

明治七年一月二十三日生

東京府下千駄ヶ谷町原宿一七〇番六號

鐵道省技師にして其の化學研究所長の重職に在る長屋修吉君は、岐阜縣の人、長屋庄六氏の長男にして明治七年一月二十三日を以て同縣下揖斐郡富秋村に生る、幼少の交より頭腦の明敏なるを以て知られ、鄕黨は將來を深く矚目する所ありき、小中學校の課程を卒り、第四高等學校を經て東京帝國大學工科大學に入り、應用化學科を專攻し明治三十三年業終る、卒業と共に愛知セメント會社の懇望に依り、技師兼支配人となれり、而して學業を終るや一年志願を爲し兵籍にありたるを以て明治三十七八年の戰役に於ては第三軍に從ひて出征し、旅順奉天等の大激戰に參加して殊功あり、陸軍步兵中尉に任ぜられ、從六位勳六等功五級に叙し、金鵄勳章を賜はれり、後明治三十九年工業試驗所囑託となり、翌四十年鐵道院技師に任ぜられ、累進して化學研究所長に至る、君資性純朴にして謹直、豊富なる人格的同化力を有す、上下の信望淺からざる誠に故ありと云ふべし、世に才華煥發の人は多く、容易に之れを物色し得べしと雖も、至誠努力を惜まざるの士は、それを求むるに難しとす、君の如きは眞に稀有の人材にして鐵道發達の爲めに寄與する所尠からずと云ふべし、思ふに我が國の鐵道業は近時長足の進歩を遂げて、其の進捗に於て將た又各般の施設に於て、面目新たなるものありと雖も、未だ前途に保留せられたる問題頗る多し、君が化學研究所長として斯界の發展に至大の關係を有するは言を俟たず、君の熱誠は、着々其の實績を示して遺憾なし、既に鐵道事業に携はること十有餘年に達し、其の顯著なる効績は內外の等しく認むる所たり、君今や恰かも知命其の圓熟せる性格と多年の經驗とは、愈々光彩を發揮して重望一身に集まる、願くば本邦鐵道界の爲めに自愛せられんことを、夫人も亦岐阜縣の產、夙に溫雅貞淑の聞えありて克く內助の功を盡くし家庭常に春風堂に滿つるの慨あり。

興田染料部主

石井熊次郎君

明治十三年三月八日生
岡山縣兒島郡琴浦町田ノ口

硫化染料製造の鼻祖とも稱すべく、斯界に多大の貢献を爲せる石井熊次郎君は、邦十郎氏の二男明治十三年三月八日を以て現住の地に呱々の聲を擧ぐ、元來織物を家業と爲し、業務侮るべからざるものありて同業の間に重きを致せる店舗なり、然るに歐洲戰亂の勃發して、我が染料界に深甚なる打撃を與へ、其輸入杜絶と爲りて國產自給自足の叫び漸く盛んとなる、之より先機を觀るに敏なる君は特に硫化染料の有望なるに着眼し、日夜其の製成に苦心して研究頗る力む、幾多の失敗と實驗とを重ねて遂に外國製品に匹敵して遜色なきものを創製し、大正四年專賣特許を出願すると共に、製造販賣に從事するに至れり、而して特許局審査の結果は、品質の優秀にして間然する所なきを認められ特許權を與へらる、爾來益々斯業に勵精して其の普及宣傳に力め、國內の各地より滿蒙にも及びて販路を有す、現下工場は千五百坪の規模を構へ、職工四十名を使用して一箇月の製造三千餘斤に達す、更に織物部の經營に就ても明敏なる手腕を揮ひ、依然として斯界一方の勢力を爲し、發展の狀態にあり、誠に君は染料織物の兩方面に對する功勞者と稱すべく、殊に染料に就ては多大の貢献を爲せるは、特筆に値ひすと云ふべし、天資卓拔識見亦尋常商賈と異なるものあり、衆望自ら集り、推されて郡町會の議員に選まるゝこと一再ならず、每次何等の運動を試むることなく、人の爲すがまゝに任じて敢て顧みずして此の榮冠を得るは、全く熱烈なる信賴に依ると云ふべく、君の人と爲りを表し得て餘りあり、思ふに當代は中央都市と云はず、地方町村と云はず、堅實にして然かも識見手腕に富める人格を要求すること頗る切なり、之れ國運發展の上に重大なる効果を及ぼすもの、君の如きは單に業界の偉材として尊敬すべきに止まらず、此國家的見地より觀るも有要の器なりと云ふべし。

☒

日本染料株式會社專務取締役

市川鶴松君

廣島縣芦品郡出口町八十番地
明治七年一月十五日生

歐洲大戰の影響は各方面に及び、政治學術と云はず、商工業と云はず、これを免れたるものなかるべし、而して其の結果は極めて良好なるあり、甚しく不良なるあり、千差萬別なりと雖も、それを要するに商工業に顯著なる刺戟を與へたるは事實なり、殊に化學工業中の染料の如きは、輸入の杜絶せる結果は、國產の自給自足を要求する叫びとなり、斯業に注目する士漸く多く、俄然活況を呈するに至れり、市川鶴松君は廣島縣芦品郡出口町の人、猪重氏の長男にして明治七年一月十五日を以て生る、夙に大志あり、然かも才華煥發、往く所として可ならざるはなく、或は實業に、或は政治に各種の方面に活躍を試みたり、就中政治に就ては特に趣味を有し、地方自治の爲めに貢献せる所尠からず、而して歐洲戰亂の勃發して輸入杜絶となり多くの染料商若くは機業家が周章狼狽する態を爲すや、君即ち染料商の有望なるを察知し、大正四年十二月出原安太郎、內海馬太郎、小川忠三の諸氏と謀り、資本金十萬圓五千圓を以て日本染料株式會社を組織せり、同社は硫化染料製造を主とし、優良なる製品を產出して定評あり、特に硫化ブラックは大に支那方面に販路を擴張し、現下北清に輸出せらるゝこと多量なり、工場の敷地六百坪、熟練せる四十名の職工を使用し、每月三十萬斤を製產する狀況にあり、前途益々發展の一路を辿り、更に規模の擴張を爲さゞるべからざる機運に迫るは、近き將來にありと云ふべし、今や君內外經營の要務に任じ努力致らざるなく、其の熱誠にして意氣盛んなる驚嘆するに堪へたり、君年齒正に知命、人生圓熟の期にありて、更に今後に期待すべきもの多々あり、幸ひに我が化學工業の爲めに健闘せられんことを望む。

☒

株式會社東洋化學工業研究所技師長兼顧問

西潟岱治君

明治八年十二月生
東京市麴町區上六番町四十番地
電話九段二九五四番

教育界に功勞あると共に發明界の天才として幾多有益なる新發見を爲し、社會を裨益せる西潟岱治君は新潟縣の人、明治八年十二月を以て東頸城郡奴奈川村に生る、父君仁七氏は算數の學理に精通し、松之山の算者と稱せられたる大家なり、多數の門下生を有し、明治十七年頃より各地の測量に從ふ、君亦父君を輔佐して其の道に通ず、明治三十二年新潟師範學校を卒業し、國民教育に貢献すること十年、父君の美資を享けて算數の學に長ぜると共に、發明の才を發揮して西潟正算機、九々不用乘除算機、衞生黑板拭、無色漆等を發明して特許を得、心算教授法の著述に併せて心算教授機の創案あり、其の他理化學機械の發明亦頗る多く、全國の各學校に普及せり、明治四十四年上京して隆文館書店に入りたるも暫くにして退き、獨立して紙鉛筆、模造白杉鉛筆、クレオン等を製作販賣す、經營二年頗る奮闘せるも所期の効果を收むるに及ばずして止む、更に發明に沒頭して色鉛筆及び靴クリームの原料製法同一なるを知り、遂に皮革塗料、主として靴クリームを創製するに至る、現

今世に行はるゝ所の靴クリームは、十中の八九まで君の發明に係るもの有りと云ふ、優に輸入品を凌駕するの品質を有し、供給依然として衰へず、これより先君は化學的發明を終生の事業として大成せしむべく東洋化學研究所を設立したるが、大正七年十一月組織を改めて株式會社と爲し、君は技師長兼顧問に任ず、同社は靴墨並に皮革塗料の製造を第一期の事業として經營に從ひ益々隆昌を極めつゝあり、蓋し品質の優秀なるは既に定評あるを以て、此の盛況は故なきにあらずと云ふべし、今後着々各方面の新發明品を出し、社會に多大の貢献を爲すべく、切に君の自愛を望み止まざる也。

☒

福井撚絲染工株式會社

福井縣足羽郡和田村城ノ橋
向八字小屋場十番地
電話　加工部福井四〇五番
染工部同五八三番
撚糸部同七七二番

創立　大正五年五月
資本金　百萬圓(六十五萬圓拂込)
重役　取締役社長安本吉次郎、專務取締役黑川榮太郎、同西野藤助、同吉江多吉、同八木榮太郎、同山口喜平、同松井文太郎、同坪內鶴吉、同早見光太郎、監査役西島順榮、同中山喜三郎、同安田惣兵衞、同齋藤貞

本邦絹織物の海外貿易は日露戰後長足の活躍を示せり、從て撚絲界も亦非常の進歩を招來せるあり、我が撚絲界の重鎭たる福井撚絲染工株式會社は逐年社運隆昌の盛況を呈し、其の製品の優秀なると價格の廉なるを以て夙に市場の定評を博せり、同社は加工部、染色部、撚絲部の三種に分ち、其の技術は何れも獨特の長所を有し、斯界拔群の聲名を馳す、大正十年下半期に於ける營業

の概況を見るに、前期以來九月迄は輸出縮緬、嗹等の特殊織物が、比較的に不況なりし爲め製産高減少の氣味ありて、加工部も一時操業閑散なりしが、十月以來商況恢復の兆候を呈し、操業漸く順調に向ひたり、染色部は輸出羽二重沈靜の狀態を持續せるが爲め、操業の閑散は免れざりしも、撚絲部に於ては前期以來好況を持續し、殊に十月に入りて縮緬用强撚絲の要求激增したるも、機械の能率に制限ありて、之れに應ずるに能はざりしも、供給は不可能の盛況にして其だ多忙の裡に本期を了はれり、今同所に於ける財産目錄の大要を見るに、地所（一萬百九十一坪五合）六萬五千四百餘圓、建物工場及倉庫其他五十四棟、此の建坪三千百七十四坪七合五勺外に附屬建物四百二十七坪一合七勺）二十二萬九千餘圓、未拂株金三十五萬圓、機械器具三十二萬七千四百餘圓、什器一萬九千五百餘圓、有價證券二萬五十圓銀行預金二十四萬九千五百餘圓、後期繰越染料、精練劑、石炭其他現在品二萬七千一百餘圓、未收入工賃及證紙料一千四百餘圓、合計一百二十九萬三千現金三千三百餘圓に達し、其の純益金は十萬八千餘二百餘圓に達し、前期繰越金二萬四千餘圓、計十三萬二千餘圓にて、七千圓を法定積立金、一萬圓を配當準備積立金、千五百圓を役員賞與金、六萬五千圓（配當年二割）を株主配當、一萬圓を稅金引當金、二萬七千七百八十九圓餘を後期繰越金とせり、其の盛榮を推知するに難からざるなり、現重役は社長安本吉次郎君其の他何れも斯界一流の人物にして、社務に盡瘁しつゝあり。

※ 福井縣精練株式會社

第一工場　福井市寶永上町六八
電話長福井一〇五番
第二工場　同市江戸上町五
電話長福井五三〇番
第三工場　同市吉野上町一
同　福井四五一番
第四工場　同市佐佳枝下町八九
同　電話長福井二三六番

創立　明治四十四年八月
資本金　四十萬圓

重役　取締役社長　田中金七、專務取締役大久保讃彌、同高田安、取締役井上正外、同藤田惣左衛門、同富岡伸次郎、同井上元次郎、同內田清、同後藤雄太郎、監査役吉田末吉、同白木治左衛門、同大久保捨吉

本邦精練界に最も古き歷史を有する同社は明治十九年冬福井市織工會社に於て始めて輸出羽二重の注文を引受けしに初まれり、爾來年と共に同縣下の斯業發達したるも、明治四十四年の交、同業者の競爭激甚にして、却て共倒れの現象を呈する憂ありしかば、福井縣知事中村純九郎氏の盡力に依りて同業者合同の氣運を生じ、福井縣精練株式會社に、各個人經營の事業を買收するに至りたり、斯くて黑川工場に本社を置き且つ之れを第一工場とし、川中、福井精練、伊藤、古市、清水、鈴木、後藤、加藤等九箇の工場を定め、後福井羽二重檢査所武生支所を武生町に繼續して工場を存置せしむる條件の下に買收し、大正元年十月一日より第十工場として作業を開始せり、後越前精練會社を買收し、玆に全く縣下の斯業を統一し、爾來精練の方法及機械器具の改善を計り、同時に專ら粗製濫造の弊を戒め、漸次品位向上せられて、其の聲價愈々喧傳せらるゝに至りたり、大正元年第五工場を廢し、同二年六月江原庄平氏を聘し、一名機練と稱する特別精練を開始し、同七月第一工場を廢して十月之れを石鹼工場に充てたり、從來當社の精練に使用する石鹼は各工場に於て適宜之れを購求し居たりしも、自製して統一するの使用上安全にして便利なるを知り、附帶事業として製造を斷行したるなり、以來或は精練の種類別をして各工場に特定すること或は軟水機の設備、或は精練研究會を組織して技術者の研究に資し、或は鐵工を常用して、應急修理に當て更に鐵工部を設けて之れに必要なる設備をなす等各種各方面に亘りて出來得る限り製品の向上と能率の增進乃至は經營方法に全力を傾注したる結果、社業は旭日昇天の勢を以て隆昌し、今や磐石の如き堅固なる基礎を確立し、其の信用と聲名とは天下に比儔を見ざるに至りたり、蓋し經營の衝に當れる幹部諸氏の貢獻頗る大りと云ふべきなり、現に社長田中金七、專務取締役大久保鐵彌、取締役高田安、井上元次郎、村上正外、內田清、藤田惣左衛門、後藤雄次郎、富岡伸次郎、監査役吉田末吉、白木治右衛門、大久保捨吉等の諸氏重役として社務に精勵す、何れも皆斯界の雄將にして同社の今日あらしめたる功勞者也、斯くの如く多士儕々たる同社の將來は更に數倍の發展を見るべきや明か也。因に同社工場は頭記の外縣下鯖江町に第六工場、同大野郡大野町に第十工場を置けり。

※ 桐生高等工業學校

群馬縣桐生市
電話桐生六六八番

當校の設立は明治卅七年の頃、群馬縣桐生地方先覺者の熱心なる主唱の下に胚胎し同年第二十二回帝國議會に於て衆議院議員武藤金吉氏より群馬縣立織物學校を國立高等染織專門學校に變更せんとを建議し、爾來群馬縣廳、縣會及當時の山田郡長利根川孫六氏、桐生町長前原良太郎氏を初め、森宗作、書上文左衛門、大澤福太郎、飯塚春太郎氏等地方有志協力して其の實現に奔走する所あり、幾多の迂餘曲折を經て明治四十四年十二月時の群馬縣知事神山潤次氏より高等工業學校を群馬縣に新設せられ度き議を文部大臣長谷場純孝氏に上申し、翌四十五年一月同縣より其の敷地約一萬五千坪と設立費三十五萬圓を寄附するに及びて其の設立の基礎定まり、更に第二十八回帝國議會に於て武藤代議士提案に基き本校創立の件審議せられ、遂に貴衆兩院に於て可決せらるゝに至れり。是に於て乎、政府は敷地及寄附金の件を許可し、着々設立の準備を進めて大正四年十二月桐生高等染織學校に關する官制を公布すると共に、工學博士吉武榮之進、工學博士田中不二麿、工學博士大竹多氣、高力直寬及關盛治の五氏に創立委員を命じ、地を桐生に卜して之れが建設工事に着手し、翌五年三月を以て其落成を見たり。是より先同年一月八日米澤高等工業學校長兼特許局技師工學博士大竹多氣氏當校々長に兼任を　ぜられ、同年四月を以て授業を開始し、大正六年八月大竹博士當校々長に專任せられしが、翌七年二月不幸にして同氏病魔の冒す所となり、同年七月十九日、同校の事業未だ半ばにして薨去せられしは眞に痛惜措く能はざる所なり。同年八月十二日同校教授工學博士西田博太郎氏校長を命ぜられ大に校務を刷新し、同八年三月第一回卒業證書授與式を擧行して、本科二十五名、色染科十一名、紡績科十四名の卒業生を出せり。同年應用化學科增設を許可せられ、其の十二月五日校名を桐生高等工業學校と改稱し以て今日に及べり。今や卒業生を出すこと、四回百十六名、選科修業生十二名、時勢の進運に伴ふて各種の施設を加ふるに至りしは獨り同校の爲のみならず、實に邦家の幸福と云はざるべか

らず、想ふに我が工業の發達に伴ひ工學の研究に志す者益々其數を加ふるに至るべく同校の今後更に盛大に赴くべきは吾人の信じて疑はざる所也。

※

ゴム引羽二重製造加工業　今野商店主

今野光郎君

明治十四年四月生

住宅　東京市淺草區茅町二丁目三番地
電話　淺草　四一一二番
工場　同淺草區福井町一丁目四十番地
電話　長淺草　四一一二番

人生行路の多艱なるは、恰も羊腸たる道程を山巓に向つて登るが如く、時に蜿蜒たる小徑あり、時に藤葛を攀づべき斷崖あり、千挫屈せず、萬撓怯まざる底の意思と勇氣とを備ふるに非ざれば、到底成功の彼岸に到達することを得ざる也、其處に苦心ありて又努力ありて初めて人事成就の鍵鑰を握るに至る、是れを我が今野光郎君に於て見んか、君は秋田の人、明治十四年四月同縣大森町に生る、同卅一年十八歳の時勃々たる覇心を抱き單身飄然として東京に出て、某呉服商の店員となりて精勵すること前後九箇年に及べり、後ち獨立して呉服商を營みしも、事志と違ひて業績思はしからず、已むなく其の方向を雜貨商に轉ずるに至る、爾來一意精勵斯業の發展に日夜怠らざること數年、早くも其の慧眼を空氣枕の製作販賣に注ぎ、當時主として獨逸に供給を仰ぎし同品の國產を圖ること多時、大正三年に至り、遂に完全なるゴム引羽二重を以てする空氣枕の製造を開始し、次て府下千住町に防水護謨製造の工場を設けて、之れに若干の加工を施すと共に、盛んに空氣枕の製造販賣に從事せり、果然其の畫策は正鵠に中りて、製品は忽ち江湖の喫々たる歡迎を招き、業運は須臾にして向上發展の盛域に向ひ、斯くて君は斯界に優越せる一地歩を贏ち得るに至る、然かも大正七八年の交は、君が業運の最も盛況を極めたるの時代にして、玆に鞏固なる君の業礎は確立するに至れり、爾來千住工場に於ける製品に加工すべき補助工場を市内五箇所に設け、汎く大阪、東京、其の他各地の問屋に向け販出しつゝあり、現下其の年產額實に一萬打を算するに至る、蓋し君は能く蜿蜒蹉跎たる人生の行路を切り開きて、成功の山巓に燦爛たる光明を望まんとしつゝある立志傳的英才なりと謂ふべし、夫人をきみ子と呼び、内助の功少なからず、君との間に一男あり、家庭洋々として圓滿和平を極む。

※

生糸撚糸業

株式日本撚糸會社

京都市上京區室町通鞍馬口下ル森ノ木町
電話　長上八一一二番

創業　明治二十八年
資本金　十二萬五千圓
役員　專務取締役小篠長兵衛、取締役木田芳之助、同今西平兵衛、工場長兼支配人中村榮次郎、監査役野口治兵衛、同廣田金之助

關西撚絲業界の權威として名聲嘖々たる株式日本撚絲會社は、實に明治二十八年の創業に係る、當時同社は京都市小川通り上小川町に工場を置き七千錘を以て操業せるが社會の進運に伴ふて機業家の各自技巧を製織上に競ひ、從來の手工撚絲に代ふるに、機械撚絲を以てするの傾向を生ずるに至りし結果、同社の事業大に進展し、幾許も無くして更に一萬錘の增錘を行ふと共に、明治三十年四月現本社所在地たる室町頭に工場を移して大に其の面目を一新したり、爾來拮据經營十ヶ年業績大に見るべきものありしが、偶々日露の開戰あり、延て商工業の不振を招來し、機業界は甚大なる打擊を蒙むるに至りし結果、同社も遂に現狀維持の不得策を認め、任意解散するの不幸を見るに至れり、然れども機業界の重要機關たる撚絲業を廢絶せしむるは頗る遺憾なりとし、有志相謀りて同社事業を繼承、以て新會社を組織せり、時に明治三十八年二月なりき、間も無く日露戰役の終局を告ぐと共に經濟界は漸次順調に復し、商工業界の一大活況を呈するや機業界亦活氣を加へ、從つて同社製品の需要著しく增加し、日本撚絲の聲價益々昂り、遂に今日の盛況を見るに至れり、是より先明治四十二年十二月福井市に分工場建設の工を起し、翌四十三年七月其落成を俟て操業を開始せるが、大正七年該分工場を帝國撚絲會社に讓渡しなり、同社現工場敷地三千餘坪、建坪千四百三十二坪にして、工場内には鐵製撚絲機械六十八臺（此の錘數一萬七千五百八十四錘）、木製機械十八臺、同合磨機械十六臺、同仕揚機械二臺を置き、原動部にはランカッシャ式及コルニッシュ式汽罐各一個並に併列聯成横置注射冷凝汽機一個を、電燈部にはエヂソン式及ラーメール式發電機各一個を設備す。現在職工數男女工合計約二百名、寄宿舍、教場、娯樂場、浴場、病室等悉く完備し洛陽に於ける此の種工場の模範たり。

※

京染及呉服販賣業近江屋主

增田善兵衛君

京都市佛光寺烏丸
電話下六六六、三六六〇番
工場　京都市四條通西院口

京都第一流の呉服商として嘖々の名あるもの、元より甚だ多からず、就中、近江屋號增田善兵衛君の如きは眞に稀れなりとす、同店の創業は五十年前にあり、單に呉服物を販賣するに止らず、悉皆染物等をも營み業勢隆々として驚嘆すべき狀にあり、君は滋賀縣の人、近江屋と稱する所以也、古來同國人が商賈として天才的素質を有するは夙に近江商人なる稱呼の存するを觀るも、極めて明白なる事實なりとす、即ち困苦に屈せず、辛勞を意とする所なくして勤儉己れ甘んじ、專心業務に熱誠を注ぐの特質を有す、君亦此美點を具へて遺憾なし、君が事業經營の方略は頗る大規模にして然かも組織整然たり、京都店は仕入れを主とするに對して、東京市日本橋區通油町に設けられたる東京店は販賣を掌り、別に洛西西院口に增田染工場を自營す、殊に染工場は數年前時世の進歩に應じ各方面の要求を充たすべく設置せるものにして、宏大なる敷地は多量廣汎の作業を執行するも尙綽々餘裕あり完備せる設備は製品の精巧優秀なることを得せしめ、職工待遇の懇切なるは常に工場内をして和氣靄々たる感あらしめ、同業の羨望措かざる所なりとす、製作品は無地染、黑染、引染、摺模樣、張、湯のし等染色整理に亘り友禪染に對しては專屬の委托工場を有せり、今や業務益々發展して近く工場の增築を爲すべき機運にあり、完成せる曉に於ては模範工場として重きを爲すべき也此の盛況は同工場の製品が到底他の企及を許さざる特色を有することを裏書するものにして、更に進みては君の才幹非凡なることを證して餘ありと云ふべし、此の勢力を持して駸々として進まんか、業界の覇者たるも易々たるのみ、吾人は君が大に自重して大成せられんことを切望して止まざるものなり。

※

飯田染工場主

飯田善次郎君

明治八年七月九日生
廣島縣安佐郡三篠町字楠之木

廣島縣下に於て最も進歩せる設備を有し、

斯界の權威として堂々其の雄姿を仰視せらるゝのみならず、恐らくは全國を通じて個人經營の染工場中、尊々たるものたるべきを廣島縣安佐郡三篠町の飯田染工場なりとす、場主飯田善次郎君明敏なる頭腦に加へて識見凡流を拔き、時勢の變化に策應して最も適切なる施設を怠らず、抑も君は飯田猿右衛門氏の長男、明治八年七月を以て呱々の聲を擧ぐ、染色を家業とせるは嚴君の時に初まり、當時は廣島市川原町に工場を設け、篤實熱誠を以て業務に當り、大に信用を博するに至れり、明治十三年現住所に移轉し、續いて君に及ぶ、先代の頃にありては、主として裏地の漂白を業とせるが君は屢々京都其の他の織物產地を視察し、時勢の趨く所を考へ、徒に舊態を脫せざるに於ては到底進歩せる製品を市場に出すと能はず、延ひて業務の發展容易ならざるを感じ、即ち大英斷を以て工場の設備に大改善を加へ、殆んど面目を一變せり、先づ動力を裝置し、新案特許を得たる精巧なる染色機を据付け、更に最近に於ては捺染機並に汽鑵を備へ、絣捺染をも開始するに至れり、誠に斯くの如き最新の設備を完うしたるは、一に君の卓見に依るものにして、營業の範圍擴大すると共に、製產能率も亦急進を來し大勢力を展開せり、工場敷地千二百餘坪、職工四十名、技術を主監する荒木氏は縣技手たる經歷もあり、有數の手腕家として知らる、而して一年間の加工額染色は一百萬反、捺染は五十萬反に達すべしと云ふ、創業以來六十年の歷史を有し、三十萬圓に餘る資本を充實せしめ、加ふるに經營者に此の人材を擁す、其の業況、盛んならざらんとするも豈得べけんや、君尙年齒知命に達せず、其の圓熟せる資性を運用して活躍を試みんこと疑ふべからず、前途に期待する所甚だ多し。

☒

泰文堂印刷所主

中村有藏君

明治三年八月生

東京市下谷區金杉上町二五四

電話下谷六五二〇番(甲)

抑も君の經歷は一篇の立志傳を爲すものにして、後進の模範とするに足れり、君は山口縣吉敷郡山口町の人、明治三年八月を以て生る、幼少の頃嚴父慈母を喪ひ、孤兒として辛酸なる境遇を嘗めたるが十七歲の頃單身上京、或は商家に入りて實務を見習ひ或は職工となりて勞働を辭せざりしも、幸運は俄かに君を當すに到らず、轉々して數年を經たり

自營の途に就かざるべからず、其の階梯として一の技能を磨くべきなりと、遂に將來印刷業者たらんとするの決意を爲し、各新聞社の工場に勤めて技術の習練に努力せり、熱誠の結果は忽ち報ひられて進歩の跡著しきものあり、既に自信ある技術を有するに到れるも尙二六新報社工場に研究すること三年餘、愈々創業の機熟して明治三十四年下谷區金杉上町に石版、活版印刷所を開く、之れ今日の泰文堂の基礎たり、爾來日夜精勵、身を以て業務に當り我が國の代表的印刷業者として指を屈せらるものに、築地活版、秀英舍、日清印刷、博文館等あれども、之れ皆株式組織にして多數資本家を包容して經營する事業たり、獨力奮鬪、斯界を濶歩する者に到りては決して多からず、然かも一職工より身を起して泰文堂印刷所として威名を馳する中村有藏君の如きは其の特筆するに値ひする者たり

營業主たり、職工たり、注文取りたり、集金人たるの有樣なりしが、年と共に繁榮を來して店舗の狹隘となり、現所に移轉して五十餘坪の工場を新設して更に長足の發展を招けり、鉛筆業者及び文房具問屋を主なる得意とし、其の鮮明にして正確なる印刷は好評嘖々たるものあり、蓋し君の如きは自ら運命を開拓せる人生の勇者にして、今や勝利の月桂冠は燦然として光彩を發揮せるは怪しむに足らず。

☒

前橋製絲同業組合

明治四十一年三月創立

前橋市本町

群馬縣は機業地として知られ、從つて生絲業の盛んなる、長野縣其の他と共に本邦屈指の地たり、而して前橋市に業を營む者甚だ少からず、蓋し斯界の一勢力たるを失はず、是等の同業者が事業の向上發展を圖り、利權の伸張を爲さんと欲すれば、互に協力して團體的威力を充實せざるべからず、業界の先輩、深く此處に感ずる所あり、熱心に同業者を勸說して遂に前橋製絲同業組合の組織を實現するに至れり、之れ明治四十一年三月の交にして、當時の組合員は其の數より觀るも、事業より察するも、今日に比すれば極めて微々たるものにして、殆んど隔世の感ありと爲すべし、爾來組合員は一致協力し、利害を共にして斯業の發展を纒れ力め、或は各地に視察員を派遣して採長補短の資に供し、或は從業員の待遇に就て改善を謀り、或は品評會展覽會等を開催して品質の向上に意を注ぐ等、著々として施設する所あり、今や組合員の數、器械生絲及び座繰生絲を合して六十名內外を算し、三萬圓に乘んとする經費を要するの盛況にあり、思ふに生絲は我が國重要物產中の重要物產なると共に、輸出品としては貿易の大勢を左右するの地位にあり、斯業の盛否消長は國家經濟に至大の關係を有す、誠に斯業者の責任や重しと云はざる可らず、然り而して我が前橋が生絲業地として屈指の地歩を占む點より考ふれば、同業者に多大の期待を寄するに獨り吾人のみにあらざるべし、然れども個々の努力に待たんよりは前橋製絲同業組合の大乘下に結束して、同一歩調を以て躍進せんことを切望に堪へざるなり、之れ實に業務の般賑となり、巨萬の富を積まんが爲めにあらずして、國運の振興に貢獻する所大なればなり、幸にして同組合は健全なる發達を遂げ、斯業者の中心となりて不斷の活動を續けつゝあり、眞に國家の爲めに視すべきなり。

☒

東京麻絲紡績會社取締役　正七位勳六等

鈴木章之君

明治八年十月二十七日生

東京市本郷區駒込千駄木町五十番地

電話小石川二八八五番

紡績界にありて重きをなし、一方の巨頭として隱然勢力を有する鈴木章之君は、其の當初の志望は海運航通にあり、斯界の研究者としても著聞す、君は福島縣田村郡守山町の人、夙に笈を負ひて東京に出て、商船學校を卒業せるは明治四十二年十月なり、成績頗る優等、同窓の間に秀づ、直ちに同校教授に任ぜられ英國留學を命ぜらる、留まること二ヶ年餘、研鑽甚だ力め、斯學の蘊奧を究めて歸朝す、續いて同校教授たると前の如く學生を指導して令聞あり、明治四十三年感ずる所ありて職を辭し、歐米の商工業界を視察すること數回、大正七年東京麻

絲紡績株式會社を計畫するや、事業忽ち緒に就き、幾何もなく創業を見るに至れり、推されて取締役となり、百般の經營に從ひて機宜を誤らず、蓋し財界の變動は歐洲大戰亂の終熄と共に、俄然として襲ひ來り、狂瀾怒濤澎湃たる勢ひを以て迫り、本邦事業界も亦深刻なる打擊を被り、喜びは變じて悲みとなるの狀態は隨所に散見せらる、就中紡績界の如きは其の影響比較的輕微なりしが如きも、然かも經營者の措置宜しきを得ざらんか、其の損害は決して尠しと云ふべからざる也、君の竦腕は克く此の間に處して綽々餘裕あり、社業は年と共に進展して今日の隆昌を來すに至れり、聞くならく君は深く勞働問題に就て研究し、造詣する所甚だ深く、識見の卓拔なる斯界の專門家をして驚嘆せしむるに足ると云ふ、蓋し歐米の工業と我が國の其れとは大に相違する點あり、我が國の如く原料を多く他國に仰ぐの國にありては、專ら生產費の輕減を圖り以て對外競爭に耐へざるべからず、單に表面の事實を以て我が勞働能率を律し、從つて賃銀を決定せんとするに於ては、正鵠なる見解を得ること難かるべきなりと、誠に事業經營者の傾聽すべき至言にあらずや、願くは邦家の爲め自重せられんことを望む。

※

製氷機其他輸出入販賣

株式會社葛原商會

東京市京橋區南鍋町一丁目一番地
電話銀座一七三、特長一七四、長一七五番

創業　大正六年三月
資本金　十五萬圓
營業課目　製氷機、電氣、蒸汽、水力に關する諸機械及び材料の輸出入販賣其の他
重役　取締役社長葛原猪平、常務取締役近藤周吉、取締役木下重作、同阿部廣吉、監査役矢田源太郎、同鈴木富士彌

社運益々隆昌を極め、財界空前の不況時代と稱せらるゝ今日にありて、尙且つ大增資の計畫中なる葛原商會の如きは眞に異數と稱すべきにあらずや、同商會は明治四十二年の頃現社長たる葛原猪平氏が單獨經營の下に、貿易及び電氣事業を創始せるに起元す、爾來業況大に進み營業の範圍亦次第に擴張せられ、大正四年十一月合資會社に改めたるも、大正六年三月更にそれを現在の株式組織に變更せり、今其の營業課目を概觀するに、製氷機の販賣は殆んど同商會の一手に掌握せられ、外に電氣、蒸汽、水力等に關する諸機械及び材料の輸出入販賣、並に鐵道、造船材料及び各種雜貨の輸出入をも營み、何れも直接文化生活に密接なる關係を有するものにして、販路の年と共に擴張せられて止まざるは故なきにあらずと云ふべし、殊に製氷機に就ては精巧至便品質を本位として需要に應じ、我が國に於ける權威たり、重役は社長葛原猪平氏を初めとして近藤周吉、木下重作、阿部廣吉の諸取締役、矢田源太郎、鈴木富士彌の各監査役諸氏、何れも實業界に錚々の名を馳するの人材か、或は又社會的に名士として重きを爲すの士にして、一致協力、社業の爲めに努力し發展を圖りつゝあり、蓋し葛原氏が個人經營に着手してより今に至る既に十有五年、其の間多大の苦心を注ぎて漸次に基礎を固め、更に株式組織に改められて各重役の熱誠之れに加はり、駸々乎として進歩發達せるものなれば、今後の狀勢は推して知るべきのみ、吾人は同商會の前途に對して衷心より祝福を捧ぐるに躊躇せず。

※

秋田工場主

秋田實君

明治十九年五月五日生
東京市外吾嬬町字小村井九三八番地
電話隅田六五三番

時運利あらず一度蹉跌せるも屈する所なく更に狂瀾を旣倒に挽廻して隆勢を極め、秋田式アルミニユーム合金（秋田式靑銅）を發明して斯界に新紀元を劃せる秋田實君の如きは意志の鞏固なると、手腕の敏活なると將た又學識の豐富なると、大に特筆するに値ひするものなくんばあらず、君は長崎縣南高來郡島原町の舊藩士、秋田政德氏の長男にして、明治十九年五月五日を以て生る大正二年七月東京高等工學校機械科を卒業するや、時恰かも松尾工場に於て職工の募集あり、君は職工として實際生活を經驗し、他日の參考に資すべく之れに應募し、日給四十錢を支給せらる、適々ポンプ製作に關して技師の設けの誤れるを指摘せる爲め、遂に其の經歷を看破せられ、一躍して工作課長に進む、爾來同場に重きを爲せり大正五年露國より多數信管の注文到り、經營者は好機逸すべからずと爲して、それを請負ふ君は到底其の利益なきのみならず、恐らくは資本を固定せしめて工場の死活に關すべきを說き、拒絕を主張せるも容れられずして遂に同工場を去る、果せるかな後に多大の損害を招けり、次て大正六年六月合金製作を企劃し芝區に東京合金製造所を設け、工場主任に高工出身の嘉村信次、池永鶴氏其の他優秀なる技術家を聘して業を營み、大正八年十一月二十萬圓の株式會社に變更し、漸次業界に頭角を拔んずるに至る近年の財界不況は經營に困難を感ぜしめ、株主に迷惑を及ぼさんことを慮り、大正十年九月斷然解散せり、君即ち不撓の勇を奮ひ、現所に單獨秋田工場を創業し、輕合金マグナリム、デユラルミン、硬質輕銀、燐靑銅等を鑄造し、海軍省、各飛航機製作所其の他大會社を得意とす、殊に秋田式アルミニウム合金は飛航機製作上缺くべからざる材料にして、全く君の創案に成り國家に貢獻する所測り知るべからざるなり。

※

備後織物同業組合

事務所　廣島縣深安郡深津村
支店　廣島縣福山市東堀端町
同　廣島縣深安郡川北村

中國に著名なる備後織物同業組合は廣島縣深安郡及び福山市の織物業者を包含する一大集團にして、同業者が同心協力して織物の改良發達を圖り、營業上の弊害を匡正し信用を增進せしめ、販路を擴張するの目的を以て同業先覺者の提唱に依り組織せられたるもの、旣に相當の歷史を有し斯業に對して貢獻せる所尠からず、即ち織染上の知識を普及徹底せしめる爲めには、講習會講演會等を行ひ、參考資料を蒐集して啓發に力め、各種統計表を作り、品評會、共進會、競技會を主催すと共に、內外の博覽會共進會等に出品し、組合員の製造品販賣品等に嚴密なる檢査を施し、職工使用人の奬勵功績者の表彰、視察員の派遣、其の他凡そ織物改善發達の爲めに裨益する所の方案は細大悉くそれを利用し、舉げて盡さゞるはなからんとす、而して組合員は織物製造業者織物販賣業者、染色業者、原料絲商、織物整理現業者等一切の機業關係者を包括し、廣汎なる地域に跨れるものなれども、秩序整然として一絲紊れず、眞に模範組合の稱に背かずと云ふべし。殊に組合員の製品に對して嚴密なる檢査を施し、些の缺點あるも斷然市場に公にするを許さず、規定の檢査票證を附するを待ちて初めて發賣せらるる制度の如きは、備後織物の聲價を發揚せしむる良策と云ふべし、此の故に備後織物に對する信用頗る高まり、今や其の販路は

全國に及びて、益々擴張されつゝあり、現に組長、副組長、評議員等の幹部は斯業の偉材を網羅し、何れも一致協力、組合の發達に貢献す、蓋し備後織物の前途は益々多望爲ると共に、同組合が地方産業の爲めに寄與する所多大なるべきは敢て喋々の言を要せざるなり、殖産興業は治世の根本にして國家存立の要諦たり、奮つて其の使命を全了せられんことを望む。

※

新潟縣酒造聯合會會長、酒造業

中島半次君

明治七年四月二十五日生
新潟市材木町一丁目二七六番地
電話 新潟 六八四番

新潟地方に於ける清酒は近年頓みに其聲價を高め、品質の改善に見るも亦釀造石數の增加に考ふるも、決して他に遜色なきのみならず、其の品種に依りては寧ろ逸品を壓倒して大いに世の歡迎賞讃を博し勢ひ隆々たるものあり、之れ蓋し同地斯業者が一致協力して品質の改善、販路の擴張に努力せる結果に外ならずと雖も、亦常に同業者を激勵鞭撻し、斯業の向上に力を傾注せし我が中島半次君の功勞も決して尠少にあらざるなり。君は新潟縣南蒲原郡中之島の人、明治七年四月を以て其地に生る、幼にして俊敏、長じて益々才氣煥發せり、夙に學を修めて官界に入り、明治三十三年稅務監督局技手を振出しに、同三十六年稅務屬となり爾後累進して關稅課長に昇任す、此の間專ら酒造業に關し研究すると共に、亦常に斯業者の指導誘掖に努め、一般當業者より多大の期待嘱望を寄せられたり、斯くて大正三年に至り、同業者の信頼は益々加はり遂に君をして永く官途にあらしめず、同年有志と謀りて新潟酒造株式會社を創立し、君其の支配人となりて深遠なる學理と造詣深き技術とを實際に活用して只管社業の隆運に盡瘁するに至れり、其後社業順潮に發展に向ひしが、幾干もなくして同志者の希望に因り君同社一事業全部を譲り受くるに至り、茲に全く其の獨力經營たるに至れり之れ實に大正七年の事に屬し、爾來其の獨特なる經營方に依りて業務益々進展し、今や造石高八百石に達し、白山の商標を附して廣く近縣に取引され、到る所嘖々たる好評を以て迎へられつゝあり、先是君や衆望を荷ひて新潟縣酒造聯合會評議員に推され大正九年副會長に、更らに同十年聯合會長に擧げられ、爾來引續き其要位にありて縣下斯界の發展に斡旋する所尠なからず、又曾つては日本釀造協會主催に成る第八回全國酒類品評會に評議員として公平の手腕を發揮し聲望を馳せたり、君の斯界に貢献する所多大なりしは前記する如くにして、殆んど枚擧するに遑あらず、宜なるかな、其業運の隆々たるものあると共に聲望同業者間に鳴り、今や縣下の第一人者を以て目せらるゝことや、君は亦軍隊出身（異材、即ち明治三十七年日露戰役に際會し第二師團に令屬して出征し、各地に轉戰して殊勳を奏す、戰後軍功に依り勳八等白色桐葉章を賜ふと、蓋し君の夙榮たらずんばあらず、資性溫厚にして謙讓の美德を有し、人に接するや快談克く應酬し對者をして覺えず推服せしむ、其家常に訪客の絶間なきが如き亦怪むに足らざるなり、趣味とする所別にあらざれども常に醸造の研究を以て念とし閑あれば關係の書籍に親しみ不斷の努力を傾注して亦淪らず、蓋し取つて以て世の典範たらん、それ今や世界を擧げて經濟戰の覇權を掌握せんとし、平和の戰闘に汲々たり、本邦實業界亦有爲の人材を俟つこと久しく、此の秋に際し君の如き職に執誠にして且つ公共的觀念に滿ち、口管國利民福を念とするの士を見るは、大いに吾人の意を强ふする所也。乞ふ自重せられんことを。

東京瓦斯株式會社

東京市神田區錦町三丁目
電話神田 一三番 一三五〇番 一三五一番

創業 明治十八年
資本金 四千五百萬圓
營業課目 燈火燃料用瓦斯及其副産物の製造販賣
重役 取締役社長小池國三、常務取締役杉浦宗三郎、同松方乙彦、取締役渡邊勝三郎、同吉田丹治郎、同井上辰九郎、同渡邊五郎、監査役岩崎清七、同鈴木實彦、同關谷兵助

東洋斯界の覇王にして我が化學工業界に絶大なる貢献を爲しつゝある東京瓦斯株式會社は、本邦に於ける瓦斯業の鼻祖たり、抑も其の起元は、明治九年十一月東京府廳に設立せられたる瓦斯局に因を發す、當時都市の生活未だ向上せず、工業界も亦極めて幼稚なる狀にありたるを以て、民業として經營せらるゝの機運に達せざりしも、明治十八年に至り澁澤榮一氏其の他に依りて拂ひ下げられ、株金二十七萬圓を以て東京瓦斯會社の設立となり、本社を東京市芝區濱松町に置き業務を開始するに至れり、之れ今日の東京瓦斯株式會社の濫觴にして、爾來世運の進展と共に漸次擴張せられ、增資に次ぐに增資を以てし、工場及び製作所を增設し、明治四十二年十二月千代田瓦斯會社を合併するや勢力俄かに加はり、一躍四千五百萬圓の巨資を擁し、千住、深川、芝等に製作所と市内に三營業所及多數の同派出所を有し、本社は神田區錦町三丁目に宏壯なる規模を構ふるに至れり、而して瓦斯副産物としてコークス類、油類、工業藥品、染料等を製産すると亦多額に上り、特にタール蒸餾品及硫酸アンモニヤの如きは優秀無比、斯界の逸品と稱せらる、同社の事業は之れを大にしては國家産業の上に寄與する所尠からず、之れを小にしては三百萬帝都市民の日常生活に關係する所密接なり、幸ひにして社長以下各重役等、何れも名流紳商を網羅し、克く此の意を體して社業に努力しつゝあり、蓋し我が國屈指の大會社として推稱するに足る。

※

化學工業用諸機械製作 山口鐵工所主

山口熊太郎君

東京市本所區太平町一丁目十一番地
電話本所 三〇三八番

近時我國の工業勃興と共に各方面の機械製作に從事するもの頗る多し、其の巨額の資本を擁し、宏大なる設備の下に、多數の技術者と最新の機械を運轉して業務を營める大會社は暫く措き、個人經營の製作所にありては所謂往昔の鍛冶工場の範圍を出ざるもの多く、何等新意の加へられたるものなく舊觀を墨守するに過ぎざるなり、然るに山口熊太郎君の經營する山口鐵工所の如き、敢て何百萬圓の資金と何千坪の工場を構ふるにあらず、全く君の獨力奮闘する所にして、毅然として群を拔き、其の製品は優秀無比、幾多の改善を施され、新發明に成れるを以て斯界に鳴る、嘗て化學工業博覽會に出品せるコロンネル式精製蒸餾機、純酒精蒸餾機、純エーテル蒸餾機、純ベンゾール蒸餾機、純木精蒸餾機等は審査官をして驚嘆せしめ、從來の蒸餾機の缺點を補ひて遺憾なく、設計の實用的に堅固なるを以て、嘖々たる好評を博せり、更にコーラム式目皿板シーブも輕便のものとして賞讃せられ、環流冷却器も精巧堅牢に構成せるを以て、他に卓越せる聲價を有す、其の他製作せらるゝ所の大小の諸機械は、何れも苦心研究の結果によりて多大の改善を加へられたる獨特の製品たり、山口鐵工所製

の商標が信用の表章として重んぜらるゝも故なきにあらずと云ふべきなり、所主山口熊太郎君は、資性溫厚にして研究心に富み、少年の頃より機械製作に趣味を有し、常に工夫考案することを好み發明の才に豐かなり、即ち長ずるや鐵工所を經營して着々實蹟を擧げ、以て今日の地歩を占むるに至れり、君は敢て廣告的手段を好まず、製品の實質を以て最後の勝利を得んことを期し、常に研究を怠らざる也、斯學の權威をして嘆稱せしむるものあるは偶然にあらず、尙益々精勵して或が工業界の爲めに貢献せられんことを望む。

染色工場

株式會社 **稻畑商店**

本店 大阪市南區順慶町二丁目五十一番地
電話 船場 自五〇〇番至五〇五番
工場 大阪府西成郡豐崎町大字本庄九四七
電話東一六四三、一六四六番

關西に於ける染色界に權威的地位を有する稻畑商店を傳へんと欲せば、先づ其の創立者たる稻畑勝太郎君を知らざるべからず、事實に於て君は即ち稻畑商店と異身同體の感あればなり、君は夙に佛國に留學して應用化學を專攻すること年あり、業成るや同國に著名なるマチナース染色工場に入り、實際的修練を積みて造詣大に進む、然かも更に蘊奥を極めんとするの意あり、リオン大學に於て斯學の世界的碩學に就き研鑽せる後歸朝す、明治卅九年最新式の染色機を輸入し、同年十月工場を創立して愈々業を始む、爰に於て多年鍛錬せられたる學識と手腕とは忽ち光彩を發揮するに至り、爾來各種の博覽會、共進會に出品して常に名譽を表彰せられ、宮內省御用品たりしこもあり、特にモスリン袴、洋傘スレキ等の染色は到底他の企及し得ざる長所を有し、尙陸軍用被服カーキ色に就ても獨特の價値あり、嘗て賞勳局より褒賞を授けらる、而して漸次に業務の發展するや、合資會社となして營業の範圍を擴張し、更に株式會社に組織を變更して愈々內外の施設を充實し、業界に活躍す、重役は何れも實業界の錚々たる人物を網羅して一致協力、社業の發展に努力しつゝあり、前途益々多望也と云ふべし抑も我が染色界は歐洲大戰中より異常の進歩を來せりと雖も、尙開拓すべき餘地は多々あり、決して現狀を以て滿足すべからざるなり、稻畑商店の如き斯界の權威は、我が染色界向上の爲めに更に貢献して、延ひて國家產業の振興に盡すもの多大なるべし、之れ吾人の期待して止まざる所なり。

合資會社松本染工場代表社員

植田藤藏君

工場 東京市下谷區谷中初音町四ノ六〇
電話 下谷 一一一二九番

織物界に於て毛斯綸が用途頗る廣く、總ての階級に需要せらるゝの狀は近年特に著明なる事實なれども、更に價格の低廉なる之れが代用品を得んと欲するは、亦自然の勢ひにして從來幾多の新製品を世に發表せるもの尠からず、就中、最も好評を博し愛用者年と共に增加し販路月と共に擴張せらるゝは松本染工場が獨特の技術を以て染色せられたる製品なりとす、製織に何等の缺點なしとするも、染色に完美する所なくんば、却て名望を汚損するに等しきを以て、斯くの如きは元より當然のみ、松本染工場の主とするものは、新毛斯、瓦斯毛斯各種、綾金布等にして、新毛斯染に就ては先年化學工業博覽會に於て銀牌を受領せる名譽を有す、元來綿織物を原料として染色仕上げの加工を施したるものなれども、其の工程に於て同工場が多年研究經驗の結果、案出せる特殊の技術を運用するが故に、外觀毛斯綸に殆んど異なる所なく、然かも耐久力に富むの特長を有す、新毛斯、瓦斯毛斯は裏地に綾金布は女子の袴に使用せられて、松本染工場加工の聲價特に他に擢んず、同工場が斯くの如き地位を占むるに至れるは、社員の共力に依ること勿論なりと雖も、代表社員たる植田藤藏君の經營宜しきに適ひたる所以に外ならず、君は多年斯業に從事し、經驗と研究とに於て他に卓越するものあり、時勢を明察するの先見に富み、萬般の施設時機を誤たず、着々成績を擧げて今日の隆昌を招致せり、思ふに新毛斯、瓦斯毛斯各種の如きは、時代の要求する織物にして將來尙益々用途の擴張すべきは明かなり、而して松本染工場が此の趨勢に順應して愈々品質の向上に力め、毛斯綸代用品たるの使命を全うするに努力するに於ては、君の献身的努力と相俟つて、其の發展は測り知るべからざるものあらん、蓋し同社の前途大に多望なりと云ふべきなり。吾人は同工場の爲めに祝福すると共に、其の今後益々改善進歩の實績を擧げ、廣く本邦斯界の爲めに貢献するを思ひ、亦國家の爲め眞に祝福せざるを得ざるなり。

布海苔製造販賣業

半田右一君

東京市日本橋區本石町二丁目八番地
電話 神田 四五九〇番

織物用糊界の覇王を以て任じ、實質亦之れに伴ひて隆々たる聲價を有するは半田右一君なり、嘗て化學工業博覽會にソルブルビジートスターチBB極天本久平柳布海苔、糊液等を出品して其優秀なるを表彰せられたりき、抑もソルブルビジートスターチは原料を馬鈴薯澱粉其の他の數種澱粉より採れる無色透明、熱湯に溶解するものにして、織物其の他に使用して毫も光澤を損する憂ひなく、工業用及び絹、綿、麻、絨等の經緯糊並に整理仕上に使用するの外、食料とするに足るべく、菓子製造に供せらる、又本久柳布海苔は其の原料は海草により溶解性に富み、不純物を含有せずして粘着力極めて强く、之れを織物に使用するに於ては、地質を滑かならしむるを以て、絹織物一般に用ひられ、又婦人用に適す、糊粉はグルブルビジースターチと同溶解せるものにして、効用はスターチと同一なり、斯くの如き特効を有するを以て、何れも需要絶ゆることなく、嘖々として好評を博し江湖に喧傳せらる、君は幼少の頃より斯業に志を寄せ、熱心に研究する所あり、其の獨立して自ら經營の任に當るに至るや、多年練磨せる手腕を縱橫に發揮して業務の發展に力め、製品の向上と生產の增加に意を注ぎ、忽ち斯界有數の店舗として擡頭するに到る、今後益々研究を重ねて更に優良なる製品を出し、一般工業界殊に織物界の爲めに貢献するや必せり、思ふに織物の進歩は驚くべきものにして、其の地質製織より觀るも、其の染色意匠より察するも之れを十年前に比して、隔世の感ありと雖も、整理仕上に就ては更に研究すべき餘地多々あり、即ち君の如き密接なる關係を有するものにして、大に努力を望まざるべからざるなり、君の英才、必ず此の期待を空うせざらんことを確信す。

橋硝子販賣店

今村英祐君

明治十三年十一月生
東京市京橋區銀座一丁目一番地
電話 長 京橋五七〇番
工場 東京府荏原郡北品川町六五六
電話 高 輪七五七番

銀座街頭樞要の地に店舗を設け、其の構造は壯麗、其の設備は完全、眞個文化の必需品たる硝子販賣所として推稱するに足るも

のを橘硝子販賣店と爲すべし、其の創業は大正二年六月なれども、工場の完成は稍後れて同年九月にあり、東京府荏原郡品川町大字北品川宿小關六百五十六番地に設けられ、主として電燈用笠、瓦斯ホヤ、壜類、丼類、菓子鉢、化粧用具、灰皿、氷入、花瓶類、花盛、文鎮、肉池、含嗽器、燗德利、インキ壺、金魚鉢、電球、卓上用具等を製作し、堅牢精緻優美絶佳にして美術的技巧と實用的價値とを併有するを以て名あり、先年化學工業博覽會に出品せる虹彩花鳥浮出模樣七寸丼、魚模樣花瓶其の他花瓶類は銀牌を受領せり以て其の眞價を知るべきにあらずや、工場の規模宏大にして嶄新なる各種の機械を備へ、練達せる技術員職工を多數に擁し、製品の向上と生産の增加とを計り、斯界有數の工場として注目せられつゝあり、店主今村英祐君は明治十三年十一月を以て生れ、今村銀行頭取にして多年英國に留學し少壯實業家の典型を以て稱せらるゝ今村繁三氏の令弟たり、君も亦學業を卒るや今村銀行にありて令兄を輔けつゝありたるが、工業界の勃興と共に志を斯界に寄せ遂に橘硝子販賣店を創業して今日に至る、橘は今村家の家紋たり、君令兄に肖て俊足、工場竝に販賣所を督して一切の經營に任じ、敏活と誠實とを以て業務に勵精す、今や創業後恰かも十週年に相當し、更に大發展を試むべく準備怠りなしと傳へらる、業蹟躍進從來の販路を倍加して海外の需要も益々高まり、斯界の覇者たること遠き將來に非ざるべし願くば我が産業振興の爲めに君の努力を望みて止まざるなり、君今や人生の最壯期、其の前途に深甚の期待を寄するもの、豈啻に吾人のみならんや。

※

野口彌太雄君

日本皮革株式會社大阪支店長兼技師長

明治六年一月十五日生
大阪市東區島町二ノ三十一番地
電話 東 二二一〇番

我國の皮革界に重きを爲す日本皮革株式會社は、人材を網羅し多士濟々たるを以て名あり、社業の盛昌今日の如き、抑も此處に因由する所勘しとせざるなり、現に大阪支店長兼技師長たる工學士野口彌太雄君の如き亦其の一人として僂指せらる、君は東京府士族野口金藏氏の長男、明治六年一月十五日を以て生る、幼時より異彩あり、到底普通兒の企及すべからざる特質を有したり小中學校の課程を進み、高等學校を經て東京帝國大學工科に入る、專攻學科は應用化學科にして、其の天稟の周到なる注意と、旺盛なる研究心とは此の頃に到りて益々發揮せられ、孜々として研學に沒頭せり、明治三十二年優良の成績を以て其の業を卒るや、直ちに日本皮革株式會社大倉皮革製造所に聘せらる、當時に於ける我が皮革工業は頗る幼稚の狀にあり、從つて新進技術家若しくは研究者の手腕を揮ふべき餘地多々ありたると共に、其の苦心も亦尠からざるものあり、君は鋭意社業に盡瘁し、深遠なる學識に加ふるに、年と共に經驗を積み、研究を重ね、我が皮革工業の爲めに貢献する所あり、明治四十年に至り同社が單に日本皮革株式會社と改稱せられ、之れを機として大に内外社務の刷新改善を圖り、人物を拔擢して自由に能率を擧げしむるや、君は大阪工場長に擧げられ、愈々精勵して信望益々加はり、次て幾何もなく大阪支店長に進み、更に技師長を兼ねしめらる、現下關西皮革界に於ける有要なる人物として、斯界の重きに任じつゝあり、思ふに我が皮革工業が大に發展すべきは疑ひを挾むの餘地なく、而して須く斯界英俊の士の努力に俟つべき所、即ち君の如きは其の中堅となすものにあらずして何ぞや、前途大に多望、切に加餐自重せられんことを。

新田留次郎君

慶應元年生
山形縣米澤市直峰町四千九百八十六番地
電話 米澤 二四四番

米澤袴地と言へば新田を想起し、新田製袴地と稱すれば又直ちに米澤を聯想せしむ、爾く新田留次郎君の斯業に對する聲譽は絶大なり、君は米澤藩士にして慶應元年を以て米澤城下に生る、先代の頃より絹織物に從事するも、今日に比すれば極めて小規模にして、僅かに家庭的組織に過ぎざりき、然るに舊藩主藩祖の遺業を體して頻りに織物を奬勵するに依り、君深く感奮する所あり、明治二十六年出機制度を執り、玆に初めて絹織物を專業するに至れり、恰かも同年誕生せる嗣子熊雄氏は、明治四十三年三月を以て山形縣立米澤工業學校染織科の業を卒り、今日斯界に重きを爲すに至れるは因緣頗る奇にして、又一家の瑞祥と稱すべきなり、爾來、君は愈々全力を斯業に傾注して發展を謀り、業運年と共に隆昌を迎へ然かも熊雄氏の學校を出でゝ工場の人となるや、勢力一段の熾烈を加へ、更に大正十一年山形織物品評會に於て一等賞を授けられたるを以て光輝益々加はれり、抑も新田工場の袴地は四十年來全國各地の好評を占め、他に追隨し得るものなし、大正四年高柳式織機を設置せるの外、山本式、寺岡式織機を增設し、十數の機臺、數十の工場員は熊雄氏督勵の下に日夜生産に力め、年額約一萬反、米澤市仲織商の權威たる下山合名會社を經て、京都に於ては、下忠、入江松坂、大阪に於ては稻西、丸升、東京に於ては西脇、其の他一流の問屋に播布せられ需要は益々增進するのみ尙品質の改善に就ては常に頗る苦心し、工場には優秀なる技術家を聘し、實質的にして且つ嶄新なる製品を得んことを主眼として研究を怠らずと云ふ、君は溫厚君子の風を帶び、熊雄氏は活達豪快敏腕を以て鳴る、父子相輔け竝び立ちて進む所、業界の重鎭を以て目せらるゝは眞に故ありと云ふべきなり。

※

麥酒及清凉飲料水製造

日本麥酒鑛泉株式會社

本店 東京市京橋區銀座一丁目九番地
電話京橋三一三、三一四、三一五番
芝口倉庫 電話銀座二五九〇番
有樂町倉庫 電話丸ノ内 二六八番
大阪支店 大阪市西區立賣堀北通一丁目
電話新町二一三、三一二、三一三番
名古屋支店名古屋市中區新柳町一丁目
電話名古屋本局三一八、八一三番
半田工場 愛知縣知多郡半田町
（ビール工場）電話半田二〇、一〇二番
平野工場 兵庫縣川邊郡多田村平野
（清凉飲料水工場）電話池田二七番
尼崎工場 尼ケ崎市初島
（製壜工場）電話土佐堀 三二二二
東京工場 埼玉縣北足立郡川口町 二四三番

創業 明治二十年
資本金 九百萬圓
役員 取締役社長 根津嘉一郎
常務取締役 鳥田貫吉 同 山本爲三郎
取締役 濱口雄之助、同中禁良吉、同中根虎四郎、同桑原虎治、同山名次郎、同高田正一、同堀四郎、同山本久三郎
取締役兼副支配人 近藤直一

取締役兼工場長　根津寅吉
取締役兼營業部長　雨宮　齊
取締役兼支社長　吉田傳吉
監査役　村上定、同宮島清次郎、同佐竹源造、同林龍太郎、同木村平右衛門
相談役　和田豐治

本邦麥酒及清凉飲料水界の一方に覇を唱ふるものを日本麥酒鑛泉株式會社と爲す。同社は、大正十年七月二十八日加富登麥酒、帝國鑛泉、日本製壜の三大會社を打つて一丸として成立せるもの、斯界に權威あるユニオンビール、及カブトビールの釀造竝に三ッ矢サイダー、三ッ矢平野水等の清凉飲料水の製造を本業とし、附帶事業として製壜業を營む。抑も當社の前身たる加富登麥酒株式會社は、元愛知縣半田町盛田善平氏が、支那人韓金海を聘して明治二十年獨力釀造を開始したるに濫觴す。當時舊式釀造法を用ひ、製品を丸三麥酒と稱して販賣せしが、品質今日の如く純良ならざりしと、邦人の麥酒を嗜好するもの少なかりしを以て事業頗る振はざりき。然るに明治二十七八年戰役の頃より麥酒の需要著しく增加し漸く利益を見るに至りしが、更に其の品質の向上と生產能力の增加を圖らんが爲め、組織を變更して株式會社とし、明治二十九年資本金六拾萬圓の丸三麥酒株式會社を成立したり。即ち半田町榎下の地を相して一大工場を建設し、獨逸製新式機械を購入据付を了すると共に、獨逸人技師二名を招聘して、明治三十二年下半期より新式釀造法に改め、製品をカブトビールと銘名して市場に出すや、品質の良好能く世人の嗜好に適し、嘖々たる高評を博するに至れり。爾來益々品質の改善に努むると共に、各地に支店出張所を設けて鋭意販路の擴張に力を注ぎ、明治三十九年十月資本金を三百萬圓に增加して社名を日本第一麥酒株式會社と改稱せしが、四十一年七月更に加富登麥酒株式會社と改め、財界の雄鎭根津嘉一郎氏入つて之れが經營の衝に當る、是に於て乎同社の陣容旣に成り、縱橫に活躍するに及んでカブトビールの名勢愈々擧り、社運旭日昇天の概を示せり。後ち大正十年九月三社合併を動機として獨逸技師ハンスダアーン氏を聘し、最新最高級のユニオンビールを釀造發賣するや、品質の純良卓出せるを以て一般の信用を博し、其の名勢益々擧る同社製三ッ矢印飲料の源泉は、兵庫縣川邊郡多田村に湧出するもの、今を距ること九百五十年前、圓融帝の御宇天錄元年源滿仲居城を此地に構へ、一日鷹狩の途次始めて之れを發見し、其の子賴光此の鑛泉に浴して病を治せし以來、其の名遠近に喧傳し、多田靈泉として四時浴客絶ゆることなかりしといふ。德川の末葉此の地著しく衰頽して往昔の盛況亦見ることを得ざりしが、明治十四年英人理學大家ガクン氏此の地に狩獵の際此の源泉を掬して理想的飲料鑛泉なりと賞揚したる結果、其の所有權獲得の競爭起り、遂に三菱家の所有に歸せり。越えて十七年同家は平野水として始めて之れを世上に發賣せしも、當時本邦に於ては未だ鑛泉飲用の習慣なく、其の需要は僅かに居留外人の一部に留まり、固より收支相償ふに至らざりき。後ち明治屋店主磯部氏該鑛泉を買收して熱心販路の擴張に努めしも、時運尙ほ到らず、更に川久保某の所有に歸せしが、偶々明治三十年宮內省侍醫局山田藥學博士本邦各地の飲料鑛泉を視察分析の結果、本泉を東宮殿下の御飲料品として採用せられし以來、稍々社會に認めらるゝに至りしも、經營宜しきを得ず、頗る苦境に陷れり、故中谷整治氏之れを遺憾とし、明治三十八年三ッ矢平野水鑛泉合資會社を組織して之れが經營の任に當り、拮据大いに努む、後ち孔雀印平野水商會を合併し、更に濱口吉右衛門、和田豐治、平賀敏諸氏の後援を得て、明治四十一年一月資本金六十

萬圓の帝國鑛泉株式會社を設立し、大いに規模を擴張して一年年間の販賣高二百五十萬本を算するに至れり。爾來時代の推移に伴ふて鑛泉の飲用益々流行し、從つて三ッ矢印飲料の需要は殆んど級數的增加を示して、六ヶ年後には一ヶ年間一千二百萬本の販賣高を見るの盛況に達せり、次て大正八年十一月資本金を百五十萬圓に增加し、同十年三社合併に依りて其の事業は當社の經營に歸せり、現時其の年產高二千五百萬本なるも、其の需要は年と共に增進して殆んど止る所を知らず。同社は斯くの如く他に類例無き優秀なる源泉を有するのみならず約九千坪の大地域を利用して壜詰室、洗ひ室、栓水及び荷造室等完全なる設備を有し內部の裝置は悉く最新科學の粹を聚めて品質の改善に餘念無く、且つ檢水殺菌を完全にし、更に同社の主眼とする衞生思想を徹底せしむる爲めに洗壜室には縱斷室より成る自働消毒洗壜機を据付け、第一室は華氏七十度の苛性曹達、第二室は華氏百十度の苛性曹達溶液にて洗淨し、第三第四室に於ては熱湯を以て消毒を行ひ、洗壜機を出づると同時に壜は新工夫になれる自働ブラシにて外部を掃洗せられ、更に自働洗淨機を以て壜の內部を三洗したる後、初めて最新式自働壜詰機にて壜詰したるものなれば、三ッ矢清凉飲料水は世人信用の的となり、旣に英領印度、麻尼剌、其他南洋諸島、香港、上海等にも多大の輸出を見るに至り、英佛品に比して毫も遜色を有せざるのみならず、寧ろ彼れに優るものありと稱せらるる近時清凉飲料水製造事業の勃興に伴ひ、其の競爭益々激烈の度を加へたるも、財界の不振とは自然其の價格をして低下するの止むを得ざるに至らしめしも、獨り當社の三ッ矢印が良く市價を維持して而かも需要の遞增を示しつゝあるは、蓋し其の品質の一頭地を拔けるに由ること論を俟たず。當社製壜部の前身たる日本製壜株式會社は故中谷整治、山本爲三郎、和田豐治、濱口吉右衞門、山名次郎、桑原虎治　故町田重備、堀四郎、木村平右衞門、故川崎榮助、岸禧一等實業界錚々の諸氏に依りて發起せられ大正七年十一月資本金二百萬圓を以て會社を設立せしもの、本店を東京市日本橋區小網町に置き、工場を兵庫縣尼ヶ崎市初島に設け、專ら帝國鑛泉株式會社用サイダー壜の製造に從事せしが、這般三社合併に依りて其の事業は當社に移れり、同工場にはオニール式及チンチ式等精巧なる製壜機を設備し、生產能率頗る大にして、比較的廉價に優良品を製造しつゝあり　ビール及清凉飲料水等の販賣價格の三分の一は、實に其の壜價に在りといふ。蓋し當業者が常に低廉にして且つ優良なる壜を得るに苦心しつゝある所以、模範的製壜工場を有する當社が、每期卓絕せる業績を擧げつゝある亦怪むに足らざるなり。近年本邦に於ける麥酒及清凉飲料水の需要益々增加し、旣設工場の生產能力を以てしては、到底其の需要に應じ得ざるの狀勢を呈せり、想ふに之れが嗜好者は今後更に激增を見るべく、玆に想到せる當社は曩に東京工場の新設を決議し埼玉縣北足立郡川口町に之れを建設すべく着々準備中なりといふ、當社今後の活躍大いに見るべきものあらん。

※

戸畑鑄物株式會社、帝國鑄物株式會社、共立企業株式會社、中央火災傷害保險株式會社各取締役社長、久原鑛業株式會社、東洋製鐵株式會社各取締役

鮎川義介君

明治十三年十一月六日生
東京市牛込區市ヶ谷左內町三十六番地
電話牛込特長二八七六番

深遠なる學識と非凡なる手腕とを有し、實業界に活躍して重きを爲せる鮎川義介君は明治十三年十一月六日を以て生る、抑々鮎

川家は長州萩藩の名家にして代々毛利氏に仕へ、郡奉行の要職に在り、爾來相承けて嚴君に及ぼせり、君天資俊雋、然かも累代傳はれる家風庭訓の感化を被り、愈々玉質は研磨せられて光彩を發揮し、年少の頃より超凡の風あり、小中學校の課程を履み更に高等學校を經て東京帝國大學工科大學に入り、機械工學科を專攻して明治三十六年其の業を卒る、成績優秀、同學の間に其の將

來を囑望せられたり、卒業後聘せられて芝浦製作所の技師となる、大いに重要せられて內外の信望一身に集まれり、然れども君は鑄物事業に熱心なる志望を寄せ、獨立創業、自由に手腕を發揮せんとするの念急なるものあり、先づ歐米の斯業に就て研究すべく、同所を辭して渡米するに至る、滯米中は具さに其の現狀を研鑽し、最新の趨勢を審かにして得る所尠なかりき、次で歐洲の各國を巡遊して歸朝す、即ち其齎せる所の抱負に依つて福岡縣戸畑町に資本金二百萬圓全額拂込を以て戸畑鑄物株式會社を設立し、其の成立と共に取締役社長として內外の經營に任じ、更に同縣若松市に資本金二百萬圓半額拂込の帝國鑄物株式會社を創立し其の社長に推され、今や兩社共業運隆々として盛大を極めつゝあり、思ふに我が國の鑄物工業は近年長足の進歩を爲せりと雖も尙ほ之れを歐米の斯業に比較して遜色あるは事實なり、其の原因は多々あれども當業者に科學的智識の乏しきものあり、徒に舊慣を守るに過ぎざるは其の弊の主なるものと認めらる、君の如き人材を有するは實に斯界の至幸と云ふべく、將來の改善進歩は君に待つ所頗る大なりと謂はざるべからず、君又前記の外、現に共立企業株式會社（資本金五百萬圓）中央火災傷害保險株式會社（資本金五百萬圓）各取締役社長、東洋製鐵株式會社（資本金四千萬圓）久原鑛業株式會社各取締役として、本邦實業界の重鎭たり、因に君の令姉は、實業界の名流木村久壽彌太氏に、又令妹は鑛業界の傑物久原房之助、貝島太市氏に嫁せり、斯の如く實業界に有力なる關係者を持する君が、各方面の大會社の樞機に參して重きを致せるは當然なりと云ふべく、前途大いに期待すべきなり。

※

デパートメント、ストア

株式會社 **三越吳服店**

本店 東京市日本橋區駿河町自七番地至十二番地
電話本局 四百番ヨリ四百四番 四千番ヨリ四千二十番
京都支店 京都市上京區室町通二條上ル
電話長上三〇五、一四四一、二六九〇番
大阪支店 大阪市東區高麗橋二丁目六十三番地
電話本局 三五四〇番ヨリ三五四九番 五五〇〇番ヨリ五五〇五番 五五五〇、三〇一三番
大連出張所 大連市大山通リ
桐生出張所 群馬縣桐生市
京城出張所 朝鮮京城本町
會社創立 明治三十七年十二月
資本金 一千二百萬圓
重役 專務取締役倉知誠夫、常務取締役小田久太郎、同松田政臣、同濱田四郎、取締役中村利器太郎、同朝吹常吉、同笠原健一、同酒井良明、同藤田一松、監査役鈴木梅四郎、同柳莊太郎、同山岡才次郎

三越吳服店の名は世界的に知らるゝに至れりと爲すは敢て誇張の言にあらず、恐らくは其の內容これに相當するものあるは實際を目擊する者の何人も首肯する所たり、蓋しデパートメント、ストアの語は邦人に頗る耳新しき感ありと雖も、同店が屋號を越

後屋と稱せる天和二年の頃より旣に其の組織を胚胎せるものにして、本邦に於ける斯業の嚆矢たり、更に其の創業の始めに遡れば、三百年に垂んとする歷史を有し、商界屈指の老舗たり、現今日本橋の要衝を占む る六層白煉瓦の大建築は、總建坪三千二百坪を算し、組織の整然たる、最新の裝置を悉く利用せる、殆んど間然する所なからんとす、商品は日用炊事の家具より萬金を投ずるも尙購ひ難き貴金屬に至るまで、其の實用品と裝飾品とを問はず、總ての百貨を網羅して需要者の採擇を待てり、市內は特設せる機關を以て配達し、地方は買客の希望に依りて適切なるものを選定して迅速に送達を圖る、自ら店頭を訪へば一瞬にして全生涯の用度を辨ずべく、遠隔の地に至るも克く敏捷なる店員の活動に依つて帝都の新流行品を購ひ得べきなり、然かも尙各樞要の地に支店又は出張所を設けて買客の便に供す、眞に此の周到完備せる營業法は、繁忙を極むる都市生活者の爲めには多大の利便を提供するものとして、文化生活に缺くべからざる機關たり、店內常に雜踏、眞に人を以て埋まるの盛況を呈するは、蓋し故なきにあらずと云ふべきなり。

※

藤倉電線株式會社

本社及第一工場 東京市深川區平久町二丁目七番地
電話本所 三七一、三七二、三七三、三一九八番
第二工場 東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町九百二十二番地
電話番町 五八六、三五三番
創立 明治四十三年四月
資本金 五百萬圓
製品種類裸銅鐵線、電車線、ゴム被覆線、木綿被覆線、電信電話用線、陸軍用電線、海軍用電線、被鉛裝纜電線、動力用紙ケーブル、通信用紙ケーブル、絹絹捲線、アスベスト編組線、エナメル線、ヴアニスト、キヤンブリツク、ケーブル、其他各種電線附屬器具一切
重役 專務取締役社長松本留吉、同常務取締役岡田顯三、取締役青山祿郎、同湯澤寬吉、監査役秋山武三郎、同利光平夫、同田代常

電線製造業者として藤倉電線株式會社の盛名は頗る江湖に喧傳せらる、同社の起元は實に明治十八年の頃、故藤倉善八氏が絹綿捲線の製造を開始せるにあり、爾來幾多の苦心を累ね、種々の變遷を經て明治二十三年護謨被覆線の製造を企つるに至れり、當時現社長松本留吉氏米國より歸朝し、共力其の研究に從ひ、漸くにして明治二十六年始めて之れを製出するを得たり、蓋し我が國に於ける嚆矢と爲すべく、前途に多大の光明を認めたり、然るに之れより先斯業

研究の爲め米國に渡航せる岡田顯三氏も三十三年八月歸朝し、愈々陣容を整へて大雄飛を試んとするの際、創業者藤倉氏の病歿となり、一頓挫を來せるは遺憾なりしと雖も、更に松本、岡田、中內、兵藤、井上、岩上の諸氏相謀りて其の遺志を體し、合名會社を組織し、新に護謨引防水布製造業をも兼營す、其後社員の奮鬪に依りて年と共に增資擴張を斷行し、四十三年四月電線製造業の部を株式會社に改め、資本金を五十萬圓と爲せり、而かも電氣事業の進歩は頗る急激にして、日に新たなるの狀にあり、翌四十四年九月には更に五十萬圓を增資して一百萬圓全額拂込となし、工場の設備を改善し、最新の機械を裝置して從來の製品に大改善を加ふると共に、多くの新製品にも着手し、今や總資本金五百萬圓を有し、本邦電業界に多大の貢獻を爲しつゝあり、想ふに藤倉電線株式會社の名聲は斯界の信

賴を表徴するものにして、創業以來今日に到る當事者の努力は、此の光輝ある結果を齎せり、吾人は我が國文化伸展の爲め同社の隆昌を冀望して止まざるなり。

※

帝國製麻株式會社

本　社　東京市日本橋區裏河岸自第十七號至廿號
電話本局　長九二二、一一八八、一五七五、二一二四番

支店並ニ製品工場及製線工場本部
- 大阪府西區靱北通一丁目二番地　電話長土佐堀一五二六、一五八三番
- 北海道札幌市北七條東一丁目　電話札幌一〇三番
- 横濱市本町一丁目　電話横濱八番

大阪製品工場　大阪府西成郡傳法村北一ノ一七二番地　電話長土佐堀四五八、一三六二番
外製品工場　大津、鹿沼、日光、札幌
製線工場　二十七ヶ所

創立　明治四十年七月
資本金　三千萬圓
重役　取締役社長安田善助、常務取締役雜賀良三郎
同兼工務部長阪本三郎、同兼技術部長鈴木鈴馬、取締役男爵大倉喜八郎、同大橋新太郎、同安田善次郎、同兼製線本部長農學博士平塚直治、監査役小澤七兵衛、同上野榮三郎
大阪製品工場長中井嘉兵衛

製麻業界に拔群の勢力を有し、事業隆昌を極めつゝある帝國製麻株式會社は、明治十九年を以て創業せる近江麻絲紡織株式會社に其の端を發せり、抑も近江麻絲紡織株式會社は我が國に於ける機械力製織業の嚆矢にして、本邦麻絲業史上に赫々たる功績を有するものたり、明治三十六年七月同社並に次で設立せられたる大阪麻絲株式會社、下野製麻株式會社の三社を合併して日本製麻株式會社と稱し、更に明治四十年七月北海道製麻株式會社を併合して、玆に現在の帝國製麻株式會社となれり。大阪、札幌、横濱の三支店及び大阪、大津、鹿沼、日光札幌の各工場、北海道、青森、岩手其他各地方に於ける二十七ヶ所の製線工場を有し麻絲、麻織物並に製造加工販賣を營み、麻の葉、鯱、王冠、十錨、獅子、鹿、金牌、錨、地球、鷄、鳩、松、日の出、鶴、扇等の商標を附し、需要年と共に增加して、其の繁榮同社の右に出づるものなし、規模の堂々たる眞に偉觀と稱すべきなり、重役は何れも大實業家を網羅し、基礎の確實なること亦他に隔絶す、而して技術家も亦斯界の俊材を集め、殊に大阪製品工場長たる中井嘉兵衛氏の如き、經驗、學識、手腕、何れも間然する所なく、斯界に重きを爲しつゝあり、誠に同社の如きは斯業の權威にして、國家產業の爲めに貢獻する所大なりと云ふべきなり。

味の素本舗化學工藥藥品輸出入商

株式會社　鈴木商店

本　店　東京市京橋區南傳馬町一丁目十三番地
電話京橋三三〇、三三一、三三二、三三三、五三五、四七三一番

支　店　大阪市北區鳴尾町十番地
電話長東三三一六、三三一七番
名古屋　名古屋市中區南瀛宜町二ノ三六番地
電話本局七一一三番
出張所　神奈川縣川崎町
電話川崎六三〇番

工　場
- 同縣葉山村
- 電話葉山二番

創立　大正六年六月十七日
資本金　三百萬圓
重役　取締役社長鈴木三郎助、專務取締役鈴木忠治
取締役鈴木百太郎、取締役鈴木三郎、同鈴木六郎、監査役青木大三郎、同太田惣七、支配人高梨新三郎

世界獨歩の稱あるのみならず、日、英、獨、佛、米各國の專賣特許權を有し、眞に名實兼ね備りたるものは『味の素』なりとす、學名をグルタミン酸ナトリウムと稱し、東京帝國大學教授理學博士池田菊苗氏の發明する所、明治四十二年七月を以て社會に發表せらるゝや、好評嘖々、調味料にして缺くべからざるものとせられ、忽ち各國の特許を得るに至れり。同品の發賣元株式會社鈴木商店は、元現社長たる鈴木三郎助君の個人經營にして、明治二十年來沃度及加里鹽類の製造に從ひ、我が國に於ける斯界の鼻祖たり、業務年と共に進みたるに『味の素』を發賣するに至るや、忽ち俄然として隆運を來し、大正元年合資會社に組織を改め、規模を擴張せるも、急足の發展は大正六年六月更に株式會社に變更せしむるの機運を生み、今や『味の素』の製造を主とし其の副產物たる澱粉、子供印滋養飴、醬油着色料カラメル、並に沃度の製造販賣を爲し、神奈川縣下に於ける川崎、葉山の兩工場及び大阪支店、名古屋出張所等を有し、盛んに生產しつゝあり、今や山村僻地と雖も之れを知らざるはなく、進んで歐米各國支那、南洋其の他にも輸出せられ、我が國に於ける化學工業製品中世界的名聲を博せる屈指のものたり、蓋し同商店は鈴木一家の人材を網羅し、一致協力經營に任ずる所にして、『味の素』の全く他品の企及す可らざる特色を有すると共に、會社自ら亦到底尋常營利の徒の集合にあらざるを以て、社業の進歩斯くの如きは寔に故ありと云ふべきなり、思ふに斯くの如き文化的製品は、將來益々需要の增加すべきは敢て多言を須ふるの要なかるべく、其の發展は容易に測り知るべからざるものあらん。

※

醫療器械商　瀧口商店主

瀧口勝太郎君

明治四十一年十月生
東京市日本橋區本石町四丁目十九番地
電話長本局七六九番

醫療器械商を營みて帝都の中心たる日本橋區本石町に堂々たる店舗を構へ、業務殷賑を極むる瀧口商店は、先代瀧口勝之助氏が夙に俊敏の資を以て經營に從ひ、同業を壓倒するの勢を爲せるも、不幸にして同氏は先年病歿せられたるを以て君其の業を繼ぐ醫療器械も驚くべき進歩を示し精巧嶄新、優秀なるもの頗る多きは事實なりとす、我が瀧口商店の取扱ひに係るものは、何れも斯界の代表的權威を有する獨特の器械にして、需要內地は勿論、海外殖民地其の他に及びて廣汎なる範圍を保持す、然かも年々歲々發展を遂げて、每年の總販賣高巨額に達し、斯業界に重きを爲せり、君は未だ獨立の年齒に達せず、專ら學業に親しみ、且つ店務の實際を修習せるも、先代に肖て天稟の才能を有し、資性慧敏、學友の間に神童の稱譽を博し、學業の傍ら常に家業の隆昌に意を注ぎ、精勵努力些も怠らず、其將來有爲の人材を以て囑望せられつゝあり、成人の曉に於ては、克く先代の遺志を體して家業を大成せしむること期して待つべきのみ、現後見人たる清三郎氏亦頗る手腕に富み、且つ誠實を以て稱せられ、年少なる店主を輔けて先代の名聲を失墜せざらんことを期し、勵精無比と稱せらる、同店の爲めに大いに祝福すべきにあらずや思ふに瀧口商店は前途益々多望にして、店主の成人と共に無限の幸福を胚胎すと云ふべきなり、願くは將來ある勝太郎君の發奮を希望して止まざるなり。

※

美顔化粧料發賣元

桃谷順天館

本　店　和歌山縣粉河町
支　店　大阪市西區靱南通二丁目三番地
電話長土佐堀六四七、六四八番
出張所　東京市日本橋區本町四丁目十二番地
電話長本局二三〇、六二六、六二七番
東京市麹町區有樂町一丁目三番地
電話丸ノ内六五九番
第一工場　和歌山縣粉河町
第二工場　大阪市南區餌谷仲之町三十九番地
電話南四八二七番
第三工場　同市東區玉造
館主　桃谷政次郎、副館主桃谷順一、研究試驗部長藥學博士桃谷幹次郎

化粧品界に於て科學的研究の下に優秀なる製品を出し、其の名聲嘖々、殆んど斯界を風靡せんとするの狀にあるは、先づ第一に美顔化粧發賣元たる我が桃谷順天館に指を屈すべし、館主桃谷政次郎君は實に名門の出にして、其の祖先は織田信長の重臣桃谷與次郎忠正に發す、天正十八年紀伊國粉河の地に居を定め、家系連綿として君に及べるもの、君は夙に大阪の鴻儒南岳藤澤先生の門に在りて漢學を修め、後、和歌山藥學校に入りて斯學を研究す、明治十五年藥用美顔水を創案し、同三十五年更に化粧用美顔水其の他を發賣するに至れり、當時幼稚なりし我が化粧界はこれに依つて大いに覺醒せられ、販路の增進俄然として加はり、遂に粉河本店にては經營上の不便を感じ、同三十八年大阪に出張所を設け、大正三年更にこれを支店として規模を擴張せり、然かも更に科學的研究を加へて、優秀なる化粧料を世に供給すべく桃谷研究試驗部を置き、專門の博士學士を多數招聘して常に研究を試みつゝあり、今や美顔白粉、肌色美顔白粉、淡紅色美顔白粉、化粧用美顔水、顔洗粉、美顔ユーマー、美顔石鹸、美顔クリーム、固煉美顔白粉等を初め、香水、香油、齒磨等の製品は到る所に歡迎せられ、支那、南洋、南米等にも輸出せられて、本邦化粧品の爲めに萬丈の氣を吐きつゝあり、殊に大正五年より高貴御用に供する爲めに研究試驗部内に御用品謹製室を特設するに至れるは、同館の光榮として特筆すべきなり、今や各地に支店出張所を置き、又多數の工場を有し、業務隆々たり、副館主には桃谷順一氏、研究試驗部主任には藥學博士桃谷幹次郎氏之れに當り何れも俊秀の資質を以て業務に執掌しつゝあり、蓋し同館の前途愈々多望にして永く斯界の權威たるべきは疑を容れざる所也

池田豁二君

東京藥品株式會社々長、高田商會常務理事、高田鑛業株式會社、帝國貯蓄銀行、株式會社荒川製作所各取締役、工學士
東京市本郷區湯島三組町三十番地
電話下谷一八七番

貿易業界の雄鎭として名勢藉甚たる高田商會の常務理事池田豁二君は、同商會の創立者たる故高田愼藏氏の義弟たり。夙に化學界に趣味を有し、東京帝國大學工學部應用化學科に入學して斯學を研鑽すること數年明治四十年優秀の成績を以て學業を卒はるや、直に高田商會に入つて社長を補け、社業の發展に盡瘁するところ頗る多し。幾許も無くして理事に擧げられ、更に大正六年同社の鑛業部を分離して高田鑛業株式會社の創立せらるゝや、君推されて其の取締役に任じ、同年又同社の旁系に帝國貯蓄銀行を加ふに際して、君其の取締役に擧げられ七年同商會に於て株式會社荒川製作所を設立するに及び君復た其の重役に推擧せらるし、中等品中の代表的逸物たるの稱あり、從來各種の博覽會又は品評會等に出品して授賞せること十數回、常に最高の名譽を表彰せられつゝあり、現下、織機二十一臺を据付け、三十餘名の工場員を使用し、年額七千反餘を產出す、然かも業務愈々發展するの一途にして、近き將來に於て工場を擴張するの計劃あるを以て、一萬反を突破するも蓋し遠きにあらざるべし、目下東京、京坂の三大都市、其の他需要の範圍頗る廣く、供給に追はるゝの狀にあるは、獨り君の爲めのみならず、米澤織物の爲めに大慶と云ふべきなり、君資性着實にして熱誠、目今廣幅織に就て研究を試み、苦心の結果漸次に完成の域に近づきつゝありと云ふ、其の發表せらるゝの曉に於ては、斯界を裨益する所尠少なからず、君尙前途春秋に富む、今後の活躍大いに期待すべきにあり。

鈴木駒吉君

山形縣米澤市信夫横町
電話米澤五二四番
明治二十四年生

名君の治績は炳手として千古に傳はり、赫々の光輝は悠久に絶えざるものあり、米澤機業界が今日の如く發達を爲し、其の名聲を喧稱せらるゝ所以は、蓋し鷹山公の如き偉大なる藩主を有したるに因るなり。然りて明治の初年に於ては、尙家庭的小工業に過ぎざりしと雖も、今や其の規模頗る擴張せられて面目全く改まり、亦昔日の面影なからんとするの盛況にあり、就中鈴木駒吉君の如き斯界の錚々なる人材として知られ、少壯新進の鋭氣を以て經營に當り、業況刮目に値ひす、抑も鈴木家の斯業創始は、君の誕生せる翌明治二十五年にあり、先代は奮鬪努力の人、舊藩士たる名家の出なれども、斯業に對して卓拔なる見を有し着々歩を進めて罕乎たる地磐を築くに至れり君亦夙に山形縣立工業學校に入りて專攻する所あり、明治四十一年其の門を出づるや、工場の改善を圖り、生產の增加と品質の向上に留意し、年と共に顯著なる實蹟を示して、男向着尺にては嶄新なる製品を出

是に於て乎、財界に於ける君の地位の向上を見ると共に名望益々加はり、大正八年六月資本金二十萬圓を以て東京藥品株式會社を創立し、君其の社長として同社を主宰經營するに至れり。同社は東京府豐多摩郡中野町に工場を置き、各種藥品の製造に從事するもの、其の業は實に君の專攻學科に對する試金石ともいふべく、從つて其の經營上に關する君の努力苦心は筆紙の良くする所に非ず。今や同社製品の純良卓拔なること漸く斯界に認められ、其の販路愈々擴大して嘖々の高評を博し、社業の進展當に順風滿帆快潮を走るの概を示しつゝあり、之れ蓋し君が努力の反映と見るべく、又其の經營的手腕の凡庸ならざるを立證するものといふべきなり。世の所謂技術者なるものは頭腦緻密の士尠なからずと雖も、常識の發達せざるの士多く、從つて事業の經營に至りては頗る拙劣なりと稱せらる、然るに君は技術家にして而かも經營の才に富む、之を以て見るも、君が非凡の才幹を擁する の士たるを知るべきなり。君や年齒尙壯、前途洋々として春海の如し、冀は、更に自重加餐せられ、本邦實業界の爲めに滿腔の努力を吝まれんことを。

早川市太郎君

尾張屋本店主
明治二十六年三月十五日生
東京市淺草區西鳥越町二番地
電話下谷五一八四番
工場　福岡縣壹岐島

明敏なる頭腦を有して常に海外の大勢を察

し、內地の需給を考へて機宜の施設を謬たず、業務の發展刮目に値ひする尾張屋本店主早川市太郎君の如きは、眞に世に傳ふべきの偉材たらずんばあらず、君は東京の人早川伊三郎氏の三男にして、明治二十六年三月を以て生る、小學校を卒りて大阪に本店を有する永廣堂東京支店に勤務すること十有二年、其の間東京市立商業學校及び正則英語學校に學ぶ、之れ他日の雄飛に備へたるものにして、君の大志を想ふべきにあらずや、大正五年獨立して現所に業務を開始し、新進の店舗として異數の發展を觀るに至れり、元より其の修養時代に於ける經驗と研究に因由するもの、之れに加ふるに孜々として倦まざる努力と、卓拔なる才幹に依りて、巧みに時の利を捉へたるとにあり、蓋し歐洲大戰中に於ける君の活躍は同業の驚嘆せる所にして、縱橫に手腕を發揮し、遺憾なき効果を收むるを得たり、香料は直輸入を主とし、國產をも取扱ひ、三大都市は勿論、北海道其の他に供給し、製菓清凉飲料業、製造業者の大商店に得意を有す油に就ては特に山○印椿油を自家工場にて生產し、同油中の逸品として推稱せらる尙ほ福岡縣臺岐島の同工場は嘗て山丸製油所と稱し、同地の二三業者が經營する所なりしが、君それを買收して更に設備に擴張を加へ、今日の如き完全なる裝置を有するに至れり、現營業所に近接して壯大なる商品倉庫をも有し、總ての機關全く備はり、君は多數の外國新聞雜誌を熟讀して、常に海外の事情を調査し、以て業務の發展に資しつゝあり、之れ君の趣味とも稱すべきなり、夫人は美子と稱し、神奈川縣立高等女學校出身の才媛にして、二男一女あり、平和多幸なる家庭にして羨望せらる、君尙前途春秋に富む、眞に期待すべきは寧ろ今後に存す、大いに自重せんことを。

※

拓殖事業

東洋拓殖株式會社

東京市麹町區有樂町一丁目一番地
電話 丸ノ內 一三六〇、六六四、八八二、一八六〇、一八六一番
創立 明治四十一年十二月
資本金 五千萬圓

役員 總裁石塚英藏、理事子爵松平直平、同川上常郎、同人見次郎、同夏秋十郎、監事島德藏、同福本元之助、同趙鎭泰

輓近本邦の人口增加率は眞に驚嘆に値するものあり、今や廣袤四萬五千方里の邦土上に於ける我同胞實に七千萬人に達し、其の密度は世界罕に見る所なると共に、邦人の海外移住發展が刻下の急務なるは言を俟たず、東洋拓殖株式會社は海外拓殖事業を目的とし、明治四十一年十二月資本金一千萬圓を以て、政府保護の下に創立せられしもの、當初宇佐川一正氏を總裁に任じ、移民區域を朝鮮に限定せしが、大正六年第三十九議會に於て拓殖會社法を改正し、營業地域を擴張したるを以て、同社は南滿洲にも其の勢力を伸張し、更に進んで支那以外の外國移民に對しても拓殖資金の融通を爲すに至り、大正七年資本金を二千萬圓に增加し、同八年再び增資して總資本金五千萬圓を擁するに至れり。最近の調査に依れば同社の事業用地は九萬九千四百八十町歩餘に達し、大正九年度に於て、蘭領南ボルネオ島バンジャルマシンに約一萬二千町歩の土地租借權を取得せり、而して既に內地より移民を送ること三千九百五十一戶、貸付移住費二千六百五十三口二十七萬九千五百五十七圓餘を算す、今後の發展殆ど豫測すべ

からず。其の移住民に對しては或は種苗肥料農具等の貸付をも行ひ、或は耕作の改良造林及竹林の植栽を奬勵する等殆んど至れり盡さゞる無し。財界の不況に際して失業蹉跌に泣き、或は又猫額大の土地に於て私利私慾にのみ汲々たる地主と爭議を事とするが如きは日本男兒の本懷に非ず、小作農民の如きは、須らく鵬翼を伸し萬里の志を立て、行て海外の曠野を開拓すべきなり。當社は移住者の萬全を保障して後顧の憂ひなからしむべし 尙ほ同社は現時東京市に本社を、朝鮮京城、南滿洲奉天、關東洲大連の各地に支店を置き、京城、水原、江景其他十數ヶ所に出張所を設置す。

※

東京小間物製造同業組合長
東京小間物卸商組合評議員
小間物卸商 町田商店主

町田駒吉君

明治二年一月十二日生
東京市日本橋區矢ノ倉町十四番地
電話 浪花 四一九九番

帝都小間物業界に人材を求むれば、其の數甚だ少からざるべしと雖も、就中卓然時流を拔きて異彩を放てるは東京小間物製造同業組合長にして同卸商組合評議員たる町田駒吉君の如き、亦其の第一人たるべきなり

君は東京の人、明治二年一月十二日を以て生る、幼時より斯業に志望を有し、普通學を修むるや、即ち同業の先業に就きて其の實際を研究す、明治三十二年三月、愈々獨立の機到來して小間物卸商を創業す、爾來業務年と共に向上して現下斯界の巨商を以て認めらるゝに至れり、其の取引先の多方面なる、大阪、京都、名古屋以東より、更に東北、北海道に及び、尙ほ益々擴大されつゝあり、店員二十餘名、其の筆頭たる關口藤次郎氏の如きは、創業當時より引續きて勤務し、業界に知られたる篤實の人たり而して專屬の工場は五十餘戶、製品を日々店頭にもたらすもの山積すれども、然かも忽ちにして雲散霧消するの狀は實に壯觀にして、其の需要の激甚なる實に驚くべきものあり、君今や斯界の重望を受けて組合長に推され、大正五年以來每期改選せられ、卸商組合評議員たること、亦既に數年に及ぶ、思ふに君の今日を觀るものは、單に成功の半面のみを知りて、多年粒々苦心せる所を察せざるべしと雖も、決して偸安逸樂時運を僥倖せるにあらず、蓋し慘憺たる努力の結晶にして、眞に尊敬に値ひするものなくんばあらず、君資性剛氣果斷、容易に他に許さゞる所あるも、亦一面に於て頗る情味に富み、人を遇する極めて寬容なり、關口氏の如き永年の勤續店員を有するは即ち此の消息を實際に證するものにして、君の人と爲りの一端を窺ふに足るべし、願くは更に業界の爲めに自愛せられて、益々貢獻せられんことを切望して止まざるなり。

※

紡績業

鐘淵紡績株式會社

本社 東京府南葛飾郡隅田村
電話 墨田 特長二〇九、二一〇、二一一、二七一、二七二、二七三
神戸 神戸市東尻池村外一三
營業部
電話 本局 一一四六、三〇八〇、七〇四、四五五〇、七〇二、七〇三、三〇八一、八五、二八三、八一九
大阪支店 大阪府東成郡城東村字鴫野三〇〇
電話 東三一九三、三七一九番
中島支店 大阪府西成郡西中島大字柴島番外一三〇
電話 東長五二、五〇〇二番
京都支店 京都市高野上閼町
電話 上五四〇〇、五四〇一、五四〇二、五四〇三番

三池支店　大牟田市明治町一ノ一
住吉支店　福岡縣筑紫郡住吉町
久留米支店　久留米市篠山町
熊本支店　熊本縣飽託郡春日町
中津支店　大分縣下毛郡豐田村
博多支店　博多市

創立　明治二十一年
資本金　一千七百九十二萬七千六百五十圓（內末拂込金百六十四萬六百八十圓）
重役　取締役社長武藤山治、常務取締役藤正純、同長尾良吉、取締役前山久吉、同山口八左右、同橋爪拾三郎、同福原八郎、同望月榮作、同名取和作、監査役平賀敏、同野崎廣太、同清岡邦之助、同安田善三郎、同宮田義文

本邦紡績業界の權威たる鐘淵紡績株式會社は、資本金千七百九十二萬七千六百五十圓日本國內の要所に本支店二十二ヶ所を有し工場數實に四十五、錘數五十三萬六千五百織機臺數七千七百臺、雇傭男女工無慮十萬人に達し、其の一擧手一投足は、我が對外貿易の趨勢を左右するの一大威力を擁す。抑も當社は資本金十萬圓を以て棉花賣買を營みたる東京棉商社に端を發せるもの、當初東京日本橋區本町に本社を置き、爾來時勢に適應せる經營宜しきを得て社運益々發展し、明治二十年資本金を一百萬圓に增加すると共に、附帶事業として綿糸紡績業を開始し、東京の北郊隅田村鐘ヶ淵に其の工場を設置せり。次て翌二十一年より紡績を專業とし　棉花賣買を廢止すると同時に現在の社名に改稱して、鋭意社業の發展に努力し、當初錘數二萬九千個に過ぎざりしもの、二十六年には第二工場を增設し、二十八年六月兵庫支店を設け、三十二年九月には上海紡績株式會社（今の兵庫第二工場）及河州紡績株式會社（今の住吉支店）を其翌十月柴崎紡績株式會社（今の中島支店）を、同十二月淡路紡績株式會社（今の洲本第一工場）を合併又は買收し、越えて三十五年九州紡績株式會社（今の三池、久留米及熊本の三支店）及び中津紡績株式會社（今の中津支店）を、同十一月博多絹綿株式會社（今の博多支店）を合併するに及びて資本金五百八十萬三千四百圓、總錘數二十一萬八千餘個を算するに至れり。次て明治四十年日露戰後斯業の一大活況を呈するや、資本金を千百六十萬六千八百圓に增大すると共に、定款を改正して各種糸布の製造又は機織物の販賣をも兼營するに至り、更に工場を增設して瓦斯紡績、撚糸紡績及び織布事業を開始し、資本金を千四百萬六千八百圓に增加せり。後ち數次の增資を行ひ、遂いに現今の總資本金一千七百九十二萬七千六百五十圓の尨大を致し、本邦紡績業界の第一位を占むるに至れり。而かも每期高率の配當を行ふて尙ほ餘裕綽々たるものあり。其の前途や眞に洋々乎として大海の如きものなりといふべき也。

※

日本橋區會議員、東京電機株式會社取締役
株式會社伊藤飛行機研究場取締役、合資會社スターメタル商會代表者、東京金物問屋組合副頭取、東京銅鐵問屋組合幹事、大日本鉛錫工業組合常務理事、秋田鉛管製造所主

勳八等　**秋田直吉君**

明治十二年一月二日生
營業所　東京市日本橋區小傳馬上町十六番地
電話神田長一三一五番、一三一六番
工場　東京市深川區新安宅町三十二番地
電話（工場專用）神田一三一六番

銅鐵錫鉛、亞鉛、アンチモニー等の地金及び鉛管、鉛板、錫管等の製造販賣を營みて業界を雄飛するの概あるのみならず、公共の爲めに盡瘁して聲望隆々たる秋田直吉君は東京の人、故秋田定吉氏の三男にして、明治十二年一月二日を以て生る、年少普通學を修了するや、東京市日本橋區小傳馬上町なる同業の先輩竹內喜三郎氏商店に勤務すること實に十有八ヶ年、後獨立して同區龜井町二番地に店舗を構へたるは明治四十年二月の事なりき、爾來業務は年と共に繁盛を來し、其の發展の速なる眞に驚嘆すべきものあり、偶々歐洲大戰に際會するや、縱橫に辣腕を揮ひて積極主義を執り、殆んど應接に遑あらざるの狀を以て躍進を爲し業界一流の巨商たるの地位を占むるに至れり、大正五年中同市深川區新安宅町に新設せる工場の如きは、最新の設計に則り、精巧なる機械を備へ、其の整頓せる點に於て

斯界の模範工場と稱せられ、從つて其の製品の優秀なるは言を俟たざると共に販路極めて廣く、全國各地の同業者、陸海軍、其の他諸官省、各都市の道路用として獨壇的地歩を占む、斯くして業界に重望を負ひ、同業各會社、各組合等の幹部たるのみならず、日本橋區會議員に擧げられ、區政の爲めに貢獻しつゝあり、先に明治三十一年兵役に服し、陸軍二等主計に任ぜられ、日露戰爭に從軍して殊功あり、戰後勳八等に叙せられ、一時賜金三百圓を賜はる、又君の光榮と云ふべし、夫人をこの子と呼び、一男一女あり、思ふに君の如きは敏慧にして活動を好む所、時代の要求する人材と稱すべく、然らざれば奚んぞ克く今日の如きを致さんや、而して書畫骨董等に趣味を有するは、一面に於て高雅なる人格の面影を髣髴するを觀るべく、之れ卽ち衆望自から聚る所以にあらずや。

※

石綿、石綿原料、グリセリン及油脂製造販賣

合同油脂グリセリン株式會社

東京市東京驛前丸之內ビルディング七七〇區
電話丸の內　長二四一〇番
特長二四一一、二四一二番
本社
工場　王子、本郷、本所、保土ヶ谷、佃、（大阪）兵庫

創立　大正十一年十二月
資本金　六百三拾萬圓（全額拂込濟）
重役及職員　取締役社長長崎英造、專務取締役營業部長長久伊勢吉、常務取締役製造部長兼兵庫工場長久保田四郎、取締役住田多造、取締役總務部長西村憲臣、取締役本所及佃工場長大橋退治、監査役金光庸夫、同楠瀨正二、總務部庶務課長井出鐵造、石綿販賣課長三木甚作、石綿原料販賣課長兼保土ヶ谷工場長長郷幸治、購買課長兼王子及本郷工場長小山田孝、製造部經理課長有川勇吉

縱橫に馳驅せんとする合同油脂グリセリン株式會社はスタンダード油脂株式會社及合名會社鈴木商店の經營せし硬化油工場竝に日本グリセリン工業株式會社の三事業を打つて一團とし大正十一年十二月資本金六百三十萬圓を以て創立せらる。抑もスタンダード油脂株式會社は、元鈴木商店經營の王子工場を基礎とし、一百五十萬圓の資本金を以て創

業せしもの其の製造に拘はるレコード石綿及硬化油は嘖々の好評を博し世既に定評あり。

般復た鈴木商店の保土ヶ谷及兵庫工場を同社の經營に移して總資本金四百二十萬圓とし更に日本グリセリン工業株式會社を合併して當社を成立す其の王子、本郷、兵庫、保土ヶ谷の諸工場に於て製せらるゝ硬化油は、鯨油、魚油其他一般植物油を原料として之れを製造し、其色純白にして惡臭なく、殊に融解點の如き任意に製造し得るの特徵あり。之れが用途は主として石綿原料其他蠟燭の原料及食料等に供し英、米、佛、南洋等に廣く輸出せ

らる。日本グリセリン工業株式會社は藤本友信氏の主唱に依り、大正五年二月資本金六百萬圓（拂込金四百廿萬圓を合同に際して二百十萬圓に減資す）を以て創立せられしもの、大阪府西成郡千舟村佃に本社及工場を建設し、更に東京市本所區向島中ノ郷町に分工場を設く。グリセリンは軍事上及醫療上竝に化學工業上必要缺くべからざるものなりと雖も、同社創設以前に在りては悉く之れを外國の輸入に俟ち、英國プライス會社製品を以て獨占せらるゝの狀に在りき。然るに同社は開業後鋭意良品の產出に苦心努力する所ありし結果、遂にプライス會社製品に比較して何等遜色無き逸品を製造し得るに至り、之れが輸入を防遏せり、其の功績や眞に偉大と云はずむばあるべからず。叙上の優秀なる工場を併合統一して業界に鵬翼を張らんとする我が合同油脂グリセリン株式會社の前途や、蓋し刮目して大いに見るべきものあらん。尙ほ同會社製品はレコード化粧石鹼、レコード洗濯石鹼硬化油、硬化蠟、ダイナマイト、グリセリン、局方グリセリン、工業用グリセリン、カンデリン、オレイン、ステアリン、ピッチ、タルゴー、石鹼原料脂肪酸、蠟燭及食用油脂其他十數種なりとす。

※ 市川留吉君

東洋硝化株式會社常務取締役

明治六年一月十九日生

住宅　東京市神田區小川町一番地
電話　神田三六四〇番
會社及工場　東京府下瀧の川中里八七九番地
電話　下谷五四四五番

硝化綿、セルロイド原料、塗料原料、バナマ帽、凝革其の他レーザ等を製出して、東京、大阪、名古屋、岐阜、岡山等の各地に廣汎なる販路を有する東洋硝化株式會社常務取締役市川留吉君は、京都府綴喜郡都々城村の人、市川市兵衛氏の三男にして明治六年一月を以て生れたり、夙に實業界に身を立てんとするの意あり、小學の課程を卒るや、東都に於て實務の鍛錬を經ると共に活動を試むべく上京す、先づ洋紙商の店務に從ふこと多年、後、獨立創業して次第に發展せるも、大正二年感ずる所ありて東京府下瀧の川中里八百七十九番地に市川化綿工場を設く、之れ東洋硝化株式會社の前身にして、爾來順潮に業務は進捗し、製造販賣の能率は年々向上せるも、更に資金を增加し、設備を充實するの得策なるを看取し大正八年有志を糾合して株式組織に改め、現社を創立するに至れり、爰に於て擧げられて常務取締役の重職に任じ、內外百般の經營に當り着々實績を擧げつゝあり、目下工場には男女工約四十名を使用し、技術主任に櫻井德太郎氏を擧げ、日々生產に追はるゝの狀を呈す、之れより先、君は別に單獨にセルロイド工場を市外日暮里町元金杉に創設したるが、之れ亦業況の進步著しきものあり、君は事業に熱誠を注ぐの外、特筆すべき趣味を有せず、即ち事業は君の生命にして又趣味たり、故に常に研究的態度を以て臨み、其の技術の方面に關しても殆んど專門家をして驚かしむる獨創の見を存す、從つて東洋硝化株式會社に於ても、將た又セルロイド工場に於ても、製品は優秀なるものを需要者に供給するを以て好評嘖々たり、又斯界の一偉器たらずんばあらず夫人みつ子、貞淑の主婦として令聞に富み一男あり、家庭亦圓滿和氣藹々たり、寔に羨望に堪へたり。

製紙用金網製造業

東洋金網製造株式會社

本社　東京府荏原郡世田ケ谷村池尻二〇四
電話　青山一六九二番
工場　東京府北豐島郡西巢鴨町池袋
電話　小石川二五〇五番

創立　大正七年九月
資本金　二百萬圓
重役　取締役社長八卷知道、專務取締役林譽四郎、取締役關原彌里、同遲塚安三、同田中末雄、監査役五十嵐榮一、同鑪田保吉

本邦に於ける製紙事業は近年急速なる進步を遂げ、斯業の發達は實に我が化學工業界罕に見る所なりと雖も、之れに要する機械及金網製造事業は尙ほ頗る幼稚にして、其研究は忽諸に付す可らざるの一大問題たり八卷知道君其他の有志は夙に本邦に於ける製紙用機械類の製造技術が不振なるを慨し、大正七年九月資本金二百萬圓を以て同社を創立し、製紙用金網製造業を開始せり爾來着々優良なる業績を擧げ、戰後財界の不振に際して、製紙事業の打擊を受くるや同社亦多少の影響を被りしと雖も、既に確實なる基礎を有せるを以て、社業漸次堅實を加へ、今や斯界に重きを爲せり。工場は創業當時東京府下世田ケ谷村に數百坪の敷地を買收して模範的建築を爲せしが、後ち社運の發展に伴ひ狹隘を告ぐるに至りしを以て東京の北郊西巢鴨町池袋に工場を增設したり。其の製品の卓絕せるは絮說を要せず、各製紙會社に特約を有し、一ヶ年間の製造高驚くべきものあり。同社今後の發展期して俟つべきなり。社長八卷知道君は仙臺藩士八卷新七氏の長男にして安政四年十一月生る、明治八年横濱に出て、米人バラ氏の門に入り英學を修め、後ち商業講習所に學び、業を卒はるや、三井物產株式會社に聘せられ、入つて同社員たり。次て第一銀行の招聘するところとなり、入つて同行四日市支店長に擧げらる。爾來實業界に活躍して各種工業會社に關與し、現に當社々長たるの外、日本坩堝株式會社及株式會社八卷回漕店監査役として名望甚だ高し。

※

絹糸加工艶糸製造

東京艶糸株式會社

本社及工場　靜岡縣富士郡吉原町六十番地
營業部　電話吉原五八番
工場　電話同二八番
出張所　東京市淺草區黑船町八番地
電話淺草二八〇〇、二八〇一番
群馬縣桐生市濱松町二丁目

創立　大正六年七月
資本金　壹百萬圓
營業課目　電線コード被覆用、織物原糸艶糸製造販賣
重役　取締役社長町田德之助、常務取締役渡邊定二、取締役大川直久、同町田德藏
監査役大橋光吉、同藤掛與左右衞門

製糸工業中、特殊の領域を占めて業況向上しつゝある東京艶糸株式會社は、本邦實業界の重鎭として聲望隆々たる町田德之助氏の計畫に依るものにして、大正六年七月を以て創立せられ、爾來順潮なる發展を遂げ今日の地步を有するに至れり、抑も同社が製作する所の艶糸は、綿糸に或る化學作用を以て加工を施せるものにして、電線コード被覆用、織物用、殊に帶地横糸、輸出向靴紐用等に用ひられ、就中、帶地用としては多大の需要を有せり、本社及び主要工場は富士山麓なる靜岡縣富士郡吉原町にあり出張所を東京市淺草區黑船町及び群馬縣桐

生市濱松町に設け、社員は男女工等を合せて二百名に垂んとし、問斷なき需要に對して、供給を圓滑ならしむるに努力す、更に各種工業の進歩と共に艶糸用途の範圍は益々擴大すべきを以て、やがて現在の規模は狹少を告げ、擴張を餘儀なくせらるゝに至るべきは必然の事實なり、同社が斯くの如き隆昌を招致せるものは、町田社長を初めとして各重役が、時運の趨向を察するの明識あり、總ての支障を打開して綽々たる手腕を望を負ふ偉材を網羅せり、特に常務取締役渡邊定二氏の如き、卓拔なる識見を有し、内外百般の社務を執掌して快刀亂麻を斷つの概あり、眞に東京艶糸株式會社の棟梁と謂ふべきなり、吾人は同社が將來益々進展して新地盤を開拓し、我が國産業の爲めに貢献する所多大なるべきを信じて疑はざるもの、茲に其の前途を祝福して止まず。

有するが故に外ならず即ち奮鬪の結果今日を致せるなり、各重役何れも實業界錚々たる人材にして、斯界に重

※

染色業京金染物店主
陸軍歩兵軍曹勳七等功七級

成田桑助君

明治六年一月十日生

名古屋市中區南伏見町二丁目七番地
電話 本局 三三五〇番

中京名古屋に於て金鯱城と共に夙に世に著聞せるは鳴海絞りにして、殊に近來益々其の聲價を發揮し來れり。之れ蓋し當業者多年の苦心研究に因る所勿論なりと雖も、亦我が京金號成田桑助君の如きあるありて、父君の代より染色の業に從ひ、專ら技術の改善研究に全力を傾注し鋭意斯業の向上發展に盡瘁せし功も決して尠少にあらざるなり。君は名古屋在知多郡東浦村の出身、成田金次郎氏の長男にして明治六年一月を以て生る、幼にして覇氣あり、長ずるに及び實業界に志を抱き、將來大いに爲すあらんと欲す、明治二十五年偶々父君手拭、判天、風呂敷等の染色業を創始するに及び、君亦克く家業を援けて業務の發展に資すると共に、技術の練磨に努め以て他日の活躍に備ふる所ありしが、明治四十五年五月不幸にして父君金次郎氏の長逝に會し、君奮然起つて家業を繼承し一家經營の要衝に當る、爾來春風秋雨幾星霜、日夜黽勉家業の繁榮興隆に努め寧日なきものゝ如し、故に其の業年と共に發展し、聲望隆々として他を壓するの概あり、惟ふに斯の如きは蓋し當然の結果なりと謂はざるべからず、今や各所の注文殺到して日々繁激なる業務に逐はれ、取引亦た頗る廣汎に亘りて近隣の諸縣に及び、業蹟同業の追縱を許さゞるものあり、而して其の家庭には令閨こを子との間に四男二女を擧げ、長男賢一氏は目下慶應義塾大學理財科に在りて優良なる成績を示し、將來有爲の人材を以て稱せらる、君亦曩きに軍務に服し、出征して滿洲の野に轉戰し、偉勳を樹てゝ累進陸軍歩兵軍曹となり、戰後功に依り勳七等功七級に叙せられたり、出てゝは軍國の爲めに硝煙彈雨の間を往來して偉功を樹て、入りては實業の發展に力を致す、洵に君の如きは稱揚に値ひすべき人傑と謂ふべきなり。

合資會社天野工場主

天野菊次郎君

明治三十年五月生

東京市本所區石原町四十九番地
電話 本所 四六八九番

金銀モールを製作するのみならず、其の原料までも産出して獨壇の地位を有するは合資會社天野工場なりとす、工場主天野菊次郎君は造花界の權威として知られたる天野卯兵衞氏の長男、明治三十年五月を以て東京日本橋區横山町に生る、夙に慶應義塾普通部を出でゝ商工中學に學び、同校を卒業するや再び慶應義塾大學部に入り理財科を專攻し、成績優良なるものありしも、業半にして嚴君病歿するに會ひ、遺憾ながら退學するの止むを得ざるに至り、金銀モール製作業を繼承して今日に及ぶ、抑も我が國の金銀モールは、從來多く海外の供給に待ちたるの狀態なりしも、君が奮鬪苦心の結果は、輸入を防遏するのみならず、更に輸出するの盛況を觀るに至れり、今や内地は勿論、支那、印度、南洋の各地方に販路を有す、之れ元より嚴君が努力せる結果なりと雖も、君の識見超凡にして手腕の敏活なる、遂に此の隆昌を來せるものにして、青年實業家の典型として推稱するに足ると云ふべきなり。工場に於ては、モール原料たる金絲、銀絲、金針金、銀針金等を製作し需要殺到するの有樣なるが、モール加工業は各所に散在し其の數決して尠からずと雖も、原料を供給する者に至つては、天下唯一に天野工場あるのみなり、君が日夜孜々として業務の發展に努め、販路を擴張し大いに同業者の信用を博して、天野工場の聲望隆々たるは嚴君の名譽を辱しめざるものと云ふべし、君天資濶達にして然かも溫厚學窓時代より頗る活動性に富み、操艇を好み、業餘常に之れを樂しむ、氣宇の快活なる、亦此處に因由すと云ふべきなり、君は前途尙春秋に富む、將來の發展は刮目に値ひするものあるべく、斯界の爲めに君の健闘を希望して止まざるなり、君、願くは自重して青年實業家の模範たるに背くこと勿れ。

※

東洋製油株式會社監査役
日本茶精株式會社顧問
株式會社長岡鐵工場顧問
合資會社明石製作所社長

明石和衛君

明治二十一年八月三十日生

住宅 東京府荏原郡中目黑村五番地
電話 芝 五二七六番
營業所及工場 東京市淺草區七軒町二番地
電話淺草四〇六七・四〇六八
分工場 東京市京橋區月島通八丁目
電話 京橋 三九五四番

創業後年所を經ること尙淺きにも拘らず、其の勢力駸々乎として高まり、斯界の注視を受くるに至れり、今や内地は勿論、支那、印度、南洋の各地方に販路を有す、之れ元より嚴君が努力せる結果なりと雖も、君の識見超凡にして手腕の敏活なる、遂に此の隆昌を來せるものにして、青

明石製作所は、地震計及び附屬品、振動計類、風壓計、風力計、風信計及び附屬品、度計類、クロノグラフ、ヘリオスタット等、其の他の機械を製作して既に定評あり微妙にして精確、堅牢なること無比と稱せらる、社長明石和衛君は東京の人、明治二十一年八月三十日を以て生る、夙に東京帝國大學工學部機械工學科に學び、大正二年優等の成績を以て其の業を卒るや、更に進雨量計類、强雨計及び附屬品、驗潮器及び水位計、波力計、セメント試驗器、晴雨計類、喞筒類、寒暖計類、溫

んで斯學の薀奥を探究すべく、大學院に入り、特選給費學生として在學すること大正五年に及ぶ、同年明石製作所を設立して社長に任じ、内外經營の重務に當る、蓋し適材を適所に配し得たりと云ふべし、同所は主として精密機械の製作に從事するものにして、材料試給機に就ては獨逸モール、ウンド、フエーデハラ會社及びドクトル、ゼーゲル、トーンインストリー、ラボラトリウムの總代理權を有し、化學工業機械特に眞空乾燥及び蒸溜裝置に就ては、獨逸エミル、バッスブルグ會社代理店たり、工場は營業所に附屬するものと京橋區月島に分工場とを有し、生産額は年と共に進歩して止まざるの狀にあり、思ふに君は少壯俊雋、機械學新進の一權威たり、單に營利的經驗に依りて業務に從事するものと全然其の選を異にす、敢て言を贅するの要を觀ざるなり、君尙ほ業餘現に東洋製油株式會社監査役並に日本茶精株式會社及株式會社長岡鐵工場の各顧問として、本邦實業界に斡旋貢献する所尠なからず、夫人は久子と呼び、清子和彦氏の一男一女あり、君は學生時代の如く今も尙運動を好み、其の潑溂たる元氣は事業經營の上に實現せらる、前途洋々として春海の如からん。

火藥及工業藥品並染料製造販賣

帝國火藥工業株式會社

本　社　東京市麴町區永樂町一丁目一番地
電話丸ノ内一四一九、一九〇二番
工　場　愛知縣知多郡武豐町
電話　武豐　四一、四三、四四番
創　立　大正八年十一月
資本金　一千萬圓
重　役　取締役社長久米良作、常務取締役三浦逸平、同礦部英一郎、同飯田包亮、同黑川修、取締役參木錄郎、同渡邊藤三郎、同岩崎清七、同山本條太郎、同太田牛六、同田林喜三郎、監査役高橋虎太、同阿部吾市、同倉田龜吉

近年工業用火藥の需要著しく增加し、從て本邦に於て使用せらるゝ軍用及民間使用の爆發藥は其の數量莫大なるものあり、而かも從來其の半ばは外國品の輸入に俟つの狀勢なりしが、先年帝國議會に於て之れが製造を民間事業として許可するの案を通過し爾來純然たる民間工業會社にして、火藥の製造に從事するものゝ創業を見るに至れり帝國火藥工業株式會社は蓋し其の尤なるものにして、本邦使用の火藥を補給し、以て其の輸入の防遏を圖らんとする同社の責任や、亦至大至重なるものなくむばあらず、今同社の營業項目を見るに、一、軍用及普通火藥、爆發藥類の精製販賣、一、前二項に關聯する事業經營及投資等にして、資本金一千萬圓、其の規模の雄大なる、設備の完全なる技術の優秀にして製造能力の大なる、殆ど他に其の比類を見ず、實に民間火藥製造界の一大權威たり。大正八年十月創立に際し其の株式の一部を公募に附するや、人氣沸騰、旬日を出でずして其の申込募集株の數十倍に達せり。之れ蓋し其の發起者に財界の重鎭を網羅せしのみならず、其の技術顧問たる工學博士深尾七郎氏及陸軍少將山崎友造氏の信望に依れり。同年十一月會社成立と共に、愛知縣知多郡武豐町に四十四萬坪の廣大なる土地を買收して、建坪約二萬坪の工場を建設し、米國加奈陀に註文せる最新式諸機械の到着を俟て是れが据付けを完了開業せり。目下主として海軍用無煙火藥の製造に力を注ぎ、其の製品は品質及び彈道上の性能に於て何れも優秀にして、益々信用を高めつゝあるのみならず、最近に於ては充分に製造能率を增進するに至れり。惟ふに同社今後の活躍こそ眞に割目に價ひすべきものあらん、吾人は邦家の爲め其の前途の發展を切望して已まざるなり。

繪具染料工業藥品問屋小島商店主

小島伊勢次郎君

慶應三年四月五日生
東京市日本橋區堀江町一丁目八番地
電話浪花一五四五番
工場　東京府南葛飾郡葛西川村
別邸　同　同　小松川村

幼少の困苦は全く報ひられて、現に帝都の中心日本橋に堂々たる營業所を構へ、業界の巨商として羨望せらる小島伊勢次郎君は栃木縣宇都宮市の人、故小島鍋吉氏の次男にして、慶應三年四月五日を以て生る、幼年の頃足利市の新居良助氏に依り、商業實務の見習に從事せり、偶々新居氏火災の厄に遭ひ、家を擧げて東京に移轉するに至る君即ち之れと共に上京し、繪具染料工業藥品を業とする氏を輔けて奮闘、其の發展に貢献すること明治三十五年まで實に前後二十餘年の長年月に達す、同年獨立の機を捉へ、僅少の資金を以て日本橋區蠣殼町三丁目に業を創む、元より規模狹小、漸く營業を爲し得るに過ぎず、然かも主家に二十餘年間を捧げたる君の至誠と努力とは、愛に亦其の努力を倍加し來りて、日夜勤儉力行敢て倦まず、次第に盛況を呈し、大正二年店舗を擴張して日本橋區小船町に移る、恰かも好し、歐洲大戰の勃發して染料藥品の暴騰するに會す、即ち巧みに機宜に處して忽如として數十萬圓の利益を占む、此の間大正四年末には再び店舗擴張の必要に迫られ、舊主新居氏が日本橋區堀江町一丁目九番地の營業所を廢するを譲り受け、現在の建築を爲して之れに移れり、更に大正八年府下葛西川に染工場を設け、浴衣地の染色を兼營し好評を博しつゝあり、今や繪具、染料、工業藥品及び浴衣地の販路は關東、關西の各地に及び、隆運益々進歩せずんば止まざるものあり、夫人との間に三男あり長子彦太郎氏は名古屋商業學校出身、次子愼次郎氏は中央商業學校出身の何れも秀才にして、現に家業に勵精しつゝあり、君は格段なる趣味を有せずと雖も、常に商業の研究を樂しみ、經營の根本精神としては、正直と勉勵とを以て進む、昔日の辛勞に代つて今日斯界屈指の巨商たるに至る、蓋し怪しむに足らざるなり。

炭化石灰、石灰窒素、硫酸安母尼亞、及セメント製造販賣

電氣化學工業株式會社

本　社　東京市日本橋區本革屋町四番地
電話本局　長二四八七、二六九六、一〇四〇、一〇四一、一〇四二番
工　場　福岡縣大牟田市
富山縣射水郡伏木町
新潟縣西頸城郡青梅村
創　立　大正四年五月一日
資本金　千六百五十萬圓
重　役　取締役會長大橋新太郎、專務取締役藤山常一、常務取締役縣左吉、取締役植村澄三郎、同牧田環、同藤原銀次郎、同馬越恭平、同中上川次郎吉、同原邦造、監査役問島與喜、同

窒素肥料の製造會社として本邦肥料界一方の重鎭たる電氣化學工業株式會社は、大正四年五月一日の創立に係る。是より先き電氣化學界の權威者たる藤山常一氏は、三井家後援の下に北海道苫小牧に於て北海カーバイト工場を開設し、炭化石灰の製造に從事すると共に窒素肥料の研究に沒頭して成績大いに見るべきものあり、遂に幾多の特許權を獲得し、玆に同社の創立を見たり。同五年十月福岡縣大牟田市に工場を增設し爾來業務年を逐ふて進展す、大正十年三月北陸水電及高砂水力電氣の兩社を合併し資本金一千六百五十萬圓となる、大正十一年十一月新に伏木工場を經營するに至りしが更に同年末又青海工場を設置せり、會社製

品の數量は年產硫酸安母尼亞、石灰窒素、炭化石灰等約五萬噸、セメント年產十五萬樽に達し、獨り內地の需要に應ずるのみならず、支那、爪哇、濠洲及東印度諸島に輸出せられ、事業の殷盛、社運の隆昌、正に旭日冲天の概あり。同社の炭化石灰は生石灰に無煙炭又は木炭を適當に調合し、之れを電氣爐に入れ高熱を加へて石灰と炭素とを化合せしめしもの、之れより發するアセチリン瓦斯は廣く燈火に用ひられ、又之れに酸素を加へて酸素アセチリン焰を得、金屬の鎔接截斷に用ふるもの甚だ多し。石灰窒素は、同社の特許爐內に炭化石灰と窒素瓦斯とを送致し、之れを化合せしめて製造したるもの、專ら窒素肥料として用ひられ速效的にして而かも持續的なるの特徵を有せり。同品は又近年染料製造上にも使用せられ、需要の範圍更に多きを加ふ。硫酸安母尼亞は石灰窒素より發生せしめたる安母尼亞瓦斯を硫酸中に導きて結晶せしめたるもの、完全窒素肥料として卓效顯著、好評湧くが如し。同會社製品は屢々博覽會、共進會等に於て名譽の賞牌を得、大正十一年七月平和記念東京博覽會に於ては名譽賞牌を授與せられたり。今や同社は諸積立金百四十三萬餘圓に達し、既に牢固として拔くべからざるの基礎を有す。將來の飛躍蓋し期して俟つべきのみ。

※

絵具、顏料、レーキ、印刷用ローラー
製造販賣、直輸入商、中田商店主

中田藤三郎君

明治十九年六月生
東京市京橋區元鳥町一番地
電話京橋長四九八八番
東京市京橋區新榮町一丁目四番地
電話京橋二五一六番
東京府下淀橋町柏木九百九十九番地
電話番町三九八七番
大阪市北區北森町七番地
電話北長四四二〇番
倉庫及工場
第二工場
出張所

創業後五年を出でざるに製造販賣高は早く既に同業を凌駕し、恐らくは其の右に出づる者なかるべしと稱せらる、斯くの如き短時日に、斯くの如き勢力と信用を博せる中田商店の經營者中田藤三郎君は尙不惑に滿ざる少壯の士なり、抑も君は明治十九年六月を以て東京市淺草に生る、長ずるに及びて印刷局製肉課に職を奉じ、精勵恪勤、其の職務に盡瘁すると共に研鑽を怠らず、印刷インキ、顏料等の製造に就て大いに造詣する所あり、思へらく我が國の印刷工藝の幼稚なるは、印刷インキ、顏料の精良ならざるに一面の理由を有すと、即ち大正八年三月を以て職を退き、同年十月中田商店を創立す、之れより先、大寺色素工業所に關係せることあるも、玆に全く獨立して理想的の經營を試み、世界大戰後の不況時なるにも拘らず、業務忽ち進展し、大正十年六月現所に移轉して、京橋區新榮町の舊店舗は倉庫及び工場に充つると共に、府下淀橋町柏木に五百坪の地を相して工場を建設し更に同年十月府下東中野に工場を增設し、昨十一年春には大阪に出張所を設くる等、

急足の發展を呈するに至れり、其の製出する所の黃鉛、ミロリブリウー、ブロンズレッド、ピグメントスカレット、クロームグリーンは優秀なるを以て定評あり、此の外各種顏料の輸入販賣を爲し、尙ほ全國に廣汎なる販路を有す、特に印刷ローラーの製造に就ては大正十二年三月より一層の研究を盡すと共に、積極的方針を以て鋭意努力すべしと云ふ、尙近く事業を大規模ならしむべく、株式組織に變更せんとするの計畫あり、之れが實現せらるゝに於ては斯界を風靡して、鬱ふ所敵なきの狀を呈するに至らん、本邦文化の爲め切に君の奮鬪と健在を祈つて止まず。

※

黑川製藥株式會社長

黑川墨治君

明治四年十二月二十日生
會社　埼玉縣北足立郡大宮町氷川公園
電話　大宮一二四番
住宅　同　上

近時本邦に於て賣藥の製造發賣せらるゝもの年を逐ふて增加し、既に其數萬を以て數ふ、盛なる哉。而かも眞に卓効を有する良藥に至りては、寥々として曉天の星も啻ならず。此間に在りて黑川製藥株式會社製軍人液は、リウマチス、神經痛、脚氣、腦病諸種の腫物、脛攣等に對して驚く可き即効を有し、嘖々の好評あり、常に注文輻湊して、業務の盛大、基礎の堅實、斯界稀れに見る所たり。同社々長黑川墨治君は岐阜縣本巢郡根尾村の人、黑川源十郎氏の長男にして、明治四年十二月二十日其の地に生る。幼にして穎悟、鳳雛を以て稱せられ、鄕黨に入るや、常に成績拔群たり。明治二十五年近衞師團に入營し、日淸、日露の兩役に參加して軍功を樹て、下士官に進み勳七等靑色桐葉章を賜はる。是より先き明治二十五年中居を東京に移し、除隊後北海道樺太地方に遊び、偶々蛇の諸病に用ひて効能顯著なるを認め、研究工夫の結果之れを原料とせる稀世の靈藥軍人液を發見せり。於是乎、大正元年十二月東京に於て其の販賣を開始し、翌二年現所に移轉すると共に更に業務の擴張を行ひ、同四年商標を登錄したり。同七年岡田埼玉縣知事に推賞せらるゝに及んで名聲更に揚り、岐阜記念博覽會に於て第一等金牌を授與せられ、其他各博覽會に於て受賞せしこと枚擧に遑あらず。之れ君の光榮として天下に誇るに足るものにして、十數年來の苦心、今や遂に報ゆる所ありたりと謂ふべきなり。大正十一年二月組織を變更して資本金十萬圓の株式會社とし、君社長の任に就く、其の工場には電動力を使用し、錠劑機、丸劑機、製粉機等の設備あり、從業員二十人、販賣人二百六十人を有し、直營販賣店十二ヶ所、特約店數百ヶ所を置く、其の販路は東北、樺太、北海道、朝鮮、滿洲、臺灣、九州、四國其の他に及ぶといふ。君今や埼玉實業界の新進として名望愈々高く、大宮町會議員町政倶樂部相談役等に擧げらる、又足立靑年聯盟會幹事たり。

※

富士瓦斯紡織株式會社取締役兼小山工場長

朝倉每人君

明治十五年五月二十一日生
工場　靜岡縣駿東郡小山町
電話　小山三番
自宅　同縣同郡小山町社宅

本邦紡績界の重鎭たる富士瓦斯紡績株式會社小山工場は、其の規模の雄大なると、設備の最新なるとを以て實に斯界の模範たり。抑も同工場は明治二十九年の建設に係り、爾來社長和田豐治氏の奮鬪努力により社業の新展を見るに伴ふて、漸次規模を擴大すると共に設備の改善を行ひ、今や其の使用人員、男女工合計約八千人、錘數、リング十四萬七千四百七十二錘、ミュル三萬二百八十錘、撚絲機四萬三千七百八十錘を算し、內外國製機械一千五百六十八臺を備

ふ。此地清流滔々として走り、加ふるに附近に東海道本線駿河驛の設置せらるゝあり作業上及製品運搬上の至便、他に多く比類を見ず。工場長朝倉毎人君は大分縣の人、朝倉親爲氏の五男にして、明治十五年五月二十一日呱々の聲を揚ぐ、明治四十一年京都帝國大學法科大學を卒業し、直に富士瓦斯紡績株式會社に入つて社員たり。君豊富なる學殖と敏才とを有し、精勵恪勤、常に社務以外に他意なく、社業の發展に盡瘁する所甚だ多し。幾許も無く拔擢せられて要職に就き、遂に擧げられて保土ケ谷工場長に就任す。後ち更に小山工場長に轉じ、取締役に推され以て今日に及ぶ。氣宇頗る宏大なるも而も思慮周匝にして、其組織的頭腦より搾出せらるゝ着實穩健の策は、機を穿ち微に當りて誤る所無し。而して博學多識なりと雖も毫も衒氣虛色無く、人に對して隔壁を挾まず、溫乎として常に春風駘蕩たるが如く、眞に親しむべき高風の士たり。蓋し工場長としては絶好の適材といふべきなり。嚴父親爲氏は衆望を負ふて代議士に當選すること、國會開設以來前後六回に及び、今尙ほ其の德を頌するもの多しといふ。夫人キヲ子は金子政吉氏の長女にして、溫順貞淑の譽高き賢婦人たり。

※

各種機械器具、金物類、石炭、藥品、硫酸、織物
自動車、雜貨、食糧品販賣及鑛山業、製鍊業並
保險業、內外貿易業

會社 株式 常盤商會

東京市京橋區尾張町一丁目一番地
電話銀座 二〇一〇、二〇一三、一九一〇番

創立 明治四十三年十月
資本金 五百萬圓
重役 取締役社長松方五郎、取締役大鳥要三、同木村駿吉、同宇都宮鼎、同中村直作、監査役堀文彥

其の取扱商品に護謨あり藥品あり塗料あり銃砲火藥の如き軍需品あり、貴金屬あり機械類あり、或は毛織物を扱ひ或は食糧品を販賣し、保險業を經營す、其の廣汎なること實に驚くに堪へたるもの、之れを株式會社常盤商會の事業と爲す。同社は明治四十三年十月を以て創立せられ、當時資本金僅かに七萬圓なりしが、大正六年七月第一次の增資に於て五十萬圓と爲し、同七年七月一躍五百萬圓と爲せり。而して部を分ちて輸出部、外國部、砂糖製茶部、銃砲火藥部、醫科器械部、護謨部、保險部、機械電機部、工業部、金物部、穀肥藥品部、石炭部、經理部、總務部、鑛山部の十四とし、其の營業概要を擧ぐれば、鋼材類に於て銑鐵、鋼板、鐵管、鋼棒其他、金屬地金類に於て金白金、ダイヤモンド、銀、銅、鐵其他特殊高速度鋼類、鑛產物類に於て寶玉、硝石、硅石、螢石其他石炭コークス類、機械器具材料類に於て艦船、兵器、鑛山、鐵道、建築其他一切、調帶革類、藥品塗料類、織物毛類、砂糖、茶、護謨類、自動車及附屬品類、軍需品類、食糧品類等の直輸入を爲し工業部に於ては、特殊合金、電氣製銑鐵、抵燐銑鐵類、耐酸耐火煉瓦類、耐酸陶磁器硅砂に至るまで之を取扱ひ、鑛山に關しては金、銀、鋼、鐵、石炭其他各種鑛物の採掘及精煉を行ひ、保險部に於ては外國火災及外國海上保險等の日本代理店及特約店として代理取扱ひを爲しつゝあり、主なる取引國は支那、南洋、印度、北米、南米、英佛、伊、露、獨、瑞典等の諸國に及び、大阪に支店を有するの外、福岡市博多に九州營業所を、京城太平通りに朝鮮營業所を、吳市本通りに吳營業所を、上海西路に上海營業所を置き、又橫濱市山下町、八幡市枝光町、佐世保市松浦町に各出張所を設け、岩手縣上閉伊郡宮守村に鐵合金電氣製煉所を、東京府下豐多摩郡代々幡町に合金製作タングステン精煉所を設置せり、又岩手縣和賀郡湯田村、同縣九戸郡久慈町小久慈、宮城縣名取郡秋保村野尻等に鑛山を有し、

何れも鑛業所あり、同社將來の隆運推して知るべき也。

※

煙草、機械、藥品、染料、紙及雜貨直輸入商

株式會社 江副商店

東京市京橋區出雲町三番地
電話銀座八五〇、八五一、八五二番

創立 大正十年七月十三日
資本金 三十五萬圓
重役 取締役社長江副隆一、專務取締役高橋鑑三郎、常務取締役原三郎、常務兼支配人北山雄尾、取締役大石廉造、監査役江副庸藏、同辰野保

株式會社江副商店の名は、人口に膾炙すること久しからずと雖も、我が國に於ける舶來煙草の輸入業者として、江副廉藏氏の名は夙に江湖に著聞す、江副氏は明治十七年東京京橋區竹川町に於て初めて肥前屋の商號を以て、歐米の煙草に併せて機械類の輸入販賣をも兼營せるを以て創業の端緒なりとす、氏の揀腕は次第に業務を發展せしめ明治二十五年には現在の營業所に移轉して店舗の大擴張を斷行し、規模堂々たるものを新築したり、同三十八年煙草專賣法の實施せらるゝや、煙草の輸入販賣業は廢止し葉煙草及び煙草製品の輸出入を爲し、政府の監督を受けて愈々隆昌を招きたり、大正三年八月資本金二十萬圓の合資會社に組織を改め、氏は無限責任社員として一切の經營を統ぶ、同年歐洲戰の勃發すると共に社運俄かに振ひ、新に米國ウルフ會社製造の製粉機に就て日本及び支那、滿洲、南洋方面の一手販賣權を獲得し、別に染料、藥品等を米國より直輸入を試みたるに、時恰かも獨逸其の他より輸入杜絶せるに際し、時宜に適切なる活動を爲したるを以て、店運一段の躍進を觀るに至れり、此の英傑廉藏氏は大正九年三月不幸病歿したるが故に、嫡子隆一君其の後を承け、更に翌十年七月には資本金を三十萬圓に增加し、株式會社に組織を改め、君其の社長となり新進の意氣を以て業務を督し、鋭意經營に從ひつゝあり、君亦嚴君に肖て俊雋、熱誠にして且つ識見卓拔、時運の趨ふ所を察して着々好成績を擧ぐ、前途の發展は期して待つべく先代の偉業を失墜せざるのみならず、更に面目を新ならしむるものあらんことは、吾人の確信する所なり。

※

各種藥品直輸入販賣、藥種商

合名會社 島久商店

東京市日本橋區本町四丁目十四番地
電話本局 長四九一、長三〇一八番
自宅同所 電話本局 二五五六番

東都藥品販賣業者中信用の厚大、店舗の殷賑稀れに見るものは、島田家の經營に係る我が合名會社島久商店なり。抑も島田家は代々日本橋本町に住して兩替を業とす、六代目久兵衞氏則ち現主の父君時勢に鑑みるところあり。文久三年藥種問屋を開業し島久商店の名全國に鳴る。會々世情一變して漢醫棄れ洋醫の擡頭せんとするや、機を見るに敏なる氏は、他に率先して一夜に手持の和漢藥全部を賣却し、洋藥の輸入賣買を開始せり、次て更に西洋文明の移入に因り東都藥品販賣業者中信用の厚大、店舗の殷賑稀れに見るものは、島田家の經營に係る我が合名會社島久商店なり。抑も島田家は代々日本橋本町に住して兩替を業とす、六代目久兵衞氏則ち現主の父君時勢に鑑みるところあり。文久三年藥種問屋を開業し島久商店の名全國に鳴る。會々世情一變して漢醫棄れ洋醫の擡頭せんとするや、機を見るに敏なる氏は、他に率先して一夜に手持の和漢藥全部を賣却し、洋藥の輸入賣買を開始せり、次て更に西洋文明の移入に因り藥及醫療用新藥の選擇輸入の先驅を爲し傍ら有志と共に製藥會社を設立し、又硝子の製造を企てたるの外、諸種の新事業に盡瘁して本邦の文化に力を致したる功績や亦沒す可らざるものあり、氏を識る者は稱して今太閤と云ひしといふ、宜なる哉。明治三十七年十二月隱居して當主に家業を委ね

悠々自適せられしが大正五年二月十七日遂に逝く。當主は幼名を直太郎と稱し夙に東京帝國大學藥學專攻科を卒業して父業を扶け、內地は勿論、海外にも支店を設置し、又樞要地に代理店を設け、海外至る處著名の會社と密接なる取引關係を結びて、家業の發展に努む、明治三十四年時勢の新運に鑑みて合名會社組織とし、同族を以て社員に擧げ、基礎益々鞏固なるに至る。君天資俊敏、志操堅實にして實直なり、這般歐洲戰亂の影響に依りて藥業界は異常の好景氣を呈し、所謂成金輩の續出せるに際しても決して投機的商法を行はず、極めて堅實なる營業方針をとり、又數多の會社に關係するところありしも、深く思ふところありとし、一切事業と絶緣し、方今二三の會社に重役たるに止り、專心家道に盡瘁しつゝあるは同業者の敬服して止まざる所たり。曩に急激なる財界の變動に依りて斯界に一大不景氣の襲來すると共に、前年巨利を贏得せる同業者の倒產するもの少なからざる間に在りて、獨り同店の家運益々隆盛に向ひつゝあるは、蓋し君が時勢の洞察力に富み、克く經營を誤らざりしに由る、眞に偉なりと云ふべきなり。

※

東京モスリン類染色業組合長、友仙染物業

中山專三君

安政三年二月生

東京市本所區柳島横川町一五一番地
電話本所一八一番

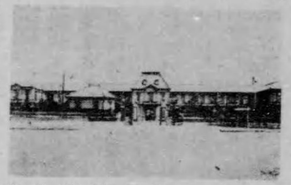
名家の出にして士君子の風を帶び、夙に實業に從事して高潔なる人格者として推稱せらるゝは中山專三君なりとすべく、君は舊秋田藩士中山盛春氏の長男なり、抑も中山家は累世儒を以て立ち、碩學高德を輩出して藩中に重きを爲せり、篤學を以て一世に喝仰せられたる從五位中山菁莪翁は實に中興の祖たり、君は明治の初年、嚴父盛春氏と共に藩主佐竹侯に從ひ各地に轉戰して偉功を樹つ、然かも年僅かに十三歲、此の時に於て豪毅なる性格を鍛錬し得たるものにして、今日あるを致せる所以に外ならず、後、上京して自由黨に參加し、民權伸張の大義を唱へ、政界の名士と共に縱橫に馳驅し國事に盡瘁する所尠からざりき、明治八年、實業に志を轉じて友仙染形付の實習に從ふ、業成るや、明治二十八年現所に獨立するに至れり、爾來孜々として其の經營に力め漸次隆昌を來して斯界に頭角を表し、遂に選ばれて同業組合長其の他公職に任じ貢獻する所尠なからず、之れ單に業務の發展より來れる輿望に依りて信賴を博せるのみならず、資性剛健、古武士的性格を有し、識見時流を拔きて卓拔なるものあるに依れり、而して年少の頃より兵馬の間に出沒し序を追ふて學業を履むことを得ざりしと雖も、常に研學の念盛んにして獨修を怠らず、法律、宗教、哲學、倫理、國語、漢文等の諸學に通曉せり、殊に業餘丹青に親しみ、南宗畫を研究して諸家の長所を採り、渾然たる一家の風を爲し、殆んど專門家として起つに足るの妙腕を有す、思ふに君の如きは市井の一工業家にあらず、國士の眞面目を存する當代稀有の俊足たるなり。今や業務愈々發展の域にあつて家庭亦和平を極む、眞に羨望すべきにあらずや、吾人は實業界に斯くの如き名士を有することを斯界の爲めに大いに慶賀して止まざるもの、君幸に自愛せられんことを。

※

名古屋高等工業學校

名古屋市中區御器所町
電話本局九九九番

工業學校は明治三十八年三月の設立に係る。是より先き文部省は高等工業學校增設の必要を認め、第四高等工業學校設立費を第十六帝國議會に要求し、其協賛を得たり。卽ち愛知縣愛知郡御器所村（現名古屋市御器所町）の地を卜して、三十六年九月校舍建築の工を起す、三十八年春、其の工事略々落成するや、文部省は當校規則を制定し、土木、建築、機織、色染、各科の生徒を募集して、同年九月一日授業を開始せり。



翌三十九年四月工業補習夜學部を附設し、大正十年六月其の程度を高めて工業高等補習夜學部と改む。而して開校以來大正十年度までに本科及選科卒業生を出すこと實に一千二百二十五人、內紡織科百八十九名、色染科百〇四名を算せり。同校は又大正元年十月より毎年數回通俗工業講談會を其の講堂に開き、實物及幻燈機を應用して各種工業に關する專門的事項を平易に講述し、以て一般世人に工業思想を普及しつゝあり。現校長は工學博士森彥三氏にして岡山縣の人、明治二十四年東京帝國大學工科大學機械科の出身にして、實に斯學の泰斗たり。教授には建築科長工學士士屋純一、色染科長理學士川口德三、土木科長工學士北澤忠男、機械科長工學士井伊谷春平等諸氏紡織科長島田才一郎氏（愛知縣立工業學校長兼任）其他の碩學を網羅し、紡績工場、浸染及捺染工場、莫大小工場、鑄物工場、木型及鍛冶工場、水力試驗室、汽罐及機關室、分析室其他實習の設備にして缺くるもの無く、規模の雄大なる此種學校中稀に見る所たり。

※

各種染料販賣、織田合資會社代表社員

藤田義保君

明治十九年十月十一日生

會社　東京市日本橋區大傳馬町二番地
電話　神田一六二〇番
住宅　東京市四谷區箪笥町四十一番地
電話　九段二九七五番

卓越せる手腕と商才を持し、我が染料業界鐵中の錚々、庸中の佼々たるものとして、同業者間注目の的となりつゝある斯界の新進に藤田義保君あり。君は茨城縣の人、藤田義德氏の長男にして、明治十九年十月十一日同縣西茨城郡笠間町に生る。夙に橫濱商業學校に學び、三十九年同校を卒業するや、橫濱市に店舗を置く獨逸馬獅子染料製造會社代理店ハ、アーレンス繼續社に入つて染料部員たり。君慧敏にして氣あり、年少の身を以て斯界を縱橫に馳驅し、大に才名を擧ぐ。大正六年五月中同社を辭して織田商店に轉じ、歐洲戰亂の影響に依つて斯業空前の好況を呈するや、君多年の經驗と辣腕とを發揮して積極的營業法に依り、大に同社の發展を試む。當時織田商店は合名會社組織なりしと雖も、實際は織田氏個人の經營に屬せしを、大正十年二月大阪の井村健次郎氏後援の下に、之れを合資組織に變更して織田合資會社を創立し、君其の代表社員に推さる。爾來拮据經營、畫策甚だ努め、同社をして益々發展の域に進め、以て今日の隆運を招致せり。現時同社は東京に本社を、大阪に出張所を置き、二十數名の社員を擁して、東京、大阪其他各地一流の染色工場及び同業者間に取引を行ひつゝあり。這般染料界異常の不景氣に際するも、同社が依然として優良卓越の業績を示しつゝあるは、蓋し君が經營宜しきを得たるに由る。君少壯、春秋に富むこと尙ほ甚

だ多し、冀くは自重以て斯業に貢献せられんことを。夫人を君子と云ひ、日本女子大學校の出身にして貞淑の譽高く、一男を擧ぐ、家庭圓滿、春風駘蕩たるが如し。

※

甲賀宜政君

大阪造幣局技師兼作業部長
從三位勳二等、工學博士

万延元年四月八日生
大阪市北區新川崎町造幣局官舍
電話 北三六〇〇番

日本文學史上に燦として輝ける曲亭馬琴の名著、八犬傳に依りて著名なる房總半島より、近年偉人傑士を出すこと少なからず、試みに最高學位の博士號を有する士を數ふるも、既に十指に餘り、或は政界に或は刀圭界に、或は又學界に實業界に、其の名聲を馳すること八犬士にも劣らざるものあり。我が大阪造幣局作業部長從三位勳二等工學博士甲賀宜政君亦千葉縣の出身にして關西化學界の耆宿として名聲籍甚たり。君は千葉縣士族二見金龍氏の三男、萬延元年四月八日生る。幼より聰明にし叡智あり、擧止群童と異り常に異彩を放つ、先代大阪府士族甲賀源吾氏其の非凡の才藻を嘆賞し懇請遂に其の養子と爲す、時に明治三年十一月なりき。君即ち同家に入つて甲賀姓を冒し。研學大いに努め、東京大學理學部化學科に入學して斯學を研修すること數年、既にして其の堂奥を究め、明治十三年優秀の成績を以て學業を卒はる。同年十二月職を大藏省に奉じ、造幣局技師に任ぜらる。君學殖豊富にして而かも精勵恪勤なり、是を以て信望年と共に加はり、漸次重用せられて同局試金部長及試驗部長たりしが、同局制度を改めて技術一般を統一せる作業部を置くに當り、同部長に榮進し以て今日に及ぶ。先是、明治三十二年工學博士の學位を授けられ、又曩きに貨幣法改正の功に依りて勳四等に叙せられしが、日露事件の功に依りて更に勳三等に陞叙し、後ち勳二等に陞叙せらる。而して最近君が銀の電氣分解に成功せるは實に學界の驚異にして、名聲更に高きを加ふ、君亦造幣局附近の住民が、流酸煙に依て健康を害するを憂ひ、精煉工場に於ける流酸煙を有効に利用せしむるの工夫を案出せり、其功績や亦没すべからず、其の人と爲り溫良恭謙にして清廉、玲瓏玉の如き人格を有し、一片の野氣なく、學者臭味を帶びず、常に溫顏を以て人に接するも、而かも其の風貌裡、凛乎として犯すべからざるの威嚴を有す、君耳順を越ゆること已に四歳、冀は加餐せられんことを。夫人亦い子貞淑敏才を以て稱せらると雖も不幸にして愛子無く、二見耳氏の令姪しづ子を入れて令嗣とし、醫學士藤井浩二氏を迎ふ。家庭頗る圓滿なり。

※

東洋燐寸株式會社

神戸市兵庫下澤通六丁目二ノ一
電話本局 四〇八八、四〇八九 七七、七八、六一番

創立 大正五年七月
資本金 四百萬圓
營業課目 燐寸製造販賣
重役 取締役社長瀧川儀作、專務取締役古河信造、取締役鈴木崇次郎、同窪田平吉、同瀧川英二、同久保田平吉、同土屋楠熊、監査役吳錦堂、同椋野武吉

本邦燐寸界の覇王として、其の製品の優良なるは、嘗て化學工業博覽會に於て名譽賞牌を受領し、其の產出の多量なるは海外にも巨額の輸出を爲しつゝある東洋燐寸株式會社の如きは、我が工業界の誇りと稱すべきなり、抑も同社は明治十三年の頃、創業せる清燧社と、明治十九年に創業せる良燧合資會社とを合同して、大正五年九月瀧川燐寸株式會社と稱せるも、翌六年一月東洋燐寸株式會社と改稱し、從來の資本金二百萬圓を四百萬圓に倍加せるものにして、我が國の燐寸界に貢献せる所多大なり、由來我が燐寸製造業者は機械力を利用すること迂遠にして、主として手工業に依りて僅かに一部分に機械力を加ふるに過ぎざりしが故に、製品不統一にして良好ならざるの憾みあり、同社は深く此の點に就て省みる所あり、頭藥浸點機を考案して特許を受け、其の他箱詰機械、小箱張機械等を創案して頗る成績良好なり、而して原料の自給、品質の精選、販路の擴張等には常に積極主義を執り、社業年と共に發展して各種工場十數箇所、職工三萬に垂んとし、內地は勿論、支那、香港、英領印度、遞羅、北米合衆國、比律賓、濠太利等に輸出す、同社が斯くの如き隆昌を致せる所以は、最初の創業以來三十餘年の歷史を有し、幾多英才の士が苦心を重ねたる結果なりと云ふべく、現重役も亦何れも斯界に傑出せる名士にして、識見非凡、手腕亦敏活、社業に貢献して倦む所を知らず、燐寸は民衆の實生活に密接なる關係を有するものなるが故に、同社が優秀なる製品を供給するは、社會の爲めに多とすべく、前途益々發展すべきは期して待つべきなり。

※

日本化學工業株式會社

加里肥料、各種加里及沃度劑
各種バリウム、機製造業

本社 東京府南葛飾郡亀戸町亀戸高貝須一〇〇〇番地
電話本所 一一〇八、一一〇九、三七一三、二七五五、四四七二番
亀戸工場 同上
會津工場 福島縣
郡山工場 同
小名木川工場 東京府南葛飾郡小名木川
塗料部 同府同郡亀戸町二二六五番地
電話本所 三九八九番
創立 明治四十年
資本金 五百萬圓
役員及職員
取締役會長男爵大倉喜八郎、專務取締役大倉發身、取締役加瀨忠次郎、同工學博士橋橋寅五郎、同根津嘉一郎、同橋本圭三郎、同梅浦健吉、監査役友田嘉兵衛、同木村庫之助、同鈴木宗兵衛、同山本留次、支配人大岸卿、技術課長中島滋磨、營業部長高瀨隆親、亀戸工場主幹岡江義彦、郡山及會津工場主幹中野芳太郎

本邦化學工業藥品製造業界の權威たる日本化學工業株式會社は明治四十年鈴木三郎助加瀨忠次郎、棚橋寅五郎の三氏が、各自其の所有工場を提供併合の上、資本金百七十五萬圓を以て創立せしものなり。同四十二年資本金を三十萬圓に減資し、別に資本金三十五萬圓を以て電氣化學工業株式會社を設立したるも、同年九月兩社を合併して資本金を六十五萬圓とし、現在の日本化學工業株式會社と改稱せり。大正二年事業擴張を計畫すると共に、百三十五萬圓を增資して總資本金二百萬圓とし、同四年六月日本電爐工業株式會社を併合するに及びて資本金三百萬圓となり、更に大正七年日本塗料株式會社を合せて五百萬圓の巨費を擁するに至れり。其の營業科目は、之れを應用化學、電氣化學の二大別とし、亀戸工場は前者に、會津工場は後者に屬す。更に其の製品を細別して示せば。加里肥料、亞硝酸曹達、硫化曹達、次亞硫酸曹達、沃度、沃度加里、沃度ホルム、沃度曹達、鹽化加里、

取締役會長
男爵 大倉喜八郎氏

鹽酸加里、硝酸加里、硫酸加里、鹽化バリウム、炭酸バリウム、硝酸バリウム、硫酸バリウム、過酸化バリウム、黄燐、赤燐等にして、就中加里肥料、亞硝酸曹達竝に硫化曹達は其の產額最も多く、啻に內地の需要に應ずるのみならず、餘力を以て海外に輸出を試み、黄燐、赤燐亦世上に好評あり、沃度劑の如きも大いに注目に値し、諸外國に輸出せられ、何れも品質の優秀なる點に於て東洋第一の名に背かず。其の郡山工場は電力頗る豐富にして、諸般の設備缺くる所無く、本邦電解工場の模範と稱せらる。同工場及會津工場の主幹中野芳太郎君は、明治四十五年東京帝國大學工學部應用化學科出身の秀才にして、常に其の管理統率宜しきを得、兩工場の秩序頗る整然たり。同工場が常に純良卓絕の製品を出せる、蓋し所以無きに非ざる也。

資本金　壹百萬圓
重役　取締役社長森岡平右衛門、常務取締役鶴塚彦兵衛、取締役淺井藤之助、同河合半兵衛、同山內定爾、監査役河合佐兵衛、森岡文三郎

※

亞鉛鍍金業

東京亞鉛鍍金株式會社

本社　東京府南葛飾郡砂村大字八右衛門新田
電話本所　八六七、一九〇八、長二〇二三番
出張所　東京市日本橋區新和泉町六番地
電話浪花　一九七七、一八〇〇、一八〇一、三五三〇番
創立　大正二年六月

我邦鍍金工業は化學工業界に於て最も早く進歩し、今や其の工場數少なからずと雖も、主として金銀及ニッケル鍍金に限られ亞鉛鍍金に至りては近年に至るまで殆んど之を試むるもの無く、亞鉛鍍鐵板及亞鉛鍍鐵線の輸入頗る莫大の額に達せり。偶々歐洲戰亂に際して其の輸入減少すると共に價格の暴騰を見るや、亞鉛鍍金業を企劃する者相次いで續出せしが、技術幼稚にして業績の見るべきもの極めて稀なり。此間に在りて獨り優秀の成績を擧げ、斯界の一大權威として瞻仰せられつゝあるものは東京亞鉛鍍金株式會社なり。同社は銅鐵業者として東都實業界に錚々の名ある森岡平右衛門、河合佐兵衛の兩氏を筆頭に、市內屈指の同業者に依りて主唱發起せられしものにして、歐洲大戰前、早く既に同事業の有利なるに着眼し、大正二年六月資本金壹百萬圓を以て會社を設立したり。幾許も無くして歐洲大戰に際會し、亞鉛鍍金業の異常なる盛觀を呈せるに當り、着々として業績を收め、已に牢固として拔くべからざるの基礎を築くるに至れり。今や鐵板亞鉛鍍金の外に鐵線亞鉛鍍金をも營み、其の製品の確實優秀なる同業者間に群を拔き、同社に追隨するもの無しといふ。取締役山內定爾氏は多年斯業に關係して經驗深く、加ふるに明敏の頭腦と潑溂たる手腕と縱橫の才氣を有し、同社今日の盛運を招來するに與つて力大なるものありといふ。亞鉛鍍金の將來益々有望なるは絮說を要せざる所にして、同社の前途や頗る多望なりといふべきなり。

※

農商務省大阪工業試驗所第二部長

片山徹吉君

試驗所　大阪府西成郡鷺洲町大仁宇大開
電話　土佐堀　六〇八、六四九番
自宅　同　上
官　同　會

學殖深遠、識見高邁の資を以て本邦工業界に貢獻盡瘁すること玆に二十數年、今や大阪工業試驗所第二部長として學界に重きを爲す我が片山徹吉君の如きは、眞に稱揚すべきの人なりとす、君は東京の人、年少好學、序を經て明治三十四年東京帝國大學工科大學應用化學科を卒業するや、直ちに兵庫縣三井耐火煉瓦株式會社に入り、技師長兼支配人の要職に就き、在職一ヶ年、此の間社業の發展に資する所尠なからざるものありしが、當時殖民地に於ける化學工業熱頗る高まり、君も亦多大の期待と抱負を持しつゝありし際なりしかば、明治三十六年同社を辭して臺灣に渡る、時の民政長官後藤新平子、夙に同地產業の發展に力を注ぎ、從つて業績頗る顯著なるものあり、遇々同子に依つて中央研究所の創設を計劃せらるゝや、君は之れに參して後藤子を扶け、斯くて該所の設立を見るや工務部長の要職に就き、爾來同所に在りて多年蘊蓄せる深遠該博なる學理を巧みに運用して銳意其の研

究に努め、殖民地開發の爲めに裨益する所甚大なるものありき、此の間實に十有七年の長歲月に及べり、君亦明治四十三年獨逸國に渡り、主としてセルロースの研究に沒頭すること二ヶ年半、造詣する所甚だ深く、而かも滯獨中同國諸雜誌に研究論文を發表して多大の賞讃歡迎を受けたり、次て歸朝後再び臺灣に渡り、中央研究所長に推されしと雖も、內地を思ふの念愈々篤く、大正九年同所を辭して歸來大阪工業試驗所第一部長に就任す、同十一年第二部長に轉じ以て今日に至れり、君天資聰明、頭腦緻密にして人物遒勁、而かも內に藏する一片の溫情は人に接して城府の制を置かず、高朗淸廉、慕ふべく敬すべきの紳士たるを失はず、德行甚だ多し、其の將來を囑望せらるゝも の故なきに非らざるなり。

※

絹織物製造業

澤　恭助君

山形縣米澤市御廏町

米澤の地、由來東北機業界の淵叢たり。近時同地の機業家にして、時代の趨向を考察し、需用者の好尙に投ぜんが爲め、苦心慘憺、新案意匠を工夫する者多く、各自其の精華を競ふて技術の進歩大いに見るべきものあり。就中澤恭助君の如きは、其の究めし所の最新學理を經とし、多年の經驗を緯として幾多品質精良、柄合嶄新なる逸品を製出し、江湖の賞讃を博しつゝあり。君は米澤市の人、先代より絹織物製造を業とし、頗る名望あり、天資聰明にして智略を有し、時人の好尙に應ずるの新柄診種を出さんと欲せば、須らく專門の學理を探究せざる可らずと爲し、序を經て米澤高等工業學校紡織科に入學して斯學の蘊奧を究め、大正五年拔群の成績を以て同校を出づ。令弟慶助氏又君と志を同ふし、同校紡織科に研學して同六年卒業するや、兄弟協力して業務に當り、夙起晚眠、須臾も研究を怠らず、常に原絲の選擇と意匠の工夫とに留意して、粉骨碎身、家業に精勵したるの結果、信用彌が上に加はり、屢々山形織物品評會に其の製品を出陳して一等賞を贏得せり。現時の生產高男物着尺地一ヶ年間約五萬反なりといふ、往昔毛利元就の病むや、其の三子を病床に招きて弓箭を與へ、先づ各自に其の一本を折らしむ、更に各三本を與へて之を折らしめ、其の前者の比にあらざるを見て兄弟協力事に當るべきを敎ふる所ありしといふ。一拳を以て擲つの五指交々擲つに優るは云ふを俟たず、協同の力や眞に偉大なるものありといふべし。澤氏兄弟共に高等專門學を修め、今協力家業の進展に力む。同工場將來の發展や、蓋し刮目して見るべきものあらん。君は年齒尙ほ頗る壯、前途洋々として春風滿帆の觀あり。自重加餐、益々斯界のために貢獻斡旋せられんことを切望して已まざるなり。

※

製藥業

株式會社 和光堂

本店　東京市神田區鍛冶町九番地
　　電話　神田　長一一三七番
小賣部　同市同區美土代町四丁目五番地
　　電話　神田　一六四八番
大阪支店　大阪市東區横堀町三丁目十六番地
　　電話　長本局　一一三七番
工場　東京府下淀橋町角筈本村
　　電話　番町　四四七七番

創立　大正七年三月
資本金　一百萬圓（五十五萬圓拂込濟）
重役　取締役社長大賀彊二、同武石義夫
　　取締役豊田鐵三郎、同篠原才吉
　　監査役弘田親輔、同篠原才吉

「堅實第一」を標語として製藥業界に絶大の信用を博しつゝある株式會社和光堂は、元現社長大賀彊二氏個人經營に屬せしもの、大正七年三月組織を變更して資本金一百萬圓の株式會社とし、事業頗る殷盛を極め、毎期一割五分の配當を持續しつゝあり。同社の特色とする所は重役は勿論、職工に至る迄關係者は殆ど株主にして、利益の過半は其の重役及從業員の配當とするに在り、之れを以て同社工場に於ては未だ嘗て勞働問題等の勃發を見たること無く、營業の堅實なる、他に多く比類を見ず、其の製品の主なるものを擧ぐれば、小兒營養品キーミール、乳兒消化不良症用ガラクトサン、便秘用マルツ汁越幾斯、大印滋養糖、皮膚疾患治療用シツカロール、咳止ボンボン、滋養强壯劑ベルミン、沃度鎮マルツエキス、呼吸氣病特効藥ジラン及胃腸疾患新藥カーボニン等にして、其の卓效を有するは已に定評の存する所にして敢て絮説を要せざるなり。而して叙上の諸藥は機械力を以て之れを製造し、殆んど人力を要せざるが故に、其の製造能率の卓越せること驚嘆に値するものあり。同社は此他醫科機械類の販賣に

取締役社長　大賀彊二氏

從事し、其の取引先極めて廣汎にして、内地は勿論、朝鮮、滿洲、支那、臺灣、樺太其他にも及び、社業常に盛況を極めつゝあり。社長大賀氏は岡山縣の人、中央大學の出身にして、夙に斯業に趣味を有し、製藥上に關する造詣又少なからず。加ふるに慧敏豁達にして經營の才を有し、斯界の新進として頗る聲望あり、君の如き適材を社長とせる同社の前途や、刮目して大いに見るべきものあらん。

※

東京隅田川工業株式會社工務主任

山内啓正君

工場　東京府南葛飾郡寺島村二八七三番地
　　電話墨田　長一〇四三、一〇四四番
自宅　同府　同郡　同　村一二〇六番地

學殖の豐富と頭腦の明晰と思慮の周密と、而して技術の卓拔とを以て東都染色界に名聲ある新進の技術家に我が東京隅田川工業株式會社工務主任山内啓正君あり。君年少にして已に穎才あり、鄕黨に在るや、常に成績俊偉を拔き大いに其の將來を期待せらる。夙に染色業に志し、進んで大阪高等工業學校染色科に入學し斯學を研修し、明治三十九年優秀の成績を以て同校を卒業す。當時君の近親たる現王子電氣軌道株式會社專務取締役榛原良男氏が、富士瓦斯紡績株式會社第二工場長たりし關係に依り、同社に入つて紡績事業に關與し、累進して精練課長に擧げらる。君勵精恪勤上下の信望頗る篤かりしが、偶々東京伊藤染工場の熱望に依り、在勤數年にして同社を辭し、同工場に入れり。染色は素と君が專攻の學科にして、斯業は蓋し君が年來の希望とする所、即ち一大抱負を以て同工場に入り、大いに快腕を揮ふ。當時染色用ロールの尙ほ不備にして改良を要するものありしかば、君專心之れが研究に當り、苦心慘憺たるもあり、時恰かも松尾氏のグラスロール發見せらしを以て、君亦氏と共に其の研究に當りしと雖も、充分なる成果を見るに至らざりしといふ。後ち橋本染色工場に轉じ、硫化染料を以て中形を染むるの方法を研究し、遂に斯法を完成したり、之れ實に硫化染料を以てする中形染の嚆矢なり。次て東京隅田川工業株式會社に於て中形染を開始するに當り、懇請辭し難く、同社に入つて更に研究の歩武を進め、終に同社現時の製品の如き精巧無比の良品を得るに至れり。今や君同工場工務主任として社業に盡瘁し、名望愈々高し。染色事業の如きは常に世人の好尙に投ずるものを出すに非ずんば、事業の繁榮期して俟つべからず。君の如き優秀なる技術家を有せる東京隅田川工業株式會社が毎期優良なる業績を擧げつゝある、蓋し自然の數なり。君や年齡尙壯、頗る春秋に富む、冀ば益々自重斯界に貢獻せられんことを

※

各種陶器製造販賣
株式會社　名古屋製陶所
營業所　名古屋東區市東芳野町二ノ七番地
　　電話東　長一一二五、一一二六番
　　同　市東區千種町弦月一四四番地
　　電話　東一一二七番

名古屋は窯業の名產地にして天下に冠絶せることは三尺の童子も亦之れを能く知ると雖も、就中、原料を精選し、品質の優秀にして製品の美術的に將た又實用的に多大の價値を有するものは名古屋製陶所の製品なりとす、同社は名古屋市外に廣濶なる地域を占め最も進歩せる工場裝置を施し、且つ徹底的に縱横の研究調査を試み、其の結果に基きて製作しつゝあり、即ち東西古今の陶器に就て其の變遷と技術の根本とを極め、或は支那に美術家を派遣し、或は遠く歐洲に新知識を求め、或は化學的立場より、或は美術的態度より、微を極め細を探り、以て製作上の參考に資するのみならず、技術員は何れも一流の名匠を網羅し、濫りに多量製產を行ひて粗製濫造の弊に墮るを避け、愼重なる注意の下に、實質を以て同業と覇を競ひ得べき自信あるものを製出せんと期せり、此の故に嘗て化學工業博覽會に出品するや、忽ち斯界の權威として認められ、名譽ある金牌を受領するに至れり、其の製品が實用品として堅牢無比、然かも價格の低廉なるは到底他の企及し得ざる所なると共に、美術的にも着色鮮明にして永久に變化せず、嶄新高雅なる意匠を施し、風趣に富めるを以て定評あり、蓋し陶器は各種工業等に利用せらるゝのみならず、吾人の日常生活上の必要品として永久の生命を有するものなるが、然かも之れに藝術的趣味を缺けるに於ては吾人の生活をして甚しく落莫の感あらしむ、此の意味に於て同製陶所が、實用、美術の二方面に亘り出色の製品を供給しつゝあるは多とすべきなり、今や其の繁榮隆々として斯界に拔んじ、販路は愈々擴張せられて海外の輸出亦頗る盛んなり、前途大に多望なりと云ふべく、永く我が窯業界の權威として重きを爲すことは、毫も怪しむに足らざるなり。

※

繪具染料及工業藥品商、大鹽染料店主

大鹽留彦君

營業店　東京市神田區堅大工町七番地
　　電話　神田　二一一一八番
住宅　東京市赤坂區青山南町五ノ六十八番地
　　電話　青山　一七一二番

明治十五年八月二十四日生

教壇に立つて染色學を講ずれば、所說該博識見卓犖、聽者をして首肯せしめずむば止まず、商會に入つて染料取引の事に當れば、縱横の手腕を發揮して快刀亂麻を斷つの概あり、又織物整理會社に入れば名技師長の

名を擅にし、獨立して店舗を開けば倏忽にして同業者間に頭角を露はす、當世人材尠なからずと雖も、其の行く處として可ならざるもの無き、吾が大鹽留蒼君の如きは稀れなり。君は名古屋市の人、故大鹽清民氏の五男にして明治十五年八月二十四日生る。夙に工業に志し、愛知縣立工業學校に入學して色染學を研修す。三十七年優秀の成績を以て同校を卒業するや、大阪に出で

丶日本フランネル製造株式會社（現日本毛織株式會社）に入社せしも、故あり歳餘にして同社を辭し、母校に入つて後進啓蒙の事に當るの傍ら、名古屋高等工業學校色染科工場實習教師を兼ね。爾來教育事業に身を委ねること三星霜、此の間色染學を研覈して其の蘊奥を極む。會々横濱の獨逸染料輸入商館たる謙信洋行の聘する所となり、同店に入りて染料の販賣に當ること前後實に六ヶ年に及び、大に商道を研究する所あり。次て名古屋織物整理合資會社に入つて技師長の要職に就き、且つ其の經營の任に當ること三ヶ年、再び同社を辭して謙信洋行に入り、活躍雄飛を試むる所あらんとせしが、時恰かも歐洲戰亂の勃發するあり、同時に獨逸商館の閉鎖せらるゝに至りしを以て、君獨立して當所に開業し、爾來順調なる發展を遂げ、以て今日の殷賑を見るに至れり。目下繪具染料及工業藥品の販賣に從事し、海外との直接取引あり、其の販路は本邦各地に及び、同業者並に染色工場に頗る多數の得意を有するといふ。君才腕ありと雖も怪竦ならず、人格頗る高潔なり、蓋し同業者間に尊敬せらるゝ所以なり。夫人曉子は津高等女學校の出身にして、貞淑敏才、閨門の秀を以て稱せられ、二男一女を擧ぐ。家庭頗る圓滿他の羨望する所たり。

※

ライオンゴム製造株式會社取締役社長
東亞セルロイド株式會社專務取締役

高木伊之助君

明治十五年六月生

東京府北豐島郡日暮里町谷中本二六五番地
電話下谷三六〇六番

明治末期に漸次發展し來りし本邦諸工業は、大正の新時代に入り更に歐洲大戰の刺戟を受けて俄然長足の發達を遂げたり、就中セルロイド工業の如きは實に其の顯著なるものにして、從つて同業者の數亦た近年頓に激增し來れり、此の間に在りて品質の優良、業績の顯著、信用の絶大なるものを物色せん乎、先づ我がライオンゴム製造株式會社及び東亞セルロイド株式會社の兩者に指を屈せざるべからず、而して此の兩社が毎期優良なる成績を擧げ、宛然斯界獨歩の感あるは、其の樞機に參する高木伊之助君の如き熱誠高潔なる人材のあるありて、經營劃策常に機宜に適中し、其の方針を誤らざるしに外ならずと謂はざるべからず、君は神奈川縣の人、高木清吉氏の長男にして、明治十五年六月同縣中郡岡崎村に生る、年少志を實業界に抱いて上京し、次て本郷及び淺草に於ける煙草元賣捌所の許可を得、以來斯業に鋭意努力せり、蓋し君が郷里煙草の名産地なるを以て自ら其の智識と經驗を有せしに依るなり、爾來該業の經營に任じて業蹟大いに見るべきものありしと雖も、君之れを以て未だ満足せず、更に大正三年時局に鑑み、セルロイド合資會社を創立し、其の代表社員となりて斯界に活躍雄飛を試みたり、之れ君が今日あるの第一歩にして、而かも君が熱誠眞摯なる奮闘振りは年と共に業務の發展を促し、創業幾干ならずして組織を東亞セルロイド株式會社と變更し、君專務取締役として業務の全責を負ふ、斯くて益々斯業の進展に寢食を忘れて鞅掌せしかば、遂に克く今日あるを致せり、君亦別に東京輸出セルロイド製造株式會社專務取締役たりしが、大正十年二月ライオンゴム製造株式會社と改稱せらるゝや推されて社長となり、現に其職に在り、君資性濶達、加ふるに絶倫なる精力と勤勉熱誠とは到底常人の企及し能はざる所にして、其の嘖々たる聲望を斯界に馳する素より故ありと稱すべきなり。

※

各種ゴム製品販賣　清松商店主

林常太郎君

明治十三年一月二十九日生

營業店　東京市神田區元柳原町四十四番地
電話神田三四一九番
住宅　東京府下中野町上町二八四五番地

醫科及び理化學器械用ゴム製品の販賣に着目して率先斯業を開始し、十星霜を出でずして既に斯界一方の覇を唱ふ、我が清松商店主林常太郎君の活眼や眞に驚嘆すべき也君は甲府市の人故林重兵衛氏の長男にして明治十三年一月生る、夙に上京して醫科器械商大磯商店に入り、斯業を研修すること十數年、精勤克く主家の發展に盡瘁し、大いに店主の信用を受け。當時君思へらく、本邦醫科器械商の數甚だ多しと雖も、之れに要するゴム製品を專門に取扱ふべき店舗の尚ほ開設せらるゝもの無きは頗る遺憾とする所、須らく之れが專門業を創始して、斯業關係者の利便を圖るべきなりと、即ち大正三年主家を辭して神田今川小路一丁目に店舗を開き、主として醫科器械用護謨製

品の販賣に從事し、漸次業務を擴張して一般護謨製品の取引を開始せり。君慧敏にして實直、專ら誠實を旨とし、信用年と共に厚きを加へ、店運日に月に隆昌に向ひ、遂に店舗の狹隘を告ぐるに至りしかば、大正九年三月現所に移轉し、以て今日の盛況を致せり、今や其の取引先は東京其他全國に亘り、其の取扱に係る護謨製品の範圍頗る廣汎なるものあり、基礎漸く固く、既に斯界の重鎮として頗る名望を有し、大正十年東京護謨同業組合第三部幹事に擧げらる。君頗る家道に熱心にして、常に專心斯業に邁進して又他を顧みず、家業は卽ち君の趣味とする所なりといふ、敏活なる手腕に加ふるにこの熱誠を以てす、蓋し同店の今日存る所以なり。夫人をかめ子と云ひ、縣立宇都宮高等女學校の出身にして才色あり。二女を擧げ、家庭頗る圓滿なり。

※

毛織物及毛絲製造販賣業

東京毛織株式會社

本社　東京市麹町區有樂町二丁目七番地
電話三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、一二六二、一二六三番
大阪市東區南久寶寺町四丁目七番地
電話船場二五〇八番
東京府荏原郡大井町三六四八番地
電話高輪一一二五〇、一一二五一、一一二五二、一一二五三番
東京府北豐島郡南千住町地方橋場五三五番地
電話淺草五九〇、五九一、五九二番
東京府北豐島郡王子町二二二九番地
電話小石川六四、六五番
大阪市西區泉尾町六一〇番地
電話櫻川二五〇七、二五〇八番
大橋工場　岐阜縣大垣市室村町
電話大垣二二一九、四一一番
大阪工場
南千住工場
王子工場
創立　明治三十九年十二月五日
資本金　二千萬圓
重役　專務取締役藤田謙一、常務取締役井

田又吉、同塚口啓三郎、同宇佐美蕙次、取締役諸井恒平、同日比谷新次郎、監査役大橋新太郎、同門野重九郎、相談役男爵大倉喜八郎

東洋に於ける毛織物業界の覇者として、事業の旺盛東亞の斯界に其の比を見ざるもの、之を東京毛織株式會社と爲す。同社は明治三十九年十二月資本金四百萬圓を以て創立せられ、東京製絨株式會社及後藤毛織株式會社と共に關東に於ける三大毛織會社として、斯界に重きを爲せしが、三社の鼎立を見るは相互の不利益なるを認め、當社は進んで盟主となり、玆に三大會社を打つて一團となし、總資本金一千一百萬圓を擁するに至れり。次て大正七年十二月泉尾綿毛紡績會社を合併して資本金を一千四百萬圓とし、更に大正八年十二月六百萬圓を增資して二千萬圓の巨資を有するに至る。曩に歐洲大戰の終熄に際し、斯業の沈靜を見ると共に毛織物の取引亦頗る警戒裡に在りしと共に、勞働問題の紛糾甚しく、爲に各國に於ける生産工業の復舊容易ならざるものあり、從つて歐洲製品の品薄を來し延いて毛織物の價格著しく暴騰するや、此間に處して當社は輸出軍服絨の製作を以て市況振興調節を計ると同時に、內地向需要品の製作に努め、頗る好成績を擧ぐ、爾來益々社業發展し以て今日の殷賑活況を見るに至れり。專務取締役藤田謙一君は靑森縣弘前市士族明石永吉氏の二男にして、明治十二年藤田正三郎氏の養子となり以て藤田姓を冒せり。明治廿七年明治法律學校を卒業し、大藏省に職を奉ずること三年、桂冠して岩谷商會に入り支配人たり、之れ君の實業界に驥足を伸べし第一歩にして、後ち諸會社に關係して社長又は取締役の重任に膺り、其の經營の手腕は張目して見るべきものあり、今や實業界一方の重鎭として名聲頗る高し。君の如き俊傑を專務取締役とし、其他幾多の英才を網羅せる當社の前途や頗る多望なりといふべきなり。

※

三田土ゴム製造株式會社

本社　東京市本所區中ノ郷業平町四番地
電話墨田　七二〇、七二一、七二二番
分工場　東京府南葛飾郡小松川町下平井二三五三番地
電話本所　七〇四〇番
創立　大正十一年五月
資本金　二百萬圓
重役　取締役社長田崎忠恕、專務取締役田崎留太、取締役土谷金之輔、監査役田崎長國

本邦護謨製造業界の雄鎭三田土ゴム製造株式會社は元三田土ゴム製造合名會社と稱し、斯界の先驅者にして、萬丈の波瀾を突破し、遂に今日の鞏固なる基礎を成せり。抑も三田土なる社名は、土谷秀之（大正九年十一月逝去）、田崎忠恕、同長國、同留太兄弟四氏の姓字に依れる名稱にして、創業時代に於ては護謨の利用今日の如く廣大ならず、幼稚なる斯界の振はざること夥しく、經營の困難言語に絶せり。當初は淺草區神吉町に試驗的小工場を設置するに止まりしが、明治二十三年土谷氏南洋を巡航して親しく護謨栽培及び製造法を研究視察し、滯留年餘にして歸朝するや、更に田崎長國氏米國に渡りて技術製法を研究し、大に製法を改良する所あり、二十五年基礎の確立を見るに及びて現所に移轉し、次て三十二年田崎留太氏渡米して斯業を研修する等、創設者互に研鑽考覈して業務の發展に努めたりしかば、幾許もなくして隆運に向ひ、漸次工場を擴張して今や其の敷地四千坪、男女工一千餘名を算し、而も需要の激增は工場の狹隘を告ぐるに至り、先年東京府下小松川町下平井に分工場を建設したり。大正十一年五月土谷辰造、田崎先太郎、田崎友吉、田崎貫之輔等田崎家一族の四氏相謀り資本金五萬圓を以て別に三田土ゴム製造株式會社を創立し、同年十月廿四日三田土ゴム合名會社を合併するに及びて玆に資本金二百萬圓（全額拂込濟）の當社成立を見るに至れり。其の製品はゴム板ゴム管等の工業用品より玩具類、ゴム加工品等に及び、明治二十年東京府工藝品共進會に出品受賞して以來、屢々博覽會共進會等に於て金牌名譽賞牌十數箇を授與せられたり。之を以て見るも同社製品の如何に優秀なるかを推知し得べし。輓近社會問題の頻發すると共に、合同力の偉大なることを現實的に目睹せしめらるゝもの少なからず。然れども世間往々私利の打算に急にして眞の合同を缺くるもの多く、之れが爲には兄弟牆に鬩ぎ、親近疎外して其の例を見る、然る田崎氏兄弟四人、一致協力して本邦護謨業界の渾沌期より創業し、斯界の爲めに貢獻する所少なからざるものあると共に、克く難關を突破して遂に一族繁榮の美果を結べるは、實に近來の美談と稱すべき也。

※

電極、高速遠心機、耐酸金屬、化學工業藥品直輸出入業
紐育
高峯商事株式會社
東京市麴町區永樂町海上ビルディング內
電話丸ノ內　一六〇八、一六〇九番

輓近電氣化學工業の進歩に伴ふ、電氣爐用及び電解用電極の精良なるもの、漸く各地に於て製出せらるゝに至りしと雖も、アチソン、グラファイト會社製のアチソン電極の如く純良なるものは稀なり。同電極は有名なるアチソン博士に由り發見せられたる人造黑鉛にして、方今標準電極として世界に於ける曹達工業の九割八分及び電氣製鋼炉の七割に使用せられ、此外最近砲金類製造用として最も重要視さるゝに至れり、而して東洋に於ける之れが代理販賣店たる高峰商事株式會社は、大正八年八月を以て創立せられ、實に米國紐育に本店を有せる高峰マヌファクチュヤリング、コーポレーションの姉妹會社たり。同社は該アチソン電極を初め、シャーブレス、セントリユージ（高速遠心機、液體分離用及淸淨用）耐酸金屬、銅鐵鬱科用品及化學工業藥品の輸入を營み、米國アチソングラファイト會社、デユリロン、カスチングス會社、デ、ビー、デヴアイン會社、シヤフフレス、スペシアルテイ會社、ウエトマンシンシナチート、タイム、レコーダー會社、ダウケミカル會社、クリーブランドクリフ會社、コグナスメビー會社、ウエストーレン會社等の東洋總代理店たり。同社取扱商品の優秀卓拔なるは既に定評ある所にして、殊にスペシアルテイ會社の高速遠心機は最も高評を博し、

染料及工業藥品輸入販賣
植田合資會社
東京市神田區鍛冶町三〇番地
電話神田　七七〇、七七一、七七二番

店舗の殷賑、商風の堅實、東都染料工業藥品界に於て之れに匹儔するもの少なく、名聲斯界に鳴る一大名舗に、我が植田合資會社あり。同社は元植田商店と稱し、故植田小太郎氏の創業に係る。氏敏捷にして機略あり、時勢の趨向を洞察して染料及工業藥品の輸入販賣が、最も有望なる將來を有す

液體の分離又は淸淨に、在來の遲緩にして不廉なる方法を有効にし、且つ從來不可能なりし液體分離の難問題に解決を與へる精巧無比の機械にして、一分間に於ける廻轉數四萬回なりといふ。今や歐米列强は大戰の創痍漸く癒えんとし世界の商戰は益々激烈ならんとしつゝあるの時、同社取締役として令名ある佐橋源太郎氏靈腕を發揮して經營の衝に當り、又支配人鈴木四十氏多年の經驗と卓絕せる商才とによりて之を補け、以て業界に活躍を試みつゝあり、實に同社は本邦に於ける直輸出入業界の重鎭にして、時代に適應せる同社の前途や眞に刮目に價するものあるべし。

※

るを察知し、明治二十年の頃其の店舗を開く。果せる哉我が工業界は頗る迅速なる發達を遂げ、之れに伴ふて染料及工業藥品の需要漸次增加し來り、數年ならずして同店の基礎鞏固として拔くべからざるに至る。明治四十一年事業の繁榮に伴ふて店舗の狹隘を感ずるに至りしかば、其の改築を行ひ外觀內容共に整備す。次で大正九年三月組織を變更して資本金三十萬圓の植田合資會社を創立し、以て今日の盛大を致せり。其

の商品の販路は本邦各地に亘り、同業者間の取引を主とすといふ。代表社員植田狀之助氏は東京商科大學に於て商業學を專攻せる斯界の新人たり、大正十一年學業を卒はると共に入つて同社經營の衝に當り、潑溂たる手腕を示しつゝあり。社員鈴木賢治氏は同店創業以來三十有餘年間社務に鞅掌し、勵精摯實、業務に沒頭して又他を顧みるなく、而かも絕倫の精力と天禀の商才を有し、同業者間に頗る信望あり。年壯氣銳にして學識ある經營者を補くるに、此の雋發展期して俟つべきのみ。

※ 富士瓦斯紡績株式會社

本社　東京府南葛飾郡大島町五丁目百十五番地
電話本所四七四番
東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地
電話濱町八二二、八二三、八二四番
八二五、八二六、一七二四番
大阪市北區中ノ島二ノ一三番地
電話本局一九六、三六五四番
東京府南葛飾郡小名木川
電話本所四七四番
大阪出張所　電話小山工場靜岡縣袋東郡小山町番
東京出張所　電話川崎工場神奈川縣川崎町
電話濱田市分西枇杷島町四一八番
名古屋工場　電話本局一〇七二番
大分工場　電話大分市大字生石一四六、二〇三番
中津工場　電話大分縣中津町
大分工場埼玉縣本庄町
岐阜工場岐阜市外加納町
青島工場青島市
安東工場安東縣
創立明治二十九年三月
資本金四千四百三十萬圓

東京、神奈川、靜岡、大分其他各府縣下に堂々たる數多の大工場を構へ、本邦代表的紡績業者たる鐘ヶ淵紡績株式會社に相對立して、其の生產量に於ては一步を讓るべきも、其の販賣價格に至りては、却つて之れを凌駕するの勢ひにありと稱せられ、社運隆々、恰かも旭日の天に冲せんとするの狀にあるは、實に我が富士瓦斯紡績株式會社なりとす、同社は初め富士紡績株式會社の名稱を以て明治二十九年三月創業せるものなれども、日露戰役の後に至り、東京瓦斯紡績株式會社の事業を合併して富士瓦斯紡績株式會社を改め、漸次に業務を擴張して今日の隆勢を爲せり、抑も創業の當初にあ

重役
取締役社長植田豐治、常務取締役工學博士持田巽、常務取締役宮本清三郎、取締役川崎榮助、同男爵森村開作、同目比谷新次郎、同濱口吉右衛門、同朝倉毅人、同長野善五郎、監査役藤井諾照、同伊藤要藏、同湯山壽介、同緒方正亮

りては、靜岡縣下小山並に東京府下南葛飾郡小名木川、本所押上の三箇所に工場を有するに過ぎざりしも、爾來大いに能率の增進を圖り、多量の生產を劃すべく、更に大正三年七月神奈川縣川崎町に工場を新設し、最新の設備を施し、精巧なる機械を据付けリンダ約三十萬本、ミュール四萬本、撚絲鍾約七萬、織機約二千臺あり、理想的工場として斯界に推稱せらるゝ所にして、爾來威容益々倍加せるの有樣なり、之れより先、明治三十六年神奈川縣橘樹郡程土ヶ谷町の絹綿紡績株式會社を合併して、程ヶ谷工場と改稱し、專ら絹絲紡績を爲しつゝありたるを以て、現下主として細絲、絹絲の精工品生產に力む、今や合計十二工場に職員約一千名、從業員約二萬人を擁し、盛況比類なし、社長和田豐治君は斯業界の巨頭なるのみならず、先に貴族院議員に勅選せられたる同家の功勞者にして、其の他の重役諸氏は何れも錚々たる實業家たり、同社の前途益々多望なるは敢て多言を要せざる所なり。

※ 深尾七郎君

陸軍技師、正五位、勳三等、工學博士
明治九年四月二十一日生
東京市本郷區駒込神明町三二四番地
電話小石川五八〇七番

方今我が火藥界に錚々の人物を求むれば、先づ指を陸軍技師深尾七郎君に屈せざるべからず。君の板橋火藥製造所に在つて火藥の研究に當ること實に前後二十又二年、今や斯界の明星として燁々の光を放つ。其の蘊蓄の豐富、學識の深遠、蓋し當代稀れに見る所とす。君は高知藩士深尾延意氏の息、明治九年四月呱々の聲を擧ぐ。幼にして穎悟、擧止自ら凡兒と異り、常に群童の間に異彩を放つ。夙に化學に趣味を有し、東京帝國大學工科大學火藥學科に入學して、斯學を研鑽すること數年、螢雪の効空しからず、明治三十六年七月優秀の成績を以て卒業す。翌八月十日陸軍技師に任官し、東京砲兵工廠板橋火藥製造所勤務を命ぜらる。君卽ち多年の蘊蓄を傾注して火藥製造の事に當り、更に研鑽大いに努め、造詣益々深きを致す、遂に斯界の權威者を以て目せられ、四十年二月十六日東京帝國大學工科大學講師を囑託さる。四十四年十月二十三日陸軍火藥研究所員を命ぜらるゝ雖も、該研究所は板橋火藥製造所構內に置かれ、依然同所に在つて火藥の研究に努力せらる。大正二年十一月再び砲兵工廠付となり火藥研究所御用掛を兼任し、同八年七月十七日更に特許局技師を兼務す。同年八月二日歐洲出張を命ぜられ、海外先進國の斯業を視察して翌九年十月五日歸朝、翌々十一年一月十一日特許局審査官兼務を命ぜられ、同年九月十一日高等官二等に陞叙し、勅任官に進み、以て今日に及べり。是より先き大正八年六月二十八日工學博士の學位を授與せられ、又正五位に叙し勳三等を賜はる。君をして若し文官たらしめば、早く旣に勅任官に列し、一局を統率するの地位に昇るべき偉材なるを、砲兵工廠に於て從來勅任官を置くの制度布かれざりしが故に、其の官等の遲々として進まざりしは同情に堪へず、遮莫、君は素より學究の人、官等を顧みず位階を欲せず、二十有餘年の久しき間孜々として專心火藥の研究に沒頭して亦他意無く、國家に貢獻する所多大なるは、世人の敬服措かざる所なり。君は君益々自重斯學に盡瘁せられんことを。夫人をきよ子と云ひ婉嫋敏才にして一男三女を擧げらる。

※ 大森佐太郎君

製紙業及製紙用マニラ麻輸入販賣
リリー紙本舗大森商店主
明治二十年六月十二日生

東京市下谷區竹町十二番地
電話下谷 二〇五二番

其香氣の馥郁たる、其の紙質の强靱にして而かも柔軟なる例へば、光澤ある絹の如く、楚々たる白百合の如く、而して消毒完全に、價格の低廉なる、リリー紙の如きは化粧紙界甚だ稀れなり。同紙が近時全國の紳士淑女間に歡迎せられ、嘖々の好評を博しつゝあるもの亦所以無きに非ず。之れが製造本

舗大森商店は實に斯界の新進大森佐太郎君の經營に拘はる。君は愛知縣寶飯郡下地町の人、善作氏の長男にして、明治二十年六月十二日其の地に生る。幼にして才藻非凡、屢々奇才を發揮して鄕黨を三嘆せしむ。伯父大森照三郎氏其の才を愛し、迎へて君を養ふ、君即ち上京して照三郎氏方に寄寓し開成中學校に入學して修養大いに努む。同校を卒業するや、君將來貿易界に活躍を試みんとし、岡田任一氏經營の商館に入つて斯業を實習すること約六年、後ち獨立して貿易業を經營す、時に年齒僅かに二十五歲なりき。而かも商運未だ到らず、三ヶ年にして閉店を見るの悲境に際會せり、當時君思へらく、マニラ麻屑は殆んど利用の途無く、徒に路傍に放棄せらるゝと雖も、之れを製紙原料とせば必ずや好結果を得べく、應て又廢物利用の一端ともなるべしと、即ち之れが販賣に着手し、熱誠以て製紙業者を勸誘せる結果、漸次其の使用を試むるもの增加するに至り、今や和紙製造業者にしてマニラ麻を使用せざるもの無く、之れが原料の拂底は遂に上物の使用を促し、嘗て生產地に於て道路の凹地埋立に使用せられたる粗惡なるマニラ麻屑の如きすら高價を以て取引せらるゝに至れり。蓋し本邦に於てマニラ麻屑の利用を高唱して社會を裨益せるもの、東京に君あり、横濱に山形屋あるのみ、後者は之れを以てロープに使用せしめ、相當の効果を見たりと雖も、其の利用の程度は製紙原料として使用せらるゝものに比較すれば、及ばざること遙かに遠し。君の功績や亦偉なりと云ふべき也。君マニラ麻需要の增加に伴ひ事業逐年繁榮に向ひ以て今日の盛況を招來せるが、大正十年其の原產地たるヒリツピン地方を視察して益々研究の步武を進め、我が製紙業界に貢獻する所甚だ多し。近年更にリリー紙の製造を開始し事業更に殷賑を加ふ。同紙が日用紙として優秀無比なるは言ふを俟たず、大正十一年の秋季、名古屋に於て開催せられたる全國紙業博覽會に於て一等賞金牌を得たり。現時同紙の販賣高一ヶ年間約三十萬圓、マニラ麻販賣高一ヶ年間約十五萬圓なりといふ、盛んなる哉。君や年齒尙ほ壯、今後の發展殆んど測り知るべからず。夫人をいそ子と云ひ溫順貞淑の譽高く、一男を儲けらる。

合名會社 西山商店
工業用藥品及諸原料品、塗料、油類直輸出入商
東京市日本橋區大傳馬町十二番地
電話神田長一五一九、三七七九番

工業藥品界の新進にして、信用の厚大、業務の隆盛、斯界稀れに見るものを我が合名會社西山商店と爲す 同社は大正六年九月小川爲次郎、西山清太郎、遠藤榮三郎の諸氏共同出資の下に創立せられ、時恰かも斯業の好況時に在りしを以て社業大いに振ひ、非年ならずして鞏固なる基礎を築けり、爾來社員の奮闘努力に依り、店運年と共に隆昌に向ひ、今や不況時に於ても尙ほ一ヶ

年間の販賣高二十數萬圓を算すといふ。以て同店の信用程度を知るべき也。創立者遠藤榮三郎氏は開業後幾許も無くして退社し、西山氏又大正十年十月退社するに至りしかば、小川爲次郎氏同氏の後を襲ふて代表社員となる。後ち又社員の異動あり、令弟小川鉦藏氏入つて社業に鞅掌する事となり、現時兄弟協力して當店の經營に當りつゝあり。現代表社員小川爲次郎氏は名古屋の人、明治二十七年を以て生る。幼にして兩親を失ひ、爾來艱難具さに嘗む。君將來實業界に雄飛を試みんとし、名古屋商業學校に入學して研學大いに努むるところありしも、中途退學して令兄の取引先たる松村商店に入り、其の敏腕を揮發して忽ち頭角を顯はす、而かも恪勤精勵にして大いに店主の信用を得、漸次重用せらるゝに至れり。當時西山清太郎氏又同店に勤務し、手腕卓拔、敏才の士として矚目せられ、君と共に同店の双璧たり。大正六年君西山氏と提携して當社を設立するや、多年の經驗と靈腕とを以て縱横に活躍し、僅々數ヶ年にして今日の盛大を招致す、其の才腕推して知るべし。君眉目淸秀一見才氣の潑溂たるものあり、資性溫良恭謙にして人格渾然玉の如く、居常能く談じ能く語り、應酬接待八面玲瓏たり、之れ多年の修養に依て大成せるもの乎、年齒尙ほ而立に達せず、前途更に數段の發展を見るならん。夫人をたま子と云ひ、溫良貞淑の譽高く二男を擧げらる。令弟鉦藏氏は明治三十年名古屋に生れ、名古屋商業學校に修學すること多年、後ち和氣商店に入つて店員たり、這般當社員遠藤爲三郎氏退社に際し、其の出資を繼承して當店に入る。敏腕の活動家として大いに囑望せられつゝあり。

各種石鹼製造及油脂、石鹼原料、工業藥品、
中間物、護謨原料輸出入商、長尾商會主
長尾敬藏君
明治二十三年十月五日生
營業所 東京市麴町區有樂町一丁目一番地丸之內仲通三號
電話丸之內一九四二、長二〇六八番
長尾石鹼製造所 東京府荏原郡北品川小關耕地五二五番地
電話高輪一一七二番

學し、人格者として一世の儀表たりし同校々長故江原素六氏の感化を享くること多し。同校を卒業するや、進んで第七高等學校に入り研學大いに努む。君才藻凡ならず、常に成績儕輩を拔き其の將來を囑望せられしが、同校卒業に際して不幸嚴君を喪ひ、遂に同校卒業後修學を中止して山武商會に入る。時に大正元年なりき。爾來同商會に精勤すること五ヶ年餘、漸次其の手腕を認められ、大いに重用せられしが、大正六年九月懇請辭し難くして茂木合名會社に轉じ、紙育支店詰を命ぜられ、翌七年同支店支配人代理に昇る。君即ち機械金物一般雜貨の取引を擔任して靈腕を發揮し、令名頗る擧がる、同八年歸朝して支那各地に出張し、歸國後拔擢せられて東京支店支配人の要職に就きしが、翌九年財界の恐慌に際會して、貿易界の重鎭たりし同社も遂に閉店の悲運を見るに至れり。於是乎、君奮然蹶

起、獨力を以て同年九月長尾商會を開き、惡戰苦闘、克く萬難を排して着々鞏固なる基礎を築き、竟に今日の盛況を招來せり。現時其の取扱に係る輸出入品は、油脂、石鹼原料、工業藥品、中間物、護謨原料を主とし、一ヶ年間の販賣高實に百五十萬圓の多きに上ると云ふ。殷賑の狀以て知るべきなり。又曩きに石鹼工場を建設し、主として工業用石鹼の製造に從事す、近時各家庭に於て好評を博しつゝある洗濯用粉末石鹼コキレーも亦實に同工場の製造に係るものたり。君年齒尙ほ壯、眞の活躍は蓋し今後にあらん。希くば斯界の爲めに健在せられんことを。夫人を鑅子と云ひ三女あり、家庭頗る圓滿なり。

※

減摩合金メタル其他諸種合金及
合金製品製造販賣
株式會社 イソダメタル工場
營業所 東京市京橋區銀座二丁目二番地
電話京橋 特長一六九三番
工場 東京府荏原郡大崎町字桐ヶ谷
電話高輪 一四九九番
創立 大正九年五月
資本金 壹百萬圓
重役 取締役社長服部良太郎、專務取締役山越秀太郎、常務取締役能勢鬼一、監査役筒井源吉

減摩合金製造界の重鎭たる株式會社イソダメタル工場は、元合資會社組織とし、服部良太郎、磯田傳七氏等に依りて創立せられ、實に斯界の一大權威者たり。抑もイソダメタルは自家獨得の設備に依り周到嚴密なる分析を遂げ、一定の成分を有する原料のみを使用せるが故に其の製品は均齊なるのみならず、熱度、硬度、强度、比重等は品種に從ひ一定せるを以て品質一定不變なるの特長を有す。加ふるに其の材料は原產地より直接に購入せると、概ね輕合金を基礎とするが故に、比重輕く且つ多年の經驗上最も經濟的なる製法に依るを以て價格極めて低廉なり。之れを以て其の需要は逐年增加し、歐洲戰亂の影響に依つて我が工業界空前の活況を呈するや、同社事業亦頗る殷賑を極め、更に規模を擴張して株式組織に變更するに決し、大正九年五月資本金百萬圓の同社設立を見るに至れり、爾來社業順調に發展し、以て今日の盛況を招致するに至りしが、同社は更に東京市外巢鴨町に大日本合金研究所を設け、工學博士後藤正治氏を所長として合金の研究に努力し、益々軸承金の品質改善に資しつゝあり。同社製品が常に他品に卓越し嘖々の好評を博しつゝある亦所以無しとせんや、社長服部良太郎君は千葉縣の人、明治十一年十二月二十三日を以て生る、嚴君於菟三郎氏は豪農として縣下に名あり、君は其の長男、夙に慶應義塾に學び、後ち海外に留學して識見甚だ博し、歸朝後實業界に身を投じて磯田傳七氏等と共に同社を創立し我が化學工藝界に貢獻する所少なからず、年齒尙壯、今後の活躍蓋し刮目して大に見るべきものあらん

※

內藤燃料研究所長 工學博士
內藤游君 明治三年生
住宅 東京府荏原郡入新井町新井宿二一七四番地
電話 大森一三三番
研究所 東京市京橋區築地明石町三十一番地
電話 京橋三二八九番

燃料が人類の生存上必須缺く可らざるものたるや論無し、而も地上の燃料は年と共に減少し、之れが研究は實に刻下の一大急務たり、我內藤游君は夙に燃料の研究に沒頭し、今や斯界の權威者として名聲內外に喧傳す。君は熊本縣の人、明治三年に生れ同三十一年東京帝國大學應用化學科を卒業し、直に東京瓦斯株式會社に入りて同社事業に盡瘁する所甚だ多し、大正三年竣工せる同社大森瓦斯製造所は其の設計の嶄新なるを以て斯界の模範と稱せられしが、之れ實に君の設計に係はる、君同年十一月其の落成を俟つて同社を辭し獨力を以て日本橋城邊河岸に燃料研究所を開き、同六年六月十八日現所に移轉せり。同十年六月燃料としての石炭の研究論文を提出して博士號を授與せられ、爾來益々研究の歩武を進め、嘗に燃料の研究のみならず、曩に砂鐵の處理法に關する研究を開始し、目下東京府下品川に之れが實驗所の建設中なり。由來砂

鐵はチタニユームを含有すること多く、之れより良鐵材を得ること至難とせらる、而かも君の研究に依れば既に良鋼を採取し得べしといふ。本邦は良鐵鑛に乏しと雖も砂鐵に至りては頗る豐富にして、君が研究完成の曉には我が製鐵界に一大革命を惹起すべし。燃料の研究に至りて本邦の第一人者を以て稱せられ、之れに關する發明特許權を有するもの既に十數種あり、就中加熱爐は嘖々の好評を博し、長崎、宇野、播摩、原田、淺野、內田の各造船所、横濱船渠及大阪鐵工所に使用せらる、此の他タール脫水器、石炭乾餾機、石炭の揮發物分離裝置たるアソーブス裝置等は一大發明として社會の注目を惹きつゝあり。君恬淡にして貨殖を欲せず、私財を投じて專心學究に沒頭すること多年、其の熱誠や敬服すべく、君の如き碩學を有するは實に我が化學界の誇りといふべきなり。著書に分析化學、實用瓦斯便覽、燃料研究資料等あり、瓦斯便覽は特に高評を博し洛陽の紙價を高からしめたり。不幸先夫人は四男を遺して逝かれ現夫人榮子を迎へらる、榮子夫人貞淑敏才にして內助の功多く、一女を擧げられ家庭頗る圓滿なり。

※

關東酸曹株式會社取締役技師長
遠藤新藏君 慶應二年十一月十四日生
工場 東京府北豐島郡王子町
電話小石川 五六六、五六七、五六八、四一四五番、四一四九、四一六八
住宅 東京市本郷區駒込神明町三六五番地
電話小石川 九八一番

博學洽聞、識見卓犖、拔群の技能に加ふるに經營の才腕を以てす。我が人造肥料界の泰山北斗とは蓋し遠藤新藏君の如きを云ふならん歟。君は宮城縣士族遠藤安通氏の長男にして慶應二年十一月十四日を以て生る。頭腦明敏、幼にして聞一知十、夙に鳳雛麟兒と稱せられ、東京帝國大學工科大學應用化學科に入學して研鑽大に努む。明治二十四年優秀の成績を以て同校を卒業し後ち入つて當社の前身たる王子製造所技師たり、同所は元大藏省印刷局に所屬し外品輸入防遏の目的を以て建設され、抄紙の原料たる苛性曹達、曹達灰、晒粉等を製造せり。後ち御料局の所屬に移され、二十八年更に之れを民間に拂下げ、資本金九萬圓の合資會社王子製造所の所屬に歸す。翌年其の組織を變更して資本金五十萬圓の關東酸曹株式會社の創設せらるゝに當り、君同社技師長に任ぜらる。於是乎、君更に奮勵製品の改良に全力を傾注し、明治四十年同社に於て從來の製品の外、人造肥料の製造を創始するに決するや、多年の經驗と嶄新なる學理に基き、品質優良、價格低廉なる良品を製出す、又同社製品の硫酸は其の原料を始め硫黃鑛に仰ぎしものを、之れが供給不足と價格の不廉とに依り、漸次硫化鐵鑛に變更して而かも優秀卓拔の製品を出す等、製造上に改良を施せしこと尠なからず。遂に

擧げられて同社取締役の任に就き以て今日に及べり。君の如く富貴を望まず、榮達を欲せず、終始一貫、我が化學工業の進歩發達に盡瘁せるの士は當代稀れに見る所にして、其の功績や寔に偉大なりと云ふべき也。君今や漸く耳順に達せんとす、冀くば自重加餐、益々斯界に貢献せられんことを。夫人をいね子と云ひ溫良貞淑の譽高く、又長男富士雄氏は東京帝國大學法科大學商業學科の出身にして、少壯敏腕の實業家として大いに矚目せられつゝあり。

※

護謨靴及護謨製品製造業

ライオンゴム製造株式會社

東京府下日暮里町谷中本二五六番地
電話下谷 三六〇六、六六一二番
振替口座東京 三五、一八三番
創立 大正十年二月十九日
資本金 五十萬圓
重役 取締役社長高木伊之助、專務取締役 横山信夫、取締役德山融成、同本多榮次郎、同佐藤清吉、同佐藤鎌太郎、同小林和三郎、監査役佐藤富藏

ライオン印護謨靴製造業者として斯界の一方に覇を唱ふるものを我がライオンゴム製造株式會社と爲す、同社は元東京輸出セルロイド製造株式會社と稱し、大正十年二月十九日を以て創立せらる。當時歐洲大戰に依りて攪亂せられたる經濟界は尙ほ安定を保つに至らず、殊に對外貿易は不振其の極に達し、我がセルロイド界も亦其の餘波を蒙りて市價頓に低落し、一般製造業者の持荷處分の爲めに投賣するもの續出せる結果市場混頓たる狀態なりしかば、同社は先づ附帶業務たる護謨部を開設したり、同護謨工場は元高木伊之助氏個人の經營に屬せしもの、其護謨の製造を開始し、の設備の着々として整頓、機業績を擧ぐ械の薪新るに至り、を以て斯ライオン印界の模範ゴム靴の名たり、同聲全國に喧社は之れ傳せらるゝを買收し に至れり。て直ちに於是乎、同社は營業方針を變更して護謨製造に主力を注ぐことゝし、大正十一年春社名を東京輸出ゴム製造株式會社と改稱し、更に同十二年一月現名に變更したり。現時硬質ゴム一式の製造に從事し、最近ゴム底足袋の製造をも開始したり。職工數約五十名、一日の製造能力ゴム靴千足餘なりといふ。其の得意先は東北地方を主とし、北海道、樺太、靜岡其他各府縣に及ぶ。近時ゴム業の景氣復活を見んとするの時、同社は更に其の陣容を整備して斯界に其の鳳翼を伸展すべく着々準備中に在り。今後の發展蓋し刮目して見るべきものあらん。社長高木伊之助氏は神奈川縣中郡岡崎村の人、王子硝酸化綿製造所、東亞セルロイド株式會社等を創立し、セルロイドに關して造詣する處頗る深し。資性慧敏豁達にして經營的才腕を有し、事に當つて熱誠なり、同社今日の盛況を見る亦所以無きに非ずといふべし。

※

製紙業

富士製紙株式會社

本社 東京市京橋區三十間堀一丁目一番地
電話京橋 一三二、一三四、一三五、二五八一、二七七三、二七七四番、一一三二、一三八七、五四三
第一工場 靜岡縣富士郡高岡村
第二工場 同 縣同 郡富士根村
第三工場 同 縣同 郡加島村
芝川工場 同 縣同 郡芝富村
大阪工場 大阪市西區西野下ノ町
神崎工場 兵庫縣川邊郡小田村內常光寺村
千住工場 東京府北豐島郡南千住町千住南
江戸川工場 同府南葛飾郡篠崎村
江別工場 北海道石狩國札幌郡江別町

金山工場 同空知郡南空野村字金山
釧路工場 同 釧路郡鳥取村
落合工場 棒太 落合

創立 明治二十年十一月
資本金 三千七百五十五萬圓
重役 取締役社長大川平三郎、專務取締役穴水要七、常務取締役高橋貞三郎、取締役栖原啓藏、同小野耕一、同田中榮八郎、同熊澤一衛、同小野連三、同塚越卯太郎、監査役佐藤博愛、同小池國三、同若尾璋八

本邦製紙界の雄鎭たる富士製紙株式會社は明治二十年十一月資本金二十五萬圓を以て創立せしものに係る、是より先、林德右衛門、村田一郎、河瀨秀治氏等製紙事業を計畫し、明治十五年時の工部省技師原口要氏に謀り、富士山麓の水利を應用して動力を得、富陽製紙會社なる名稱に依りて會社設立を企劃する所ありしが、偶々財界の不振に際會し、一時其の實行を中止するの已むなきに至りしが、二十年十一月田村一郎氏洋紙界の視察を終りて米國より歸朝し、同志と計りて玆に同社を創設し、富士山麓に工場建設工事を起せり、越えて二十三年一月第一工場の施設を完成したるを以て抄紙業を開始し、翌二十四年更に製紙原料の製造に着手し、次て新聞用紙の抄造を開始せり。既にして諸般の設備成り其生產力著しく增加するや、二十八年率先して機械紙の海外輸出を企て、天津、漢口に派出所を設置して專ら海外發展に努力し、四十三年十月更に上海に出張所を設く。爾來益々事業を擴張すると共に逐次增資を行ひ、大正九年二月東京板紙株式會社並に四日市製紙株式會社を合併して一躍三千五百十五萬圓の膨大なる資本金を擁するに至れり、後ち更に增資して總資本金三千七百五十五萬圓を算するに至れり、現時靜岡縣下に四箇所、北海道に三ヶ所、東京府下に二ヶ所、大阪、兵庫及樺太に各一ヶ所の工場を置き、上等紙類、印刷紙類、新聞紙類、包紙連紙類、唐紙類、有光紙類、其他の紙類を製造し、北海道旭川に於て電氣事業を經營せり。其の製品の優良なるは世人の周知せる事實にして、內外博覽會に出品して受賞せしこと前後實に二十數回に及べり。今や同社は靈腕を以て斯界に鳴る大川平三郎氏を社長に、新進の穴水要七氏を專務に、高橋貞三郎氏を常務に推し、陣容堂々斯界に活躍しつゝあり。吾人は其隆運を祝福するに吝かならざる也

大川平三郎氏
取締役社長

※

東洋モスリン株式會社

本社及第一、第三、第四工場 東京府南葛飾郡龜戸町字龜戸千二百六十八番地
電話本所四五四、四五五、三一五五番
日本橋出張所 東京市日本橋區濱町一丁目七番地
電話浪濱 四八九、四八四番
第二工場 東京府南葛飾郡龜戸町字五ノ橋四十八番地
電話本所六二四番
第五工場 靜岡縣安倍郡豐田村小黑
大阪出張所 大阪市東區北濱五ノ九番地
電話長本局三六〇二番
東北出張所 福島市榮町二十一番地
創立 明治四十年一月
資本金 一千五百萬圓
重役 取締役會長神戸泰一、專務取締役田中海一、取締役若尾幾造、同渡邊福三郎、同前川太兵衛、同小池國三、同兼技師長永井米藏、監査役渡邊勝三郎、同若尾璋八、同山星德太郎

繊物界に於けるモスリンの勢力は近時頓みに擡頭を來し、測り知るべからざる速度を以て進展しつゝあり、從つて我がモスリン業も頗る隆昌を極む、然り而して其の覇者たる地位を占むるものは東洋モスリン株式會社を措きて他に無かるべきは、何人も異

議なく認むる所なりとす、同社創業の當時は僅かに二百萬圓の資本金を以て開始せるものなりしが、年と共に業務進展し來りて再三再四增資を行ひ、遂に一千五百萬圓の巨資を擁する一大會社と爲るに至れり、工場の諸設備は間然する所なく、機械に最新精巧のものを据付け、優秀なる技術家を聘して、生產額の多量なると共に、製品の卓越せることは斯界に定評の存する所にして、東洋モスリン製の語は、一の信用狀たるの觀なくんば非らざるなり、今や三千五百名に垂んとする從業員を有し、業績は日進月にして、取締役會長たる神戸學一君を初めとして、錚々たる俊英を網羅し、田中海一、若尾幾造、渡邊福三郎、前川太兵衞、小池國三、永井米藏氏等諸取締役渡邊勝三郎若尾璋八、山星德太郎氏等の各監査役は、何れも皆實業界知名の士たり、抑もモスリン界の前途は尙益々發展すべきことは、明白なる事實にして、此の間に處して東洋モスリン株式會社が如何に活躍すべきかは、刮目して待つべく、必ずや重役諸氏の懷抱する雄圖は、近き將來に於て實現せらるべきなり、億容今日より想望すべきにあらずや。

富士印刷株式會社取締役 合資會社竹尾洋紙店代表社員 竹尾藤之助君

明治二十年一月三日生
東京市神田區錦町三丁目五番地
電話 神田 三〇七八番

洋紙業界新進の俊傑として多大の期待を囑せられ、然かも着々其の實蹟を擧げ、同業者をして驚嘆せしめつゝあるは、合資會社竹尾洋紙店代表社員竹尾藤之助君にあらずや、君は三重縣河藝郡明村大字林竹尾岩三郎氏の次男にして明治二十年一月三日を以て生る、幼少の頃より雄心勃々たるものあり、小學校の課程を卒るや十四歲にして上京し、叔父竹尾榮一氏の許に投ず、恰かも榮一氏は洋紙界の巨商柏原洋紙店に勤務すること十有餘年、經驗手腕超凡なるものあり、明治三十一年獨立して京橋區八丁堀水谷町に獨立洋紙店を經營せる當時なりしかば、氏を輔けて銳意其の發展に盡瘁する所あり、而かも業運次第に隆昌を來して翌年神田區表神保町二番地に移轉し、更に大いに業務を擴張せり、次で明治四十一年には又々店舗の狹隘を告ぐるに至り、現所に新築移轉したり、偶々店主榮一氏は疾病の爲めに大正二年遂に鄕里に歸臥せり、從來にありても君が營業上の中心たりしは勿論なれども、此處に於て愈々經營の全責任を双肩に擔ひ、縱横の手腕を發揮するの機運到來す、然かも君は尙二十餘歲の靑年に過ぎざりしと雖も、其の周到なる用意と明快なる果斷とは、巧みに機宜の措置を執りて誤つことなく、益々隆勢を致し、榮一氏及び親族等と謀りて合資會社の組織に改め、業況一層の發展を見るに至れるは之れ一に君の苦心と努力の結晶に外ならざるなり、目下數十名の店員を指揮して巨萬の取引を試みつゝあり、蓋し洋紙業界に於ける一流の店舗たることは何人も否定せざると共に、一般實業界の偉材として重きを爲し、各方面に努力する所勘からざれども、富士印刷株式會社其の他一二の會社に就ては、重役として特に貢獻すと云ふ、誠に君の如きは少壯の實業家として特筆するに足るべく、前途春秋に富むが故に將來の發展は刮目すべきなり。

芳醇無比

大黑正宗

大黑正宗の畧歷

安福又四郎商店の創業は遠く寶曆元年（今より百六十餘年前）の昔に發し專ら優良清酒の釀造に腐心して今日に至れり現今の造石高は一萬餘石に過ぎざれども品質特に優秀なる斯界既に定評あれば敢て贅言せず大黑正宗の酒銘を冠して賣出せしは極めて最近の事なれども芳醇の品質は普く愛飲家の認むる所となり各地に於て非常なる好評を博しつゝあり更に品質の向上を計り清酒界の逸品を以て各位の嗜好に投ぜん事を期せり。

釀造發賣元

安福又四郎商店

兵庫縣灘御影町

電話 御影 六一五
番一
番〇一
番七二一四 神戸三ノ宮

營業科目

銅、錫、鉛、亞鉛
アンチモニー
アルミニューム
ニッケル
鉄力板平浪板
其他舶來雜貨商

大阪堤孝吉商店

田川九一郎

東京出張所　東京市神田區元岩井町八番地
平山豐吉商店
電話神田四〇七六番

GENERAL & PRINTER'S WooD WORKS

一般木工品
印刷用木具の製作

高橋吉松製作所

營業部　東京市京橋區彌左衛門町
電話京橋三六三七
振替東京二一九七七
工場　芝浦、市ヶ谷
代理店　大阪、神戸、熊本、仙臺、臺中

カガシ印

染料及工業

藥品商

登錄商標

㊤

馬場染料店

東京市日本橋區傳馬鹽町一番地

電話神田一三五七番

醫科器械

理化學器械

度量衡商

東京市日本橋區本町三丁目十二番地

合資會社

いわしや松本器械店

電話本局 特長一三二二番 二四九二番 四一八七番

發電及受電略號(登錄濟)イワシキ

活動寫眞機械及附屬一式
幷ニ映畫販賣業

東京市下谷區車坂町五十一番地
合資會社 東京實業商會
代表社員 吉田淺吉
電話下谷五七七五番

醫科器械、理化學器械輸出入商
いわしや 岩本器械店
岩本藤吉
東京市日本橋區本町三丁目二番地
電話本局長 二三四、八三六番

東京市日本橋區室町三丁目十六番地

理化學器械及び器具
並に醫療用ゴム製品
製作販賣

石坪啓次商店

店主 石坪房二郎

電話本局 一五五一番
振替東京 三五二五六番

コロタイプ
石版
美術印刷

東京市神田區柳町一番地

早川印刷所

所主 早川右三郎

電話神田 七五九番

帝國塗料株式會社
日本化學工業株式會社 特約店

ペイント各種
ワニス類
ボイルド油
絶縁塗料
化學工業藥品
繪具染料
歐米塗料
機械減磨料
ラクダ印塗料製造

東京市本所區相生町五丁目三十七、八番地
合名會社
宗片岡商店
電話本所 四七九番
振替口座 東京 五八一〇番
工場 東京府大島町七丁目竪川河岸

栃木縣足利市通二丁目
旅館 遷喬館 初谷本店
電話足利 八番 二三番
振替口座 四三八六番
東京市神田區連雀町十八番地
初谷支店
電話神田三七〇番三七一番
足利市兩毛線停車場前
初谷支店
電話足利 一二九番

秋田縣横手町
阿櫻酒造株式會社
銘酒「阿櫻」釀造元

獨逸メルク製藥會社
獨逸グリユベル製藥會社
獨逸カールバウム製藥會社
尚前記各社製顯微鏡用色素及び純良『化學藥品』在庫品多數有之候
純正化學藥品
分析用藥品
顯微鏡用色素
東京市日本橋區本石町三丁目八番地
鹿印最純保證付
化學藥品發賣元
藥種貿易商
化學藥品直輸商
K 小島商店
電話本局 〔長四六六五番 一七五六番〕
振替東京 一九〇九八番
電信略號 〔ヨ〕
▲毎月發行定價表は御一報次第進呈

藥種貿易商

岩城市太郎商店

東京市日本橋區本町三丁目四番地
電話本局長四四七八番

化學用藥品（目錄進呈）

◉二硫化炭素（人造絹糸製造用、殺蟲用、溶解用）

- アンモニア水（化學用藥局方工業用）
- 純硫酸（化學用藥局方）
- 純鹽酸（化學用藥局方）
- 苛性硝酸（化學用藥局方）
- 苛性加里（化學用藥局方）
- 苛性曹達（化學用藥局方）
- 硫化鐵（化學用工業用）
- 鹽化カルシウム（內服用、化學用、製氷用）
- 鹽化アンモニア（電池用工業用）
- 酸性燐酸加里（釀造用）
- 酸性燐酸石灰（釀造用）
- 赤色血滷鹽（寫眞用）
- 枸櫞酸鐵アンモニア（寫眞用）
- 乳酸（釀造用藥局方）
- 寫眞用藥品各種

其他一般化學工藝用藥品製造
官公署用達
直輸出入商

林亦吉商店

大阪市東區道修町二丁目十一番地（堺筋北入）
特長七九九番
長九四四八九番
振替大阪七二五九番
受電（オサカカガク）
電話本局
長二三九七四八番
發電略號【ハ】
工場 大阪市外東成郡鯰江町今福
同市西成郡鷺洲町海老江
電話土佐堀四八一三番

工藝用藥品

工業藥品
染料中間物
ゴム原料
諸油脂販賣

商標 ✕

高野商店

東京市日本橋區本石町壹丁目拾五番地
電話本局長四貳〇八番

高能率
眞空ポンプ
一、乾燥機用
二、電球製作用
三、實驗室用

東京市芝區三田松坂町三十八番地
芝製作所
電話高輪二、一三三番

大阪市東區北濱五丁目十六番地
辨理士 小谷鐵次郎
電話長本局二八三番

活動寫眞映畫製作
外國映畫直輸入業

岩岡商會

岩岡巽

東京市下谷區上根岸町四十一番地
電話下谷 特長二一二八番

CONTENTS

目　次

コ687

A

Aukawa, Gisuke ... ...(鮎川義介君) 275
Araki, Danzo ... ...(荒木團藏君) 41
Amano, Kikujiro ... ...(天野菊次郎君) 116
Amano, Chiyomaru ...(天野千代丸君) 83
Amamiya, Bunkichi ...(天宮文吉君) 87
Asakura, Rutaro ... ...(朝倉柳太郎君) 154
Asakura, Tsunehito ...(朝倉每人君) 281
Asakura, Fukuju ... ...(朝倉富久壽君 134
Asanuma, Shokai ...(合資會社 淺沼商會) 144
Asano, Toshiro ... ...(淺野敏郎君) 87
Asano, Yasunosuke ...(淺野安之助君) 166
Asami, Kaichiro ... ...(淺見加一郎君) 146
Asami, Yoshisuke ... ...(淺見義佐君) 185
Asami, Genkichi ... ...(淺見源吉君) 147
Asama, Ichiro ... ...(淺間市朗君) 80
Asamai, Shuzo Co.... (淺舞酒造株式會社) 20
Asada Myoban Seizosho (淺田明礬製造所) 163
Asahi, Toki Co. ... ...(旭陶器株式會社) 100
Asahi, Glass Co. ... ...(旭硝子株式會社) 260
Asahi, Denka Kogio Co.(旭電化工業株式會社) 222
Asahi, Petrorium Co. ...(旭石油株式會社) 186
Akiike, Hanzo ... ...(秋池半藏君) 184
Akita, Genshichi ... ...(秋田源七君) 121
Akita, Naokichi ... ...(秋田直吉君) 278
Akita, Minoru ... ...(秋田實君) 272
Akita, Yetsuta ... ...(秋田悅太君) 215
Akigusa, Ryuzo ... ...(秋草龍藏君) 32
Akigusa, Masagoro... ...(秋草正五郎君) 240
Akiba, Toyokichi. ... ...(秋葉豐吉君) 194
Akiyama, Shikakichi ...(秋山鹿吉君) 30
Ando, Jubeh ... ...(安藤重兵衛君) 69
Abe, Shoten ... ...(阿部商店) 194
Anami, Masashige ... ...(阿南正茂君) 48
Adachi, Tatsuzo ... ...(足立辰三君) 268
Abe, Kichizo ... ...(安部吉藏君) 19
Aibara, Gizo ... ...(粟飯原義藏君) 57
Aikawa, Risaburo ... ...(相川利三郎君) 266
Aita, Hachishiro ... ...(相田八四郎君) 105
Aimoto, Senkojo ... ...(相本染工所) 109
Ariga, Matsuhiko ... ...(有賀松彦君) 55
Arimatsu, Teiju ... ...(有松貞重君) 89
Aoki, Tsunezo... ... ...(青木常藏君) 238
Aoki, Kunitaro ... ...(青木國太郎君) 70
Aoki, Shozo ... ...(青木庄造君) 8
Aoki, Celluloid Manufactory ... ...
... ...(合資會社青木セルロイド製造所) 14
Aoshima, Matsutaro ...(青島松太郎君) 165
Akai, Daijiro ... ...(赤井大次郎君) 141
Akai, Shoten ... ...(赤井商店) 238
Akamatsu, Gentaro... ...(赤松源太郎君) 142
Agata, Gongoro ... ...(縣權五郎君) 107
Akashi, Kunisuke ... ...(刀石國助君) 148
Akashi, Kazue ... ...(明石和衛君) 280
Akashi, Komei.... ... ...(明石厚明君) 221
Akashi, Gomei Kaisha ...(明石合名會社) 75
Anahara, Konosuke... ...(穴原幸之助君) 221
Arashiyama, Shuzoten (合名會社嵐山酒造店) 239
Arai, Kisuke ... ...(新井喜助君) 56
Arai, Kocho ... ...(新井幸長君) 234

B

Banzaizyozokaisha, ... (萬歲釀造株式會社) 225
Bingo Orimono Dogyokumiai ... ...
... ...(備後織物同業組合) 272

C

Chiba, Ziro ... ...(千葉次郎君) 109
Chiyoda Ribon Seishoku Kaisha ... ..
... ...(千代田リボン製織株式會社) 41
Chiyoda Kagakukogyo Kaisha ... ...
... ... (千代田化學工業株式會社) 124
Chiyoda Seiyaku Kaisha ... ...
... ...(千代田製藥株式會社) 182
Chichibu Kinuorimono Dogyo kumiai ...
... ...(秩父絹織物同業組合) 228
Chuo Ink Company ...(中央インキ株式會社) 238
Chugaiboseki Kaisha (中外紡織株式會社) 129
Cho, Chuichi, ...(張忠一君) 267
Carbon-paper Co. Ltd, ...
... ...(カーボンペーパー株式會社) 226

D

Dai Nippon Inryo Co. (大日本飲料株式會社) 210
Dai Nippon Jinzo Hiryo Co.... ... ...
... ... (大日本人造肥料株式會社) 258
Dai Nippon Bear Co. (大日本麥酒株式會社) 93

Dai Nippon Celluloid Co. ... ...(大日本セルロイド株式會社) 172
Dai Nippon Seito Co. (大日本製糖株式會社) 253
Daifuku Boseki Co. Ltd. (大福紡績株式會社) 29
Daikoku Tatsujiro ... ...(大黒辰次郎君) 90
Dai-ichi Kogyo Seiyaku Co.... ... ...(第一工業製藥株式會社) 122
Daigo Jozo Co. Ltd. ...(醍醐醸造株式會社) 16
Denkai Kogyosho ...(株式會社電解工業所) 143
Denki Kagaku Kogyo Co. Ltd. ... ...(電氣化學工業株式會社) 281
Dobashi, Sataro ... ...(土橋佐太郎君) 202
Dohi, Taketoshi ... ...(土肥猛利君) 193

E

Ebara, Shobei ... ...(江原庄兵衛君) 153
Eda, Kunita ... ...(江田邦太君) 191
Ezoe, Shoten ... ...(江副商店) 282
Ezoe; Magoemon ... ...(江副孫右衛門君) 161
Ebi, Matsuji ... ...(海老松二君) 13
Ehi, Teizo ... ...(英比貞造君) 77
Enjoji, Ki... ... ...(圓城寺規君) 262
Endo Soroku ... ...(遠藤宗六君) 27
Endo, Shinzo ... ...(遠藤新藏君) 288
Endo, Buemon... ... ...(遠藤武右衛門君) 153
Endo, Seiyaku-sho ...(合資會社遠藤製藥所) 214
Eensaka, Itaro... ... ...(遠坂伊太郎君) 217

F

Fuji Tan-Seizo Co. Ltd. ... ...(不二炭製造株式會社) 226
Fukoku Orimono Co. Ltd. ... ...(富國織物株式會社) 217
Fuji Gasu-Boseki Companay Ltd. ... ...(富士瓦斯紡績株式會社) 286
Fuji Seishi Co. Ltd.... (富士製紙株式會社) 288
Furukawa, Seizi ... ...(古川清治君) 231
Fukagawa, Eizaemon ...(深川榮左衛門君) 191
Fukao, Shichiro ... ...(深尾七郎君) 287
Fukada Gomei Kaisha ...(深田合名會社) 159
Fukamauchi, Kyuzo ...(深間内久藏君) 34
Funabashi, Yorihisa ...(舟橋賴久君) 31
Fukui-ken Kinu-Orimono Dogyo-Kumiai ... ... (福井縣絹織物同業組合) 235
Fukui-ken Seiren Co. Ltd. ... ...(福井縣精練株式會社) 269
Fukui, Kenchu Seiren Co.. ... ...(福井縣絹紬精練株式會社) 235
Fukui-kenritsu Kogyo Gakko. ... ...(福井縣立工業學校) 212
Fukui Nenshi Senko Co. Ltd. ... ...(福井撚糸染工株式會社)

Fukuda, Kumajiro ... ...(福田熊治郎君) 200
Fukushima, Matsuo ...(福島松男君) 168
Fukushima Kogyo Shikenjo (福島工業試驗場) 186
Fukushima-ken Yushutsu Habutae Kensajo ... (福島縣輸出羽二重檢査所) 143
Fukushima Shintatsu Shuzo-Kumiai ... ...(福島信達酒造組合) 17
Fukushima Habutae Co, ...(福島羽二重株式會社) 198
Fukumochi, Hisao ...(福持壽雄君) 243
Fujii, Mankichi ...(藤井萬吉君) 250
Fujii, Gosaburo ...(藤井誠三郎君) 8
Fujii, Zensuke... ...(藤井善助君) 64
Fujii, Monsaburo ...(藤井紋三郎君) 46
Fujita, Ichimatsu ...(藤田一松君) 160
Fujita, Teiji ...(藤田貞二君) 189
Fujita, Yoshiyasu ...(藤田義保君) 283
Fujimura, Inosuke ...(藤村猪之助君) 196
Fujino, Izo ...(藤野懿造君) 232
Fujio, Yuzo ...(藤生雄三君) 240
Fujisawa Shop's, Chemical Factory. ... ...(藤澤商店化學工場) 174
Fujimoto, Kinzo ...(藤本金藏君) 217
Fujimoto, Hideji ...(藤本秀治君) 251
Fujikura, Electric-Wire Co. Ltd. ... ...(藤倉電線株式會社) 276

G

Gan, Unnen ...(願雲年君) 125
Genta, Yoshinosuke...(源田芳之助君) 190
Gyota, Kogyo Kaisha ...(行田工業株式會社) 233
Goto, Benjiro ...(後藤辨次郎君) 195
Goto, Masatake ...後藤正雄君) 87
Goto, Decine Honpo ...(後藤デシン本舗) 154
Goto, Hei... ...(後藤丙君) 212
Gumma-ken Kiginu-futo-orisho Dogyo Kumiai ...(群馬縣生絹太織商同業組合) 213
Godo Ushi Guriserin Kaisha ... ...(合同油脂グリセリン株式會社) 279

H

Hirose, Wasaku ...(廣瀨和作君) 25
Hirose, Fumikazu ...(廣瀨文寛君) 7
Hirai, Keinosuke ...(平居敬之助君) 197
Hirata, Gosaku ...(平田五作君) 164
Hiramatsu, Yoshitaka ...(平松義孝君) 228
Hirasawa, Jun-ichiro ...(平澤準一郎君) 251
Hikosaka, Manjiro ...(彦坂萬次郎君) 45
Hisada, Yatoji... ...(久田彌藤次君) 49
Hirasawa, Shigetaro ...(平澤繁太郎君) 110
Hoshina, Kensuke ...(保科賢介君) 113
Hori, Yashichi... ...(堀彌七君) 37
Horio, Kamajiro ...(堀尾釜次郎君) 42

Hotta, Naomichi ...(堀田高道君) 66
Horino, Kyuzo... ...(堀野久造君) 112
Hosoyama, Tashichi ...(細山太七君) 70
Hoshi Seiyaku Kaisha ...(星製藥株式會社) 204
Hoshino, Takezo ...(星野武三君) 265
Honma, Toyoei, ...(本間豐榮君) 161
Hoshino, Ishimatsu ...(星野石松君) 116
Honma, Magotaro ...(本間孫太郎君) 186
Hasegawa, Takeo ...(長谷川武雄君) 1
Hasegawa, Zyun-ichi ...(長谷川淳一君) 157
Haneda, Masukichi ...(濱田益吉君) 2
Hachioji Enogu-Senryosho Kumiai, ... (八王子繪具染料商組合) 34
Honaoka, Tokuichi ...(花岡德一君) 159
Hara, Tamisaburo ...(原民三郎君) 104
Harada, Sadasuke ...(原田定助君) 175
Harayama, Kinshiro ...(原山金四郎君) 24
Harashina, Hikoshige ...(原科彦重君) 33
Hattori Tokeiten Ltd. (株式會社服部時計店) 257
Hattori, Yasunaga ...(服部保永君) 30
Hattori, Matsujiro ...(服部松次郎君) 205
Hakuyosha Cleaning Kaisha, ...(白洋舍クリーニング株式會社) 246
Hachisuga, Mitsujiro, ...(蜂須賀光次郎君) 38
Hayakawa, Ichitaro... ...(早川市太郎君) 278
Hayakawa, Entaro... ...(早川延太郎君) 33
Hayashi, Iwami ...(早矢仕岩巳君) 220
Hayashi, Yoshijiro ...(林芳治郎君) 209
Hayashi, Heizo ...(林平藏君) 204
Hayashi, Tsunetaro... ...(林常太郎君) 285
Hayashi, Hei'nosuke ...(林兵之助君) 157
Hayashi, Yogo ...(林要五君) 88
Hayashi, Itaro... ...(林鐵君) 71
Hayashizaki, Eiichi ...(林崎榮一君) 49
Hamada, Hasujiro ...(濱田初次郎君) 158
Hamaguchi, Tomisaburo...(濱口富三郎君) 230
Hamamatsu Technical School ... ...(濱松工業學校) 28
Harumoto Soap Manufactory Ltd... ... ...(株式會社春元石鹸製造所) 105
Hagihara, Tokuyuki ...(萩原德之君) 177
Hashizume, Shintaro ...(橋爪新太郎君) 61
Handa, Uichi ... ...(半田右一君) 274

I

Ihara, Chokichi ...(井原長吉君) 136
Inoue, Jisaburo ...(井上治三郎君) 115
Inoue, Shigezo... ...(井上重造君) 65
Inoue, Soio ...(井上相如君) 82
[illegible] ...(井上準次郎君) 245

Imoto, Tamesaburo ...(井元爲三郎君) 1
Ito Kochoen ...(伊東胡蝶園) 261
Ito Kotozo ...(伊藤琴三君) 106
Ito, Keizo... ...(伊藤桂藏君) 202
Ito Kinshichi ...(伊藤金七君) 114
Ito, Shizuka ...(伊藤靜君) 156
Ito Seijiro... ...(伊藤清次郎君) 250
Izusho Senshokukoba ...(伊豆庄染色工場) 106
Ibuki, Manjiro... ...(伊吹萬次郎君) 56
Ise, Boshokukaisha ...(伊勢紡織株式會社) 76
Ise, Kichizo ...(伊瀨吉藏君) 34
Igarashi, Kanzaburo ...(五十嵐勘三郎君) 197
Inomata, Masajiro ...(猪俣政次郎君) 21
Iida, Masa ...(飯田昌君) 249
Iida, Zenjiro ...(飯田善次郎君) 271
Iiyama, Sadajiro ...(飯山定次郎君) 196
Ichii, Kasaburo ...(市居嘉三郎君) 181
Ichikawa, Tomekichi ...(市川留吉君) 279
Ichikawa, Tsurumatsu ...(市川鶴松君) 269
Ichikawa, Shosaku ...(市川正作君) 6
Ichikawa, Kokichi ...(市川小吉君) 120
Irie, Kanichi ...(入江勘市君) 200
Iwakawa, Kichiroku ...(岩川吉六君) 59
Iwatsuki, Shokichi ...(岩月庄吉君) 137
Iwamoto, Ryosuke ...(岩本良助君) 197
Iwamoto, Ichiro ...(岩本一郎君) 124
Itagaki, Genshiro ...(板垣源四郎君) 180
Izumi, Torazo ...(泉寅藏君) 143
Izumigawa, Seitaro ...(泉川清太郎君) 192
Inahata Shoten Co. Ltd. (株式會社稻畑商店) 273
Ikuta, Seiichi ...(生田清市君) 31
Imai, Taku ...(今井卓君) 8
Imai, Taisaku ...(今井泰作君) 137
Imaizumi, Eigai ...(今泉英又君) 121
Imamura, Mansaburo ...(今村萬三郎君) 245
Imamura, Hisuke ...(今村英祐君) 274
Imano, Mituro ...(今野光郎君) 270
Ikeda, Isaburo ...(池田伊三郎君) 248
Ikeda, Yoichi ...(池田與市君) 264
Ikeda, Hiroji ...(池田馨二君) 277
Ikeda, Ko... ...(池田浩君) 211
Ikeda Kikunae... ...(池田菊苗君) 267
Ikeda, Mototaro ...(池田元太郎君) 231
Ikegai, Tekkojyo ...(池貝鐵工所) 192
Ikeme, Masujiro ...(池目增次郎君) 68
Ishii, Kumajiro ...(石井熊次郎君) 268
Ishii, Kumao ...(石井熊夫君) 141
Ishii, Ginzo ...(石井銀造君) 246
Ishii, Hiroshi ...(石井[illegible]君) 82
Ishihara, Syuzo ...(石原周三君)

Ishihara, Seisuke ... ... (石原清助君) 214
Ishifuji, Toyota ... ... (石藤豊太君) 267
Ishiwatari, Kiyoshi ... ... (石渡 清君) 216
Ishikawa, Ichiro ... ... (石川一郎君) 232
Ishikawa, Hachiroji... ... (石川八郎治君) 154
Ishikawa, Yagoro ... ... (石川彌五郎君) 150
Ishikawa, Kotaro ... ... (石川浩太郎君) 241
Ishikawa, Mokichi ... ... (石川茂吉君) 139
Ishikawa, Shichishiro ... (石川七四郎君) 201
Ishida, Kamejiro ... ... (石田亀次郎君) 50
Ishida, Taizo ... ... (石田泰藏君) 172
Ishidzuka, Toji... ... ... (石塚燈次君) 127
Ishinaka, Otokichi ... ... (石中乙吉君) 213
Ishiyama, Masuzo ... ... (石山益三君) 7
Ishimaru, Shin-ichi ... ... (石丸眞一君) 193
Ishizaka, Masae ... ... (石坂正衛君) 207
Ishizaki, Yonezo ... ... (石崎米藏君) 2
Isoda Metal Factory (イソダメタル工場) 288

J

Jomo, Yori-ito Co. Ltd (上毛燃糸株式會社) 248

K

Kato, Haruzo ... ... (加藤春三君) 199
Kato, Benkuro ... ... (加藤辨九郎君) 10
Kato, Tomisaburo ... ... (加藤富三郎君) 243
Kato, Jungo ... ... (加藤純吾君) 205
Kato, Chosaburo ... ... (加藤長三郎君) 17
Kato, Daisaku ... ... (加藤大作君) 176
Kato, Sotaro ... ... (加藤宗太郎君) 95
Kato, Nakajiro ... ... (加藤仲次郎君) 214
Kato, Masaichi ... ... (加藤正一君) 219
Kato, Masataro ... ... (加藤正太郎君) 62
Kato, Keisaburo ... ... (加藤桂三郎君) 204
Kato, Sakujiro... ... ... (加藤作次郎君) 191
Kato, Kichiju ... ... (加藤吉十君) 180
Kato, Seikichi ... ... (加藤清吉君) 57
Katsuchi, Hirotsugu ... (加土廣次君) 246
Koga, Yoshimasa ... ... (甲賀宜政君) 283
Kainoso, Tadaka ... ... (甲斐莊楠香君) 156
Kaku Juji... ... ... (賀來重治君) 221
Kabashima, Kisaburo ... (樺島喜三郎君) 227
Kawamura-gumi Co. ... (合資會社川村組) 229
Kawamura, Matsuji ... (川村松次君) 101
Kawai, Eitaro ... ... (川合英太郎君) 242
Kawamichi, Saichiro ... (川道佐一郎君) 124
Kawashima, Heigoro ... (川島平五郎君) 70
Kawashima, Hikoroku ... (川島彦六君) 235
[illegible]shima, Gen-emon (川島源右衛門君) 139

Kawahito, Sanpachi ... (川人三八君) 216
Kawai, Ryozo ... ... (川合諒造君) 239
Kawabata, Hiromasu ... (河端廣益君) 132
Kawanishi, Torakichi ... (河西寅吉君) 26
Kawaguchi, Takashi ... (河口 孝君) 133
Kawamura, Hidekuma ... (河村英熊君) 206
Kawai, Naozo... ... ... (河合直三君) 65
Kawamori, Matasaburo ... (河盛又三郎君) 201
Katayama, Tetsukichi ... (片山徹吉君) 284
Kataoka, Hideji ... ... (片岡秀治君) 146
Kataoka, Motoya ... ... (片岡元彌君) 260
Katakura, Seishi Boseki Co. Ltd.... ...
... ... (片倉製糸紡績株式會社) 254
Katsura, Jinsuke ... ... (桂 甚助君) 29
Kanegafuchi Boseki Co. Ltd. ... ...
... ... (鐘ヶ淵紡績株式會社) 278
Kaneda, Sosaburo ... ... (金田宗三郎君) 241
Kaneko, Torizo, ... (金子酉三君) 214
Kaneko, Zentaro ... .. (金子膳太郎君) 155
Kaneko, Tatsusaburo ... (金子辰三郎君) 207
Kaneko, Taketaro ... ... (金子竹太郎君) 185
Kaneko, Fukumatsu ... (金子福松君) 67
Kaneko, Kotaro ... ... (金子功太郎君) 36
Kanamori, Sennosuke ... (金森仙之助君) 200
Kamakura, Umeta ... ... (鎌倉梅太君) 227
Kakehi, Sansuichi ... ... (筧 三七君) 54
Kabushiki, Nippon Nenshi Co. ... ...
... ... (株式日本燃糸會社) 270
Kageyama, Rinsaburo ... (影山林三郎君) 53
Kageyama, Mankichi ... (影山萬吉君) 68
Kamurigi, Kichiroji... ... (冠木吉郎次君) 109
Kasaishi, Kunitaro ... ... (笠石國太郎君) 10
Kagihira, Suezo ... ... (鍵平末藏君) 102
Kamei, Itaro ... ... (亀井伊太郎君) 19
Kameda, Yonesuke... ... (亀田米助君) 96
Kameda, Michitaro... ... (亀田道太郎君) 120
Kameyama, Gaishi ... ... (亀山外史君) 64
Kamikura, Jiro ... ... (上倉次郎君) 214
Kozuki, Hidetaro ... ... (上月秀太郎君) 266
Kajiwara, Shinhei ... ... (梶原眞平君) 249
Kanto Sanso Co. ... (關東酸素株式會社) 112
Kanto Brewing Co. Ltd. (關東醸造株式會社) 129
Komorimiya, Yoshitaro ... (小森宮山太郎君) 51
Kodama, Orimono Dogyokumiai ... ...
... ... (兒玉織物同業組合) 188
Kojima, Toyosaburo ... (兒島豊三郎君) 35
Kompira Senryo Co. Ltd ... ...
... ... (コンピラ染料株式會社) 86
Koizumi, Risuke ... ... (小泉利助君) 97
Koizumi, Kakugoro... ... (小泉角五郎君) 60
Koizumi, Tatsu ... ... (小泉

Kobayashi, Torazo... ... (小林寅藏君) 3
Kobayashi, Ryoshiro ... (小林良四郎君) 134
Kobayashi, Wasuke ... (小林和助君) 139
Kobayashi, Ushi oro ... (小林丑五郎君) 55
Kobayashi, Ki-ichi ... ... (小林喜一君) 24
Kobayashi, Kichinosuke... (小林吉之助君) 27
Kobayashi-Shoten Co. Ltd. ... ...
... ... (株式會社小林商店) 257
Konishi, Soshichi ... ... (小西宗七君) 142
Kodama, Gomei Kaisha... (小玉合名會社) 16
Kohira, Isao ... ... (小平 勲君) 44
Koguro, Shikazo ... ... (小黒鹿造君) 224
Kogure, Yoshisaburo ... (小暮由三郎君) 122
Koyama, Hisayoshi... ... (小山久好君) 54
Koyanagi, Seiki ... ... (小柳清熙君) 9
Komatsu, Makisaburo ... (小松槙三郎君 63
Komatsu, Ki-ichiro... ... (小松喜一郎君) 138
Kojima. Masaji ... ... (小島正治君) 170
Kojima, Kenjiro ... ... (小島健次郎君) 171
Kojima, Isejiro ... ... (小島伊勢次郎君) 280
Kudo, Sukehisa ... ... (工藤祐壽君) 140
Kume, Takeshi ... ... (久米 武君) 4
Kuniya, Seinosuke ... ... (國谷誠之助君) 180
Kuniyoshi, Ki-ichi ... ... (國吉喜一君) 211
Kurokawa, Sotaro ... ... (黒川惣太郎君) 147
Kurokawa, Bokuji ... ... (黒川墨治君) 281
Kurokawa, Denjiro... ... (黒川傳次郎君) 53
Kurota, Ichinosuke... ... (黒田市之助君) 4
Kurota, Shosaku ... ... (黒田正策君) 167
Kurota, Juhei ... ... (黒田重平君) 230
Kurogoshi, Gomei Kaisha (黒越合名會社) 31
Kubota, Kunikazu ... ... (窪田國和君) 189
Kuchiki, Tsunasada... ... (朽木綱貞君) 235
Kurihara, Kanshi ... ... (栗原鑑司君) 208
Kurihara, Kohachi ... ... (栗原幸八君) 134
Kuwayama, Keikichi ... (桑山啓吉君) 132
Kuzuhara, Shokai ... (株式會社葛原商會) 272
Kuzuoka, Shobeh ... ... (葛岡庄兵衛君) 97
Kurada, Kishiro ... ... (蔵田喜四郎君) 78
Kumazawa, Kuemon ... (熊澤九右衛門君) 170
Kushida, Wasuke ... ... (櫛田和助君) 91
Kusumoto, Fujikusu ... (楠本藤楠君) 247
Kimura, Isaburo ... ... (木村偉三郎君) 135
Kimura, Yataro ... ... (木村彌太郎君) 170
Kimura, Magoshiro... ... (木村孫四郎君) 193
Kinoshita, Masajiro... ... (木下政次郎君) 72
Kimura, Shutaro ... ... (木村周太郎君) 144
Kimura, Jiro ... ... (木村二郎君) 168
Kimura, Hidejiro ... ... (木村秀次郎君) 236
Kitamura, Yoshio ... ... (喜多村吉雄君) 121
Kito Buntaro ... ... (鬼頭文太郎君) 135

Kiyo Senko & Co. ... (紀陽染工株式會社) 222
Kiri, Hatsujiro ... ... (桐初次郎君) 3
Kitai, Minekichi ... ... (北井峯吉君) 48
Kitakawa, Toyojiro... ... (北河豊次郎君) 86
Kitakata, Seiichiro ... ... (北方清一郎君) 38
Kitamura, Heisaburo ... (北村平三郎君) 96
Kitamura, Yoshitaro ... (北村義太郎君) 193
Kitsuta, Kakutaro ... ... (橘田覺太郎君) 73
Kitsutaka, Kikugoro ... (橘高菊五郎君) 173
Kitsutaka. Ginichi ... ... (橘高銀一君) 162
Kiri-u Orimono Dogiokumiai... ... ...
... ... (桐生織物同業組合) 290
Kiri-u Heigher Technical School... ...
... ... (桐生高等工業學校) 289
Kishimoto Senshoku Koba Co., Ltd. ...
... ... (合資會社岸本染織工場) 248
Koto Seiyaku Kaisha (江東製藥株式會社) 120
Koho, Asajiro ... ... (幸保淺次郎君) 51
Kono, Junsaku ... ... (河野順作君) 58
Kono, Usabro ... ... (河野卯三郎君) 47
Kono, Jenkuro... ... ... (河野善九郎君) 113
Kokusai, Celloloid Kogyo,Co. Ltd. ...
... ... (國際セルロイド工業株式會社) 149
Koshiji, Cho, ... (越路 暢君) 245
Kondo, Rinji ... ... (近藤林治君) 196
Kondo, Wakichi ... ... (近藤和吉君) 74
Kondo, Masao... ... ... (近藤政雄君) 199
Kondo, Seiyaku Kojyo ... (近藤製藥工場) 69

L

Lion Gum Seizo Co. Ltd. ... ...
... . (ライオンゴム製造株式會社) 288

M

Mita Tsuchi Gum Seizo Co. Ltd... ...
... ... (三田土ゴム製造株式會社) 286
Mitsukoshi Gofukuten ... (三越呉服店) 275
Mitsui, Tokuho ... ... (三井德寶君) 147
Mitsui Mineral Co. Mi-ike, Senryo Factory ...(三井鑛山株式會社三池染料工業所) 225
Mikami, Yasutaro ... ... (三上安太郎君) 171
Mikami, Toshimatsu ... (三上壽松君) 94
Mimura, Shosaburo... ... (三村鐘三郎君) 215
Miyake, Eisaburo ... .. (三宅榮三郎君) 111
Miki, Tatsuroku ... ... (三木長六君) 90
Mishina, Yorio... ... ... (三品賴雄君) 191
Mita, Seisaburo ... .. (三田清三郎君) 240
Misumi, Aizo ... ... (三角愛三君) 140
Mitsubishi Kogio Co. Osaka Seirensho
... ... (三菱鉱業株式會社大阪製錬所) 113

Mitsubishi Seishi Co. ... (三菱製紙株式會社) 263
Miyuki Keori Co. ... (御幸毛織株式會社) 198
Mizuya, Matsujiro .. ... (水谷松次郎君) 208
Mizuno, Togazo ... ... (水野樽藏君) 186
Mizuno, Kin-ichiro ... ... (水野錦一郎君) 171
Mizuno, Shingo ... ... (水野錦吾君) 88
Mizuno, Zenbei ... ... (水野善兵衛君) 161
Mizuide, Naoye ... ... (水出直衛君) 78
Mizushima, Saburo ... ... (水島三郎君) 290
Minatotani, Monbei ... ... (湊谷門兵衛君) 242
Minami Manshu Tetsudo Co. ... ... (南滿洲鐵道株式會社) 253
Miyairi, Seitaro ... ... (宮入清太郎君) 237
Miyakawa, Tokusaburo ... (宮川德三郎君) 136
Miyakawa, U-ichi ... ... (宮川卯一君) 126
Miyata, Tokumatsu ... ... (宮田德松君) 76
Miyata, Shigetaro ... ... (宮田繁太郎君) 162
Miyata, Seiji ... ... (宮田清治君) 46
Miyauchi, Kotaro ... ... (宮內幸太郎君) 265
Miyazaki, Katsujiro... ... (宮崎勝次郎君) 88
Miyazima, Takao ... ... (宮島孝雄君) 23
Machida, Komakichi ... (町田駒吉君) 278
Machida, Einosuke ... ... (町田榮之助君) 178
Maruyama, Kaheh ... ... (丸山嘉平君) 70
Marugen Shoten Goshi Kaisha ... ... (合資會社丸源商店) 97
Marusan Shoten Gomei Kaisha ... ... (合名會社丸三商店) 39
Maruse, Masaaki ... ... (丸瀨正明君) 64
Matsuhara, Motouemon ... (松原元右衛門君) 112
Matsuoka, Usaburo... ... (松岡卯三郎君) 79
Matsuoka, Seisaburo ... (松岡清三郎君) 117
Matsugaki, Sei-ichi... ... (松垣正一君) 49
Matsuda, Otojiro ... ... (松田音次郎君) 133
Matsuda, Tasaburo... ... (松田太三郎君) 61
Matsutake, Kinema Co. (松竹キネマ株式會社) 257
Matsunaga, Takejiro ... (松永竹次郎君) 159
Matsunaga, Hisanobu ... (松永久延君) 226
Matsumuro, Unosuke ... (松室雄之助君) 39
Matsumura, Heibeh... ... (松村平兵衛君) 119
Matsumura, Bennosuke ... (松村辨之助君) 244
Matsumura, Kyuta ... ... (松村久太君) 265
Matsumaru, Jo... ... ... (松丸蔚君) 20
Matsuzawa, Yoshio... .. (松澤善雄君) 86
Matsuzaka, Norishige ... (松阪德重君) 114
Matsuzaki, Senkojo... ... (松崎染工場) 241
Matsushita, Tomekichi ... (松下留吉君) 10
Matsushita, Kyujiro ... (松下久次郎君) 177
Matsushita, Chikanori ... (松下親業君) 169
Matsumoto, Aijiro ... ... (松本愛次郎君) 188
Maebashi Seishi Dogyo-Kumiai ... ... (前橋製糸同業組合) 271
Maeda, Yataro ... .. (前田彌太郎君) 249
Maeda, Manjiro ... .. (前田萬次郎君) 223
Maeda, Zensaburo ... ... (前田善三郎君) 32
Masui, Yaharchio ... ... (增井彌八郎君) 40
Masuda, Zenbehi ... ... (增田善兵衛君) 270
Masuoka, Shuji ... ... (益岡修治君) 239
Masuda, Tatsu... ... ... (益田達君) 119
Matsumoto, Orimono Kojo (松本織物工場) 185
Murai, Tokuzo... ... ... (村井德三君) 151
Murai, Jiheh ... ... (村井治兵衛君) 74
Muraishi, Asakichi ... ... (村石淺吉君) 5
Murabashi, Teizo ... ... (村橋庭藏君) 148
Muraoka, Etsuzi ... ... (村岡悅二君) 78
Murakami, Kizo ... ... (村上喜藏君) 168
Murakishi, Toyokichi ... (村岸藤代吉君) 36
Momotani, Juntenkan ... (桃谷順天館) 277
Moro, Shimpei... ... ... (諸新平君) 72
Mori, Takejiro... ... ... (森武治郎君) 13
Mori, Kintaro ... ... (森欽太郎君) 51
Morikawa, Sosuke ... ... (森川惣助君) 139
Moriyoshi, Raikichi... ... (森吉賴吉君) 190
Morinaga Seikwa Co. (森永製菓株式會社) 73
Morishita, Hatsuo ... ... (森下初男君) 197
Morishima, Takeshi... ... (森島武君) 36
Morimoto, Tsunenobu ... (森本庸充君) 43
Moriya, Ichiro ... ... (守屋一郎君) 136
Motoyama, Shigemi ... (本山茂美君) 42
Momma, Guntaro ... ... (門馬軍太郎君) 289
Meiji Boshoku Co.... (明治紡織株式會社) 79

N

Naito, Yu... ... ... (內藤游君) 288
Nai-gwai Ink Seizo Goshi Kaisha ... ... (內外インキ製造合資會社) 203
Naniwa, Senkojo ... ... (浪速染工場) 79
Narikawa, Harumatsu ... (成川春松君) 9
Narita, Kuwasuke ... ... (成田桑助君) 280
Narita, Naoshi ... ... (成田直君) 53
Narumi, Naokichi ... ... (鳴海直吉君) 11
Nakahara, Yoshizumi ... (中原義純君) 35
Nakanishi, Seizo ... ... (中西清造君) 103
Nakata, Kazuo ... ... (中田一雄君) 71
Nakata, Tosaburo ... ... (中田藤三郎君) 281
Nakata, Morio... ... ... (中田守雄君) 205
Nakaya, Kiyoshi ... ... (中谷清君) 79
Nakamura, Tamiichi ... (中邨民一君) 263
Nakamura, Kaheh ... ... (中村嘉兵衛君) 150

Nakamura, Tanji ... ... (中村丹治君) 104
Nakamura, Noboru ... ... (中村昇君) 16
Nakamura, Yuzo ... ... (中村有藏君) 271
Nakamura, Kisaburo ... (中村喜三郎君) 105
Nakano, Genichi ... ... (中野源一君) 10
Nakanoshima Paper Manufacturing Company Ltd.... ... (中之島製紙株式會社) 90
Nakane, Nobuaki ... ... (中根信明君) 42
Nakane, Kennojo ... ... (中根賢之丞君) 194
Nakane, Mankichi ... ... (中根萬吉君) 6
Nakaya Insatsujo. Co. Ltd. ... ... (株式會社中屋印刷所) 223
Nakayama, Senzo ... ... (中山專三君) 282
Nakayama, Etsuji ... ... (中山悅治君) 106
Nakayama, Shusaku ... (中山周作君) 211
Nakamatsu, Tsuzuku ... (中松續君) 243
Nakazato, Benjiro ... ... (中里辨次郎君) 45
Nakaki Nassen Kojo ... (中木捺染工場) 219
Nakaminami, Sadataro ... (中南定太郎君) 54
Nakashima, Hanji ... ... (中島半次君) 273
Nakashima, Taketaro ... (中島武太郎君) 84
Nakashima, Seiji ... ... (中島精二君) 183
Nakashima, Sankosho ... (中島三工所) 60
Nagai, Shintaro ... ... (永井新太郎君) 250
Nagata Knitting-machin Company Ltd. ... ... (永田メリヤス機械株式會社) 187
Nagata, Hiroshi ... ... (永田博君) 238
Nagayasu, Uichi ... ... (永安右一君) 144
Nagao, Keizo ... ... (長尾敬藏君) 287
Nagaya, Shukichi ... ... (長屋修吉君) 268
Nagasawa, Tajiheh... ... (長澤太治兵衛君) 18
Namekata, Seiji ... ... (行方清二君) 59
Nansei Boseki Co. Ltd. (南勢紡績株式會社) 165
Nagoya Higher Technical School... ... ... (名古屋高等工業學校) 282
Nagoya, Seito-jo Co. Ltd. ... ... (株式會社名古屋製陶所) 285
Nomura, Gizo ... ... (野村儀三君) 181
Noguchi, Toranosuke ... (野口寅之助君) 262
Noguchi, Yatao ... ... (野口彌太雄君) 274
Noma, Zenjiro ... ... (野間善次郎君) 215
Nosan Kogio & Co. Ltd. (農產工業株式會社) 108
Noborizaka, Hideoki ... (登坂秀興君) 54
Negishi, Hikaru ... ... (根岸光君) 220
Niitani, Toyokichi ... ... (新谷豐吉君) 27
Nitta, Tomejiro, ... (新田留次郎君) 275
Niizaki, Kunisaburo ... (新崎邦三郎君) 203
Nippon Beer Kosen Co. Ltd. ... ... (日本麥酒鑛泉株式會社) 275
Nikka Rabber Kogyo Kaisha ... ... (日華ラバー工業合資會社) 138
Nisshin Seiyukaisha ... (日清製油株式會社) 177
Nippon Karitt Kaisha ... ... (日本カーリット株式會社) 246
Nippon Tile Co. Ltd. (日本タイル株式會社) 157
Nippon Cloth Kogyo Kaisha ... ... (日本クロス工業株式會社) 151
Nippon Metalikon Kogyosho, ... (日本メタリコン工業所) 58
Nippon Togyokaisha ... (日本陶業株式會社) 161
Nippon Tokkyoinkikaisha, ... — ... (日本特許インキ株式會社) 137
Nippon Chisso, Hiryokaisha, ... (日本窒素肥料株式會社) 230
Nippon Kagakukogyokaisha ... ... (日本化學工業株式會社) 283
Nippon Katsudoshashinkaisha ... ... (日本活動寫眞株式會社) 256
Nippon Gaishikaisha (日本碍子株式會社) 161
Nippon Nenshikaisha ... ... (株式日本撚糸會社) 270
Nippon Asaito Kaisha (日本麻糸株式會社) 229
Nippon Keorikaisha... (日本毛織株式會社) 265
Nipponkeisen, Kaisha (日本形染株式會社) 158
Nippondenchi Kaisha (日本電池株式會社) 117
Nippon Denpun Seizozyo ... ... (合資會社日本澱粉製造所) 143
Nippon Asubesuto Kaisha ... ... (日本アスベスト株式會社) 231
Nippon Kinuoriki Sesakuzyo ... ... (株式會社日本絹織機械製作所) 83
Nippon Kennenkaisha — (日本絹撚株式會社) 140
Nippon Kenshi Boshokukaisha ... ... (日本絹綿紡織株式會社) 213
Nippon Kenmen Bosekikaisha ... ... (日本絹糸紡績株式會社) 187
Nippon Aento Kaisha (日本亞鉛鑛株式會社) 80
Nippon Shikiso Kogyokaisha... ... ... (日本色素工業株式會社) 185
Nippon Sefun Kaisha... (日本製粉株式會社) 69
Nippon Senryo Seizokaisha ... ... (日本染料製造株式會社) 11
Nishikawa, Torakichi ... (西川虎吉君) 127
Nishikawa, Chusuke ... (西川忠亮君) 181
Nishiyama, Shoten ... ... (西山商店) 287
Nishikawakoba, Co.... (合名會社西川工場) 216
Nishijin Nenshisaisei Kaisha... ... ... (西陣撚糸再整株式會社) 203
Nishigata, Taiji ... ... (西潟岱治君) 269
Nishida, Kametaro ... ... (西田龜太郎君) 201
Nishimura, Denpachi ... (西村傳八君) 37
Nishimatsu, Kikujiro ... (西松菊次郎君) 99

O

Obara, Kaemon ... ...(小原嘉左衛門君) 108
Ogawa, Tatsujiro ... ...(小川辰治郎君) 50
Ogawa, Naozo... ... ...(小川直三君) 26
Ogawa, Michinosuke ...(小川道之輔君) 108
Ogasawara, Jirokichi ...(小笠原次良吉君) 203
Odajima, Unta ... ...(小田島運太君) 82
Ozu-Takebayashi Kigio Co. ... ...
... ... (小津武林起業株式會社) 165
Ono, Masataro ... ...(小野昌太郎君) 47
Ono, Jun ....(小野 淳君) 100
Oguma, Shinzo ... ...(小熊信藏君) 217
Ogura, Chozaburo ... ...(小倉長三郎君) 46
Ogura, Munekichi ... ...(小倉宗吉君) 4
Ogura, Kiichi ... ...(小倉喜一君) 38
Ozawa, Yasuo... ... ...(小澤保雄君) 192
Osaka Inki Sezokaisha ... ...
... ... (大阪印刷インキ製造株式會社) 23
Osakatogyo Kaisha... (大阪陶業株式會社) 55
Osakaorimono Kaisha (大阪織物株式會社) 56
Osaka Obikawa Sezosho, Co. ... ...
... ... (株式會社大阪帶革製造所) 183
Osaka Guriserinkaisha ... ...
... ... (大阪グリセリン株式會社) 75
Osaka Godo Boseki, Kaisha ... ...
... ... (大阪合同紡績株式會社) 241
Osaka Meriyasu Boshoka Kaisha... ...
... ... (大阪莫大小紡織株式會社) 100
Osaka Shikiso Kagaku Kenkyusho ...
... ... (大阪色素化學研究所) 103
Osaka Seika Sezogzo ...(大阪染料製造所) 142
Osaka Senko Goshi Kaisha ... ...
... ... (大阪染工合資會社) 60
Oishi, Ryozi ... ...(大石良治君) 128
Oishi, Kosaku ... ...(大石小作君) 193
Onishi, Keisuke ... ...(大西啓介君) 78
Okawa, Tanaka Jimusho (大川田中事務所) 61
Okawa, Ryusaburo... ...(大川柳三郎君) 76
Otake, Yoshigoro ... ...(大竹由玉郎君) 178
Otaki, Naonosuke ... ...(大瀧直之助君) 80
Otsuki Ink Manufactory (大月インキ製造所) 70
Otsuka, Kyujiro ... ...(大塚久次郎君) 240
Ono, Ichizo ... ...(大野一造君) 204
Ono, Otojiro ... ...(大野音次郎君) 46
Ono, Kisuke ... ...(大野喜助君) 75
Okubo, Yosakichi ... ...(大久保與三吉君) 81
Okubo, Tsunekichi ... ...(大久保常吉君) 131
Okuchi, Kiroku ... ...(大口喜六君) 206
Ogusa, Takejiro ... ...(大草竹次郎君) 37
Omura, Kisaburo ... ...(大村喜三郎君) 224
Osawa, Naoshige ... ...(大澤直重君) 129
Osawa, Seizaburo ... ...(大澤清三郎君) 219
Oshio, Tomehiko ... ...(大塩留彦君) 285
Oshima, Kyujiro ... ...(大島久次郎君) 91
Omori, Sataro ... ...(大森佐太郎君) 287
Ota, Kojiro ... ...(太田孝治郎君) 225
Obara, Gisuke ... ...(尾原儀助君) 232
Obayashi, Sigeki ... ...(尾林茂樹君) 264
Okachi Seizas Co, Ltd. (雄勝製材株式會社) 182
Oaki, Inosuke ... ...(生明伊之助君) 173
Ochiai, Heizaburo ... ...(落合兵三郎君)
Okabe. Motosuke ... ...(岡部元輔君) 225
Okada, Mansaku ... ...(岡田萬作君) 81
Okada, Yuji ... ...(岡田祐二君) 219
Okada, Kiyoshi ... ...(岡田 清君) 30
Okajima, Chiyozo ... ...(岡島千代造君) 256
Okamoto, Ichitaro Tokyo (岡本市太郎(東京) 80
Okamoto, Ichitaro Hyogo (岡本市太郎(兵庫) 260
Okamoto, Brothers & Co. (岡本兄弟商會) 207.
Okuda, Genjiro ... ...(奥田源次郎君) 247
Okumura, Yahei ... ...(奥村彌平君) 243
Okujumi, Tsunasaburo ...(奥住綱三郎君) 45
Ogiwara, Sawajiro ... ...(荻原澤二郎君) 127
Ogimura, Kametaro ...(荻村亀太郎君) 138
Oshitani, Co. ... ...(押谷合資會社) 216

R

Radium Seiyaku Co. Ltd. ... ...
... ... (ラヂューム製藥株式會社) 210
Rassa island Rinko Co. Ltd.... ... ...
... ... (ラサ島燐鑛株式會社) 258
Rigosha, ... (合名會社離合社) 46
Ryomoboshokukaisha (兩毛紡織株式會社) 98

S

Santa, Seisaburo ... ...(三田清三郎君) 240
Sanritsu, Seishi Co., Ltd. (三立製紙株式會社) 227
Sawa, Kyosuke ... ...(澤 恭助君) 284
Sakai, Tadasuke ... ...(酒井忠結君) 77
Sakai, Shokichi ... ...(酒井庄吉君) 135
Sakata, Yasunosuke Shoten (阪田保之助君) 199
Sakata, Moto-o ... ...(阪田素夫君) 218
Sakamoto, Sotaro ... ...(阪本宗太郎君) 169
Sakakihara, Tsunekichi ...(榊原常吉君) 145
Sagawa, Takutaro ... ...(作川澤太郎君) 123
Sakura Cement Co. ...(櫻セメント株式會社) 77
Sakurai, Enjiro... ... ...(櫻井延次郎君) 73
Sakurai, Seizo ... ...(櫻井正三君) 9
Sasabe, Eikichi ... ...(笹部榮吉君) 56
Shima, Bunzo ... ...(志摩文藏君) 6
Shimizu, Tosaburo ... ...(清水藤三郎君) 218

Saberi Orimono ... (山邊里織物株式會社) 106
Shi-ina, Yoshio ... ...(椎名義雄君) 92
Shibata, Sojiro ... ...(柴田惣治郎君) 160
Shibata, Tsunekichi... ...(柴田常吉君) 7
Shibata, Mitsuo ... ...(柴田三雄君) 266
Shibayama, Yoshitaro ...(柴山芳太郎君) 11
Shiohara, Kin ... ...(塩原 鈞君) 144
Shikama, Kwagakukogio ... ...
... ... (飾磨化學工業株式會社) 163
Shoji Mannosuke ... ...(東海林萬之助君) 179
Shotiku Kinema Co. (松竹キネマ株式會社) 257
Shofu Industrial Co. (松風工業株式會社) 166
Shizuoka, Shokufu Co. (靜岡織布株式會社) 250
Shizuoka, Senshoku Co. (靜岡染色株式會社) 89
Shizuhata, Seishi Co. (駿機製紙株式會社) 18
Shiranezawa, Shinsuke ...(白根澤信助君) 125
Shinosaki, Ink Manufacturing Co.... ...
... ... (篠崎インキ製造株式會社) 126
Shinosaki, Tomozo ... ...(篠崎知三君) 182
Shimada, Glass Factory...(島田硝子製造所) 169
Shimada, Kyubei ... ...(島田久兵衛君) 282
Shimadu, Keisuke ... ...(島津圭助君) 196
Shimadu, Genzo ... ...(島津源藏君) 26
Shimahisa Shoten ... ...(島久商店) 282
Shigeno, Tomezo ... ...(茂野留造君) 191
Shuzui, Hikotaro ... ...(守隨彦太郎君) 97
Shimoi, Makizo ... ...(下位牧藏君) 43
Shimonishi, Minosuke ...(下西己之助君) 199
Shimokawa, Tsukichi ...(下川通吉君) 189
Shimomura, Sen-nosuke...(下村專之助君) 189
Sugihara, Yasaburo ...(杉原彌三郎君) 92
Sun-Celluloid Kabushiki Kaisha ... ...
... ... (サンセルロイド株式會社) 245
Sato, Magoshichi ... ...(佐藤孫七君) 211
Sato, Kenji ... ...(佐藤憲治君) 167
Sato Kyoichi ... ...(佐藤恭一君) 236
Sato, Gonzaemon ... ...(佐藤權左衛門君) 244
Sato, Teiji ... ...(佐藤貞次君) 13
Sato, Shiro ... ...(佐藤四郎君) 239
Sato, Shikazo ... ...(佐藤鹿藏君) 164
Sato, Nobushiro ... ...(佐藤信司郎君) 52
Sato, Zennai ... ...(佐藤善內君) 229
Sano, Hanbei ... ...(佐野半兵衛君) 212
Sano, Enzo ... ...(佐野圓藏君) 160
Sano, Shoten ... ...(佐野商店) 141
Sakuma, Tatsuji ... ...(佐久間長治君) 107
Sasaki, Taichi ... ...(佐々木太市君) 32
Sasaki, Umejiro ... ...(佐々木梅治郎君) 22
Sasaki, Seisaburo ... ...(佐々木清三郎君) 246
Saito, Kintaro ... ...(齊藤金太郎君) 52
Saito, Seiken ... ...(齊藤靜賢君) 158
Saito, Seigo ... ...(齊藤晴五君) 235
Saiki, Yoshijiro ... ...(齊木義次郎君) 25
Saisei Shono & Co. (再製樟腦株式會社) 124
Satomi, Kakuzo ... ...(里見覺藏君) 134
Sawatari, Genbeh ... ...(澤渡源兵衛君) 103
Sawamoto Gomei Kaisha (澤本合名會社) 81
Sunaga, Naojiro ... ...(須永直次郎君) 187
Sugai, Kyofu ... ...(菅井趨夫君) 222
Suganami, Zensuke ...(菅波善助君) 245
Sugano, Gi-ichi ... ...(菅野義一君) 209
Sugi, Yoshikazu ... ...(杉 宜算君) 131
Sugihara, Yosaburo... ...(杉原彌三郎君) 92
Sugiura, Denkichi ... ...(杉浦傳吉君) 51
Sugimoto, Tamejiro ...(杉本爲次郎君) 195
Sugimoto, Seiren-jo ...(杉本精練場) 115
Sumitomo Goshi Kaisha...(住友合資會社) 54
Suzuka Shoten Osaka Branch ... ...
... ... (株式會社鈴鹿商店大阪支店) 210
Suzuki, Tomeji ... ...(鈴木登米治君) 114
Suzuki, Tomio... ... ...(鈴木東海夫君) 117
Suzuki, Jihe ... ...(鈴木治兵衛君) 152
Suzuki, Jisaburo ... ...(鈴木治三郎君) 135
Suzuki, Toshizo ... ...(鈴木利藏君) 47
Suzuki, Sohachi ... ...(鈴木惣八君) 190
Suzuki, Umetaro ... ...(鈴木梅太郎君) 261
Suzuki, Komakichi ... ...(鈴木駒吉君) 277
Suzuki, Akira ... ...(鈴木 亮君) 234
Suzuki, Shohei... ... ...(鈴木正平君) 223
Suzuki, Shoshi ... ...(鈴木章之君) 271
Suzuki, Shoten Co., Ltd. (株式會社鈴木商店) 276
Suzuki, Shoten Gomei Kaisha ... ...
... ... (合名會社鈴木商店) 254
Suzuki, Mitsukata ... ...(鈴木充形君) 51
Suzuki, Zenkuro ... ...(鈴木善九郎君) 118
Suganuma, Gensaku ...(菅沼源作君) 188
Suzuki, Ryozo... ... ...(鈴木良三君) 196
Seruroid Kushi Kiodo Hanbaisho Co. ...
... (株式會社セルロイド櫛共同販賣所) 179
Seko Taichi ... ...(瀨古太一君) 237
Seye Goshi Kaisha... ...(瀨榮合資會社) 233
Semoto, Sakujiro ... ...(瀨本作次郎君) 91
Seno-o, Kenji ... ...(妹尾兼治君) 92
Seki, Jiro ... ...(關 二郎君) 28
Sekito, Kaishi ... ...(關戸開司君) 172
Sekine, Hiroshi ... ...(關根 博君) 167
Segawa, Hideo ... ...(瀨川英男君) 200
Soejima, Usaburo ... ...(側島宇三郎君) 12
Sonoda, Eisuke ... ...(園田穎助君) 153
Sonobe, Tatsunosuke ...(園部長之助君) 146
Shin, Nizokichi ... ...(新 仁三吉君) 150
Shimpo, Shinzo ... ...(新穂眞藏君) 90
Sankyo Co. Ltd. ... ...(三共株式會社) 252
Santo, Tomosaburo... ...(山東友三郎君) 102

T

Tetsuka, Hei hiro ... ...(手塚平四郎君) 20
Teikoku Bussan ... (帝國物產株式會社) 115
Teikoku Kayaku Kogyo ... ... (帝國火藥工業株式會社) 280
Teikoku Seima ... (帝國製麻株式會社) 276
Teikoku Senryo Seizo (帝國染料製造株式會社) 117
Teikoku-Senryo Seizo Fukuyama Kojo ... ... (帝國染料製造株式會社福山工場) 175
Teikoku Seishi & Co. (帝國製糸株式會社) 220
Teikoku Gokin Seiren (帝國合金精煉株式會社) 179
Terada Gomei Kaisha ...(寺田合名會社) 98
Terayama, Hachisaburo ...(寺山鉢三郎君) 66
Terashima, Senkichi ...(寺島仙吉君) 141
Tohoku Jozo Kaisha (東北醸造株式會社) 15
Tokai Paper Manufacturing Co. ... ... (東海製紙株式會社) 289
Tokai Senshoku Kaisha (東海染色株式會社) 83
Toyo Takushoku, Kaisha (東洋拓殖株式會社) 278
Toyo Seiyu Kaisha ... (東洋製油株式會社) 111
Toyo Kanaami Kaisha(東洋金網製造株式會社) 279
Toyo Sengyo Kaisha (東洋染業株式會社) 175
Toyo Matchi Kaisha... (東洋燐寸株式會社) 283
Toyo Mosurin Kaisha (東洋モスリン株式會社) 289
Tokyo E. C. Kogyo Kaisha ... ...(東京イーシー工業株式會社) 212
Tokyo Tsuyaito Kaisha...(東京艶糸株式會社) 279
Tokyo Anirin Senryo Kaisha ... ...(東京アニリン染料株式會社) 198
Tokyo Aentokin Kaisha ... ... (東京亞鉛鍍金株式會社) 284
Tokyo Mosurin Boshoku Kaisha ... ... (東京モスリン紡織株式會社) 259
Tokyo Boshi Kaisha ...(東京帽子株式會社) 122
Tokyo Gasu Kaisha ...(東京瓦斯株式會社) 273
Tokyo Gasu Fukagawa Sezojo ... ... (東京瓦斯株式會社深川製造所) 122
Tokyo Kanaami Kaisha (東京金網株式會社) 140
Tokyo Keori Kaisha ...(東京毛織株式會社) 285
Tokyo Furitsu Senshoku Gakko ... ... (東京府立染色學校) 209
Tokyo Commercial & Industrial School ... ... (東京商工學校) 120
Tokyo Asahi Shokai (東京旭商會合資會社) 249
Toa Celluloid Co. (東亞セルロイド株式會社) 122
Toa Kagaku Kogyo Kaisha ... ... (東亞化學工業合資會社) 110
Toskawa Kyujiro ... ...(東川久次郎君) 103
Totoki, Gen ... ...(十時 元君) 25
Tojima, Kunijiro ... ...(戸島國次郎君) 84
Toyohara, Jinsuke ... ...(豊原義介君) 40
Toyoda, Kisuke ... ...(豊田喜助君) 229
Tonooko, Risuke ... ...(殿岡利助君) 137
Tokunaga, Ushihiko ...(德永丑彦君) 29
Tokue, Yasaburo ... ...(德江彌三郎君) 155
Tokiwa, Co., Ltd. ... (株式會社常盤商會) 281
Tokoname Seito Kaisha (常滑製陶株式會社) 232
Tokorozawa Orimono Kumiai ... ... (所澤織物同業組合) 155
Tominaga, Kinkichi... ...(富永金吉君) 67
Tomiya, Sokichi ... ...(富谷宗吉君) 178
Tomiyama, Eikichi ... ...(富山榮吉君) 128
Tomoe Seitozyo ... (株式會社巴製陶所) 156
Tomoegawa Seishi Kaisha ... ... (巴川製紙株式會社) 222
Tabata, Kihachi ... ...(田畑喜八君) 73
Tabata, Asajiro ... ...(田畠淺次郎君) 149
Tanaka, Iheh ... ...(田中伊兵衛君) 18
Tanaka, Iwakichi ... ...(田中岩吉君) 40
Tanaka, Tomekichi ... ...(田中留吉君) 243
Tanaka, Chotaro ... ...(田中長太郎君) 67
Tanaka, Katsuzo ... ...(田中勝藏君) 119
Tanaka, Takeshi ... ...(田中 武君) 153
Tanaka, Tairyo ... ...(田中泰亮君) 242
Tanaka, Shoki ... ...(田中昌龜君) 24
Tanaka, Keikichi ... ...(田中慶吉君) 163
Tanaka, Komazo ... ...(田中駒藏君) 19
Tanaka, Dempachi ... ...(田中傳八君) 165
Tanaka, Shokai ... (合資會社田中商會) 163
Tanaka, Shingo ... ...(田中新吾君) 176
Tamura, Tomo-o ... ...(田村知雄君) 132
Tamura, Masagoro ... ...(田中政五郎君) 220
Tamura, Mantaro ... ...(田村萬太郎君) 72
Tamura, Shiro... ... ...(田野倉榮郎君) 151
Tafuji, Takasuke ... ...(田藤高輔君) 79
Tashima, Akiharu ... ...(田島明治君) 125
Tasaki, Yoshitaro ... ...(多崎由太郎君) 174
Tagatani, Isematsu ... ...(多賀谷伊勢松君) 126
Taisho, Kwagaku Kogyo Co. Ltd. ... ... (大正化學工業株式會社) 236
Taisho Kogyo Co. Ltd. (大正工業株式會社) 44
Taisho Mempu Co. Ltd. (大正綿布株式會社) 164
Taiwan Seito Co. Ltd. (臺灣製糖株式會社) 207
Taisho Seiyaku Co. Ltd. (泰昌製藥株式會社) 133
Tanioka, Tetsuzo ... ...(谷岡鐵藏君) 195
Tanitame, Yonejiro ... ...(谷爲米次郎君) 236
Tachibanaya Shoten (合名會社橘屋商店) 194
Tateishi, Ki-ichi ... ...(立石喜一君) 142
Tachikawa Keorimono Kojo ... ...(立川毛織物工場) 241
Tachino, Yasutaro ... ...(立野安太郎君) 171
The First Chemical Manufacturing Company Ltd. ... ...(第一製藥株式會社) 116
Togawa, Yosaburo ... ...(十河與三郎君) 41
Takahashi, Tomekichi ...(高橋留吉君) 12

Takahashi, Kyoji ... ...(高橋享二君) 38
Takahashi, Gentaro... ...(高橋源太郎君) 150
Takahashi, Koji ... ...(高橋孝次君) 233
Takahashi, Koichiro ...(高橋孝一郎君) 14
Takahashi, Kinzo ... ...(高橋金造君) 14
Takahashi, Shinroku ...(高橋新六君) 73
Takahashi, Seisaburo ...(高橋清三郎君) 62
Takahashi, Senkojo... ...(高橋染工場) 116
Takada, Tsunesaburo ...(高田常三郎君) 215
Takada, Masujiro ... ...(高田益次郎君) 145
Takada, Shokai ... ...(合資會社高田商會) 65
Takano, Nizo ... ...(高野二三君) 247
Takano, Takejiro ... ...(高野竹次郎君) 71
Takano, Masashi ... ...(高野政司君) 34
Takasago Kogyo Co. Ltd. (高砂工業株式會社) 123
Takaki, Inosuke ... ...(高木伊之助君) 285
Takaki, Yoshinosuke ...(高木由之助君) 206
Takaki, Raizo ... ...(高木賴三君) 251
Takamine Shoji Co. Ltd. (高峰商事株式會社) 286
Takase, Kizaemon ... ...(高瀬喜左衛門君) 15
Takasu, Hidejiro ... ...(高須秀二郎君) 157
Takaya. Seijiro ... ...(鷹屋清次郎君) 57
Tatsumi, Yosuke ... ...(辰己彌助君) 33
Tatsumi, Shotaro ... ...(辰己庄太郎君) 131
Tanabashi, Bunsaku ...(棚橋文作君) 94
Tanabashi, Shinji ... ...(棚橋眞次君) 74
Takeuchi, Mitsunao ...(竹内光直君) 39
Takeuchi, Saichiro ... ...(竹内佐一郎君) 228
Takeuchi, Kosaburo ...(竹井興三郎君) 251
Takechi, Tamiji ... ...(武智民次君) 59
Takeda, Shujiro ... ...(武田周次郎君) 202
Takeda, Chobeh ... ...(武田長兵衛君) 162
Takeuchi, Soju ... ...(武内宗十君) 152
Takiguchi, Katsutaro ...(瀧口勝太郎君) 277
Taki, Sadasuke ... ...(瀧 定助君) 99
Taki, Kiyoshi ... ...(瀧 清君) 82
Takifuji, Jisaburo ... ...(瀧藤治三郎君) 192
Takizawa, Ginjiro ... ...(瀧澤銀次郎君) 126
Tanto Company. Ltd. ...(淡陶株式會社) 208
Tuyool & Co, Ltd. (株式會社ツヨール商會) 145
Tsukui, Hikoshichi ... ...(津久居彦七君) 48
Tsuguma Kensaburo ...(津熊健三君) 115
Tsushima, Kinjuro ... ...(津島金重郎君) 146
Tsubaki, Miyataro ... ...(椿宮太郎君) 183
Tsuchida Shinji ... ...(土田信次君) 85
Tsuchiya, Yoshimi ... ...(土屋 嘉君) 50
Tsujimoto, Mitsumaru ...(辻本滿丸君) 267
Tsujimoto, Hidegoro ...(辻本秀五郎君) 145
Tsuruga-oka, Orimono Co, Ltd. ... ... (鶴岡織物株式會社) 176
Tsuruoka, Kogyo Gakko (鶴岡工業學校) 93
Tsurutani, Genji ... ...(鶴谷源治君) 237
Tsukada, Ryosuke ... ...(塚田良介君) 202
Tsutada, Chujiro ... ...(蔦田忠治郎君) 93
Tsunogae, Risaku ... ...(角替利策君) 246
Tsunoda, Tosuke ... ...(角田藤祐君) 8
Tsunoda, Fukuroku... ...(角田福六君) 129
Tsuonda, Kojiro ... ...(角田幸次郎君) 72
Tsumida, Ryozo ... ...(積田良藏君) 7

U

Ujigawa Electric Co. Ltd. ... ... (宇治川電氣株式會社) 85
Uno, Masao ... ...(宇野正雄君) 120
Uno, Saburo ... ...(宇野三郎君) 151
Usami, Keiichiro ... ...(宇佐美桂一郎君) 165
Uchiyama, Yazaemon ...(内山彌左衛門君) 107
Uchiyama, Yurio ... ...(内山有利夫君) 251
Uyeda, Tozo ... ...(植田藤藏君) 274
Uchimi, Junsaburo... ...(内海順三郎君) 147
Urima, Shinichi ... ...(賣間信一君) 22
Nratani, Tetsutaro ... ...(浦谷鐵太郎君) 184
Urano, Zenichiro ... ...(浦野善一郎君) 85
Urayama Celluloid Co. ... ... (浦山セルロイド株式會社) 100
Urase, Tetsuzo ... ...(浦瀬鐵藏君) 42
Uehara, Keishiro ... ...(植原敬四郎君) 262
Ueta Goshi Kaisha... ...(植田合資會社) 286
Uemura, Heitaro ... ...(植村平太郎君) 101
Ushiyama, Kiyota ... ...(牛山喜代太君) 15
Usui, Kunihoko ... ...(薄井邦矛君) 66
Usuta, Koichiro .. ...(薄田幸一郎君) 63

W

Wada, Tsunesuke ... ..(和田恒介君) 131
Wakodo, & Co. ... ...(株式會社和光堂) 284
Wada, Eisaburo ... ...(和田瑛三郎君) 198
Wajiki, Kazu ... ...(和食 和君) 75
Wakayama- Nassen Menpu Yushutsu Kyokwai Co. ... ... (株式會社和歌山捺染綿布輸出協會) 206
Wakayama Nassen Co. ... ... (和歌山捺染株式會社) 224
Wakayama-kenritsu Sho-Kogio Gakko, ... (和歌山縣立工業學校) 101
Wakayama Tekko, & Co.(和歌山鐵工株式會社) 99
Wakayama Shoko, & Co. ... ... (和歌山商工株式會社) 223
Wakayama Senko, & Co. ... ... (和歌山染工株式會社) 224
Watanabe, Tetsu... ... (邊渡 徹君) 129

Watanabe, Hajime ... (渡邊 始君) 205
Watanabe Kwagaku Kenkyusho ... ... (渡邊化學研究所) 263
Watanabe, Masakichi ... (渡邊正吉君) 53
Watanabe, Matajiro ... (渡邊又治郎君) 261
Watanabe, Shu ... ... (渡邊 周君) 52
Watanabe, Shukichiro ... (渡邊修吉郎君) 177
Waki Shoten ... ... (脇 商 店) 128
Wakimoto, Shokichi ... (脇木庄吉君) 5
Washio, Yuhei ... ... (鷲尾勇平君) 148

Y

Yoshida, Takeshi ... ... (吉田武士君) 234
Yoshida, Magosaburo ... (吉田孫三郎君) 95
Yoshikuni, Yuichi ... ... (吉岡祐一君) 67
Yoshizawa, Sadasuke ... (吉澤貞助君) 49
Yoshimi, Masuziro ... ... (吉見增次郎君) 184
Yokoi, Tamaharu ... ... (横井玉治君) 177
Yokoi, Yasubeh ... ... (横井安兵衛君) 74
Yokohama Chemical Industory Co. Ltd. ... ... (横濱化學工業株式會社) 201
Yokohama Higher Technical School ... ... (横濱高等工業學校) 233
Yokohama Electric-wire Manufactory ... ... (横濱電線製造所) 118
Yokoda, Takejuro ... ... (横田武十郎君) 63
Yokoda, Gentaro ... ... (横田源太郎君) 43
Yokoda, Sahachiro ... ... (横田佐八郎君) 118
Yokoyama, Minekichi ... (横山峯吉君) 94
Yokoe. Zenjiro... ... ... (横江善治郎君) 213
Yoroi, Tsunekichi ... ... (鎧 常吉君) 228
Yokohama Gum Manufacturing Co. Ltd. ... ... (横濱護謨製造株式會社) 84
Yagi, Usaburo ... ... (八木宇三郎君) 240
Yagi, Matsuziro ... ... (八木松次郎君) 28
Yagi, Shosuke... ... ... (八木庄助君) 264
Yagi, Hidejiro... ... ... (八木秀治郎君) 98
Yagi, Kyutaro... ... ... (矢木久太郎君) 260
Yabe, Kiyoshi... ... ... (矢部 清君) 110
Yama-Hachi Shoten (合資會社山八商店) 166
Yamagata-Kenritsu Technical School... ... ... (山形縣立工業學校) 139
Yamagata-kenritsu Kogyo Shikenjo ... ... (山形縣立工業試驗場) 139
Yamagata Shuzo Co. (山形酒造株式會社) 95
Yamada, Hamajiro... ... (山田濱次郎君) 218
Yamada, Rokumatsu ... (山田六松君) 137
Yamada, Yoshizo ... ... (山田由藏君) 21
Yamada, Tetsusaburo ... (山田鐵三郎君) 175
Yamanaka, Hittoshige ... (山中仁重君) 86
Yamanashi-kenritsu Technical School Kogio Shikenjo ... ... (山梨縣立工業學校同工業試驗場) 133
Yamamura, Yeikichi ... (山村銳吉君) 261
Yamaakuchi, Tomojiro ... (山口友次郎君) 48
Yamaguchi, Kwan... ... (山口 完君) 195
Yamaguchi, Yoshiro ... (山口與四郎君) 220
Yamaguchi, Matsuzo ... (山口松藏君) 45
Yamaguchi, Sadakichi ... (山口定吉君) 68
Yamaguchi, Giichi ... ... (山口儀一君) 234
Yamogucni, Kumataro ... (山口熊太郎君) 273
Yamagucni, Jihsniro ... (山口甚四郎君) 95
Yamaucni, Hiromasa ... (山内啓正君) 284
Yamadera, Shoji Co. (山寺商事株式會社) 242
Yamasaki, Kisaburo ... (山崎喜三郎君) 1
Yamashita, Eizo ... ... (山下榮藏君) 148
Yamashita, Yuzo ... ... (山下裕三君) 237
Yamamoto, Toyozo... ... (山本豊藏君) 47
Yamnmoto, Natsuki ... (山本夏樹君) 3
Yamamoto, Kunizo... ... (山本國藏君) 50
Yamamoto, Masanori ... (山本正實君) 39
Yamamoto. Seishiro ... (山本政四郎君) 268
Yamamoto, Genbei ... (山本源兵衛君) 210
Yamamoto, Tsunekichi ... (山元常吉君) 74
Yamamoto, Sèichi ... ... (山元清市君) 152
Yamato, Tokiji ... ... (大和時次君) 264
Yamatogawa, Senkojo ... (大和川染工所) 88
Yamatoya Shirts Shop ... (大和屋シャツ店) 130
Yanagizawa, Hakuta ... (澤柳伯太君) 208
Yasuhara, Naochika ... (安原尙親君) 96
Yasuda Kuma Gomei Kaisha ... ... (安田熊合名會社) 218
Yasuda, Shimpei ... ... (安田申平君) 5
Yasuno, Masao ... ... (安野正夫君) 13
Yasumura. Chozo ... ... (安村長造君) 247
Yoshii, Sadasuke ... ... (吉井定助君) 60
Yoshiike, Rizaemon ... (吉池利左衛門君) 69
Yoshikawa. Matahei ... (吉川又平君) 58
Yoshida, Hatsugoro ... (吉田利五郎君) 68
Yamaberi Orimono Co. Ltd. ... ... (山邊織物株式會社) 106
Yamato, Tomosaburo ... (山東友三郎君) 102
Yasufuku, Matashiro ... (安福又四郎君) 255
Yasufuku, Takenosuke ... (安福武之助君) 256
Yuzawa, Shuzo Co..... (湯澤酒造株式會社) 182
Yuzawa, Seizai, Co. ... (湯澤製材株式會社) 111
Yuri, Hiroshi ... ... (由利 博君) 52
Yui, Tokuzo ... ... (油井德藏君) 17

Mr, Kisaburo Yamasaki, (山崎喜三郎君) The Muslin Manufacturer. He is the man of self-help, his untiring endeavour made him the present success. He was born at Kameyama town, Suzuka District, Mie Prefecture, in the 4th year of Meiji. He has clear intellect and steady character"always walking the main road. When Seventeen years old he went out to Osaka and entered Mr. Risuke Ogura's Company, then the most old muslin dealers, and worked with all his energy for his master. His talent was soon appreciated by his master and was promoted to an important position, but his aim was high and to secure further experiences and knowledge he removed to Hoda Yuzen Manufactory after 16 years service in his master Ogura's shop, then he worked here until the day of independence.

When his preparations was fully achieved, he opened his business at the present place in the 45th year of Meiji. But the Death of Late Emperor Meiji andthe a ccurrance of the Great war came over as a dark cloud and the business became on the ridge of crisis, but his very long experiences could overcome this after the hard effort. From the 7th year of Taisho his business could see the light and daily became prosperous. At present there is 48 men in his fac ory and the product monthly 1500—166 pieces. (His mode of business lies in his words " Never seek the greatness inform, but seek the fulfilment of Real Capacity." Address :— Kosone Osaka Parefecture, Telephone : Mikuni No. 12.

Mr. Tamesaburo Imoto, (井元爲三郎君) An Exporter of Earthenwares Among the business world of Nagoya he is the man of character always establishing steady market never selling liname, his mind is broad hearing others word and ever progressive. He was born in Atsuta Nakasemachi, Minamiku, Nagoya, to the second son of Mr. Yujiro Ito. And was adopted by Imoto, his relatives. In youth he went to Kobe branch of Tashiro Company, and untill 25 years old he was engaged there, during where he has fully gained the experiences of the trade. Afterwards he opened a shop at Iidamachi Higashiku Nagoya, and his long hoped attainment was here fully played. His mode of businessins was prog ressive always saking the good of European mode of business, and always extending the market of the Japanese earthenwares. His younger brother Nobukichi assisted him well Then he removed to the present place, thus became the fi st rank exporter in Nagoya. Recently he made a tour in America, and after returning the business became more active and efficient. Thus at present he has the branches and agencies in Kobe, San-Francisco. New York, Singapore etc., The chief wark lies in America, South Seas and China.

Between Mrs. Tatsuko there is Shunko, the eldest daughter. The son in—law Matsuzo, the graduate of the Law department of Tokio Imperial University is in Hokkaido Colonial Bank. Address :— Shumokucho, Higa-shiku, Nagoya, Telephone :

Mr. Takeo Hasegawa, (長谷川武雄君) The master of " Diamond " Metal Manufactory. As the civilisation advances and the applications of the machines increase, it is natural that the uses of special metals extend enormously, Our Mr. Hasegawa is the man who foresaw this and rode on the business successfully. He was born to the eldest son of the Jiin Hasegawa in Ushigomeku, Tokio. After finishing the middle school course he entered Kawasaki Ship Building Co., and engaged earnestly there 4 years. At that time one of his relatives, Mr. Denhichi Isoda, was a manufacturers of metal, Mr. Hasegawa, seeing the future of the metal industry, entered into the relative's factory and studied those all the buseiness and minute experiences of the industry several years. In August of the 5th year of Taisho he resigned from there and opend a work shop at the present place. After this his ability and experience made the business to ever increasing pros|erity. The "Diamond" metal, which is produced at his farctory, using selecte l raw material and suitable concetion with trained export, has a high hardness with homogeneous compactness and its tensile strength and resistance for high temperature, high pressure and the high viscosity being great the casting is easily done. As the consequence it is extensively used in the bearings,

of high pressure solling machines, High pressure engine bearings on steamships, bearings of high speed mo or generators, bearings of high pressüre generators and electric motors, arbine sys em tengines, high speed loc motives. 'eroplanes, Automobiles and other very heavy cranks, Gas generator cranks, Stretching roll machines, Turbine pumps, Kerosene gas engine cranks, pack breakersin mines, cement and flour will machines and some other frictional surfaces etc. So that the great company like. The Electric Railway Companies of Osaka and Kawasaki ship yard Co., Yawata works, Hanshin Electric rail way Co, Toyo Iron work, etc. all have the direct transaction with his factory, and the bussiness is ever broadening. Address:—No. 246 Ichioka-machi, Nishiku, Osaka. Telph.: Nishiku No. 2133.

Mr. Yonezo Ishizaki, (石崎米造君) The master of Ishizaki Dyeing Factory. The true weapon in the business world is true credit than large capital, and the honesty and enduring diligency is the sole way of getting credit. It is easyto know this but to do it is another thing. We see the good example of this in Mr. Ishizaki's career. From youth he was sagacious having a strong will, and was very faithful to the parents, loved reading. When growed he threw himself in the dyeing indlustry, seeing its future, and worked as a plain shopman in certain dyeing shop. His ability was soon acknowledged by his master and was entrusted with important business, which he carried on with sincere fathfulness. After this working several years he established a factory in dependently and his expiriences and ability made the business steady progress. His factory treat the pure silk thread, which is famous for its superior quality as "Ishizaki's dyeing" among the dyeners. He is now investigating about the dyeing process as a member of the Kyoto Dyeing Association. Thus his business is ever on the steady expansion becoming the important factory of the dyeing world. He is yet young, there is opened large field before his dauntless career.

Mr. Masukichi Hada, (羽田益吉君) The ex-chief of the Military Medical impedimenta Board.

The recent development of Japanese chemical industry is surprising, this is of course owe to national activity but behind this there are many known and unknown inventors and chemists, who made an untiring in the various field of the Chemisty. Our Mr. Haneda is also one of them. He was born in Uyeno (Tokyo) in the 2nd year of Bunkyu. His father was a policeman of the Tokugawa govenment, when he removed to Shizuoka he also went there with him. He entered there in the primary school, he was prominent among mary. At that time there was a certain Mr. Hachiro Ishibashi who laarned European books and loved chemical experiment, the young Mr. Haneda looking these chemical reactions and cherished a deep interest. Afterwads he went Tokyo and learned Eniglish and Mathematics, when Mr. Ki Hayashi, the ex-director of Shizuoka clan's hospital, was already the Surgeon-general, and seeing his ability recommented him to enter the pharmacentical department of the Imperial University. After he graduated there in the 20 years old, he was appointed the 15th rank office of the Department of war, Kumamoto garrison. Afterwards he removed Ogura, Konodai, Hiroshima and Formosa etc. During these services he was continuing the chemical researches, and when he was appointed to the service of the Military Medical Impedimenta Board, he engaged these investigation with Mr. Naotaro Ono, and succeeded in the manufacture of Borneo camphor. violet and linalyl acetate also in the preparation of nobocain etc. Violet and Linalyl Acetate is now used extensively by the name of "Yoyogi Spices" His eldest son, Mr. Makoto Haneda, also the graduate of the Pharmacentical Dep. of theImperial University, is now earnestly investigating with Mr. Ono at Yoyohata. Thus he is now in leisure of old. but his name will remain long in the history of Japanese chemical industry. Address:— No. 737 Sendagaya, Tokio Prefesture. Telephone: Bancho No. 3901.

Mr. Torazo Kobayashi, (小林寅蔵君) The councillor of the Osaka mineral waters manufacturer's Guild. The mineral water manufactures. He was born at Kawaaimura, Amata District Kyoto Prefecture in the 16th year of Meiji. When 23 years old he went out to Osaka and began to sell mineral waters with very small capital. But seeing that to satisfy the customers he must himself make the good waters and also believing the future of the industry he established a factory at Homsho in the suberb of Osaka city first he made sweat Lemondade and after also Lemonade, Cider and Fruit Syrup. Thus year after year the business being enlarged, in the 10th year of Taisho he established a large factory at the present place with perfect equipments. Now he is the 1st rank mineral water maker in Osaka, at present the Capacity of production is 60,000 dozens of Lemonade of Umadama 18 Ban "Brand," 3,000 boxes of "Yutaka Brand" Cider, "Kozakura brand" fruit syrups, "Yutaka" port etc. Among these the cider and Fruit Syrup is especially known by its superior quality. The chief market is Kinki, San-in, Sanyo and Nankai Provinces.

Between Mrs. Tatsuko there is one daughter Shigeko, who is now 14 years old and attending to the Osaka Jikka Girl's School. Address:— No. 521 Honsho, Toyosaki-machi Nishi-nari District, Osaka Perfecture. Telephone: Kitaku No. 3913.

Mr. Hatsujiro Kiri, (桐初次郎君) The Chief of the Osaka Flag and Curtain Dealer's Guild. The master of Kirihatsu National Flag and Curtain Co. He was born at Fukubara Tatsutamura, Aichi Prefecture, in the 2nd year of Meiji. In boyhood learned in his village earnestly in spite of other young people's indulgencies, thus he was acknowledged form early as the hopeful boy in the village. When growed he assisted his father in agriculture. But he could not satisfied with the country life, and at last resolving his mind he went to Osaka in the 23th year of Meiji. It is told that when he reached Osaka there was only 2 sens in his purse and could not even take the break-fast. Thus he entered acertain shop and during three years he worked very hard looking the future independence before him. At length in 25th year of Meiji he opened sewing shop, then after ten year's hard endeavour he began the manufacture of flag and curtain at 4-chome Higashi Yokobori. Afterwards in the 2nd year of Taisho he removed to present place. At present the National flags and curtains with the trade-mark of "Futami-jirushi," manufactured in his factory, is wide spread in whole Japan and its colonies, Formosa, Korea, Hokkaido, Kabafuto and Manchuria, wherever the Japanese peoples lives. Its superior quality is proved by the first prize conferred on it at the Inland Products Exhibition and several other prizes at various exhibitions. At the Fourth General Exhibition of Goni-kwai, which was opened at Kyoto in the 40th year of Meiji, His Imperial Highness Prince Kuninomiya made the honour of buying the flag, and also several other H. I. Highness ordered several times.

Thus when the Osaka Flags and curtains dealers Guild was organised he was elected as the chief, and since the time he is remained in the position. Address:— No. 44 4-chome Yokobori Higashi-ku, Osaka.

Mr. Natsuki Yamamoto, (山本夏樹君) The master of the Yamamoto Chemical Products & Co. The products of chemical application is making never ceasing progress, our Mr. Yamamoto is one of the promising chemical manufacturers. He was born to the Second son of Mr. Kiyoshige Yamamoto at Yenoki-machi Akasaka Tokyo, on 25th May, in the 23th year of Meiji. After finished the elementary course he entered the Tsukiji Technical School, studied in the Applied Chemistry Department, and graduated in the 40th year of Meiji In the 41st year he was appointed an inspector of the finance section of the Imperial Railway Board Afterwards he was removed to the Researching Laboratory of the same board, and engaged

there several years. Previous to this he cherished interest about the paint industry, and studied about the famous Tsumaki's varnish, and could engaged in examining the paint and oil bought at the Board In February of the 3rd year of Taisho he resigned that post and established Yamamoto Chemical Products Co. independently. After that continuing the researches about the paint and enamel, at last succeeded in getting enamel containing copal, which is exellent and can match with the European products. Bisides this he also succeeded in producing graphite paint, the substitute of anticorrosive Komyotan. This paint was valued as an efficient anticorosive of Iron works. Formerly this kind of paint was imported from America, but now this was made by him for the first time in Janpan, and the product can even excell the American paint. This is known by the fact that it was used in the Marunouchi building, Nippon Usen Building, Nippon Sekiu Building and Kokko Seimei - hoken Building etc., all the important large buildings recently constructed in Tokyo. Mr. Shuzaburo Kuwai also the graduate of Applied chemistey Department of Kogyo-gakko, is working as a worker, chemist in his factory. Address: No. 1879 Shimoshibuya, Toyotama Distirct, Tokyo uiban Prefecture.

Mr. Ichinosuke Kuroda, (黒田市之助君) Wholesale-dealer in paints, dye-stuff and chemical medicines, residing at Setomono-cho, Nihonbashi discrict in the city of Tokyo. He was born in Tochigi Prefecture, the fourth son of Mr. Hanjiro Itabashi an inhabitant of Kitago village in the province of Ashikaga of the same, on February 1st in the 7th year of Meiji.

He came up to Tokyo in December 19th year, Meiji accompanied by his own father from his native province accidently and became acquainted with Mr. Ichinosuke Kuroda the predeccessor, to the effect that, he began to be that predecessors apprentice in the following year. Since his commencement of apprenticeship there his inborn talent in business was brought from buds to flowers: later he was adopted by his master and consequently succeeded the inheritance having taken the predeccessor's surname after him in October in the 41st year of Meiji.

In the present moments, he is taking active parts in public enterprises at the same wered of the capital besides the conduct of his own firm. At his private residence he lives a happy home life with his mother-in-law, his wife Mrs. Kitako, five sons and two daughters Address:— No. 7, Setomono-cho, Nihonbashi-ku. Tokyo. Tel. Honkyoku (long distance 2632. 4269).

Mr. Sokichi Ogura, (小倉宗吉君) Manufacture in printing types, well known as "Jibo (prining type) So" in the line of business. His factory is located at Ushigome ward in Tokyo, in which ten and more workers are employed devoting themselves to the manufacture of the excellent kinds of printing types.

His father was called Kichizo bearing the surname with him, who started the present job in the earlier days of his life in Koishi-kawa Tokyo. As the first son of Mr. Kichidzo, Mr. Sokichi took over the present accupation. Later he removed his office to Ushigome from Kanda in December in the 44th year of Meiji and then established a large factory at the present location. He completes the design of an improved method in the manufacture of printing types in June Taisho 9th year, that was patented in November in the same year.

As he is a cheap dealer in his commodities on the other hand, he has many customers in various places and in accepting numerous orders in consequence. His wife, Mrs. Haruko gave birth to two sons and four daughters. Address:—No. 110, Yamabuki-cho, Ushigome-ku, Tokyo.

Mr. Takeshi Kume, (久米武君) The proprietor the Shubundo, the Kume Printery. He was born in May in the 13th year of Meiji at Kawasaki-cho, Kita-ku in Osaka City the first son of Mr. Shun-etsu Kume one of a people belong the former Samurai of Waka yama Prefecture, endowed with extraordinary talent.

He received the common education in his native city during the boy hood; he has had technical business at heart from his early days of life and came up to Tokyo City later where he studied science in that line specially having entered the Junten-kyugosho which he left soon afterwards owing to his optical disease. And he came back to Osaka, where he started the present business in the 33rd year of Meiji. First his calling was not just the same as the to-day's one. It was in the 44th year of Meiji he commenced the management of common printing businses at the same office: in the 5th year of Taisho he added to the above the socalled tinplate printing. Since his business has become more and more prosperous and won the present success. Address:— No. 13. Ise-cho, Kitaku, Osaka. Tel. Kita (2516

Mr. Asakichi Muraishi, (村石淺吉君) A bright star among texitile traders in Yonedzawa city in the Tohoku districts. He was born in the preceding city, the first son of Mr. Miyakichi Muraishi, endowed with gentle and earnest spirit.

After he had graduated from the Yonedzawa prefectural middle school in his 20th year of age. He engaged in the family calling having taken over his father's inheritance. His father was an energetic figure among his comrades and started that trade for the first time in that vicinity in the 26th year of Meiji, to the effect that, he early fixed on his business policy there.

It was in the 41st year of Meiji when he succeeded his father's business: since its enlargement and development in the line were simulaneously brought in chiefly under his new policy. At present he owns the main factory at Tateoka-cho, in the same city where he employs many skillful workers by appliance of weaving machines since September 8 year of Taisho. He is one of the representative members of the silk texitle trader's guild there. Address:— No. 5950, Kibamachi, Yonedzawa city. Tel. (558).

Mr. Saruhei Yasuda, (安田申平君) The proprietor of the. Yasuda Printed Mousseline Works established at Misato village in Kato-kawachi province, Osaka prefecture. He is broadly acknowledged as a man of light and is leading the Osaka mousseline circles now-a-days. He was born in Osaka city in February in the 17th year of Meiji endowed with clever tendency; when grew up he made up his mind to be a businessman and later entered employment at a large mousseline works which was owned and managed to Mr. Tokijiro Hayashi a chief in the dyeing line there.

After he had continued his service at the preceding works for eight years, he started his present's business at the present address in June in the 6th year of Taisho. Soon after then, that trade in general was brought in bad condition having received a severe attack by influence of the Great War. But it was exceptional for him: he went exceedingly well in the trade during those days and has strongly built up the foundation of his calling by his own efforts. He now enploys sixty of workers under his superintendence and accordingly has many clients everywhere. Address:— Higashi-hashiba, Misato village, Kita-kawachi-gun, Osaka Prefecture.

Mr. Shokichi Wakimoto, (脇本庄吉君) A leading business man in Osaka City in tin-plate printings. He was born on the first day of April in the 17th year of Meiji, the second son of Mr. Tomekichi Wakimoto a in Nara Pre. As soon as he had received the common education in his native town he came up to Osaka City when he was 14 years old in the 30th year of Meiji and continued his study for some time on carving under a certain shop. Later he changed his purpose for the line of tin-plate printings and came up to Tokyo with that end in the year of Meiji when he was only 16 years old. On his arrival at the

30th metropolis he entered employed at the Takayama printery at Hirokoji Kyobashi-ku, there he continued his service for several years since then. In the 37th year of Meiji he came back to Osaka City where he began to manage his own factory and office at the present address.

It needs no saying that he has gained a great success in that calling afterwards, to the effect that, he is looked upon as an authority in the same line of industry. Address :— No. 352, Shimizudani Nishino-machi, Higashi-ku, Osaka. Tel. Minami (651).

Mr. Masasaku Ichikawa, (市川正作君) A member of the Hachioji municipal assembly, additionally, the proprietor of the Ichikawa weaving machines foundary well known with regard to the so-called Ishikswa system. It can be judged in this respect that he is the pioneer in the respect that he is the pioneer in the same line of industry.

He was born in Hachioji city in the February the 13th year of Meiji : on the graduation from the Hachioji prefectural dyeing and weaving school in the 32nd year of Meiji he started textile business in the preceding city. And soon after this, he began to apply motive power with the weaving machine in the early days of his business life when his comrades were hesitating in its practice.

Thus, it was brought in consequence that his business became more and more, prosperous and efficient, to the effect that, he has been looked upon as a representative figure in the same circle. Since he has added the manufacture of various weaving machines of the newest pattern to the main calling. Recently he was elected as a menber of the Hachioji municipal assembly. Address :— Tera-machi, Hachioji City. Tel. Hschioji (517).

Mr. Bunzo Shima, (志摩文蔵君) The leading manufacturer in silkentextile fabrics in Yonezawa city, Tohoku districts. He was born the first son of Mr. Bunzo, the predecessor, with clever endowment ; after having completed the primary schools course during his boyhood he entered the dyeing and weaving section of the Yonezawa prefectural school and graduated it in the 40th year of Meiji, with honours.

His father went to heaven in the 42nd year of Meiji after he had established the foundation of the present calling since the 27th year of the same. Subcequently he succeded the father's inheritance at the same time and began to manage the textile business by his own efforts at the present address.

At present he employs many workers in his factory and uses to produce much quantity of several silken textile fabrics year after year. It goes without saying that he has a great many clients throug out that territory and accordingly endevours a great deal for the elevation of the fame of the so-called Yonezawa textile. Address :— No. 4146, Teppoya-cho, Yonezawa City. Tel. (711)

Mr. Mankichi Nakane, (中根萬吉君) The proprietor of the Nakane factory in which various cans and toys are manufactured by applying tin-plate printing. He was born in October 18th year of Meiji, at Kitadzume Shinsaibashi, Minami-ku, Osaka city. As his father was engaged in toys dealing business at 2-chome, Minami-kuboji-cho, Higashi-ku in the same, he attached himself to that line from his early days of life giving possible assistance to his father.

At about 18 years of age, he came up to Tokyo where he devoted himself to the study of the manufacturing in toys by tinplate printing for several years.

In the 2nd year of Taisho he came back to Osaka and opened his stors at the present location. In the 5th year of Taisho he losted his father by sickness. After this, he had experienced a reat bitterness in shifting his calling, before he could gain present's success. There are one hundred and more workers employed in his factory ; persons in-charge, Messrs. Eitaro Ando, Zen to, Shintaro, Sakurai, Shotaro Kamimura and Shunshichi Akedo. Address :— No. 301, Enokinami-cho, Higashi-nari-gun, Osaka, prefecture. Tel. Namadzue (58)

Mr. Fumikatsu Hirose, (廣瀬文窟君) The proprietor of the Keihin Renga Shokai (Tokyo and Yokohama bricks firm). He was born on the 10th day of October in the 13th year of Meiji at Tadagoe, Honda village, Motosu province in Gifu Prefecture, the second son of Mr. Sendzo Hirose. His initial name had been Teiichi, which was altered Fumikatsu on May 5th 26th year of Meiji.

Coming up to Tokyo in the last month on the 29th year of Meiji, he entered Hibiya Middle School : after graduation from it he studied jurisprudence at Meiji University for a few years. The first step of his career was to an official service.

Later he changed his mind to plunge himself in the commercial circles from the government position in the 42nd year of Meiji. Thus he has commenced to take part in the brick industry. At first the manager of the Kwanto bricks company : secondary promoted to a partner of the Osaka ceramic company. In the fifth year of Taisho he established the present firm and a brick-yart in Nagoya city. He additionally manages a large saw-mill at Fukagawa, Tokyo. Address :— No. 17, 2-chome, Minami-sakumacho, Shiba, Tokyo. Address :— Tokyo. Tel. Shiba (4836)

Mr. Masudzo Ishiyama, (石山益三君) The proprietor of the Chuseido office, dealers in chemical apparatuses and medicines. He was born in Yonezawa city Yamagata Prefecture, the heir to Mr. Shinsaku Ishiyama, on the first day of April, 30th year of Meiji. After completing common school course he came up to Tokyo at his eighteenth age, where he first occupied himself to textile manufacturing business and then to the present one. It was the 6th year of Taisho when he started the management of his own office at the following address. Since afterwards his honest policy in the line fitted to the demands of the present generation, to the effect that, he has speedily won the flourishing fame in the commercial world. There is manufactured acetate of lead at the Kameyedo factory, which is the special one among various chemical medicines circles. He employs many experts, clerks and workers under his superintence to promote his business mentioned above. Address :— No. 21, 5-chome, Midori-cho, Honjo-Tokyo. Tel. Honjo (6203. 596)

Mr. Ryodzo Tsumita, (積田良蔵君) An engineer at the mantle making section of the Tokyo Gss and Electric Engineering Co. whose main office stands on No. 1, Ote-machi 1-chome, Kojimachi-ku, Tokyo. He was born in Chiba Prefecture, on the 23rd June in the 19th year of Meiji, the fourth son of Mr. Ben-ichiro Motoyoshi, at Yoro village in Ichihara province of the same. Later he was adopted by the Tsumita's at the same village and has taken over the present surname. In the 36th year of Meiji he came up to Tokyo bearing the purpose to study stenography. But unfortunately it was not realised since he met with a chapter of accidents successively. In the next year he was employed as a mere lamplighter at the Nippon Lamp-lighting Co. in Tokyo, and this was indeed his first step to the business circles. He studied physics for a few years at the Tokyo Physics School (Private). He once entered as an expert the mantle factory belonging to the Tokyo Gas Co., and then to the present company since the 5th year of Taisho. Address :— No. 7, 1-chome, Tokiwa-cho, Fukagawa-ku, Tokyo.

Mr. Tsunekichi Shibata, (柴田常吉君) Man-in charge of the photograph department of Mitsukoshi Gofukuten. He was born in January of the 3rd year of Meiji in Ichi Prefecture, the third son of Mr. Genzo Suzuki. In his boy hood he was adopted by Mr. Matsutaro Shibata and took over the present surname. After having completd the primary school course in country he came up to Tokyo at his 16th age in October 18th year of Meiji with the purpose of study on paintings first ; later it was changed into printings

or carvings. Generally speaking, he has been the owner of inborn talent about art, and won in consequence the fame in the artificial circles of the metropolis. Especially, there is the following fact that he invented the method of applying platinum paper with photography in the 27th year of Meiji when he continued his service at the Takagi photographic studies. And additionally he purchased one set of photographing instruments of cinema from Italy in the 30th year of Meiji, for the first time in this country. Since 40th year of Meiji he is taking charge of the preceding department of Mitsukoshi. Address :— No. 15, 1-chome, Tamachi, Akasaka, Tokyo. Tel : Shiba (6509).

Mr. Tosuke Tsunoda, (角田駿助君) A councillor of the Hachioji textile traders' guild, additionally, a conseller of the Hachioji dyeing credit and purchasing association. A leading merchant in dyeing business there. He was born in September in the 12th year of Meij , at Eris village in the province of Awa, Chiba Pre'ecture. When he was 16 or 17 years old he came to Hachioji and continued employment under a certain textile trader in that city for some years since then. In 42nd year of Meji he started for the first time a dyeing business at Asahi-cho after he has established his own factory there. And it was very lucky for him that his business went on more and more prosperous year after year, to the effect that, he removed his offlce to the present address in 4th year of Taisho and at the same time he newly built in the same year a graet factory at the to-day's situation. It needs no saying that he is looked upon among his fellow traders a man of light and leading in the line. Address :—No. 53, Tera-machi, Hachioji. Tel. (269)

Mr. Gosaburo Fujii, (藤井護三郎君) Representative partner of Fujii Kaishindo of an unlimited liability, an artificial lithograyhers. He was born the eldes son of Mr. Ichigoro Fujii a wealthy merchant in rice wholesaling, additionally, soy ane sake brewery at Yamazaki village in Shishiawa province in Hyogo Prefecture. He has had business at heart even in his boyhoad: first he engaged in mining enterprise and then in tobacco trading both of trading mere given up by him owing to some eircumstances after wards. It was in the 23'd year of Meiji when he started the present business at the to day's offlce by his own efforts. But it belonged to his individual management at first: later he changed the organigation of his firm to an unlimited liabrlity in March 2th year in accordance with the elevation of its mannfacturing efficiency and also the enlargement of its makerts. His third son Mr. Masao is a graduate of Waseda University, who takes dharge of the business department of the firm. Address :— No. 1, 2-chome, Izumi-cho, Higashi-ku, Osaka. Tel. Higashi (long distance 270. 1770). The photo belongs to his son Mr. Masao.

Mr. Taku Imai, (今井卓君) A textiles manufacturer in Yonezawa City. He wss born on the 20th day of February in the 13th year of Meiji at an old family in Miyagi Prefecture: later he was adopted by Mr. Tetsutaro Imai a wealthy inhabitant in Yonezawa City. He has had business at heart in his early days of life and after wards entered employment at a textile manufactory owned by Mr. Shinza Shiranegawa where he continued his service and practical training for that industry for ten and more years. As the matter of curse he left the preceding factory in 43rd year of Meiji after he had devoted himself for the sake of his master and established a foundary by his own exertions at the present address in the same year. Since his business has been guided under his peculiar policy and brought into flonrishing condition year after year. Even in the critical period of to-day pertaining to the so-called capital and labor problems he uses to adopt a new method in siministering his factory and also in employing his workers. Address :— No. 304, Sotonouchi, Kita-fukuro-machi, Yonezawa. Tel. (551)

Mr. Shozo Aoki, (青木庄造君) The proprietor of Aoki & Co. manufacturers in tallow, paint, gum and technical medicines. He was born at Chokoji Gamo Province in Shiga Prefecture, on the 10th day of December 20th year of Meiji, the second son of Mr. Sotaro Aoki. In 33rd year of the same he came up to Osaka City to become a merchant, where he complied practical experiences at a certain drapery store for several years: he met with

his father's death at that time. Later he came up to that metropolis from his native province to penetrate his cherished will again and entered service at the Yoshikawa oil refinery in 41th year of Meiji. In this way he continued his service most urgently and devotedly at the preceding works since to the effect that, he could become a business man carrying on business on his own account in a short time. And it was in November of the 5th year of Taisho when he started the current business at the present address by his own efforts. Address :— No. 1, 5-chome, Nishi-dotonbori-dori, Nishi-ku, Osaka. Tel. Sakuragawa (2567) Post transfer account Osaka (43097)

Mr. Shozo Sakurai, (櫻井正三君) The representative partner of the Sakurai firm a joint-steck combany in which dyeing and painting stuff, medical drugs and chemical medicines etc. are dealed. His native country is the prefecture of Chiba in the Kawants districts: he was born the third son of Mr. Dembei Sakurai an inhabitant at a town called Sakura in the same prefecture, on the 28th day of July in the 18th year of Meiji. He was employed in the 31st year of Meiji when he grew up later at a wholesale dealers in dye-stuff, chemical medicines and coarse wares by the name of Handa Jihei Shoten located at Ise-cho, tn the ward of Nihonbashi, Tokyo. Thus he had continued that service till the second year of Taisho when his master's old shop was shut up under some circumstance. Since he has begun to take the management of his firm at the present address. At first that firm was conducted mercly by his own exertions, which was latetly put on solid foundation of io-day under incorporated organization. Address :— No. 13, 1-chome, Honshirogane-cho, Nihonbashi, Tokyo. Tel. Honkyo-ku (long distance 277)

Mr. Seiki Koyanagi, (小柳清熙君) The proprietctor of the Hinoda & Co., manufacturers in the so-called Kinodo Metal. That firm was established in September 7th year of Taisho, in which the valve-cock is manufactured on a large scale in addition to the above metal since 10th year of Taisho. The metal is absolutely anti-frictional and has accordingly a great merit in this respect. The present proprietor was born in Niigata Prefecture, on the 15th day of November in 19th year of Meiji, at Koyoshi village in Nishi-Kambara-gori of the same, the first son of the late Mr. Usaburo Yanagi, Ex-Member of Parliament. His father had striving politically for the sake of his country in the looal and central cireles, until he died recently at an advanced age of seventy and more. Mr. Seiki has founded the present company merely by his own efforts after his fater's death, for the timns have given him the strong suggestion to rouse himself in the industrial field. He has branch offices in Osaka and Sendai cities, besides the First Factory at Adzabu-ku Tokyo and the Second Factory at Osaki-machi Tokyo Prefecture. Address :— No. 17, 2-chome, Morimoto-cho, Adzabu-ku, Tokyo. Tel. Shiba (expers & long distance 2681)

Mr. Harumatsu Narikawa, (成川春松君) The proprietor of Narikawa's Metal Foundry, in which babbit-metal (two horses brand solding tin) is chiefly manufactured and dealed He was born in the province of Arita in Wakayama Prefecture, endowed with an unparalleled ability on commerce. It was in the 25th year of Meiji when the Narikawa Foundry was established under his own scheme. In those days, the metal industry of this country was in a very crude condition in general, so that the most of all the metals were supplied from foreign countries. In this critical period pertaining to that line of business, his ommencement of that metal supplying enterprise in the home land has duly built the foundation of his today's success. He owns First Factory at 7-chome, Tani-machi and the second one at Minami-Momoya-machi, respectively in Minami-ku, Osaka, City. It goes without saying that

his financial condition is more and more prosperous in the present times. His first son, by the name of Mr. Seidzo, is a graduate of the Osaka Commercial School and now gives a great assistance to his father's business. Address :— No. 9, 7-chome, Tanimachi, Minami-ku, Osaka. Tel. Minami (long distance 1363. 1013. 645)

Mr. Genichi Nakano, (中野源一君) The representative partner of the Goyo Shokai of an unlimited liability, in which several kinds of liquid refreshments are ideally prepared for sale. He was born in Hiroshima Prefecture, the son of Mr. Gennai Nakano, on the 14th day of July in the seventh year of Meiji, in the province of Aki of the same. He was very clever and gentle in the boyhood and had business in mind from his early days of life. In the later days he was incessantly paying attention to catch an opportunity to set sail on the open sea of commerce. That is to say, he had already aimed at the immense supply of the hygienical liquid refreshments throughout the country. And this was easily realized by his inborn ability. In the 23rd year of Meiji, he started the to-day's business at the present address. Since that time, the market of the commodities has spread to a large extent year after year and accordingly it was lead to occupy further to Formosa, Korea, East China and the South Seas and as forth. He is a reserved military officer, the first grade of the eighth-class rank. Address — Osuga-cho, Hiroshima City. Tel. (175)

Mr. Benkuro Kato, (加藤辨九郎君) The leading business man in the locality. The manufacturer in various kinds of earthenware prepared of excellent materials which are produced in the prefecture of Gifu. He is a son of Mr. Matsujiro Kato who started pottery at his native province in the early days of his life. And his father's enterprise quitely met with the exigencies of the times, to the effect that, the business was speedily enlarged and according the technical art was brought in greater progress after a short time. As the matter of course, the solid basis of that industry was founded soon after then, and, after yearly development in the line, Mr. Benkuro has succeeded the trade from his predeccessor after the lapse of two generations. He is one of the counsellors of the Mino Earthenware Trader's Guild and a member of the Tajima Town Assembly. His wife Mrs. Mitsu-ko gave birth to one son and two daughters. The first danghter Miss. Makiye-ko is an able woman recently graduated from the Gifu Higher Girl's School. Address :—Awaridzaka, Tajimi-machi, Doi-gun, Gifu Prefecture.

Mr. Tomeichi Matsushita, (松下留吉君) The proprietor of the Matsushita Printed Mousseline works, was born at Kado Village, Sakai Province in Fukui Prefecture, in April 16th year of Meiji. When grew up he came to Osaka where he continued his apprenticeship at a certain printed mousseline works for about ten years. Later he entered Mr. Ichidzo Mihara's works in which he prosecuted his study on the line for just ten years. Thus he could get plenty of business capital and practical abilities for that industry. In October 8th year of Taisho, he opened his office at the present address and started the monsseline industry at the same time. Though he had met afterwards with a check against his calling owing to the depressed tone of money-market in general, he could fortunately recover his livelihood and financial condition not so long after then. There are thirty-five men and women hired in his works and its market occupies very broadly through the country.

Mr. Kunitaro Kasaishi, (笠石國太郎君) The director of the Hayajima Factory of the Kurashiki Spinning Co. He was born on March 15th year of Meiji in Okayama Prefecture: aftergraduation at the Osaka Highter Technical school in 39th year of the Meiji he entered sevice at the Settsu Spinning Co. of Osaka (to-day's Dai-Nippon Spinning Co.) as an engineer to the Company. The above service he had continued for about five years, before he changed his post to the Kurashiki Factory of the Kurashiki Spinning Co. in the 44th year of Meiji and then to the Tamashima Factory of the same He attended to his duties for more than two years at the latter factory as the head of its engineering department. In this way he devoted

himself to the engineering management of the spinning factory for the long years of seventeen and more before and since.

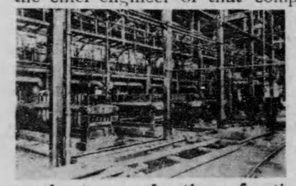
It needs no saying that the Kurashiki Spinning Co. has great influence over the spinning circles through this Kwansai Districts. There are numbered 400 of spinning machines, 15,000 of spindles and one thousand workmen are engaged in that operation. Address :— Hayashima-machi, Okayama Prefecture. Tel. Hayajima (44)

Mr. Naokichi Narumi, (鳴海直吉君) A bright figure among the local businessmen, engaging in the dyeing industry in Hachioji City. He is at present one of the directors and councillors of the dyeing section of the Hachioji textile traders' guild, additionally, a councillor to the goung men's associotion at Kokado-cho there. He was born at Kawaguchi village in a suburb of Hachioji city, in September in the 24th year of Meiji. Having had business at heart from his early days of life, he entered employment at Mr. Takidzo Kawai's foundry when grew up: where he continued to commit the practical study of dyeing industry for about twelve years since and after. Then he attended himself to the military service for two years. After that he took charge of the dyeing department of the Koyama foundry having had a call to the same. In October 8th year of Taisho, he establis ed his foundry at the present address by his own efforts. He is, on one hand, known as a good sportsman for the purpose of promoting the health of his own, his clerks and workmen altogether. Address :— No. 65, Kokado-cho, Hachioji city.

Mr. Yoshitaro Shibayama, 柴山芳太郎君) Director of Hachioji dyeing credit and purchasing guild. The proprietor of the Shibayama dyeing foundry. He was born at Nishi-naka villsge, Nishi-ibaraki province, Ibaraki prefecture, in December 16th year of Meiji. When he was attained to the age of 15, he began to study about the textile and dyeing industry coming to the city of Hachioji, one of the leading cities in the same line of business in Japan It was in the 2nd year of Taisho, when he started the textile industry in the same city: which had a great progress since then through the ill tide of an economical condition in general. And, after this, he newly completed the establishment of the present factory in Febrwary 7th year of Taisho. He is one of the pioneers who applied electrical power to the textile operation, which is easily persecuted by means of natural, rapid streams washing along the suburb of the city of Hachioji. It can be also mentioned that he particularly uses to select the newest patterns of dyeing machines. Address :— No. 77, Kokado-cho, Hachioji city. Tel. Hachioji (739)

Nippon Senryo Seizo K. K. (日本染料製造株式會社) (The Nippon Dye-stuff Manufacturing Co., Ltd). An authoritative company in the Oriental dye-stuff manufacturing circles now-a-days, bearing a capital paid up of 8,000,000 yen. Its main office stands at Kasugade-machi Nishi-ku Osaka City and its detached office is situated at Yaria-cho Kyobashi-ku in Tokyo City. Generally speaking, the dyeing industry of this country had been still in the infancy before the Restoration of Meiji Era: after this it became prosperous gradually accompaied with an import of chemical dye-stuff from European countries and accordingly the progress in its methods was greatly acknowledged since that time having been benefited chiefly by an enormous quanity of German imports. Recently the Great War suddenly broke out in Europe, and at the same time the import of all dye-stuff to this country was caused into stoppage, to the effect that, its value rose not only to the highest degree at one bound but the relation between its demand and supply was confused to a great extent. In the critical period of the times pertaing to the dye-stuff industrial circles throughout this country, the Government effected the issue of an encouragement law on the manufacture in dye-stuff and medicines in the 4th year of Taisho in order to protect the traders in the same line of business. Thus, the Nippon Dye-stuff Manufacturing Company was organized in February 5th year of Taisho under this law and started the business in July

the same year when a grand manufactory was already established at a convenient location of to-day about land and water transportation in Osaka City. The present staff of that company is as follows: President and director—Mr. Hirokichi Nakaya Directors—Messrs. Shintaro Ohashi, Raita Fujiyama, Chiyosaburo Watanabe, Nisuke Nagata, Tei Hori, Kotaro Miyoshi, Doctor of Technies. Inspectors—Messrs. Kan-ichi Ito, Katsutaro Inagaki, Masasuke Kubo, Among the staff, Mr. Kotaro Miyos i D. T. is the chief engineer of that company since its foundation, who takes command of all



technical parts belonging to this manufacturing, investigating and repairing departments in which more than 160 of technical expert are engaking in their work under his guidance. It goes without saying that company has attained to perfectness in its organization, its business plan, its production efficiency, its transaction, additisnally even in its managing basis. And it turns out almost all kinds of direct and indirect dye-stuff yearly to supply them for the merkets of the whole lands. The president Mr. Hirokichi Nakaya is the Ex-Vice-Minister for Communication. Address:—Main office) No. 199, Kasugade-machi, Nishi-ku, Osaka. Tel. Tosabori (3500, 3501, 3502, 3503, 3504, 3505, long distance 3506) Detached office) Na. 1, aYriya-cho, Kyobashi-ku, Tokyo. Tel. Kyobashi (long distance 4000) The 1st photo belongs to Mr. H. Nakanishi the president.)

Mr. Usaburo Sobajima, (側島宇三郎君) A new figure among druggists in Nagoya City, known as the so-called middle capital in Japan. He certainly deserves a place in the biography of self-made men of the present era. He is the second son of Mr. Yoshibei Sobajima a brewer of sweet Sake and a dealer in old things in Nagoya. As his father was not so fortunate in the line of his business at that time, he could not accordingly receive full education during the boyhood. At his 14 years of ags, he was employed by Mr. Seibei Sawata a druggist at 3-chome, Kyo-machi in the same; at that store he faithfully continued his service for seven years since. At his 21st age, he started a drug store at the present address, id est. Nishi-hegi-machi, Naka-ku, there. Later he has added the techinical medicine to the above commodity for sale. Established additionally a varnish foundry near his store in the 5 year Taisho. He is engaged in the business quite flourish in gly with his elder brother Mr. Jiro at present. Address:—Nishi-hegi-machi, Naka-ku, Nagoya City.

Mr. Tomekichi Takahashi, (高橋留吉君) Thep roprietor of the Takahashi iron-foundry located on No. 86 Ichioka-cho, Nishi-ku, Osaka, City. That foundry is known throughout the city. As on in which are turned out annually a great mass of stills, chemical and technical machines. He was born the third son of Mr. Kindzo Takahashi a millionaire in Minami-kawachi province, Osaka prefecture, in June 20 year Meiji, with clever endowment. After he completed the common course of education in his early days of life, he soon has had technical business at heart. Firstly he engaged in the practical study of the can-making industry under his elder brother Mr. Masajiro Takahashi's guidance who lived in Osaka. Later he established by his own efforts a grand foundry at the present address. Recently he began on the manufacture of various improved stills, which lately has become strongly perceived in general as the most valuable tyres of machines in the line. Address:—No. 86, Ihioka-cho, Nishiku, Osaka city. Tel. Nishi (688, 1158)

Mr. Takejiro Mori, (森武治郎君) The proprietor of the Mori glass foundry which suppries electric lamps to Tokyo Dento K. K. and other leading companies and fiirms in the metroporis. He was born in Hakodate-ku, Hokkaido with extraordinary endowment. On the completion of his common school cource in his native land during the boyhood, he has had technical business at heart. And he came up to Tokyo to study in the 32nd or 33rd year of Meiji. At that time, the glass industry of this country began to hoist its sail to put to the ocean of business in general. Firstly he studie the glass industry under Mr. Speed's guidance. Later he entered service at Mr. Miyagi's glass foundry, in which he continued service for seven year since. Then he established a foundry at 2-chome, Kikugawa-cho, Honjo-ku by his own efforts and started the manufacture of provisional apparatuses there. Recently he abolished the above manufacture and instead of it began to make electric lamps in his foundry. It was the in 9 year Taisho when he founded the present factoty at the addressing location. Address:—No. 830, Hatagaya, Yoyobata-mura, Toyotama-gun, Tokyo Prefecture.

Mr. Masao Anno, (安野正夫君) An engineer and at the same time the head of the branch-factory of the Nippon chemical fertilizer Co., L. at Lot No. 4, Nishi-chikuro, Minami-ku, Nagoya, city. He was borm in Sanyo districts on the 3rd day of November in the 23rd year of Meiji, endowed with extraordinary talents. He completed the higher common school course in his early days of life. Later he graduated from the Osaka higher technical college, having finished the whole course of applier chemistry of that college in 4 year Taisho. On the graduation from the above, he entered service at the Osaka perfectural government; then he changed his post to the former Nippon artificial manure Co., Ltd. (the present Nippon chemical fertilizer Co., Ltd.) in which he took charge of its branch factory in Tokyo. It was in 8 year Taisho when the above two companies were amalgamated as to-day. And it goes without saying that he devotes himself to that company from begining to end as previously mentioned. Address:—c/o Nagoya Branch Taetory of Nippon Chemical Fertilizer Co., Ltd., at Lot No. 4, Nishi-chi-kuro, Minami-ku, Nagoya city.

Mr. Teiji Sato, (佐藤貞次君) The typical gentlemen in the tile manufacturing circles of the country as the present proprietor of the Sato Tile Foundry at Toyooka-machi in Gifu Prefecture. He was born on the 12th day of December in the 20th year of Meiji at the above- mentioned town, with clever endowment. After completing the primary school course in his native province he further learnt at the Keikwa Middle School then, from which he graduated in the 42nd year of Meiji showing the best results in its graduation examination. Since its graduation he has had business at heart and in accordance with it he built up entirely the elements of the tile industly by himself. This was in October in the fourth year of Taisho, he had experienced great bitterness in his life until he established a large factory at the present address. He has recently engaged to Mr. Chugi Sato as an engineer to that factory, who is a brilliant alumnus of the Nagoya Middle School. Mr. Teiji's wife is called Mrs. Yoshiko an almunus of a girls' school of needle-works.

Mr. Matsuji Ebi, (海老松二君) The proprietor of the Ebi & Co. of joint stock organization. That firm was established in the 25th year of Meiji by his late predecessor, in which the defacement-deductive allay is cheifly tutned out at present. In that respect of the industry his predeccessor had once greatly devised into the present perfectness. And at last the basis of that firm was strongly built up by his own efforts early in those times. It goes without saying that the defacement-deductive allay is

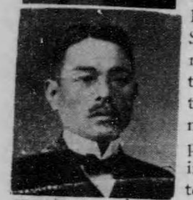
indeed the central power to organize various technical institutions now-a-days, and accordingly he has been looked upon in the same line of business as its pioneer among his comrades. Later he succeeded in accomplishing one kind of superior white metal branded with "wheel," which was soon recornized as the best quality in this country and recommended as an article designated by the Imperial Railway Government and other heading offices, companies etc. The present proprietor was born in Gifu Prefecture in January 12 year Meiji the first son of his predeccessor; since the boyhood he devotes himself to the family's, calling. Address:—No, 3, 3-chome, Hamamatsu-cho, Shiba, Tokyo. Tel. Shiba (734)

Aokj Cellulojd & Co., (青木セルロイド製造所) The late Mr. Yubi Aoki the former proprietor of Aoki Celluloid Works of to day was the pioneer of the celluloid remanufacturing industry in this eountry. He was endrwed with strong will; when grew up he pushed himself into the business world in order to complete the ideal remanufacture of celluloid material. Later the above purpose was realized by his hard application into the present success. It was in the 2nd year of Meiji when a colluloid factory was established at Kamedo in Tokyo Prefecture by his own efforts; in which the raw materials for toys and fancy goods are made. And he died owing to sickness in Nobember 8 year Taisho; on his death in their year the present Aoki Celluloid & Co. was organized by his remaining households and his juniors as a joint-stock company. The present representative partner of that company is Mrs. Tsuru-ko Aoki and other partners contain Miss. Kiyo-ko Aoki, Messrs. Kyunosuke Iyeda and Michisuke Inazaki. The latter two are juniors to the late Mr. Yubi. Address:—No. 2682, Kami-suijin, Kamedo-machi, Minami-katsushika-gun, Tokyo Prefecture. Tel. Honjo (3894)

Mr. Ko'ch'ro Takahashi, (高橋孝一郎君) The Vice-Director of the Osaka Saibi First Youngmen's Association. The standing director of the Children Protest Association. The master of Takahashi Kogyo-sho (manufactory) He was born in Tsuruga town, Fukui Prefecture, to the son of Mr. Isaburo Takahashi, after finishing the primary scool he entered Yawata Commercial School, in Omi Province, but after 2 years he was obliged to eave the school on account of the house affairs. Thus he remained in the country always looking for the oppotunity, at last resolving to raise himself in business world, he went to Tokio in the 38th year of Meiji, and open a shop of metal works in 2-chome Okachi-machi, Shitaya-ku, Tokio, but unfortunatery this was failed. After this he engaged as an canvasser of a bank, never ceasing to take up the oppotunity. At last it came and he began dye-stuff manufacture in Osaka in the 2nd year of Taisho. In this work he was always assisted by certain influential person who trusted him. Besides, as he consequence of the great war his business became properous daily and opened a new markets in China and Korea. According he made a inspecting tour in the important cities of these countries. After returning he began newly Iron works, Electro apparatus manufactute. As present there is about 20 persons working in his works. The daily production of dyestuff is about 300 kin. The Chief market is in Osaka, Kobe, Kyoto and Nagoya. The Iron works is also busy in Osaka. This the future of his business is very promising. Address:—No. 75 Minami-hama-cho, Kita-ku, Osaka. Tel. Kitaku No. 1789 (for Section of dyestoff and Business) No. 2577 (for Iron work section)

Mr. Kinzo Tal ahashi, (高橋金造君) A manufacturer of vitascope, was born in Tokyo in 1889, whose father, the late Mr. Yasokichi Takahashi, was the pioneer in manufacturing this machine in Japan. He is the second son of Mr. Yasokichi. He has not only

the chief works, but also two branch works; the custmers of his manufacturers are chiefly the following companies namely Nikkatsu, Shochiku, Kokkatsu and other several companies concerning cinematograph in Tokyo, Osaka, Nagoya, and such districts as Kyushu, North-East, Korea, Formosa, etc. Most of fellow-manufacturers in Tokyo are those who studied in his manufactory. Address:—No. 43, Rokkenbori-cho, Fukagawa-ku, Tokyo. Tel. Honjo, No. 4843.



Mr. K yota, Ush'yama, (牛山喜代太君) Who has long proved himself highly capable as an engineer of paper-mill, was born at Suwa-machi, Nagayo prefecture in 1872. He entered the Fuji Paper-mill Co., Ltd. in 1890 as a workman in the first manufactory of that company at Iriyamase, Fuji-gori, Shidzuoka prefecture and was transfered to the second mill as an engineer in 1920, to the seventh mill at Osaka in 1907. In 1909, he retired himself from the company and became an engineer of the Umedzu Paper-mill Co., Ltd. in Kyoto. After he recovered that company from its downward tendency, he returned to the Fuji Paper-mill Co. in 1913, and became an engineer at the third mill. In the next year, he was transfered to the fifth mill in Hokkaido, but owing to the severe chillness in that place he returned to the third mill, having been taken ill, Having completely restored to health, he was transfered to the Osaka mill and in 1916 to the present mill; next year, he was promoted to the chiefmaster of the mill. Being a christian, he is the president of the Fuji-gori Temperance and Von-smoking society. He is also a member of a school-board and an advicer of the Fujine Young Men's Association and of the Y.M.A. at Kuroda-ku, Omiya-machi Address:—Koidzumi, Fujine-mura, Fuji-gori, Shidzuoka-ken.

Mr. K'zayemon Takase, (高瀬喜左衛門君) Is the president of the Shirokiya Lacquar-ware Partnership. He was born as Kizayemon the thirteenth of the Takase family—every patriarch bearing the same—at Wakamatsu city in Fukushima prefecture in 1894. After Middle School, he entered the Economic Colledge of the Keio University and graduated at the colledge in 1918. Not only in the lacquar-ware circle, but he is famous as a young business-man of promising ability in the Wakamatsu business world. He established The Aidzu Lacquar-ware Technical Meeting, co-operating with Mr; Tokujo Kaneko, the principal of the prefectural technical school, for study and developement of lacquare-ware technology, expending his private fortune upon it. That meeting helds an annual competitive exhibition once every year, Mr. Kaneko being its examiner. In his boyhood, Mr. Hachiro Takase acted in his name on account of his infancy. Mr. Hachiro, who is his brother-in-law, being the hasband of his elder sister, is the leading spirit of the lacquara-ware circle of Aidzu province and is now the president of the Aidzu Lacquare-ware Association. The bright future is, indeed, shining before these brothers. Address:—Manuka-machi, Wakamatsu, Fukushima. Tel. No. 202, 203, 204.

The Tohoku Brewing Co., Ltd. (東北醸造株式會社) Which has established a world-wide fame as the brewery of the superior "Totaku," "Kanetsubomi," and "Gosannen" brand Japanese wine, was organized in April in 1920 with the capital of 250,000 yen

(Y. 100,000 paid-up) and is now busily carried on by Messrs. Kanzo Umekawa, the president, and Kun Ito the manager, with numbers of employe who increase in number ovet forty in the brewing season. The wine they brewed, it is said, exceeds other breweries' ones not only in its taste, but alse in durability as might be expected from the situation of their brewery where is one of the best place for brewing. The quantity brewed this year is estimated to 10,500 bushels and the wine is sold directly from the company to markets in Akita, Miyagi, Iwate and other prefecture, the demand of "Kanetsubomi" brand being mostly from Toky and neighbourhood, Mr. Ito, the president, was born at Honjo-machi in Osaka prefecture and after he has graduated trom the colledge of law, he entered the Osaka Asahi Newspaper Office and became a journalist belonging to the economic and social department. Not long after he retired from the Osaka Asahi, being repeatedly entreated, he became the manager of this company. Address:—Iidzume-mura, Senpoku-gori.

The Kodama Brewing Corporation, (小玉合名會社) A successor of the soy brewing business carried on by Mr. Kumenosuke Kodama since 1877, was formed in Febrary, 1907, with the capital of Y. 250,000 by members of Kodama family, namely the president, Mr. Tomokichi, the vice-president and head of business department, Mr. Sanzo, the head of soy dept., Mr. Sadaharu, the head of wine dept., Mr. Kakuji, the head of selling dept,, Mr. Seikichi, the head of account dept., Mr. Kumetaro, and the head of warehousing dept., Mr. Susumu, which business is chiefly for brewing Japanese wine and soy and for making mise or bean paste; the wine, "Taiheizan" and "Hachiryu Masamune" brand, and the soy, "Yamakyu" brand, are brewed 16,000 bushels a year each and mise is made, 1,242,000 pounds, for which markets are in the following provinces namely Akita, Awomori, Hokkaido, Tokyo, etc. and extending day by day, Mr. Seikichi, the head of selling dept., has organized the Tohoku Mineral Spring Co., Ltd. at Takanosu-machi, Kitaakita-gori, Akita prefecture, and has been engaged in manufacturing and dealing in natural carbonated water with the capital of 10,0000 yen. Mr. Kakuji, the head of wine dept. has been widely famed by his special method of three years brewing. Address:—Iidagawa-mura, Minami-Akita gori, Akitaken.

The Daigo Brewery Co., Ltd., (醍醐醸造株式會社) Which is one of the leading company of brewering, was established in 1917 by Messrs. Ryuta Ito, the president, Keinosuke Fujiwara, Heikichi Oku, Keikichi Kakizaki, Hiroshi Takahashi, Rihei Sato, Seishiro Sato, the directors, Kataro Takahashi, Ikunosuke Watanabe, Kanzayemon Kakizaki, Yojihei Kakizaki, Teiji Ito, the inspectors, and Mr. Tokiji Sato, the brewing expert, etc. Before this company was established, there had been a company named The Daigo Brewing Partnership, established in 1919 by Messrs. Ryuta Ito, Kataro Takahashi and the preminent businessman in that province. On the other hand, another joint-stock company was organized in 1917 with the capital of 55,000 yen by the above mentioned gentlemen in the name of the Daigo Brewing Co., Ltd. These two companies amalgamated in 1918 and became the present company. As its business developed, the capital was multipied to 200,000 yen in 1919 and to 1,000,000 yen in May, 1922. Their business is chiefly for the brewing of Japanese wine and soy, the quantity brewed amounting to 20,000 bushels this year, besides the brewing of vinegar, the quantity amounting to 3,000 bushels; any of them is very famous in its most superior quality; soy received an honours prize in the competive exhibition of the six prefectures in Ou province, and wine a silver medal in the Tokyo Peace Exhibition. Addtess:—Daigo-mura, Hirashika-gori, Akita-ken.

Mr. Noboru Nakamura, (中村昇君) The head of the Osaka Branch Office of the Nippon Rutsubo K. K. (Japan Crucible Co., Ltd.), and also the Chief Chemist of the

Osaka factory of the same company. He is now one of the important person in the Japanese crucible industry, which has been neglected comparativery from the public. He was born in Kanagawa Prefecture, and having interest in ceramic industry entered Tokyo Higher Technological School after finishing the elementary course of learning. He is always engaged in chemical researches, and in the researches about the manufacture of bismuth he reaches to very satisfactory result, which will benefit the industry greatly. This his ability and barning being acknowledged by the company he was promoted to an important position. Afterwards he entered into Kyoto Cerawic Researning Laboratory by the selection of the company, and studied there about the application of chemisty about two years. After that he was appounted to the chief chemist of the Osaka factory, and also the head of the Branch office of Osaka. It is already 17 years since he entered toe company and the untiring efforts is now reaching to the period of creating new field And shedied at the Ceranics Department there, and graduated the same in 36th year of Meiji. After wards he entered Japan crucible Industry & Co. and engaged three as a Chemist. At that time the curcible industry of Japan was yet in solely empirical stage, and the scientific method of manufacture was entirely neglected. So after he entered the company his endeavour was made in making progress in the mafufacturing process by applying scientific theory. The result was excellent, and the company could pioneer new market extensively.

Mr. Chozaburo Kato, (加藤長三郎君) Whose name is widely known as the owner of the Kanagawa brand Japanese wine Brewery was born at Oyama-machi, Nishitagawa district, in Yamagata Prefectute. His family, being for generations brewer who has lived at the said town, has been noted for its great wealth. It is over two hundred years now since the enterprise was started by his ancestor, and was most prosperous during the time from 1877 till 1883, brewing 15000 bushels, When eighteen years of age after he succeeded to that calling, he traveled through many countries to observe their manners and customs in that live of business and perfected himself as that businessman. In 1886 when he was over thirty years old, he was elected the headmann of Oyama village which afterwerds became the town of Oyama and simaltaniously he became the town headman. He has been a member of Yamagata prefectural assembly fot twenty years, and was appointed many other honorary posts. Now he is devourting himself for promoting the public interests, his business being made over his sen, Mr. Chiyotsuru.

Mr. Tokuzo Aburai, (油井德藏君) Who has been widely famed since long ago as the second son of Mr. Unosuke Aburai the first, in Fukushima prefecture in 1870. Mr. Unosuke the first who started in the said business in 1872 died in 1889 and Mr. Unosuke the second the first son of late Unosuke, who succeeded to the business, also died not long after his succession. In 1894, Mr. Unosuke the third who is a brother-in-law of Mr. Tokuzo succeeded to the house. In the first year of the twentieth century, Mr. Unosuke the third tranfered the constitution of his business and organized a company of partnership. But he passed away in 1912, Mr. Tokuzo the place of his brother-in-law, dissolved the company and made it his personal business. At present he has a branch store in Yokohama for specially Forein trade, and a purchasing department at the town of Kawamata, Date-gori, Fukushima prefecture. Not only famed in that line business, but also he is celebrated as a directot of the Fukushima Habutae Co., of the Fukushima Commercial Bank, of the Sei-itsusha Ltd., and of the Segami Tamaito Co., the president of the Kuzasa Textile Co., the headman of the Fukushima Fushiginu Guild and a member of the Chamber of Cmmerce.

The Fukushima Shintatsu Japanese Wine Brewer Guild, (福島信達酒造組合) Was

established in 1897 in the name of The Fukushima Shinobu-gori Japanese Wine Brewer Guild, Mr. Wayemon Sato advocating the necessity of its establishment, who is now the president of The Shintatsu Guild. In 1912 The Shinobu-gori Brewer Guild amalgamated with The Fukushima Date-gori Japanese wine Brewer Guild, changing the designation to The Fukushima Shintatsu Japanese Wine Brewer Guild which style was taken from each initial of both guilds. The members of the guild consist of a company and eleven individual brewers and its president is Mr. Wayemon Sato, vice-president Mr. Soyemon Hattori annual council is held in October to estimate and settle accounts and to make the plan of the year; the council consists of six councillors elected by mutual vote. Competitive exhibition of yest and critical meeting of wine, both held once or twice annually, a meeting in acknowledgement of employees' service held in every Aptil, a class for the study of brewing, inspection of brewing business in various countries, etc. are the main work of this institution, the annual expense eulminating 700 yen according to the latest return.

Mr. Ihei Tanaka, (田中伊兵衛君) The rising brewer who owns the Hanaminato brand Japanese wine Brewing in well-known for his spiritedness in his business. He was born a son of late Ihei at the town of Sakata, Akmi-gori, Yamagata prefecture in 1904. His brewery was commenced by his grandfather, Mr. Ihei,—the patriarch being successively the same name. Even when childhood he was well-known to the neighbours as a prodigy. Clever as he is, he is yet young and he cannot devort himself fot the business, being a student of the Sakata Commercial School. Under these circumstances, his uncle Mr. Taminosuke who is his father's younger brother is now practically acting in his name. Mr. Taminosuke was engaged in this business since his elder brother, late Ihei, was alive under his guidance, so at present he is quite an expert in that way. Concequently the Hanaminato brand became famous day by day throughout Yamagata ptefecture and its neighbouring districts; the brewery has now 2250 bushels of anual quantity brewed. Mr. Ihei has been the vice president of the Akumi-gori Japanese Wine Brewer Guild.

Mr. Tajihei Nagasaka, (長坂太治兵衛君) Is a well-known brewer of Beppin brand Japanese wine who was born at the town of Tsuruoka in Yamagaka prefecture. His family has always lived at the said town from the time of the first ancestor and for generations been famous brewer. In 1890 being Chosen president of the Nishi-tagawa province Brewer Guild, he exerted his best for the guild during the whole term of his service which lasted until 1920. The Beppin brand, being of the first grade Japanese wine, has never failed to receive certificates of merit or medals in every exhibition it had been sent. In view of these facts, it is no doubt that his business is indeed proceeding towards prosperity with rapidity. He also has made every effort in his power for completing the institutions of the Shonai Middle School and for political affairs of his native town as a member of the town assembly for over forty years since 1879 so that the middle school awared him a silver-cup and the town assembly a set of gold-cups.

The Shidzuhata Paper-mill Co., Ltd., (殷樓製紙株式會社) Was formerly called the Japan Fire-proof-board Manufacturing Co., Ltd. established in 1912 with the capital of Y. 50,000 of which business proved a failure and designation changed to the Shidzuhata Paper-mill Co., Ltd. in 1917, tranfering its object of business is paper-manufacturing and reducing its capital to Y. 25,000. Since then, the plan hitting the mark and the business proceeding towards prosperity with rapidity, they continued to pay the annual dividend not less than fifteen per cent every year, in 1920 paid twenty per cent dividend

and laid by a large amount of reserve fund, and at last, in May, 1922, gave clerks and workmen special bonuses and paid special dividend of five percent per year. They have now a piece of ground covered about 900 Tsubo for the site of their factory and annual amount manufactuted of Y. 200,000. The chief officers are the president, Mr. Inei Ozaki, the directors, Messrs. Shinzo Isono, Jusuke Adachi, Tokichi Nakamura, the inspectors, Messrs. Ei-ichiro Mabuchi, Kikutaro Mayazaki, and the manager Mr. Arata Ohki. The paper manufactured in this company is now enjoying the greatest reputation in Japan and neighbourhood.

Mr. Komazo Tanaka, (田中駒蔵君) Who has flourishing established himself in textile industry, was born the first son of the late Komazo at Yone- zawa city in 1873, and succeeded his father in August in 1921. The late Mr. Komazo was the senior in that business, starting the enterprise in 1867, and rendered great services to the textile industrial circle in that province. In 1910, he precedently fitted up his workshop with weaving machines of Nishino style and get satisfactory results with the machines, so fellow-manufacturers followed him. At present, these factories are in possession of Mr. Komazo, the second with weaving machines exceeding sixty in number and workmen over seventy. Manufactures are chiefly high class texture or Hakama used some new patterned cloth, the quantity manufactured amounts to twenty thousands pieces of cloth. In May, 1910, he was honoured to receive the first class gold medal in the New Pattern Exhibition held at Mitsukoshi Gofukuten in Tokyo and it is said that he has never failed in receiving prized in any exhibitions to which he had sent his manufactures. He has been a member of the commitee of the Textile Industrial Association of Yonezawa.

Mr. Kichizo Abe, (安部吉蔵君) Whe has established his fame as a textile manufacturer of special silk goods for Hakama use only, was born as the first son of Mr. Shukichi Daikyo of the Samurai class in Yonezawa city in 1879. When forteen years of age, he was engaged in dyeing business under Mr. Tatsunosuke Toyono, celebrated dyer at Nishinakama-cho in the said city to raise himself in that line of business in the future. In 1895, when eighteen years old, he commenced the manufacturing business silk goods for himself, establishing at Kitafukuro-machi. But owing to the depression of the economic world before the Russo-Japanese War, he was obliged to give up his business in 1903, so after shutting up his manufactory, he came up to Tokyo to inspect many famous manufactories. In 1905, returning to his native place, he became an adopted son of Mr. Mikizo Abe and commenced the present enterprise, fixing his abode at Doya-machi and establishing the first manufactory at the same adress and the second one at Kitatera-machi. As his business developed, he newly constructed an ideal manufactory at Motoro-cho as the third one in 1921; these three manufactories is at present in their full efficiency, several ton looms of Takayagi style weaving over twenty thousands pieces of cloth a year for specially Hakama use for which demand is almost from the middle class.

Mr. Itaro Kamei, (亀井伊太郎君) The representative of Kamei & Co. the wholesale dealer in chemical for manufacturing industrial use of gun, was born in November in 1887 in Osaka. In his boyhood, he lost his father and was engaged in that line of business under a certain drug merchant at Dosho-machi, Higashi-ku, Osaka for faithful ten years. In 1915, he set up in the same business for himself at Awaji-machi under his former master's support, just at the very time, the European War was at its height

established in 1897 in the name of The Fukushima Shinobu-gori Japanese Wine Brewer Guild, Mr. Wayemon Sato advocating the necessity of its establishment, who is now the president of The Shintatsu Guild. In 1912 The Shinobu-gori Brewer Guild amalgamated with The Fukushima Date-gori Japanese wine Brewer Guild, changing the designation to The Fukushima Shintatsu Japanese Wine Brewer Guild which style was taken from each initial of both guilds. The members of the guild consist of a company and eleven individual brewers and its president is Mr. Wayemon Sato, vice-president Mr. Soyemon Hattori annual council is held in October to estimate and settle accounts and to make the plan of the year; the council consists of six councillors elected by mutual vote. Competitive exhibition of yest and critical meeting of wine, both held once or twice annually, a meeting in acknowledgement of employees' service held in every Aptil, a class for the study of brewing, inspection of brewing business in various countries, etc. are the main work of this institution, the annual expense eulminating 700 yen according to the latest return.

Mr. Ihei Tanaka, (田中伊兵衛君) The rising brewer who owns the Hanaminato brand Japanese wine Brewing in well-known for his spiritedness in his business. He was born a son of late Ihei at the town of Sakata, Akmi-gori, Yamagata prefecture in 1904. His brewery was commenced by his grandfather, Mr. Ihei,—the patriarch being successively the same name. Even when childhood he was well-known to the neighbours as a prodigy. Clever as he is, he is yet young and he cannot devort himself fot the business, being a student of the Sakata Commercial School. Under these circumstances, his uncle Mr. Taminosuke who is his father's younger brother is now practically acting in his name. Mr. Taminosuke was engaged in this business since his elder brother, late Ihei, was alive under his guidance, so at present he is quite an expert in that way. Concequently the Hanaminato brand became famous day by day throughout Yamagata ptefecture and its neighbouring districts; the brewery has now 2250 bushels of anual quantity brewed. Mr. Ihei has been the vice president of the Akumi-gori Japanese Wine Brewer Guild.

Mr. Tajihei Nagasaka, (長坂太治兵衛君) Is a well-known brewer of Beppin brand Japanese wine who was born at the town of Tsuruoka in Yamagaka prefecture. His family has always lived at the said town from the time of the first ancestor and for generations been famous brewer. In 1890 being Chosen president of the Nishi-tagawa province Brewer Guild, he exerted his best for the guild during the whole term of his service which lasted until 1920. The Beppin brand, being of the first grade Japanese wine, has never failed to receive certificates of merit or medals in every exhibition it had been sent. In view of these facts, it is no doubt that his business is indeed proceeding towards prosperity with rapidity. He also has made every effort in his power for completing the institutions of the Shonai Middle School and for political affairs of his native town as a member of the town assembly for over forty years since 1879 so that the middle school awared him a silver-cup and the town assembly a set of gold-cups.

The Shidzuhata Paper-mill Co., Ltd., (賤機製紙株式會社) Was formerly called the Japan Fire-proof-board Manufacturing Co., Ltd. established in 1912 with the capital of Y. 50,000 of which business proved a failure and designation changed to the Shidzuhata Paper-mill Co., Ltd. in 1917, tranfering its object of business is paper-manufacturing and reducing its capital to Y. 25,000. Since then, the plan hitting the mark and the business proceeding towards prosperity with rapidity, they continued to pay the annual dividend not less than fifteen per cent every year, in 1920 paid twenty per cent dividend

and laid by a large amount of reserve fund, and at last, in May, 1922, gave clerks and workmen special bonuses and paid special dividend of five percent per year. They have now a piece of ground covered about 900 Tsubo for the site of their factory and annual amount manufactuted of Y. 200,000. The chief officers are the president, Mr. Inei Ozaki, the directors, Messrs. Shinzo Isono, Jusuke Adachi, Tokichi Nakamura, the inspectors, Messrs. Ei-ichiro Mabuchi, Kikutaro Mayazaki, and the manager Mr. Arata Ohki. The paper manufactured in this company is now enjoying the greatest reputation in Japan and neighbourhood.

Mr. Komazo Tanaka, (田中駒蔵君) Who has flourishing established himself in textile industry, was born the first son of the late Komazo at Yone- zawa city in 1873, and succeeded his father in August in 1921. The late Mr. Komazo was the senior in that business, starting the enterprise in 1867, and rendered great services to the textile industrial circle in that province. In 1910, he precedently fitted up his workshop with weaving machines of Nishino style and get satisfactory results with the machines, so fellow-manufacturers followed him. At present, these factories are in possession of Mr. Komazo, the second with weaving machines exceeding sixty in number and workmen over seventy. Manufactures are chiefly high class texture or Hakama used some new patterned cloth, the quantity manufactured amounts to twenty thousands pieces of cloth. In May, 1910, he was honoured to receive the first class gold medal in the New Pattern Exhibition held at Mitsukoshi Gofukuten in Tokyo and it is said that he has never failed in receiving prized in any exhibitions to which he had sent his manufactures. He has been a member of the commitee of the Textile Industrial Association of Yonezawa.

Mr. Kichizo Abe, (安部吉蔵君) Whe has established his fame as a textile manufacturer of special silk goods for Hakama use only, was born as the first son of Mr. Shukichi Daikyo of the Samurai class in Yonezawa city in 1879. When forteen years of age, he was engaged in dyeing business under Mr. Tatsunosuke Toyono, celebrated dyer at Nishinakama-cho in the said city to raise himself in that line of business in the future. In 1895, when eighteen years old, he commenced the manufacturing business silk goods for himself, establishing at Kitafukuro-machi. But owing to the depression of the economic world before the Russo-Japanese War, he was obliged to give up his business in 1903, so after shutting up his manufactory, he came up to Tokyo to inspect many famous manufactories. In 1905, returning to his native place, he became an adopted son of Mr. Mikizo Abe and commenced the present enterprise, fixing his abode at Doya-machi and establishing the first manufactory at the same adress and the second one at Kitatera-machi. As his business developed, he newly constructed an ideal manufactory at Motoro-cho as the third one in 1921; these three manufactories is at present in their full efficiency, several ton looms of Takayagi style weaving over twenty thousands pieces of cloth a year for specially Hakama use for which demand is almost from the middle class.

Mr. Itaro Kamei, (亀井伊太郎君) The representative of Kamei & Co. the wholesale dealer in chemical for manufacturing industrial use of gun, was born in November in 1887 in Osaka. In his boyhood, he lost his father and was engaged in that line of business under a certain drug merchant at Dosho-machi, Higashi-ku, Osaka for faithful ten years. In 1915, he set up in the same business for himself at Awaji-machi under his former master's support, just at the very time, the European War was at its height

and our chemical world had experienced wild days, so he made himself a Narikin, his plan hitting the mark. But "To the moon clusted clouds and stomy winds to the flowers," he suffered great losses from fluctuation in prices of the chemical and drug in 1917 when the War drew near to the end and gave up his business. Before long time, he re-organized Kamei & Co. and working harder and harder, he gradually became greater in the favourable condition of the economic world after the War. At present, branch shops at Kobe, Hiroshima, and Okayama, paints works at Kyoto, magnesium factory at Seto-mura in Tokushima prefecture and the capital of Y. 100,000.

Mr. Heishiro Tezuka, (手塚平四郎君) The managing director of the Hiroshima Calcium Carbonate Manufacturing Co. by the occurrence of the European great War Japanese industry made a surprising development, and men of experiences over in wanting. Our Mr. Tezuka is a young skilled expert. He was born to the fourth son of Mr. Taichiro in Yamaguchi Prefectute, when proved he entered the Tezuka as the heir. Hp learned at the Electrical Engineering Department of Tokyo Imperial University, and praduated there form in the 34th year of Meiji, at the same time gratuated the degree of bachelor of engineering. After then he engaged round various offices of the Chief engineer of Keihin Electric railway company, the Chief of the Vehicles department of the Tokyo Street Lailway Co., the engineer of Hanshin Electric tramway company, the chief engineer of Kyushu Electric tramway company and the engineer of Osaka Electric rairway company. Afterwards lending effors to the establiment of Hiroshima Calcium Carbonate Company, and he became the managing director of it with the establishment, and endeavoured for the development of the business, which advanced to a present prosperity besides he became managing director of the Suwo Railway company. He is a man of modesty, and always engaged in the study of technical knowledge. The Electric Apparatus is now ever-increasing, it waits a endeavours of the engineer like him. Mrs. Tezuka Natzuko is the graduate of Kandabashi Girls' High School, his son Shin-ichi is now attending the Keio University.

The Asamai Sake Manufacturing Co., (浅舞醸造合社) Established in the 6th year of Taisho. Authorized Capital yen 100,000 Paid-up Capital 84,000 yen The president: Mr. Tomitaro Iwami. The manufacturing directors: Mr. Munemitsu Kakizaki, Mr. Taneji Yoshida, Mr. Koretsu Murata, Mr. Fukuji Omi, the Inspectots: Mr. Kinhachiro Kikuchi, Mr. Eikichi Hayashi. The "Sake" (Japanese Wine) is the unseparable drinks with the Japanese life, and is almost looked upon as a divine thing from anaent. The Asamai Sake Manufactûring Company was established in December of the 6th of Taisho, with a capital only of 20,000 yen. But as the consequence of the properous business it was raised to 100,000 yen in September next year, with 80,000 yen paid up. The president and the managing directors are the prominent business-men in the prefecture, especiaally the president Mr. Iwami, with his deep knowledge and active ability, endeavored with all his went for the expantion of the bestness to the consequence of present prosperity. The 7th year of Taisho 30 0/0, in the 8th year of Taisho 20 0/0, in the 9th year 12 0/0 in the 10th year of Taisho. The yearly production amounts to 1700 Koku, the chief market is neibouring prefectures and Hokkaido. But was the company is contemplating to open the market in the metropolice, with the mark of making the yearly production up to 3500 Koku. The future is to be said very hopeful.

Mr. Sakae Matsumaru, (松丸榮君) The head of the Fukuda factory of the Dainihon Beer Co., the second grade of the second class rank. The Sixth Order of Merit. The

Fifth Order of the Golden Kite. He was born to the eldest son of Mr. Jun-ichi Matsumaru, the Tottori Clansman, at No. 114, 4-chome, Tatekawa-machi, Tottorishi. When ten years old his father died. After granduating the Tottori Middle School, he entered in the Technological Dep. of the Third High School in Kyoto. Soon after graduating from them he entered the Fukita factory of the Dainihon Beer Company, and engaged in the study of Brewering Machines. With his enter also Mr. Ryutaro Takahashi, the present head of the Osaka branch office of the company, in the Sone Company. When, in the 42th year of Moiji, Mr. Takahashi went abroad to Europe, he managed well in his absence and aroduced superior pruducts. In the 37th year of Meiji, when Russo-Japanese war was opened, he also went to the field made a valuable services to the company, and for this he was confered the Sixth order of merit when he returned in victory. In the 44th year of Meiji when the general international conference of Brewerers was held in U. S. America he was sent as the representative of Japanese brewerers, and on the way to return he went round England France, Germany, Nederland, Spain, Demmark and Russia, thus marking mesunte inspection around almost all the Europepean countries After returning to Japan he was promoted the Chief of the Engineering Department of the Fukita factory, then in the 6th year of Taisho he was made the brice Chief of the Fukita factory, and carried the management assisting Mr. Takahashi. In the 8th year of Taisho he was appointed 10th present position after Mr. Takahashi. Indeed the efficiency of the factory is now ten times longer conpared witn the period when he entered the company. Now the factory, under his superintendence, began also the new type of Brewering with Rice as the ran material, and have the capacity, of producing 200,000 Koku, producing 48,000 acity of "Asahi" beer, and 10,000,000 bottles of "Ribon brand" Citron, Tansan and Rasberries. The market extend as far as China, Korea, India and South sea. The present employes unders about 1300 persons. He is a man of strict morals, loving the books; between Mrs. Haruko there are Sons and 2 daughters.

Mr. Yoshizo Yamada, (山田山藏君) The master of the Agumi Silk-mill. The member of Shimosuwa town Assembry. He was born to the eldest son of Mr. Chozo Yamada in Shimosuwa town in the 1st year af Ganji. He entered one of tae mill silk industly which is the Chief industry of the town and famous even to abroad and engaged there many years. But not satisfying the be employe he established to gumi silk-mill with co-partner Mr. Torokichi was continued till the 43rd year of Meiji. In that glan he separated from the joint enterprise, and began the business independently in next year, under the name of gumi. At that time the number of overs were only 400, but as the result of every tending business he established a branch factory at Susona in Shizuoka Prefecture in the 11th year of Taisho, and now the total number of ovens of both factories reach 1260, the workmen two hundred and more, workmen one hundred and more, thus the factory is now the most prominent in the Silk industry of the twon. The Superintendent of the factory is Mr. Eijin Imai, his relative who engaged the mill from the time of gumi. And the Subona brand factory is under the management of Mr. Kumitaro Yamada, his son-in-law, who were in U. S. America several years inspecting business and is now the progressive factor in the industry. The present production anounts 25,000—26,000 gwan. The goods are clossed in three. The best good is "Momo brand," next "Kuri" and "Kaki." Now the "Momo brand" silk is largely produced and are being exported to Europe and America through Yokohama part.

Mr. Masajiro Inomata, (猪股政次郎君) The Manufacturer of Silk for Hakama, The Councillor of Yonezawa Silk Goods Quild. He was born to the son of Mr. Hisataro

Honda in Kubota-mura, Minami-okitama District, Yamagata Prefecture. In the 32nd year of Meiji he entered the Imata as the heir of late Mr. Eitaro Imata, and in the 3rd year of Taisho inherited the house. His father in law Mr. Eikichi was the Yonezawa clausman, when the New era of Meiji began after the Tokugawa feudal poverment resolving to engaged in the business world, and seeing the drapery as the suitable industry for Yonezawa distict, began it in the 26th year of Meiji as the pioneerer in this place. After that time in the Yonezawa developed extensively and as the consequence there occured competition between the brother traders. In this competion he endevoured well to stand on the stady business. When Mr. Masajiro heire him the business prospend well and his factory stand now pronunent among the brother draperies. He has the geneous for the drapery and his deep knowledge and experiences which he has gotten under late Mr. Eita brought him the present success. Now Yearly production is above 15,000 tons, the factory with 40 machines using many works. His motto of business is 1st to produce superior goods, 2nd to sell it cheap, and make honest transactions. His products its quality by the many priges conferred on it at various Enhibitions. Thus his business is going steadily even under the present trade depression afther the great war. He is endeavouring for the brother trade as the delegate of the Yonezawa silk goods guild. His eldest Mr. Ei-ichi and second son Okuta are both now attending the Prefectural Technological School, and studying about the drapery.

Mr. Shin-ichi Urima, (賣間信一君) The master of the Urima Silk-mill. He is the important silk manufacturer in Yonezawa, intreriting Mr. Shingo Urima, who was the vetetan of that industry. He was born at Shimizu-machi Yonezawa in the Fukuchi, and entered the Urima as the heir in the 29th year of Meiji. The Urima was the late clansman and was old millionare in the provinces, the begining of the silk-mill dates bad to the date of grand-father of the present in the era of Ansei, and on some years it was interrupted, but in the 24th year of Meiji, the late Mr. Shingo began it again. This Mr. Shingo made a great effort in the development of provincial industry, lending efforts for the establishment of Yonezawa Silk trade and was the Chief of it for many years then was lifted to the standing director of it, he endeavoured also for the setting up of Yonezawa Tochnological School. In the 14th year of Meiji the Mikado honored him by conferring "Ranju hosho." The present Mr. Shin-ichi, after ten in heriting the house, well managing the business, organised the Silk Dyeing Investigating Association, and established Maizuru company with typical factory. He is also always making effert is made to the production of superior goods, himself producing the most seleated goods, thus establishing the eredit of Yonezawa silk. The present factory was established in the 8th year of Taisho, its equipment is perfect, with electro-driven Takayanagi's weaving machnes, the works is also several tens. Besides these is turiting thread factory, supplging fot the mill. The Chief products is the striped patiern for women, Amongst then the large and middle stripped ones has special quality and has a public merit. The yearly prodution is above 20000 tons. The Chief market is Kyoto, Osaka, Tokyo etc. Thus he is now the most pronument factor in the Yonezawa Silk industry.

Mr. Umejiro Sasaki, (佐々木梅治郎君) The Manufacturer of Tin, Solder, Bappitte Metal etc. He was born to the third son of Mt. Toyokichi Sasaki in Yagi, Yamato Prorince. His father began the present business and he could born from early that work. Seeing the future prosperity of the industry, he elected a factory at the present place in the 34th year of Meiji, and began it independently. Several years after when the Russo Japanese war opened he also went to the field, Charging the business to Mr. Hidekichi his younger brother. This after through hard battles of Mukden and Tetsurei

etc. he could return in triumph in November in the 38th year of Meiji, and was conferred with the Eighth Order of Merit for his services. After returning he again engaged the former business, endeavouring to prochece good metals with cheaper princes, this extending the work steadly. Especially by the occurrence of the great wat his business made a grert Expansion. Now his factory procheces Solders, Tin, Bappitle metal and Antimony for printin3 type, Zinc ane Lead etc., all will excellent qualities. His younger brothet Mr. Hidekichi also has a shop at No. 2 Maru-machi, Higashi-ku, Osaka, with the same business.

The Osaka Printing-Ink Manufacturing Co. (大阪印刷インキ製造株式會社) Among the printing-ing manufacturers in Kansai district, our Osaka Printing-ink Manufacturing Co. has the factory with the largest producing capacity and Newest type of organisation. The company was established in April of the 9th year of Taisho, intreriting the business which was under the management of present president Mr. Yuzo Miki. Mr. Miki was born in the 4th year of Meiji in Hyogo prefecture, and from boyhood he engaged in printing business in Osaka, and is the 28th year of Meiji he began printing-ink manufacture. At that time Japanese printing-ink industry was yet in its infancy, and even the inks for wood-engraving was imported. But after hard endeavour he made a superior ink, which surprised the public. Then in the 41st year of Meiji he began also the manufacture of inks for lithograph, newspapers etc. Previous to this when, in the 32nd year of Meiji, the Printing-ink manufacturers' guild was formed he was elected as the president, and is which he made his effort for the trade. In the 9th year of Taisho when the present company was organised he resigned that office and devoted himself for the company's business. In this he was assisted by Mr. Takechi (Tamiji), the experienced practical man, as the managing director and also as the Chief engineer. As the consequence the business expanded yeatly and at present the yearly production amount above 600,000 pounds of various inks, of which about 1500 pounds are exported to foreign counties, chiefly China and South Seas. His eldest son Mr. Yukichi, the graduate of Osaka higher Technological School the Applied Chemistly Department, is now working in the company with progressive knowledge and abilit. (This the factory at Shokakaji in the Osaka suburb is known as the typical.) Mr. Shinroku, the younger broths of president Mr. Miki, is the managing director of the company and is also engaged independently in the printing-ing manufacture.

Mr. Takao Miyajima, (宮島孝雄君) The Silk Ayaori (Figured Cloth) Manufactuter. The Member of Yonezawa Municipal Assembly. The Counciller of Yonezawa Silk Manufacturers' Guild. He is one of the most important manufacturer in Yonezawa Silk industry. His father Mr. Seibei Miyajima began the silk manufacture in the 20th year of Meiji, when the enterpriting tide of that industry was high. When he intrerited the business, his endeavour was concertrated to the expansion of it, and in the 6th year of Taisho, he stand a factory with power-driven machines, and the work developed greatly. At present there is 50 of Weaving machines and go of hand machines the workmen above one hundred. The chif goods mane is the figured cloth for men and in summer season "Rohaori" cloth and Joyfu etc. The yearly production amount 20000 tons. Those products always have a rising public demand with selected quality and New type of figure. The Chief market is Kyoto & Osaka and the nighboors. He is a man of modest character and noble, being the graduate of Yonezawa Technical School, has a deep experiences, always endeavor for the development of the prorincian industly. This

from early he is the Councillor of the Yonezawa Silk Manufacturers' Guild, and in the 9th year of Taisho he was elected the member of Yonezawa municipal Assembly.

Mr. Kinshiro Harayama, (原山金四郎君) The master of the Harayama Cotton-mill, the vice-head of the Aizu Cotton goods guild. Recently the name of Aizu-ori became widely known in the public. And this ones much to our Mr. Kinshiro Harayama. He was born in the city of Wakamatsu in the 9th year of Mieji, and from boyhood he was sagacious. Early resolving to engaged in the textile industry he entered into the shop of Mr. Tomekichi Ishido, who was the largest Cloth dealers in the city, and dilligently worked there ten years, during which he has gotten fully the experiences of the business. After he resigned his masters' shop, and opened a shop of Cloth and Cotton-thread, when he was 26th years old. After this time his ability and effort made a neverceasing expansion of the business. When the Russo-Japanese War was opened he established a cotton-mill and trusted the management of it to the head of the factory. Here beging his cotton-goods manufacture. In the 44th year of Meiji he shut the selling shop and concentrated his efforts to the manufacture only. At that time the machines were all of old type of foot-trodden, but as the business expanded he made many reconstruction in the factory equipments and in the 2nd year of Taisho he set Toyoda's new weaving machines and now these machines numbers thirty. He has a deep interest in the dying researches and always endeavour to develop the quality of the products, which is classed into Gold brand, Silver brand and Copper brand and make the transactions converuent. Hence the market expand year after year and now besides Fukushima Prefecture it sells as far as Tokio, Hokkaido. The speciarity of his goods are proved by the many prizes conferred upon them in various exhibitions. He is now the vice-chief of the Aizu cotton-goods guild.

Mr. Kiichi Kobayashi, (小林喜一君) The Master of the Kobayashi Yuzen Manufactory. He was born in Kyoto in the 32nd year of Meiji. This factory was established in the 13th year by late Kobayashi. The late Kobayashi was a diligent worker and endevoured to produce the new fashoned Uzen, economiculy and began to work upon the thin Habutae. This the first step in the Kamogawa Uzen. This is now very populas among Uzen's circle. When young he finished the technical school of Kyoto city, with honour. His father's death made him a master of this factory, in spite of his small. He became, new, no inferier to his father, with experience and learning. He is tender hearted and generous and clever. As he grews up, recogning the demand of the hours, he began to excert and made him way into his superiors. At last he became to stand unique among his partners. His inflexible effert and ability made him so prosperious. He can he recommended as a typical master of factor.

Mr. Shoki Tanaka, (田中昌龜君) The Chief Engineer of the Aoki Dyeing factory. He was born at Yoshira Kawamura, Aki Distinct, Kochi Prefecture, in the 10th year of Meiji. He learned in the Kochi Prefectural normal school, and after finishing it was in Ashikaga Technical School and Akaiwa Ditrictual Dyeing School in Okayama Prefecture. After he went to Tokio and began the peppermint manufacture and the Refining of Fish oil. Afterwards he was made the Assistant-Professor of the Tikio Shokugyo School, and then also engaged as the Assistant of Mr. Toyokichi Takahashi, then the professor of Tokio Imperial University. At that time his peppermint factory was burned, so he resigned the above services and entered the Dyeing industry. It is at these times that he went to India to begin the importing of Indian-Indigos, but this was failed. Then he entered the present Aoki factory and is endeavouring for the

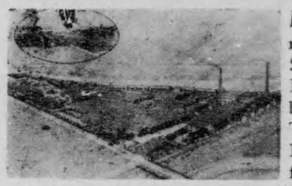
business as the Chief engineering. This Aoki Dyeing factory was established in the 20th year of Meiji, and at first engaged solely to the Deep Brown dyeing. Beside from early continued the Study of Cotton jusu manufacture and in the 3rd year of Taisho began the manufacture, and now its daily production amounts 1,000,000 yards. Its raw Cloth are gotten from Toyoda-mill, Toyo Spinning-mill, Tokyo-muslin Company, etc.

Mr. Wasaku Hirose, (廣瀬和作君) The manager of the Gakunan Paper-mill Company, the managing director of Megata Tramway Co., the member of Fuji District Assembly, the member of Imaizumi Village Assembly, he was born to the second son of Mr. Kohei Hirose at Imaizumi-mura Shizuoka Prefecture in the 14th year of Meiji. In the 35th year of Meiji he graduated the Shizuoka Prefectual Agricultural School, and engaged in Shizuoka Prefeetural Experimental Farm, Fuji District Agricultural & Foresty School and as the inspecting officer of Fuji District Agriculture, etc. this fully devoted to the development of districtual industry. In the 45th year of Meiji when the Gakunan Paper-mill Company was established he became to engaged the business as one of the large stock holder. The company is making Copy-papers, the Raw-paper for Mottoi, Mizuhiki, hat making and for spinning; the yearly production is about 100,000 gwan, the selling price about 300,000 yen. The workers employed about fifty. The chief market is Tokio, Yokohama, Kobe, Osaka and Kyushu Distriet. Besides the service of the manager of this company, he is also the managing director of Negata tamway company, and the member of Fuji District Assembly and Imaizumi Village Assembly.

Mr. Gen Totoki, (十時元君) The managing director of Matsuoka Co., and the head of Factory Management Section of the same Co., The first grade of the Seventh class rank. The Sixth order of merit. He was born in Yanagikawa-machi, Fukui Prefecture, in the 1st year of Meiji. In the 26th year of Meiji he graduated the Engineering Department of Tokio Higher Technological School, and entered into the Kanegafuchi Boseki Co. in the next year, and in the 32nd year of Meiji he made a inspecting tour of 2nd years in America. After returning ne was made the president of Fukui Prefectural Industrial Laboratory, then became the engineering expert of the Department of Agriculture and Commerce, but after one year's service he resigned there and entered the Tokio Keori Co. with its new establishment. But on some reason he resigned there in the 1st year of Taisho and is nexst year he was engaged as the managing director of Matsuoka Bosekisho Co. In the 6th year he again went to America and inspected throughly the American textile industly, and Assirted the applicability of American Machines as the substitute of British machines, which was then prohibited to export on account of the great war, to the spinning of Bombay cotton, this the importation of American machines were made enormously after that. He made serval planing of factory, and is now the authority of the Japanese spinning world.

Mr. Yoshijiro Saiki, 齋木義次郎君) The Chief of the Shibakawa factory of the Fuji Seishi Company. He was born to the second son of Mr. Nagojiro Okawa, in Yokkaichi city Mie Prefecture. Afterwards he inherited the name of Saiki. He learned the middle school course at Keika Middle School in Tokio, and after finishing it he entered the Fourth High School in Kanazawa, of which he finished in 3rd year and entered to the Tokio Imperial University and studied in the Mechanical Engineering Department there. When he graduated therefrom he entered the Yokkaichi Paper Manufactur-

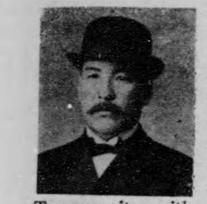
ing Company as the apprentice-student in the 43rd year of Meiji. His ability was soon acknowledged and was made the chief of the Paper-manufacturing section. Thus in the 6th year of Taisho he was sent to America to study the Paper-mill industry, the result of which brought to the company an important development. In the next year he again went to abroad to buy the machines. Aftet these development the company was annexsed to the Fuji Seishi company, and at the same time he was made the chief of the Shibakawa factory. This factory, situated at Shibafuji-mura in Fuji District, employs about 409 workers using 4000 horse power.



Mr. Naozo Ogawa, (小川直三君) The chief of the Shinukijima factory of the Toyo Boseki K. K. (The Oriental Spinning Company.) The present development of the Toyo Boseki K. K. owes much Mr. Naozo Ogawa. He was born in Ishikaka Prefecture. Whe young he entered the Tokio Higher Technological School and studied in the Mechanical Engineeling Department when graduated there from in the 39th year of Meiji he entered into the Kanegafuchi Boseki Company and after several services he became the chief of factory management section of Osaka branch. Afterwards, however, he removed to the Nippon Meriyasu Company. The after working there one and halfyear he entered into The Toyo Boseki Company in the 9th year of Taisho. This company was first established under the name of Kinpuku Spinning Company in the 23rd year of Meiji, and in the 39th year of Meiji annexed the Osada Spining Co., and in the 3rd year of Taisho annexed the Mie Spinning Co. The Shinukijima factory is one of the largest factory, with the site of 16278 tsubo, 50,000 of Pratt's Spinning Machines, 2200 of Dreper & Libsy's Spinning Machines. The workmen are 50 person of business men, 1000 persons of workingmen and 25000 persons workingwomen. The chief product is the Tenjiku Kinpuku. The management of Mr. Ogawa is making a steady development, producing always superior goods by the labour of willing workmen.

Mr. Genzo Shimazu, (島津源藏君) The president of the Shimaz Seisaku Co., the managing director of the Nippon Denchi Co., the Kyoto Automobile Co., and Nippon Shinyaku Co. He was born to the first son of late Mr. Genzo Shimazu in the 2nd year of Meiji. In the 27th year he inherited the house by the death of late Mr. Genzi. He established the Shimazu Seisakusho and was the master of it, after when the electric-cell factory reformed to independent company he became the managing director of it, and when the organisation of the Shimazu Seisakusho was changed he became the president of it. In his career he engaged great many public services, among of which may be named the secretary of Kyoto Prefectural Industry Encourging Society in the 40th year of Meiji, the Inspecting councillor of Kyoto Goods Exhibiting Association of the Anglo-Japanese Exhibition of the year of Meiji 42nd, the Economic Investigation committee of Kyoto Chamber of Commerce etc. Thus in the 5th year of Taisho he was aworded the Ryokuji Hosho in appreciation of his merits to the public.

Mr. Torakichi Kawanishi, (河西寅吉○) The head of the Chuo Seishi Domeikai, the country of the Suwa Silk-manufacturers' Guild, the managing director of the Suwa Kozai Company, the Member of Shimosuwa town Assembly. He was born to the first son of Mr. Zenshiro Kawanishi in the 1st year of Ganji. At first he was engaged in



the founding, especially in the making of borlers for Silk-mill, but he entered the Silk industry by establishigg Silk-mill in co-operation with Mr. Yoshizo Yamada, his relative, in the year of Meiji. In the begining the work was very small scalle, with only 60 overs; but his endeavour making the work everexpanding the number of overs reached above 600 in the 40th year of Meiji. Then on some reasons he separated with Mr. Yamada and continued the Silk-mill independently. At present the number of overs amounts above 1000, and in the 8th year of Taisho he established a factory at Ushiyama, Toyama city, with several hundred overs, which is managed by Mr. Tatsuo Takayama, his son-in-law. The number of workers amounts one thousand and several hundreds in both factories with the site of above 1000 tsubos, producing always superior goods chiefly exporting to America.

Mr. Toyokichi Shintani, (新谷豐吉君) The representative partner of Shintani company. He was born in Yedo-machi, Fukui city, in the 17th year of Meiji. His father failed in the enterprise and died from illues when he was only ten years old. He then entered Yamamoto's shop in the city, as the apprentice, but after he went out to Osaka and entered Konishi's shop, the foreign Cloth dealer. But as the consequence of the rejection of the shop he went to Tokyo and learned in Tsukiji Technical School, and after finishing there he entered Foreign Language School and learned Chinese language Then with the declaration of Russo-Japanese War he was eulested and serviced int he field, and was made the military, secretary-interpreter. But in the 41st year of Meiji tesigning the office, returned and entered business world and opened Shintani shop in Shinzaimoku-cho, Nihonbashi-ku, dealing with textile goods and metals, in the 44th year he established a factory in Kanasugi, Shitayaku, and also in Kameido & Tsukishima and Branches in Hanawa, Gumma Prefecture. Thus the business made a enormous expansion, and engaging in mineral industry he got a large profit. In the sixth year of Taisho the Shintani Company was made the joint-stock company and he is the representative partner of it. Besides, he established the Nippon Yoriito Co. and was made the managing director of it and also made the inspector of the Toyo Graphito Manganese Co.

Mr. Kichinosuke Kobayashi, (小林吉之助君) The spinner of Hachioji city. He was born at Mizomura, Koko District, Kanagawa Prefecture in the 14th year of Meiji, and when young entered the Kobayashi and inherited the house, which is the spinner from ancient He graduated the Chuo University in the 38th year of Meiji and first hoped to rise in the official world but on account of illness he gave it up, and threw himself in industrial world. After that he continued to develope the textile industry in the distinct and made a distinct progress in its producting quarthte's and qualities of the products, thus now the textile industry of Hachioji is became one of the promment one always will Kiryu and Ashikaga, which is the old textile district. He in arming to produce the goods suitable for export as Hachioji situated near Yokohama. Besides his endeward for the districtual industry, he is also earnest for the betterment of the youngmen in the district. His pregressive attitude was once misunderstood from the conservative men in the district but now it is thoroughry appreciated.

Mr. Soroku Endo, (遠藤宗六君) The chief of Kawasaki factory, Fuji Gas Cotton-spinning Co., No. 25, Horinouchi, Kawasaki, Tokyo suberb. He was born in Oita prefecture in the 14th year of Meiji. After finishing his middle school course at Oita

he entered Keio University, and completed the Economical course in the 39th year. Immediately after his graduation he engaged in cotton-spinning industry at a spinning Co. And in the 3rd year of Taisho he was removed to its Hyogo branch factory and in september of the same year he was appointed the chief of its Kumamoto factory. He entered Fuji Cotton-spinning Co. in the 8th year, and was appointed the chief of its Kawasaki branch factory in October of the following year.

Mr. Jiro Seki, (關二郎君) The Chief Engineer of the Kishiwada Boseki Kaisha. He was born at Sugamura, Higashi-chikuma District, Nagano Prefecture, in the 19th year of Meiji. He graduated the Engineering Departmenl of Tokio Imperial University in the 45th year of Meiji, and entered the Kishiwada Boseki Kaisha. Now he is the authority of Japanese spinning industry. The company was first established in the 25th year of Meiji; Now the authoriged capital is 8,600,000 yen, the Paid up capital 5,944,000 yen, and the reserve fund reaches 8,677,000 yen; and the recent divident is 65 per cent. The company has four factories at four places, that is at Sake, Haruki, Nomura and Kishiwada; the total spinning spindles numbers 176,000, and the weaving machines 1,100, the total workers above 7000. These magnificient business owes its present properity much to the managing respects, but amoungst these the merits of Mr. Seki must be preminently acknowledged. Now the company is contemplating to stand the 1st argest factory in Shanghai.

Mr. Matsujiro Yagi, (八木松次郎君) A merchant of chemical industry medicines. He was born in June, in the 23rd year of Meiji as the first of the late Mr. Otokichi in Koriyama, Nara prefecture. After graduating from the higher primary school in the Native place, he has been engaged in his family affairs. But larbouring high ambition, he went up to Tokyo single handed in the 28th year of Meiji, when he was only 16th years old. Being poor, he experienced all hardships and studied under difficulties. Fortunately he passed the examination of pharmaceulist at the 43rd year of Meiji. As soon as he was given the license by the Department of Home Affairs at the same year, he entered a joint-stock company and served mainly to pharmacy and testo of medicines. After a year he moved to Teshioguchi Hokkaido to manufacture Acetic-acid line. Owing illness when the business looked not a little prosperous, he was obiliged to stop it. Since then engaging in business of medicine for years, he opened a drug-store Tadokoro-cho, Nihonbashi-ku, Tokyo, On the other hand he endevoured in selling medicines to every factory. As its progress he discontinued the retoil one and opened wholesale one at the present address. The main articles which are managed now are as follows, 1. Materials tof pharmacy, 2. Medicines of dye-stuff manufacturing, gun-powder and 3. Materials of print, spinning and toilet goods and soap. And takes charge of selling condenced milk which are made in joint Eastern condensed milk factory. He is very faithful and devotes himself to his business. His old mother, wife, 2 boys and daughter are in his home. And furthermore 7 servants are employed for his business. His customers are shops, manufacturers and traders of the first rank. Some are in the direction of Kansai locality too.

The Hamamatsu Techinical School, (濱松工業學校) The Terashima, Hamamatsu city,

Shizuoka prefecture. The 39th year of Meiji, the Dyeing department of industrial examination was founded by the effort of Mr. Tamejiro Kuwabara who was the chief of weawing guild Both organs did the various kind of necessary things, helping each other in the third year of Taisho, the institute for the study of Dyeing war organized for the purpose of further development and supplying the want of its educational organs. After some histories, this school took the place of the institude on the 31st of May in the 7th year of Taisho. Now there are 200 students and 16 graduates of special course. This shool stands at the neibour of the examination department, and always helps each other and contributed to the weaving development of the place. The principal's short antecedants. The first grade of the 7th-class rank. He was born in the 14th of Meiji at Kochi prefecture, graduated from the course of Dye-colour in the higher techinical school, Tokyo, in 39th year of Meiji and served as a teacher at the Ishikawa prefectural school and next at the Tokushima one in the 4th year of Taisho. Then the Hamamatsu industrial examination department has not been affarted yet and called Hamamatsu Dyeing department and this school was also called yet the institude for the study of Dyeing. After Both names were changed he has served as the chief of Both. The institude was large as much as any other schools and teachers were superior so those gratuates were divid in the important position holder all in Hamamatsu.

Da'fuku Cotton Spinning Co., (大福紡績株式會社) Since Great War broke out there increased many cotton spinning factories Japan, but when the war came in an end some of them bank rupted or ceased their mark owing to their bad time. In these hard time Da'fuku Cotton Spinning Co. is still spreading its mark without having the influence of bad time; these is due to the skillfluness of the chief manegerous other assistance producing good goods selling at the moderate prince. This factory was established in 5th year Taisho succeeding Fukushima Cotton Spinning Co. and named its as above. Its total sits are about 7000 tsubo and building area about 3450 tsubo. Mr. S. Yamamoto the chief its co. is a man of so clever and has for-sight in business world that there much owe to him the prosperity of the co. Mr. Y. Honda, the director of general affairs; Mr. M. Terai, the chief of the factory, are both prominent men in these line; and contribution to Japan directory and in directory managing the factory to produce good things in Japan.

Mr. Jinsuke Katsura, (桂甚助君) The owner of Kashiwaya Motohama Yashi colouring factory. He was born in the 23rd year of Meiji, and completed the whole course of acertain Weaving ori school which became afterward Kyoto Technical school. He was generally called Kashijin those that dyed in his factory are called "Motohama Yashi Zome" and its colour is refined and lasts forever. So they used to wear them whenever there held a celemony in court. This was exhibited some 50 times, and had the honour of being awarded priges. He is a man of great character, and may well be called the pattern of men of business. Once he begins an enterprise, he goes about it with all his might. So we can all see that he has a bright future before him.

Mr. Ushihiko Tokunaga, (德永丑彦君) The chief engineer of Taisho suger manufacturing Co. and the chief of its Tokyo factory. He is a man of gentle industrious and

now is known as an authority of this line. He liked studying from his boyhood and was hoped with curiosity by neborhood. When he was 18th years of age he entered Tokyo Technical School, after he had studied medical came of it graduated from in 37th years of Meiji and engaged in the factory of Dainihon Suger Co. where he studied mutch and experienced, at the same time, could show sprendid knowledge and contributed to the co. In 8th year of Taisho he resigned his post and established Taisho Suger Manufacturing Co. independently with some persons of the same mind.

After this he worked so hard innesting and experiencing with his might that at length he made several inventions about suger manufacturing, millet-jelly making and he on, all of these having the special permissions of the Japanese patents office. His works is now becoming greatry and there are about 30 officers and skillful markers in it producing 100 kin, in a month, its sprended prosperity has promissing future.

Mr. Kiyoshi Okada, (岡田清君) The chief of Yokohama factory of the Nippon Kagaku Hiryo Company. 3-chome, Moriya-cho, Yokohama city. He was born at Takamatsu city in 21st year of Meiji. He was graduated from the chemical course of Osaka Higher Technical School in 42nd year of Meiji. He entered upon the duties of the Osaka Kagaku Hiryo Co., but the Co. was combined into the Nippon Kagaku Hiryo Co. with the object of economy. He was appointed as a chief engineer of Onoda factory, though he was young. He improved every kinds of system and restored from dying condition by his great efforts. It was reported that the Yokohama factory is going to ruin of the same company. Consequently, he appointed again of the chief of factory of the Yokohama in this year. He went to Yokohama with his 100 workers. The factory is recevered again with his great talent. His merit is great indeed.

Mr. Yasunaga Hattori, (服部保永君) The chief Taisho Suger Manufactory Co. Nagoya factory. No. 21, Haba-cho, Nakaku, Nagoya. He is well known as a posseser of high character and a talent man. He was horn in 15th year of Meiji at Sasuyama-mura Taki-gun Hyogo prefecture, having liked studing from his boyhood, he graduated Tokyo Higher Technical School in 37th years of Meiji. Through a engineer of railway superintendence bureau, a artest of Fukagawa Iron Works he was engaged by Formosa Ensui Suger Manufacturing Co. in 42nd year of Meiji where he had very interest in its work and he studied very mutch of works, applying his engineering art on them. After that he was engaged by Taisho Sugar Manu. Co. as an engineer where he has been improving suger manufacturing work at many points—rapitness of the work, good quaritying etc. Even while he is making this wonderful inventions he is not contented only with it but he mutch studied European and American suger industrial works and as a result of it he innected a good machine which is popular in suger factory. At the same time the prosperity of Nagaya Iron Manu. Co., an branch factory of Taisho Suger Mamu. Co., is very sptended one and now it has a promissing works.

Mr. Shikakichi Akiyama, (秋山鹿吉君) Russian in No. 2048, Minami-Ota-machi, Yokohama city. The short antecedants, Mr. Akiyama was born in the 3rd year of Keio at Asakusa, Tokyo. In his early years he was looked upon as a precocious child, from 10 years old he worked hard under Mr. Sakichi Ueda. Who was famous in this circles and lived Edogawa-machi, Nihonbashi-ku. Here he was charged with important part of business, hitherts he commenced his own on his account at the above addrees in

Yokohama. The independence of position and action were his principles. Now he is a share holder of the 1st rank Yokohama. About 150 employears are working and his business are mainly dye-colour and plain dye-colour. The yearly amount is about 360,000 hiki of cloth. Customers are the mercantile houses of direct exportation and wholesale merchants, 4 years ago he was selected as the head of the trade-guild of the Yokohama export woven goods. Until now representing the guild every year and inspecting textile industry everywhere, he has contributed not a little to the development of the guild. They may well estate him as a specimen of the present business men. He is now happy, but if we abserve his past minutely, we can easily find that he has ever been thrown into agony from his birth and beated thousands of difficuties with all his might. In short he has gotten the victory with the spirit of self-help.

Mr. Seiichi Ikuta, (生田清市君) The Chief of Dainihon Bear Co. Hodogaya glass manufactuting factory. Factory No. 305 Hodogaya-machi Kanazawa prefecture Tel. 2800, 2801, 2802, 2803, 2804 Chojamachi Yokohama. Residence Hodogaya aza Hodogaya. Now demand of bear in increasing yearly in Japan and that the work of Dainihon Bear Manufacturing Co., is now very seprended one. When this Co., umalgamated with Nihon Glass Manufacturing Co., in 8 years of Meiji Mr. S. Ikuta was the cheif of latter and also had excellent talent he was remained to take the same post though the name and fact of the latter had been belonged to the former Co. He has fine brothers and is the youngest of all and his father is well known as a wealthy farmer in Kyoto prefecture. He liked studing of engineer and in 42nd year of Meiji. He graduated Osaka Higher technical school with honours. His sprended talent can be seer by how he combinated his idea with practical art in his factory and that the works of its Co., now wonderfully increasing as many as 160,000 bottles are manufactured in a day in its factory; this shows who he is excellent in this work.

The Kurogoe Printing Ink Mannfactory, (黒越合名會社) No. 14 1 chome, Kita-Kutaro Osaka City. Tel. No. 576, Senba. This factory was establish in 26th year of Meiji by Mr. Suematsu Kurogoe who was born in Nara prefecture, and he experienced for many years for printing-ink in the Osaka Miyagawa's Factory. At that time his factory produced the best lethel of match in Japan. He made it an ordinary partnership with his relations in 35th year of Meiji. The chief product of this factory is red ink and the rest are in many colours. It's total volume of products amount to 300,000 pound in a year. Recently, he entrusted to his relations the care of his factory because he has entered his dotage and can work no longer. We can believe that the factory will become prosperious more and more.

Mr. Yorihisa Funahashi, (舟橋頼久君) The chief of the Factoty of the Wakayama Cotton-spinnin Co. 6 chome Denho-cho Wakayama City. Tel. No. 672 Wakayama. There was two great factories for spinning in Wakayama City. But they were combined each other for their own advantage in 44th year of Meiji, and was called Wakayama Cotton spinning Co. The Co., consists of very large factories and about 1,100 workers. Well, Mr. Yorihisa Funahashi, chief of this factory, was born at Nagoya in 22nd year of Meiji. After finished the Spinning Course of Nagoya Higher Technical School in 45th year of Meiji, entered upon the duties of the Nippon Cotton Spinning Co., for 9 years. He turned in this Co., as a chief of factory. He is a man of benevolence and has a noble character. Therefore, the workers respects him very much. He improved the system of factorys and many other kinds of spinning. Cludeed he is a hopeful young man.

Mr. Zensaburo Maeda, (前田善三郎君) A dealer in soft metals. Nichome Kodemmacho Nihombashi Tokyo. He was born at the above mentioned address on the 15th of October of the 18th year of the Meiji though he attended an elementary and a highet elementary school in the neighbourhood he has no education to speak of. He inheritted his father and became an iron monger in February of the 8th year of Taisho. But on account of the great European War, he confronted with a great truble, and he is now dealing in tin, lead, zinc, autimony etc. He is living in harmony with his wife and three children and seven shopmen. He is always on the side of the week.

Mr. Shinroku Takahashi, (高橋新六君) The proprietor of the Masushin Shoten, was born at Takeda-machi in Bungo province as the forth son of Mr. Mizuzo Tani, and intending to rise in the world through dyeing business, he came up to Kyoto when he was young. In the age of twenty three, he was adopted in the family of the Masushin Shoten, a famous dyer of old standing in Kyoto, and succeeded to the house as the seventh head of the family. In 1916, he wrote and published the "Dyeing Practice in Kyoto," in 1917, the "Story about the dyeing of Kyoto and the cleaning of stains," and in 1921, the revised edition of the "Dyeing Practice in Kyoto," which was subuited for His Majesty's inspector. These books are all succeeded in introducing the Kyoto dyeing to the world, from hence it was heavily applanded by the public and consequently it achieved a great improvement. His business is now departed in three sections namely: the publishing department, the dyeing department and the miscellaneous department—the first dept. is for publishment of books, magazines, designs of patterns cataloques of colours about dyeing, the second one for dyeing of special patterns, and the third one for general dyeing business.

Mr. Taichi Sasaki, (佐々木太市君) The owner of the Sasaki Berl in wool Dyeing company, was born at Kitaya, Ono district Fukui prefecture in November 1892, When he was only thirteen years of age his parents died so that he lived under received his brother's care for two years, but he thought that he ought not to stay for long time in this place if he want to be succeed. So he went to Fukui City and was employed as an apprentice at the Kumai Dyeworks for twelve years, from where he went to Osaka after 12 year's service to be independent, and organized his own works at Kitanagae Nishinarigun, Osaka prefecture in 1918, and with his profound experience about and dyeing and his attentive effort, his business became greater day by day. While he had been in the Kuwai Dyeworks, he has invented a new method of dyeing of ribbon for hat use, and from the begining of his own business, he attracted his costomers with that new method. In April 1921, he established a new factory at Toyosaki, Nishinari-gori, Osaka.

Mr. Ryuzo Akigusa, (秋草龍蔵君) The president of the factory at Iwabuchi of the Toyo Paper Mill Co., Ltd., was born in 1878 at the town of Kurayoshi in Tottori prefecture as the third son of Mr. Rinzaburo Akigura, who was the second son of Mr. Magoyemon Akigusa, a famouse wholesale merchant of the imitation nankeens. His father set up a branch family and started also a wholesale business dealing in cottons, but to the sorrow of his family, he died in his prime when Mr. Ryuzo was at the age of nine and, since then, he was brought up by his mother and his brothers. After he finished the whole course of the Kurayoshi Middle School and the Suga-jyuku, a private school, he came up to Tokyo and enteted the Meiji Law Colledge when his family had fallen into distressing circumstances owing to the hard condition of the cotton

markets in his native town. Afterwards, he left for Formosa and there he held a humble post in the office of Koshun. After his faithful eight year's service as an officials at the Government of Formosa and at the Monopoly Bureau of Tobacco there, he retired from the official life and enterprised sugar manufacturing, which proved a failure after two years and a half when he was, however, recognized for his ability by Mr. S. Inoue and Mr. T. Saito, both leading businessmen in Japan, and through their recommendation, was appointed the present position.

Mr. Hikosh'ge Harashina (原科彦重君) The owner of the Makino Dyeworks, was born in Shizuoka prefecture as the seventh son of Mr. Hikozayemon Harashina in November 1889. From his boyhood, he intended to rise himself in the world by dyeing business and entered the Kyoto Higher Technical School. On his graduation at that school with distinction in 1912, he entered service at the dyeworks of the Kunitake Weaving Co., at Kurume and there he was engaged in the business of his intention for 7 years till he commece his own works which has now enormous quality of annual output totally amounting to 900,000 pieces of cloth. Such as he who has not only scientific knowledge but also practical experien ought to be called as a true expett and we must also recommend him as a successful director of a works owing to his good understanding and sympathy for the condition of labourers. No disorder nor strike had, accordingly' occured in his factory even at the height of strife which had spread all over the country. And he is now enjoying a great reputation from the public.

Mr. Yasuke Tatauni, (辰巳彌助君) A manufacturer of printing ink, was born in 1868 at Semba, Osaka and was widely famed that he had been endowed with admirable character and spirit of inquiry. He was once engaged in manufacturing lacquerwares as it was his family business inherited from his father. But at that time, most of our printing ink are imported from abroad, so he intended to make so excellent one with our owh hand that foreign ones will be held in check and, taking great trouble over the design of its method, he, at last, sent his manufactures to the market in the name of the "Home-made Printing Ink" in 1887. In May, 1893, it received a great reputation in the Osaka Competitive Exhibition, and at the same time, was patented. The practical result of his ink, it is said, is quite excellent and has not only nothing to fear from comparison with imported ones but also many points surpass them. In his factory, paints and colours are also manufactured as well as printing ink and the output amounts to 40,000 yen or so in a month. At present, his eldest son is taking the manugement of the whole business and his son also is reputed as a promising man of business.

Mr. Nobutaro Hayakawa, (早川延太郎君) The Vice-President of the Osaka Drapery Finishing guild and the representative of Hayakawa Joint Stock Co., was born at Koshikata, Kawabe-mura, Funai-gun, Kyoto-fu in 1865. He came to Osaka in 1886, and in 1890, began the business of regulating towels finding it is hopeful in future From be gining he used motons in his factory and the products are welcomed by all his customers for their goodness and trust worthiness in quality. In 1919, he founded Hayata Joint Stock Co., which business is for regulating foreign calicos and muslins. Mr. Gendo Yamaguchi's Kamataro Tamura's, Katsujiro Noro's, Yasubei Chigusa's and other large shops in Osaka are the regular custcmere of his factory. He made every effort as the president or vice-aresident of the Osaka Fullers' guild and the Osaka Textile Regulating guild for many years and when the Osaka Drapery Finishing Guild was established in March, 1921, he was appointed the vice-president, and he is now in that position. On the other hand, he is receiving god's favour in his home, having a son and four daughters who are all clever and healthy.